拓殖大学論集 (326)

ISSN 1344－6622

人文·自然·人間科学研究

第 47 号

2022 年 3 月

論　文

空間論から見たカント批判哲学への道……犬竹　正幸（ 1 ）

亡霊の語り── 中間航路の死者の声 ……三井　美穂（ 29 ）

英語文化とポピュラー・ジオポリティクス
── 非英語圏日本の文化的アイデンティティ交渉過程の観点から ──……小林　敏宏（ 50 ）

英語体験学習が「コミュニケーション不安」に及ぼす影響
～東京都英語村（TGG）における調査から～ ……長尾　素子（ 80 ）

英語の自動詞と他動詞の区別について ── to screen を出発点として ……渡辺　勉（ 95 ）

研究ノート

20 世紀ベルギーにおける言語事情と
バイリンガル作家ジャン・レー／ジョン・フランダースの関係 ……井内　千紗（126）

自発的な活動を促す「子ども向けミュージカル」の開発及び改善 ……山田　克巳
萬　司（142）

調査報告

神奈川県の旧制中学校における英語教育史（ 2 ）
── 第四中学校以降の外国人講師を中心に ──……保坂　芳男（157）

明治初頭，日本人米国渡航者リスト解題・史料の補足
── 横浜発サンフランシスコ行き日本人船客リストと関連史料紹介及び考察（ 1 ）：
横浜出航 1870 年 1 月から 6 月まで ……塩崎　智（177）

論　文

「美しい目の視線は遠い，遠い所に」
── 森鷗外「安井夫人」とドイツ・ロマン主義……村上　祐紀（ *1* ）

拓殖大学研究所紀要投稿規則……（215）

『拓殖大学論集　人文・自然・人間科学研究』執筆要領……（218）

拓殖大学人文科学研究所

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 1–28　　March 2022

空間論から見たカント批判哲学への道

犬　竹　正　幸

A Road to Kant's Critical Philosophy from the Viewpoint of his Theory of Space

Masayuki INUTAKE

要　旨

カントは 30 年以上にわたる哲学的思索の末に，批判哲学を樹立するに至ったが，この批判哲学へと向かう思索の歩みの途上において決定的な役割を果たしたものは，カントの空間論（の変遷）であったと思われる。カントはその哲学活動の開始以来，自然哲学と形而上学との関係というテーマ，より正確には，ニュートン力学に代表される近代自然科学の形而上学的基礎づけというテーマを自己の主要な哲学的課題の一つとしていた。カントは初期には，この問題をライプニッツやヴォルフの形而上学のうちに受け継がれている伝統的な形而上学の枠組の下で考えていたが，ニュートン力学の理解が深まり，とりわけ，その基礎に絶対空間という形而上学的前提がおかれるべき必然性を理解するにつれて，空間の関係説を内包する伝統的形而上学に対する深刻な疑念が生じてきた。そして 68 年の『方位論文』における絶対空間の存在論証を経て，69 年には，空間・時間をわれわれの感性的直観の形式として捉える空間・時間の超越論的観念性の理論へと至ったと思われる。その成果が 70 年の『就任論文』であったが，そこに展開された形而上学は，批判哲学への扉を開いただけの過渡期の形而上学であり，批判哲学の完成には，なお 10 年余にわたる茨の道を歩む必要があった。

キーワード：批判哲学，『方位論文』，絶対空間，空間の関係説，ニュートン力学

はじめに

成熟期カントの哲学は批判哲学と呼ばれる。それが確立されたのは通常，1781 年に公刊された『純粋理性批判』（以下，『批判』と略記）第一版によってであるとされ，その前後におけるカントの哲学活動を二分して前批判期と批判期とに分けるのが大方の見方である。私もこうした見方に基本的に同意する。ただし，1770 年に公刊された教授就任論文『感性界と知性界における形式と原理』（以下，『就任論文』と表記）をどちらの時期に含めるかについては，諸家のあいだに完全な意見の一致は見られていない。この問題については以下のように考えたい。批判哲学の成立を 1781 年という一点におい

て捉えるのではなく，少し幅をもたせて捉えるべきである。なぜかというと，カントの批判哲学が，空間・時間の超越論的観念性の理論（空間・時間をわれわれの感性的直観の形式と捉える理論）と，対象構成の理論（経験の対象を，われわれの悟性のはたらきによって構成されたものと捉える理論）とを二本の柱として成立していることに異議はないと思われるが，このうち，前者の理論はたしかに 70 年の『就任論文』で提示されているのに対し，後者の理論は『批判』のうちではじめて登場するからである。それゆえ，70 年の『就任論文』において批判哲学への扉がはじめて開かれ，ほぼ 10 年間にわたる「沈黙の歳月」(1) を経て，81 年の『批判』に至ってカントの批判哲学が確立されたと見てよいであろう。

さて，本論考で問題にしたいのは，カントはどのようにして批判哲学への扉を開いたのか，その経緯についてである。この問題を本格的に論じた欧米の研究は枚挙にいとまがないのに対し(2)，我が国の研究は意外に少ない。高橋昭二の『カントの弁証論』中の第二章「カント批判期前の哲学」，あるいは濱田義文『若きカントの思想形成』がよく知られている程度である(3)。ただ欧米の研究にせよ我が国の研究にせよ，前批判期から批判期への移行プロセスを追跡するにさいして，前批判期のほとんどすべての著作・論文の内容を執筆年代に沿って網羅的に紹介し，そこに見られるさまざまな要素が統合されて批判哲学が形成されるに至ったとする論調が大半を占めている。このような論じ方を誤りであると主張するつもりはない。ただ，このようなやり方では，カントが 30 年を超える哲学的営為の果てに，なにゆえ批判哲学へと向かうに至ったのか，その必然性が見えてこないのである。前批判期におけるカントの哲学活動の主要なテーマが，その著作・論文の数と量から推測されるように，自然哲学および，それと形而上学との関係にあったことはまちがいない。上記の諸家の多くの研究も，この点に着目して，カントの自然哲学および形而上学，さらには両者の関係についての論考に多くのページを費やしている。だが，その自然哲学および形而上学の中でも，特にどのようなテーマが批判哲学の形成に強い関わりをもつのか，という問いに対して明確な解答を提示している研究に出会うことは稀である(4)。

私は前批判期においてカントが取り組んだ自然哲学的ないし形而上学的なテーマのうち，彼の空間論こそが，批判哲学の成立へと至る道程を理解する上で，もっとも重要なものであると考える。彼の空間論は，49 年に公刊された処女作『活力の真の測定に関する考察』（以下，『活力測定考』と略記）をはじめとして，55 年の『形而上学的認識の第一原理の新解明』（以下，『新解明』と略記），56 年の『自然モナド論』，58 年の『運動と静止の新理論』（以下，『運動と静止』と略記）といった諸著作のうちに見いだされるが，何といっても重要であるのは，68 年に公刊された『空間における方位の区別の第一根拠について』（以下，『方位論文』と略記）である。詳しい論証は本文に譲る

が，アカデミー版のページ数でわずか 7 ページという，きわめて短いこの小論文こそが，批判哲学への道を明確に示す決定的な道標ないしターニングポイントであると考えられるのである。

さて，上述したように，前批判期におけるカントの主要なテーマは，自然哲学と形而上学との関係をどう考えるか，というものであった。この観点から見たとき，前批判期におけるカントの自然哲学の内容およびその変遷が，つねに形而上学のそれと連動していることが判明する。56 年の『自然モナド論』は 55 年の『新解明』と対応し，63 年の『負量の概念を哲学に導入する試み』（以下，『負量の概念』と略記）は 64 年の『自然神学と道徳の原則の判明性』（以下，『判明性論文』と略記）と対応しており，さらに 68 年の『方位論文』は 70 年の『就任論文』と連動している。そこで，空間論から見たカント批判哲学の成立史をテーマとする本論考では，自然哲学と形而上学とのこうした対応ないし連動の内容およびその変遷を，時代順に三つの時期に分けて順次，検討することを通じて，批判哲学の成立プロセスにおいてカントの空間論が決定的に重要な役割を担っていたことを明らかにして行きたい。それゆえ本論考は 70 年の『就任論文』までを考察対象とし，『批判』については折に触れて言及するにとどめる[5]。しかし，その前に準備作業として，若きカントの思想形成にさいして直接，間接に影響を及ぼしたと見られる，当時のヨーロッパ哲学界の状況を，自然哲学と形而上学との関係という点に絞って簡潔に見ておこう。

第一章　若きカントを取り巻くヨーロッパ哲学界の状況

当時，「自然哲学」という語は現代ならば，ほぼ自然科学という名で呼ばれる学問領域を指示していた。とりわけ 17 世紀は，数学の適用にもとづく近代自然科学の創成期にあたり，それが新たな自然哲学の成立を意味するものであったことは，1686 年に公刊されたニュートンの主著の表題『自然哲学の数学的諸原理』（以下，『プリンキピア』と表記）のうちに象徴的に示されている。ところが，まさしくこの『プリンキピア』のうちでニュートンは，「事物の現象するところより神に及ぶのは，まさしく自然哲学に属することである」[6] と語って，自然哲学が，経験的な自然研究から神学ないし形而上学までも含んだ広範な内容をもった学問であることを明言している。具体的には，ニュートンの運動の三法則が成立する場として「絶対空間」の存在が要請され，さらに，この絶対空間が「神の感覚器官」[7] とみなされることによって，その神学的ないし形而上学的な基礎づけが与えられる，といった例を挙げることができる。このようにニュートンにあって自然哲学は，その基礎・土台に超経験的な学問である神学ないし形而上学がおかれ，その上に経験的な学問としての自然科学が位置するという構造をもった，広範な

内容を含むべき学問であった。したがって，自然哲学という語が主に自然科学という意味で用いられるにしても，その場合の自然哲学が，その根底に形而上学的な原理・基礎を有すべきことが，つねに意識されていたわけである。その点はニュートンに限らず，彼に先立つデカルトについても，同様に見てとることができる。デカルトは 1644 年の『哲学原理』の中で，自然界において運動量の保存則が成り立つ根拠として，神の完全性を持ち出しているが(8)，これもまた形而上学による自然哲学の基礎づけの例として理解することができるであろう。さらに，若きカントの思想形成にきわめて大きな影響力を及ぼした，ライプニッツおよびヴォルフの形而上学もまた，自然科学ないし自然哲学の形而上学的な基礎づけというテーマを，その重要な部分として含んでいるが，そのさい，直接に神学的根拠を持ち出すのではなく，一般形而上学ないし存在論のうちに自然哲学を可能にする根拠・原理を見いだそうとする，そのかぎりで合理的な思想傾向を有しており，この点がニュートンやデカルトとは決定的に異なっている。しかし，その詳細については，次章以下で明らかにしたい。

さて，上述したようにニュートンは自然科学の根底に形而上学が存すべきことを認める一方で，『プリンキピア』の中で，自然哲学ないし自然科学の方法的原理として，いわゆる数学的実証主義を提唱している。すなわち『プリンキピア』では「力の数学的概念」（河辺訳，前掲書，64 頁）だけを問題としており，「力の物理的な原因や所在を考察しているわけではない」（同上）と語り，さらに「私は仮説を捏造しない」（同上書，564 頁）と主張して，『プリンキピア』の中では力，とりわけ重力の本質に関する形而上学的な考察には関与しないという態度を鮮明に打ち出している。これに対しては『プリンキピア』公刊直後から，絶対空間や遠隔作用としての重力といった概念は形而上学的概念そのものであり，しかも形而上学的に見て理解しがたい不合理を含んでいるという，デカルト派やライプニッツによる批判が現れた。その詳細はしばらく措くが，ここではこの問題をめぐるニュートンとデカルト派・ライプニッツとの対立の根本的な所在がどこに在るのか，という点についてだけ述べておきたい。

デカルト派とライプニッツに共通する思考の枠組みによれば，自然哲学的認識においては，それが対象とする事物の本性・本質を，まず第一に形而上学的考察によって把握し，そうした形而上学的な基礎の上に，当該の事物の振舞いや現象に関する法則的認識が可能となると考えられていた。物体即延長の形而上学的テーゼを基礎とするデカルトの『哲学原理』や，物体の本質には延長に先立って固有の力が内在するという動力学的な原理を出発点におくライプニッツの『動力学試論』（1695 年）は，こうした思考法の典型的な産物である(9)。これに対してニュートンが『プリンキピア』で表明している公式的見解によれば，事物の本質についてのそうした形而上学的な考察を棚上げにしたままで，事物の振舞いや現象に関する数学的法則を確立することは十分可能であるとされ

る。このような思考態度は直接には，ニュートン自身が論証した重力の数学的法則に対する，重力の本性に関する形而上学的考察にもとづく反論をあらかじめ封じることを目的としたものであって，ニュートン自身は，自然哲学全体から形而上学を排除する意図をもっていたわけではなかった（この点は先述した通りである）。だが，自然哲学における方法上の原理としてのこうした実証主義の思想は，18 世紀に入るとダランベールを中心とした，啓蒙主義の洗礼を受けた自然研究者たちによって全面的に採用されるに至り，自然哲学からの形而上学の排除という思想傾向が自然研究者のあいだに共有されるようになって行ったのである。

以上のようなヨーロッパ哲学界の状況の中で自らの哲学思想の形成に努めていた若きカントは，一方でニュートンの自然哲学に傾倒し，他方で基本的にライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学の枠組の下で，ニュートンに代表される近代の数学的自然科学の形而上学的な基礎づけがいかにして可能となるかを模索していた。それがどのような内容であったか，またどのような結果となったかについて，次章以下で見て行こう。

第二章　初期カントにおける自然哲学と形而上学との関係

上述したように，若きカントは一方でニュートン自然哲学に傾倒しつつ，他方でライプニッツ・ヴォルフ形而上学の枠組の下でニュートン自然哲学の基礎づけを模索していた。しかし，この問題への取り組みが相当な困難に直面するであろうことは容易に想像がつく。その理由は以下の通りである。『ライプニッツとクラークとの往復書簡』から読み取ることができるように，ライプニッツとニュートンの代理人クラークとのあいだで行われた論争における中心問題の一つは「絶対空間」をめぐるものであった(10)。ライプニッツは主に「不可識別者同一律」という形而上学的原理にもとづいて絶対空間の存在を否定し，空間を物体が共存するさいの「共存の秩序」とみなす空間の関係説を主張した（米山・佐々木訳，同上書，285 頁を参照）。先述したように，ニュートンが絶対空間の存在を要請したのは，ニュートン力学の原理としての運動の三法則がそこで成り立つための場としてであった。したがって，絶対空間の存在が否定されることは，ニュートン力学全体の真理性が根本的に疑問に付されることを意味するはずである(11)。要するに，空間の関係説をその重要な一部として含むライプニッツおよびヴォルフの形而上学は本質的に，絶対空間の存在要請にもとづくニュートン力学とは相容れない面を有している。現に上述した『動力学試論』中に展開されているライプニッツの運動論は，慣性抵抗と反作用との同一視に典型的に見られるように，ニュートン力学の運動論とは根本的に異なる代物である(12)。それゆえライプニッツ・ヴォルフ形而上学の枠組の下にニュートン自然哲学を基礎づけようとすることは，あたかも水と油を一緒にしようとす

る試みに思われるのだが，カントは何故こうした試みを，しかもかなり長期にわたって遂行しようとしたのであろうか。

この点を理解するためには，以下のような科学史的知見が役に立つ。それによれば，18 世紀前半のヨーロッパ大陸におけるニュートン自然哲学の受容の実態は，現代のわれわれが想像するように，いわゆるニュートン力学の定礎者としてニュートンを受容するのではなく，「当時，大陸において Newton の名前は，ただもっぱら Descartes の渦動仮説に対する万有引力理論にのみ結びつけられていた」[13] というものである。つまり，当時の大陸諸国では，ニュートン力学のうち，重力理論だけがニュートン独自の業績とみなされ，ニュートンといえば，第一に重力理論の提唱者として知られていた，ということである。これに加えて，ニュートン自身に起因する実証主義の浸透によって，当初はデカルト派やライプニッツがその形而上学的根拠から問題視した，遠隔作用としての重力の概念もまた問題視されなくなっていた。このような状況下でニュートン自然哲学をライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学によって基礎づけようとする試みに従事していたカントが理解していたニュートン理論の中心もまた，ニュートン力学の原理としての運動の三法則ではなく，その力学的・数学的な導出過程から切り離された重力理論にあった。この点は，処女作『活力測定考』の内容から明白に読み取ることができる。カントはそこで，「諸実体が自分の外部に作用する力をもたないとすると，空間も延長もありえないであろう」（I 23）と語って，空間の存在や性質が物体間の相互作用に依存する相対的・関係的なものであると主張し，さらに，そのことを示す証拠として重力法則を挙げている。すなわち，空間の三次元性は重力の逆二乗法則からの帰結であり，もし重力法則が異なったものであったなら，異なった性質・構造をもった空間が帰結していたであろうと語って，ライプニッツ的な空間の相対説・関係説を提唱している（vgl. I 24）。他方でカントは，ニュートン力学の根本原理である「慣性の法則」についても言及しているが，慣性法則がはたらくのは物体が一定の速度に達してからであり，かつ，その一定速度が維持されるのは，物体に内在する力によってである，といった文言（vgl. I 55）から明らかなように，この時期のカントはニュートン力学の基本すら理解できていなかった。したがって当然のことながら，運動の三法則とりわけ慣性法則の前提としてニュートンが要請した絶対空間の意義について省察することなど，とうてい不可能だったのである。

以上のように，若きカントが受容し傾倒したニュートン自然哲学の中心は，ニュートン力学の基礎理論から切り離された，その重力理論にあった。また上述したように，当初はデカルト派やライプニッツが攻撃し，ニュートン自身もまた（形而上学的には）否定していた遠隔作用としての重力という概念[14]，すなわち物質そのものに内在し，空虚な空間を隔てて直接，相互に作用し合う力という概念に含まれる問題点が表立って論

じられることも，18 世紀前半には見られなくなった。そこで，カントによるニュートン自然哲学の形而上学的基礎づけの構想は，具体的には，ニュートンの重力理論に整合し，かつ空間の関係説を自らのうちに含むような形而上学ないし存在論を打ち立てるという形をとることになる。その成果が 55 年の『新解明』である。次にその内容を概観してみよう。

『新解明』はカントが最初に著した形而上学の書であり，根底に実体一般に関する根本規定の学としての一般形而上学ないし存在論が据えられ，その土台の上に物体的自然の形而上学が展開されているという形をもった，基本的にライプニッツ・ヴォルフ形而上学の枠内にある著作である。しかし，最後の第三章にはカント独自の形而上学的思想が提示されており，その中心は「改善された物理的影響説」（I 416）にある。すなわち，カントはここで，いかなる被造的実体の状態変化も「諸実体の相互依存関係」（I 410）つまり諸実体の実在的な相互作用の結果としてのみ可能であると主張し，実体間の観念的な対応関係しか認めないライプニッツの予定調和説を根本的に否定している。なおヴォルフについては，「現象のレベルではものともものとの実在的作用関係を認めるような言葉づかいをしている。…にも関わらず，…実体レベルでは〔つまり形而上学のレベルでは〕，ヴォルフは力の実在的作用関係を認めていない」[15]（挿入引用者）という山本道雄の指摘から明らかなように，ここでのカントの形而上学説はヴォルフのそれとも異なるものであろう。カントは，諸実体のこうした実在的な相互作用の根拠を追究し（「命題 XIII」），それが，独立存在としての実体の単なる概念のうちには求められない以上，「諸実体の存在の共通原理としての神の知性」（I 413）にその根拠が求められねばならないと論じる。いかにも独断的な，こうした論法の是非についてはしばらく措く。むしろ，ここで興味深いのは，この論証の途中でカントが次のように語っている点である。

> 個々の実体が他の実体から独立した存在をもっているかぎり，それらの相互的結合はない。にも拘わらず，宇宙における一切が相互に結合されているのが見いだされるのであるから，この〔実体間の実在的な相互作用という〕関係は共通の原因，つまり存在者の普遍的原理である神に依存していることが認められねばならない。
>
> （ibid. 挿入引用者）

ここで，経験的に見いだされる宇宙全体における一切の結合とは，いうまでもなくニュートンの重力ないし万有引力の法則を指している。つまりカントはここで，被造的実体全体が実在的な相互作用のうちにあることの証拠として，ニュートンの重力法則を挙げているのである。本来，形而上学的論証のうちに経験的な自然法則を根拠として持ち込むことは，許容されはしても，せいぜい傍証にとどまるはずであるのに，そうした経験的

法則をあえてここに持ち込んだことは，カントがいかにニュートンの重力理論に傾倒し，それを拠り所として自らの形而上学説を構築しようとしていたかを如実に物語るものであると言えるだろう。

さらにカントは，この命題 XIII からの帰結として，「場所，位置，空間は諸実体の関係である」（I 414）ことを導き出している。こうしてカントは，実体間の実在的な相互作用を核とする自らの形而上学のうちに空間の関係説が含まれることを示し，さらに，形而上学的レベルで成立する実体間の実在的な相互作用の「外的現象」（I 415）として，重力による全宇宙の結合が見いだされるのだと論じて，ニュートン自然哲学とライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学との結合を図ったのである。なるほど，ニュートンの重力理論に限定すれば，上に見てきたカントの形而上学説に対して，相応の妥当性を認めることができるかも知れない。しかし，ニュートン自然哲学の基礎部門である力学論ないし運動論を考慮に入れるならば，空間の関係説という相対主義的な空間論をうちに含むカントの形而上学説が，そのままの形でニュートン自然哲学と折り合えるとは考えられない。だとすれば，ニュートン力学に関する理解が深まるに応じて，カントは自らの形而上学説に対して次第に深刻な疑念を抱くことになるであろう。カントの行く手は険しいと言わざるをえない。しかし，先を急ぐ前に，『新解明』で提示されたこうした形而上学に対応する，カントの自然哲学上の著作である『自然モナド論』の内容を見ておこう。

『自然モナド論』の正式なタイトルは『形而上学を幾何学と結びつけて自然哲学に役立てること，その最初の試みとしての自然モナド論』というものである。先述した通り，ニュートン力学に代表される，数学の適用にもとづく近代の数学的自然科学をその本質的な部分として含む点こそが，近代自然哲学の最大の特徴であり，カントもまた，こうした潮流に掉さす者の一人であった。ただ若きカントは，デカルトのように物体即延長のテーゼを基軸にして，幾何学的・数学的知見に全面的に適合するような新たな形而上学を構築するという道を行くのではなく，スコラ哲学の伝統を色濃く残すライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学に依拠するという道を選んだ。そのため，幾何学的・数学的知見と形而上学的知見とが，しばしば対立するという問題に直面した。そこで，「形而上学を幾何学と結びつけて自然哲学に役立てる」というカントの構想は，具体的には数学的知見と形而上学的知見との対立を，なんらかの仕方で調停する試みとして示されることになる。

このような戦略はじつは処女作『活力測定考』のうちで，すでに実施されていたものであった。周知のように『活力測定考』のテーマは，運動状態にある物体がもつ力を測定する尺度として，デカルト派の mv（質量×速度）を採るか，それともライプニッツ派の mv^2（質量×速度の 2 乗）を採るべきかという，いわゆる活力論争をいかにして解決できるか，というものである。これに対するカントの解決策は，デカルト派の力の

尺度 mv が数学的考察のレベルで成り立つのに対し，ライプニッツ派の力の尺度 mv^2 は形而上学的考察のレベルで成り立つという，折衷的な調停策であった。このような解決策の妥当性如何はここでは問題にしない。ここでは以下の点だけを確認しておきたい。

近代自然哲学の基本的概念（ここでは運動物体のもつ力という概念）は，数学と形而上学双方の知見が結びついて成立するものであり，もし両者の知見が対立する場合には，なんらかの仕方で調停が図られなくてはならない，と若きカントは考えていた。なるほど『活力測定考』における解決策がどれほど思想的に未熟であったにせよ，自然哲学ないし自然科学が成立するための必然的条件として，数学と形而上学とが結びつかなくてはならないという思想そのものに関するかぎり，カントはこれを終生，手放すことはなかったのである。(16)

さて『自然モナド論』における中心テーマは以下のようなものである。自然哲学の対象は空間のうちなる物体であるが，「物体が占める空間は無限分割可能である」（I 478）という明白な数学的真理と，「物体は単純実体から成る」（ibid.）という形而上学的真理とが，対立した主張でありながら，物体的世界に関してともに成り立つように見える。相対立するこの二つの真理をいかにして調停するか（ここで物体を構成する単純実体は「自然モナド」と呼ばれるが，松山壽一が注意するように(17)，この自然モナドをライプニッツのモナド概念と結びつけることは誤りであり，むしろ，モナドを物体的なものと精神的なものとに区別したヴォルフに由来するところの，表象能力を欠き単に空間を占めるだけの，ただし大きさをもたない点的アトムの類とみなすべきである）。物体が空間を占めることは「不可入性」と呼ばれるが，この不可入性という性質は，機械論者のいうアトムに備わると想定された絶対的な剛性によるのではなく，物体の構成要素である単純実体に備わる根源的な斥力による（このような物体論は批判期の表現を借用すれば「機械論的自然哲学」（IV 532）に対する「動力学的自然哲学」（ibid.）と呼ばれるが，ここでは詳論できない(18)）。したがって，幾何学者の主張する無限分割可能性は，単純実体がその力によって張り巡らす作用領域には妥当するものの，単純実体そのものには及ばないことになる。こうして，空間の無限分割可能性という幾何学的・数学的真理と，物体は単純実体から成るという形而上学的真理とが，物体的世界に関してともに成り立つことが示された。

さて，カントによって示された以上の調停案には，それを支える要となっている根本前提が存在する。それこそが空間の関係説にほかならない。なぜなら，空間が実体そのものではなく，実体間の関係であるからこそ，空間の無限分割可能性はそうした関係についてのみ妥当し，実体そのものには妥当しないと言えるからである。カントは『自然モナド論』の中で，空間が「まったく実体性を欠き，…諸々のモナドの外的関係の現象である」（I 479）ことを自明のごとく語っているが，この事実は，『自然モナド論』が

『新解明』で論証された空間の関係説に依拠した自然哲学であることを明白に物語っている。しかし，そうだとすれば，仮になんらかの論拠によって空間の関係説という前提が崩れることがあれば，『自然モナド論』における数学的真理と形而上学的真理との調停案もともに崩壊することになる。それどころか，空間の関係説をその本質的な部分として含む『新解明』の形而上学の立場そのものが崩れ去ることになるであろう。ここに，近代の数学的自然科学の形而上学的基礎づけを主要なテーマとする若きカントの哲学形成の成否を握る鍵が，その空間論に存することが明らかとなった。しかし，この問題が深刻な形で露呈するのは，68 年の『方位論文』においてである。次章では，そこに至る前の 60 年代前半におけるカントの哲学を見て行くが，その前に，物体の運動と空間との関係をあつかった 58 年の『運動と静止』の概要を見ておこう。

近代力学の形成過程で，ニュートン自身を含む多くの自然研究者によって使用された「慣性力」（vis inertiae）という概念は，哲学的な観点から見たとき，多くのあいまいさ，不可解さを含んでいた。こうした実情に対して，運動と静止に関する徹底した相対主義的理解にもとづいて，慣性力の概念を「不必要に仮構された」（II 20）概念として自然哲学から追放すること，それが『運動と静止』の主要テーマである。しかし，この点に関してはすでに他の機会に論じたことがあるので[19]，ここでは空間論に関係するかぎりで，その内容を簡潔に見ておこう。

冒頭，まず目につくのは，デカルト，ライプニッツ的な運動・静止に関する相対主義的な理解を示した直後に，ニュートン的な絶対空間を端的に否定している点である。

> 私は運動や静止という表現をけっして絶対的な意味にもちいてはならず，つねに相対的な意味にのみもちいなくてはならない。…あらゆる被造物を除いた数学的な空間〔すなわちニュートンの絶対空間〕を，諸物体を入れる容器として想像してみたところで，それは何の役にも立たない。（II 399, 挿入引用者）

ところがカントは，こうした相対主義的な運動理解，空間理解の下でなお，真の運動と見かけの運動との区別が可能であることを示そうとする。この点はカントの運動論，空間論を理解する上で，きわめて重要な論点である。というのも，ニュートンが絶対空間を導入したのは，まさしくこうした真の運動と見かけの運動を区別するためだったからである。すなわち，ニュートンの場合には，真の運動イコール絶対運動，見かけの運動イコール相対運動であり，この真の運動イコール絶対運動を記述するための枠組として絶対空間が導入される[20]。これに対してカントは，相対主義的な運動概念，空間概念の下で真の運動と見かけの運動との区別が可能であることを示そうとする。その概要は以下の通りである。

われわれの知覚に直接与えられている空間ないし座標系，たとえば大地に定位する座標系で静止している物体 A に，一定速度で接近してくる物体 B が，その直後に衝突した場合，その衝突を力学的に正しく記述するためには，静止している A に B が接近すると理解してはならず，両物体は「たがいに接近し合っている」（II 17）と理解すべきであり，したがって双方に「同等の〔つまり同じ大きさの〕運動〔量〕を与えるべきである」（II 18，挿入引用者）とカントは言う。ここで，衝突する両物体に同じ大きさの運動量を与えるべきだとする主張は，力学的な力の尺度として，作用を及ぼす運動物体の運動量をそれに充てるという非ニュートン力学的な力概念をカントが抱懐していたことにもとづく(21)（これに対してニュートン力学では，外力の大きさは作用をこうむる側の物体の運動状態の変化で測られる）。こうしてカントは，われわれの知覚に直接与えられる座標系において記述される運動が見かけの運動であるのに対し，物体の衝突といった相互作用が見られる運動を記述する場合には，両物体の運動量の大きさが等しくなるように記述できる座標系，すなわち共通重心座標系においてのみ「真の運動」（ibid.）が記述されるという結論を導く。カントによれば，この真の運動が相対運動とみなされるのは，運動と力の関係をテーマとする力学的考察のレベルでは，一個の物体の運動ではなく複数の物体が「たがいに接近し合う」相互的な運動として，すべての運動を理解しなくてはならないからである。

こうしてカントは，ニュートンのように絶対運動，絶対空間の概念に依拠することなく，真の運動と見かけの運動との区別を与えることができた。その要諦は，複数の物体間の相互作用の場の中で，はじめて真の運動を理解することが可能となる，という点にある。このような運動理解，したがってまた『運動と静止』の自然哲学が，実体間の実在的な相互作用を根本原理とする『新解明』の形而上学と整合的であり，そうした形而上学の土台の上で可能となることは，もはや明らかであろう。

ただし，共通重心座標系における運動記述が絶対空間の概念をまったく抜きにして可能であるか，この点は問題として残る。この点について『運動と静止』は何も語っていないが，批判期の著作『原理』は，この問題を正面から取り上げ，そこでニュートンとは異なったカント独自の絶対空間の必然性を論証している(22)。しかし本論考では，これ以上この問題に立ち入ることはできない。

第三章　60 年代前半におけるカントの自然哲学と形而上学

まず 63 年の『負量の概念』から見てゆこう。この論文は，その正式名称『負量の概念を哲学に導入する試み』から知られるように，数学で用いられているプラス，マイナスの符号のついた数量が自然哲学の対象に適用される場合に，その使用を正当化する根

拠を形而上学のうちに見いだそうとする試みである。したがって『負量の概念』は，『活力測定考』『自然モナド論』『運動と静止』と続くカントの自然哲学と基本的に同一の構図の下にある。ただ，これらの著作群とは大きく異なる点がある。それはカントが，これらの著作では数学的真理と形而上学的真理とをいかにして調停するかという問題意識の下に哲学的考察を展開していたのに対し，『負量の概念』では，自然哲学の対象への数学的真理の適用可能性を根拠づけるにさいして，伝統的形而上学の知見を役立たずとみなし，むしろ数学的知見に適合するような仕方で新たな形而上学を模索している，という点である。こうした点は，本著作の冒頭部分におけるカントの以下のような文言から明瞭に読み取ることができる。

> 〔旧来の〕形而上学という学問は，数学の諸概念や教説を利用する代わりに，しばしば数学に対して武装してきた。そして，〔数学から〕堅固な基礎を借り受けることによって形而上学的考察をそうした基礎の上におくことができたかも知れないのに，数学者の諸概念を…精緻な虚構としてしか理解しなかった。しかし，この二つの学問の争いにおいて，どちらに分があるのか，言い当てることは容易であろう。（II 167, 挿入引用者）

さてカントによれば，形而上学の方法という観点から見た場合に，伝統的形而上学の問題点が集約的に現れるのが，「実在性」（Realität, II 172）という概念である。「実在性」とは（『批判』の表現を借用するならば）「物の規定」（A598/B626），より正確には「物の現実存在に属する」（B225）規定を意味し，具体的には色や重さ，明るさといった感覚的性質，不可入性や運動力といった物理的性質，さらに人間が対象である場合には，人間のもつ知力や感情など，きわめて多くのものが実在性と呼ばれる。もう一点，実在的と呼ばれる物の規定は，何か積極的なもの，肯定的なものを含んでいる。暗黒に対する光明，静止に対する運動，死に対する生ないし不死，無知に対する知などが実在性であり，暗黒，静止，死などは「否定性」（Negation, II 172）と呼ばれる。では伝統的形而上学における実在性概念の捉え方にどのような問題があるのか。カントによれば，それは実在性同士の対立という自然界にありふれた事象を，伝統的形而上学のやり方ではうまく説明することができない，という点にある。カントの説明を見てみよう。

「同一の物について，あることが肯定されると同時に否定される」（II 171）ような場合に見られる対立は「論理的対立」（ibid.）と呼ばれ，こうした事態が成立不可能であることは矛盾律にもとづく。たとえば一艘の船が運動していると同時に運動していない（静止している）という事態は不可能である。これに対して「一つの物に付される二つの述語が対立していても，それが矛盾律による対立ではない」（ibid.）場合，そうした

対立が「実在的対立」（ibid.）と呼ばれる。たとえば船が東に向かって進もうとする（力をもつ）ことと，西に向かって進もうとする（力をもつ）こととは，二つの対立する述語であるが，この二つの述語を同一の船に同時に述定することは可能であり，その結果が否定的なもの（たとえば静止）となるだけである(23)。ここで実在的な対立の結果として生じる否定的なものが，実在性に対する否定性である。ただし，この否定性は実在的な対立の結果として生じるだけでなく，ある結果を生み出す積極的な根拠（これは後に「実在的な根拠」（II 190）と呼ばれる）が欠如ないし不在であるために生じる場合もある。前者の否定性が「剥奪」（II 177）つまり相殺による否定性，後者のそれが「欠如」（II 178）による否定性と呼ばれる。そして，こうした相殺あるいは欠如による否定性をゼロで表し，実在的に対立する各々の積極的な根拠（実在的根拠）の量，あるいは，その各根拠が単独で定立された場合に生じる帰結（実在的帰結）の量を正負の符号で表すことができる。そのさい，正負の符号の意味はまったく相対的なもの，便宜的なものであり，負の符号が付された量は「それ自体では真に積極的なもの」（II 169），実在的なものである。こうして，数学で用いられている正負の符号を自然界の対象に適用することの正当性が示された。いいかえれば，正負の符号は実在的な対立を表すものとして，実在的な意味が与えられたことになる。

しかし，以上に見てきたカントの説明はことがらとしては明瞭であるのだが，それがどのようにして伝統的形而上学に対する批判と結びつくのか，その点が不分明なままである。だが，この点を意識しながら，あらためて第一章の冒頭の一文を読み直してみると，カントのこれまでの説明と，伝統的形而上学に対する批判との結びつきの端緒が見えてくる。カントは言う。「従来は論理的対立だけに注意が向けられてきた」（II 171）。主語は明示されていないが，それが伝統的形而上学であることはまちがいない。したがってカントはここで，伝統的形而上学が論理的対立だけに注目し実在的対立を無視してきた，と言わんとしている。ただし伝統的形而上学は，じっさいには実在的対立を無視してきたわけではなく，善と悪の対立は真実には存在せず，悪は真実には善の欠如ないし不在にすぎないとする，アウグスチヌス以来の伝統的なキリスト教神学思想を背景として，実在的対立を実在性と否定性との（消極的な）対立に還元しようとする思想傾向を有していた(24)。実在性同士は対立しないとする考えも，そこから導かれる。だからこそカントは本著作の中で，実在的対立を実在性と否定性との対立に還元した場合に生じる不合理を，執拗なまでに指摘しているのである(25)。要するに，論理的対立だけに着目し矛盾律に依拠するだけでは，実在性同士の（積極的な）対立と，実在性と否定性との（消極的な）対立という二種類の対立を正しく区別することができない，というのが伝統的形而上学に対するカントの批判の要点である。

だが，本著作における伝統的形而上学に対するカントの批判は，これだけにとどまる

ものではない。彼の批判の矛先は，伝統的形而上学の最深部にまで達していたと思われる。この点は本著作の末尾に付された「総注」（II 201ff.）から読み取ることができる。カントはそこで次のような主張を行っている。

> ある帰結が，いかにしてある根拠によって同一律に従って定立されるのか，私はよく知っている。なぜなら，その帰結は概念の分析を通じて根拠のうちに含まれていることが分かるからである。…しかし，あるものが別のあるものから，いかにして同一律によることなく定立されるのか，この点こそ〔伝統的形而上学に対して〕是非とも明らかにしてもらいたいと望んでいることがらなのである。第一の種類の根拠を私は論理的な根拠と名づけ…，第二の種類のそれを実在的根拠と名づける。…この実在的根拠および，その帰結との関係については，私の問いは単純な形で述べることができる。〈あるものが存在するがゆえに別のあるものが存在することを，私はいかにして理解したらよいのか〉。…原因と結果ということばの前で私は引き下がらない。なぜなら，私があるものを別のあるものの原因とみなす場合，私はすでに原因のうちに，実在的な根拠と帰結の関係を考えているからである。…このような関係〔がいかにして可能か，その点〕こそ，私が〔伝統的形而上学に対して〕説明してもらいたい点なのである。（II 202f. 挿入引用者）

ここでカントは伝統的形而上学に対して，自分の問いに答えるよう請願する形をとっているが，これがカントのレトリックであることは言うまでもなく，伝統的形而上学はこうした問いに答えることができないと暗に主張している。すなわち，「概念の分析」という方法に従い，論理的対立のみに注目し，同一律ないし矛盾律を原理とする伝統的形而上学ににによっては，実在的な根拠と帰結の関係がいかにして可能となるかを説明することができない。それがここでのカントの主張の骨子である。この実在的な根拠と帰結の関係は原因・結果の関係と言い替えられている。したがって伝統的形而上学は，因果律が実在的世界に妥当することの哲学的な根拠を与えることができないとカントは主張しているわけである（ここで当然，ヒュームとの関係が問題となるが，ここではこの問題に立ち入る余裕はない[26]）。要するに，論理的対立だけに注目し概念分析をこととする伝統的形而上学は，レス（物）の世界，この実在的世界についての真理を語るべき真の形而上学たりえないという判決が，あるいはそこまででなくとも，根本的な疑念が言い渡されたことになる。

ただしカントはここで，伝統的形而上学に替わる新たな形而上学を提示しているわけではない。彼が論じたのは，実在的な根拠と帰結の関係，さらには実在性同士の対立関係という，実在的世界の普遍的な事象を成立させている根拠を従来の形而上学のうちに

は見いだしえないとうことだけである。注意すべきは，ライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学的枠組の下に形成された『新解明』の形而上学もまた，この伝統的形而上学に算入されるという事態である。したがって，『負量の概念』で示された伝統的形而上学に対する根本的な疑念は，これまでの自己自身の形而上学に対しても，あるいはむしろ自己自身の形而上学に対してこそ，向けられていることになる。上に「総注」から引用した文章の直前でカントは，「私は自分の洞察力の弱さのせいで，すべての人が容易に理解できると思っているたいていのことがらが，いささかも理解できない」(II 201) と語っている。この一文からは，形而上学に対する当時のカントのかなり深刻な疑念を読み取ることができる。

さて，以上見てきた『負量の概念』に対応する形而上学の書と見られる，64 年公刊の『判明性論文』の内容を見ておく必要があるが，その内容は，『負量の概念』を検討する中で見てきた，形而上学に対するカントの見解にほぼ沿ったものであるので，ごく簡潔に見ておくにとどめる。

『判明性論文』におけるカントの主張のポイントは，数学と形而上学では，その認識方法に根本的な相違があり，ゆえに数学の方法を形而上学が模倣することはできない，という点にある。カントによれば，数学の方法は「概念を任意に結合すること」(II 276) から始まり，したがって概念の定義（および公理）が最初におかれ（たとえば「三角形」は三本の直線に囲まれた図形として定義され，この定義に先立って三角形の概念は存在しない），そこから諸命題が演繹的に導出される。これに対して，「哲学の仕事は，混乱したものとして与えられている諸概念を分析して，余すことなく尽くされた明確なものにすることである」(II 278)。したがって，哲学ないし形而上学の方法として概念分析が否定されたわけではない。問題は，そうした分析に先立って与えられる諸概念もしくは諸命題をどこに求めるべきか，という点にある。数学の場合，たとえば幾何学ではその基礎に証明できない少数の命題が据えられるが，これらの命題は「直接に確実なもの」(II 281) とみなされ，公理と呼ばれる。これに対して形而上学の場合も，「この学問の根底に…証明できない諸命題が一覧表に記されたもの」(ibid.) がおかれるべきだが，現状では，そうした諸命題は見いだされていない。したがって「そのような証明できない根本真理を捜し求めることこそ，上級哲学〔形而上学〕のもっとも重要な課題である」(ibid. 挿入引用者)。

要するに当時のカントの考えによれば，真正な形而上学の名に値する形而上学はいまだ存在せず，そのためには，何よりもまず，その土台をなすはずの根本真理を発見する必要がある。したがってカントは，旧来の形而上学を否定しはするものの，形而上学の可能性そのものを否定しているわけではなく，ただ暗中模索の状況に身をおいている，ということである。しかし，その後，68 年の『方位論文』に至って，事態は急展開す

る。次に『方位論文』の内容を見てゆこう。

第四章　『方位論文』の衝撃

『方位論文』のテーマは以下のようなものである。カントによれば，東西南北および上下といった，空間における「方位」（Gegend,II 377）という概念は，空間における諸部分間の位置関係にもとづくのではなく，もろもろの位置関係が「絶対的な宇宙空間に対してもつ関係」（ibid.）にもとづくものである。この点を，右手と左手や現物と鏡像といった「不一致対称物」（ein inkongruentes Gegenstück, II 382）の存在に訴えて論証すること，要するに，実在的な絶対空間の存在を論証することが本著作のテーマである。空間の性質や構造は，いうまでもなく幾何学があつかう対象である。したがって本著作は，幾何学を実在的な空間に適用するさい，その適用を正当化する哲学的根拠を解明する試みであると言ってよい。そのかぎりで本著作は，処女作以来カントが取り組んできた，自然哲学と形而上学との関係というテーマの一環と見ることができる。とはいえ，カントはこれまで一貫して，ライプニッツ的な空間の関係説という形而上学的前提の下で，このテーマに取り組んできた。したがって，この前提が覆されることになれば，その影響は単に空間論という哲学の一テーマにとどまるものではありえず，カントのこれまでの哲学的営為全体に及ぶことになろう。その意味で『方位論文』は，カントの哲学的進展における，きわめて重要なターニングポイント，あるいは彼の批判哲学へと向かう重要な里程標とみなすことができる。

ところが『方位論文』に関する従来の諸研究では，本著作をカントの哲学的進展の歩みから切り離して，不一致対称物に関するカントの議論の妥当性を，空間の関係説を擁護する立場から批判したり，トポロジーのような現代数学との関係の観点から論じたりするものが多く見られる[27]。こうした研究はそれ自体としては，きわめて魅力的であり意義深いものではあるが，本論考の主旨とは一致しないので，多くを語ることは差し控えたい（ただし，空間の関係説擁護の立場からのカント批判に対しては，カント擁護の立場から後に反批判を試みる）。またカントの哲学理論の進展と結びつける場合でも，せいぜい本著作が，感性的直観の形式としての空間という，空間の超越論的観念性の理論へのきっかけを与えたとういう指摘にとどまるものが大半である[28]。しかし，近年の研究の中には，「カントが批判哲学へと転換するさい，68 年論文の果たした決定的な役割をカント研究者たちは無視してきた」[29] と語って，『方位論文』を批判哲学へと至る重要なファクターとしてカントの哲学的進展の文脈のうちに位置づけようとする B. ファルケンバーグのような研究も現れてきた。本論考も，こうした研究動向に沿ったものである。

さて，しかしながら先に見ておいたように，そもそも絶対空間は，ニュートンが自らの力学理論の基礎に据えた運動の三法則，とりわけ慣性の法則が，そこで成り立つための場として，その存在が要請されたものであった。だとすれば，『方位論文』における絶対空間の存在論証は，ニュートンの力学的な絶対空間に対する哲学的な基礎づけの試みとして理解されるべきものではないだろうか。この問題については，すでに他の機会に詳論しておいたが，『方位論文』のテーマをめぐる重要な論点であるので，以下に，ほぼそのままの形で再掲しておく(30)。

『方位論文』におけるカントの論証がニュートンの力学的な絶対空間の存在を示そうとしたものであるという解釈は，同論文中でカントがL. オイラーの名を挙げ，しかも1748年に公刊された『空間と時間についての省察』という彼の論文に言及している，という事実を考慮に入れるとき，きわめて妥当な解釈であるように見える。オイラーはたしかに当該論文において，慣性の法則が力学の基礎としてすでに十分な真理性を獲得しているという事実を根拠に，絶対空間の存在の必然性を導いている。そこでわれわれは，カントがオイラーとは別の根拠，すなち「不一致対称物」の存在にもとづいてニュートンの絶対空間の存在論証を行うことによって，オイラーの論証を補完しようとしたのだ，と解したくなる。しかし，以下の文言から読み取ることができるように，カントはオイラーの論証に，けっして満足しているわけではない。

> しかし，〔オイラーの〕この論証はその目的を完全に達成したとは言えない。というのも，その論証が示したのは，もし仮に現実に存在する物体を捨象することによって作られた空間〔すなわち相対空間〕のほかに，なんの空間も想定しないならば，その場合には，ごく一般的な運動法則〔慣性法則〕にしかるべき意味を与えることも困難になる，ということだけだからである。しかし，その論文が触れていないのは，そこで言われた運動法則を絶対空間の概念にしたがって具体的に表象しようとすると，その困難にも劣らぬ困難がまだ残されている，ということである。
>
> （II 378, 挿入引用者）

ここに見られる通り，明らかにカントは絶対空間に関するオイラーの論証に納得しているわけではない。その理由は，絶対空間のうちで慣性法則を具体的に表象しようとする場合に生じる困難にある。この困難とは何か。それはまちがいなく，その場合には絶対運動を承認せざるをえなくなる，という困難である。なぜなら慣性法則は，宇宙にただ一個の物体しか存在しないとしても，その物体の真なる運動について，したがってまた絶対運動について，有意味に語りうることを要求するからである。この点でカントは，ニュートンの絶対空間の存在論証を与えたとするオイラーの主張に対して，保留ないし

不承認を表明しているのである。

しかし，それではカント自身はこの『方位論文』において，絶対空間に関わるこの困難を克服し，もってニュートンの力学的な絶対空間に対する存在論証を与えているであろうか。これも否である。不一致対称物の存在を引き合いにだすカントの論証は，「力学者（Mechaniker）に対するものではなく，ほかならぬ幾何学者（Messkünstler）に対する」（ibid.）ものであり，それによって論証されるべき空間は，「幾何学者たちが考えるがままの普遍的な絶対空間」（II 381）である。そうした絶対空間は，たとえば球面上に線対称に描かれた二つの不等辺三角形が，対応する辺と角とがすべて等しい大きさであるにもかかわらず，互いに重ね合わせることができないという，「幾何学が含むところの延長に関する直観的判断」（II 378）によって指示される場として導入される。このように，ここでカントが論じている絶対空間は，幾何学固有の直観的判断によって指示され，したがって幾何学において前提されるべき空間を意味しており，慣性法則の成立を保証する場としての力学的な絶対空間を意味してはいないのである。何より，ニュートン的な力学的絶対空間の最大の特徴であるはずの絶対静止について，本著作はまったく触れていない。

以上，再掲された拙論から明らかなように，カントが『方位論文』で問題にした絶対空間は，ニュートンの力学的な絶対空間ではなく，幾何学者があつかう絶対空間である（なお付言すれば，ニュートンの力学的な絶対空間の概念に正面から対峙し，「理念としての絶対空間」（IV 559）というカント独自の絶対空間の概念を提示するのは，批判期の著作『原理』においてであり，したがって本論考の守備範囲を超えている）。ただし，それは単に想像された，あるいは単に思惟されただけの空間ではなく，この世界の枠組をなす実在的な絶対空間である。この点は，先に触れたライプニッツ的な空間の関係説を擁護する立場からのカントの議論に対する批判の問題とも関わる点であるので，以下に詳論したい。

右手と左手とは，対応する諸部分の大きさや形が完全に等しい場合でも，（右手用のぴったりした手袋を，けっして左手にはめることができないように）けっして完全に重ね合わせることができない。カントによれば，その理由は「〔右手あるいは左手といった〕物体の形態を完全に規定する根拠が，単にその諸部分相互の関係と位置にもとづくだけではなく，それに加えて幾何学者たちが考えるがままの普遍的な絶対空間に対する関係にももとづいている」（II 381, 挿入引用者）からであるとされる。これに対して，ライプニッツ流の空間の関係説の支持者からは，次のような反論がよく挙げられる。ユークリッド二次元空間上で線対称に描かれた二つの不等辺三角形は，対応する辺と角との大きさがすべて等しいにもかかわらず，その平面上で図形を移動させるかぎり，互いに重ね合わせることができない，つまり両図形は互いに区別できる。ところが，その線を

中心に折り返せば重なり合う，つまり両図形は区別できない。要するに，二つの図形が重なり合うか重なり合わないか，いいかえれば二つの図形の区別がつくか，つかないかは，その図形が二次元空間のうちで考えられているか，それとも三次元空間のうちで考えられているかに応じて異なる。同様に，もし四次元空間を考えることができたなら，そのうちで右手と左手を重ね合わせることができるであろう。ゆえに右手と左手の区別は，それをどのような性質，構造をもった空間のうちで考えるかに応じて異なる，相対的な区別であって，絶対的な区別ではない。したがって不一致対称物の存在は絶対空間の存在を示す根拠とはなりえない，と(31)。

じつはカントは，こうした反論について先刻承知している。すでに見ておいたように，カントは『活力測定考』のうちで，空間の存在や構造が実体間の相互作用に依存する相対的なものであって，この実体間の相互作用の法則が異なっていれば，異なった性質や構造をもった空間が帰結したであろうと語っている（vgl. I 24）。そして『新解明』で主張されていたように，この実体間の相互作用の法則を最終的に決定するものは「神の知性」（I 413），より正確には「神の知性の創造的表象」（I 414）であった。しかも神の知性は世界の創造にさいして，まったく自由に構想することができるのだから（vgl. ibid.），空間の性質や構造は結局のところ，神の知性の自由で恣意的なはたらきによって決定されることになる。ゆえに神が別様な世界を構想したならば，別様な空間が成立していたわけである。なるほど，60 年代前半のカントは，こうした独断的な形而上学に対する根本的な疑念を示していたが，空間の構造は知性によるかぎりでは，自由で恣意的な仕方で思惟可能であるという理解については，カントはこれを批判期に至るまで手放すことはなかった。この点は，二角形，すなわち二本の直線で囲まれた図形という概念は矛盾を含んでおらず思惟可能であるという，『批判』のうちに表明されている，よく知られた文言からも明らかである（vgl. A220/B268）。

要するにカントは，四次元空間が思惟可能であることは十分承知しているのである。だが『方位論文』における空間の構造に関わる議論は，知性による思惟に依拠したものではない。それは「幾何学が含むところの，延長に関する直観的判断」（II 378）に依拠したものである。カントは東西南北や上下といった方位に関する説明を開始するにあたって，「物体的空間においては，その三つの次元のゆえに，互いに直交する三つの平面を考えることができる」（ibid.）と，いきなり語り出し，実在的空間が三次元を有することを自明のごとく前提している。これは実在的空間の三次元性が，直観的に知られる根源的な事実ないし所与であるとカントがみなしていることを明白に物語っている。なるほど『方位論文』の段階では，この直観がアプリオリな直観であることまでは明言されていないが，空間に関する幾何学的認識が，知性的思惟に依拠するのではなく「直観的判断」に依拠すべきものであることは，この段階でカントにより明確に理解されて

いる。したがって，四次元空間が思惟可能であれば，その空間のうちで右手と左手とが重なり合うであろうという，空間の関係説擁護の立場からの主張は，思惟されるかぎりでの空間については当てはまるであろうが，「幾何学が含むところの，延長に関する直観的判断」に依拠するカントの議論に対する批判とはなりえないのである。

さて，『方位論文』を論じるさいの論点としては，以上に見てきたような，実在的空間に関するカントの論証が，じっさいには何を論証しようとしたものであるのか，また，その論証は妥当といえるのか否か，といった論点の他に，もう一つの論点が存在する。実在的な絶対空間の存在を認めた場合に，それが真正の形而上学を求めて暗中模索の状況にあったカントの思考に，どのような影響を及ぼしたのか，という論点がそれである。次に，この問題を検討してみよう。

実在的な絶対空間の存在がひとたび承認されるならば，幾何学の物理的世界への適用可能性がただちに導かれ，さらには，『方位論文』では直接，論証されなかったものの，ニュートン力学の基礎におかれる力学的な絶対空間との関係という問題が視野に入ってくる。しかし，当時のカントにとっては，こうした問題以上に，より重大で深刻な問題が彼の心中を占めるようになったと思われる。それは次のような形而上学的ないし存在論的な問題である。カントによれば，「絶対空間はあらゆる物質の存在から独立であり，それ自身，物質の合成の可能性の第一根拠として，固有の実在性を有する」（II 378）はずのものである。ここで「物質の合成」とは「物体」を意味すると理解できる。したがってカントはここで，絶対空間が物体の可能性の第一根拠である，と主張しているわけである。これに対して 55 年の『新解明』では，一つの物体を形成する要素的な諸実体の実在的な相互作用は，結局のところ，それらの存在の「共通の根拠」（I 413）あるいは「存在者の普遍的な根拠」（ibid.）たる神によって可能となり，したがって実体間の関係としての空間もまた神によって可能となると主張されていた。つまり，『新解明』と『方位論文』では，根拠と帰結の関係がまったく逆になっている。矢印で表すと，前者では神→実体間の相互作用→空間として表されるのに対し，後者では絶対空間→物質の合成（＝物体）として表され，後者では神の代わりに絶対空間が第一根拠の地位を占めることになる(32)。だとすれば，絶対空間の存在を認めるかぎり，『新解明』で提示されたようなライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学を採用することは，単に疑わしいだけではなく，完全に不可能であるという帰結を避けることはできない。なぜなら，ライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学にもとづくかぎり，絶対空間の存在は「不可識別者同一律」に抵触するからである。

さらに，自然哲学と形而上学との関係という観点から見た場合に，『新解明』の形而上学に依拠した『自然モナド論』の戦略，すなわち自然哲学の対象に関して数学的真理と形而上学的真理とを両立させるための調停を図るという戦略を採ることも不可能であ

る，と結論せざるをえないように見える。なぜなら，絶対空間が物体の可能性の第一根拠である以上，空間に関する幾何学的真理である無限分割可能性は，必然的に物体そのものにも妥当し，したがって，物体は単純実体から成るという形而上学的真理は否定されざるをえないであろうからである。

ところが，きわめて興味深いことに，この期に及んで，なおカントは，物体が単純実体から成るという形而上学的命題を完全に手放そうとはしない。この点の詳細は次章で論じることにするが，要するに，一方で物体の存在に先行し，物体を可能にする根拠としての絶対空間の存在を認めながら，他方で，なおかつ形而上学的真理が可能となるためには，この絶対空間の在り方，したがってまた空間的世界の在り方はどのようなものとして考えられるべきか，という問題こそが，『方位論文』公刊直後にカントが直面した存在論上の大問題なのである。次章で論じる，いわゆる「69 年の大いなる光」という，いささか芝居がかったカントの表現は，こうした文脈の下で理解されるべきである。

第五章　過渡期としての『就任論文』の形而上学

まず「69 年の大いなる光」というカントの文言をどう理解すべきかという問題から見て行こう。カントは批判哲学を確立した後に，「覚書」の中で自らの哲学的進展を振り返って次のように記している。

> 私は最初，この教説を薄明のうちに見ていた。私は一つの命題を証明し，次にその反対命題を証明することを真剣に試みた。それは懐疑論を打ち立てるためではなく，知性の自己欺瞞（Illusion des Verstandes）がどこに潜んでいるのかを発見しようと思ったからである。69 年が私に大いなる光を与えてくれた。
>
> （R5037, XVIII 69）

ここで言われている「この教説」を批判哲学と解して問題はないであろう。また「69 年の大いなる光」が，空間（時間）を実在物，実体とみなすのではなく，われわれの感性的直観の主観的な形式とみなす，空間（時間）の超越論的観念性の理論を意味するものと理解してよいであろう。問題は，そのあいだに挟まれた「一つの命題を証明し，次にその反対命題を証明することを真剣に試みた」という一文をどう理解するか，という点にある。

一つの有力な解釈として，この一文が「純粋理性のアンチノミー」（A405/B432）を指示したものであるとする解釈が存在する(33)。それによれば，純粋理性のアンチノミーの問題こそが，空間（時間）の超越論的観念性の発見へとカントを導いた鍵であるとみ

なされる。たしかに，『批判』の「純粋理性のアンチノミー」章における定立と反定立の証明は一見，この一文が示唆する通りの仕方で行われており（vgl. A431/B459），この解釈の拠って立つ根拠もそこにある。だが，この解釈には根本的な問題がある。第一に，純粋理性のアンチノミーの場合，その解決の鍵をなすのは，単に空間・時間の超越論的観念性の理論だけではなく，それ以上に，純粋理性の「理念」（A321/B377）に関する批判哲学的考察である。とりわけ，被制約者が与えられている場合に，制約の全体は与えられているのではなく「課せられている」（A498/B526）という根本洞察は，これなしにはアンチノミーの解決が不可能であるが，70 年以降の，いわゆる「沈黙の歳月」の中で得られ熟成されていったものであろう。もう一点，この解釈が拠り所とする上記「覚書」中の一文に関しては，じつは『就任論文』のうちでも，これに対応すると見られる箇所があり，しかも，その解決方法はアンチノミーで示されたものとは，まったく異なっている。「69 年の大いなる光」が直接，関係しているのは，むしろこちらの箇所であると思われる。以下，『就任論文』の内容を追いながら，詳しく見てゆこう。

『就任論文』のうちで展開されている形而上学的理論は大略，以下のようなものである。まず，空間・時間がわれわれの感性的直観の主観的条件であるという洞察にもとづいて，空間・時間的世界は，われわれに対して現れる世界，現象界ないし感性界であり，これに対して，われわれの知性によって思惟される世界，知性界こそが，在るがままの客観的世界であるとされる。つまり，われわれ人間のもつ二つの認識能力たる感性と知性に，それぞれ固有の認識原理を認め，そうした認識原理の区別に応じて考えられる二つの世界，すなわち感性界と知性界について，前者には数学的真理が，後者には形而上学的真理がそれぞれ成り立つという仕方で，両真理の棲み分けを図るというのが『就任論文』の基本戦略である。こうして，たとえば『方位論文』で示された絶対空間の根本規定である「あらゆる物質の存在からの独立性」（II 378）および「物質の合成の可能性の第一根拠」（ibid.）という規定が，感性を通じて世界を認識するさいの，われわれ人間の認識原理の特性として，あらためて捉え直され[34]，そのことによって，空間は（外的）現象界のあらゆる事物の可能性の原理であると同時に，その管轄領域は知性界には及ばないことになる。こうした戦略は，数学的真理と形而上学的真理との両立を図るという点では『新解明』の戦略と同一であるにしても，『新解明』の場合，実体間の関係としての空間という根本把握にもとづいて，実体間の関係についての言明は実体そのものには及ばないという仕方で，実体と関係に関する存在論的な位階の差に訴える戦略であったのに対し，『就任論文』では，感性と知性という認識の「起源」（II 393）の違いに関する認識論的考察が土台に据えられている点で，両者の戦略は根本的に異なっている。

では知性的認識としての形而上学的真理の内容は，具体的にはどのようなものか。驚

くべきことに，その内容は『新解明』で提示された形而上学の内容とほとんど同一のものである。すなわちカントは，「直観的に表象された場合に空間と呼ばれるところの，あらゆる実体の関係それ自体は，いかなる原理にもとづくのか」（II 407），あるいは「多くの実体が相互に交渉し合うことはいかにして可能か」（ibid.）と問い，それに対して，「あらゆる実体は唯一の存在者に由来」（II 408）しており，「宇宙の諸実体の結合における統一は，あらゆる実体が一なる存在者〔すなわち神〕に依存していることからの帰結である」（ibid. 挿入引用者）と答えている。これが『新解明』の形而上学説とまったく同一の内容であることは一目瞭然である。63 年の『負量の概念』の末尾で表明された，伝統的形而上学に対する根本的疑念が，あたかも忘れ去られてしまったかのようである。それだけに，かえって空間・時間の超越論的観念性の発見が，カントにとって形而上学の存亡を左右する決定的なできごとであったことを，逆に物語っていると言ってよいであろう。いずれにせよ，カントは知性的認識としての形而上学の内容という点から見るかぎり，50 年代の独断論的形而上学に完全に復帰したことになる。

さて，先述した「69 年の大いなる光」をめぐる問題に関する内容は，『就任論文』の第五章に見られる。そこでは，感性的認識に固有の原理が知性的認識に影響を及ぼし，その結果，感性的なものを知性的なものと取り違える，あるいは「感性的概念を知性的表徴であるかのように称する知性の自己欺瞞（praestigiae intellectus）」（II 412）が生じることが論じられている。たとえば，「どこかに存在するものは現実存在する」（ibid.）という命題は「文句なしに真である」（ibid.）が，これを逆にした「現実存在するものはどこかに存在する」（ibid.）という命題は，「どこかに存在する」という感性的概念が述語の位置にあるがゆえに，（空間の超越論的観念性の理論にもとづくかぎり）本来はこの命題を対象それ自体に関する客観的言明とみなしてはならず，対象を感性的に表象するさいの主観的条件とみなさなくてはならないのだが，これを客観的言明とみなしてしまうところに，「知性の自己欺瞞」が成立すると言われる。同様な知性の自己欺瞞は次のような場合にも生じる。「物体は単純体から成る」（II 416）という命題は，確実な知性的認識であるが，だからと言って，「合成体〔物体〕においては一定数の〔つまり有限個の〕部分が存在する」（II 415, 挿入引用者）という命題は，そこから確実に導かれるわけではない。にもかかわらず，なぜ知性はそうした推論を行ってしまうのか。カントによれば，合成体の部分への分割は時間の条件の下で行われるが，「無限の系列はわれわれの知性の制約のゆえに判明には認識されず」（II 415），したがって有限の時間内には「無限の系列は不可能に思われる」（ibid.）ため，分割が単純体に達するかぎり，それは有限回の分割によってのみ可能であると，知性が自らを欺いてしまうからである。したがって，この知性の自己欺瞞を暴露することによって，一方における，物体が単純体から成ることと，他方における，物体の無限分割可能性との矛盾を避

けることが可能となる。いいかえれば，「物体は単純実体から成る」という形而上学的真理と，「物体は無限分割可能である」という数学的真理とが両立可能となる。すなわち，前者は，在るがままの物体に客観的に妥当する命題として，後者は，物体がわれわれに現象するための主観的条件を示す命題として，ともに成立するということである[35]。上記「覚書」中の，「一つの命題を証明し，次にその反対命題を証明することを真剣に試みた」という一文に直接，対応するのは，両命題の真理性をともに認めた『就任論文』における，こうした議論であって，『批判』の第二アンチノミーにおける，定立と反定立をともに偽と結論づけた議論ではないであろう[36]（vgl. A528/B556）。

それでは，空間論から見たカント批判哲学の成立史という本論考のテーマ全体から見たとき，この『就任論文』にはどのような位置づけが与えられるであろうか。この点の検討をもって本論考を締め括ることにしよう。

『就任論文』は，空間・時間の超越論的観念性の発見をもって批判哲学への扉を最初に開いた。『就任論文』はまた，狭義の形而上学を講述するに先立って，われわれ自身の認識能力を吟味し，そこから明らかとなる「感性的認識と知性的認識の区別を教える学」（II 395）として，形而上学の「予備学」（ibid.）を先行させるという，批判哲学に直結する方法論上の根本思想をはじめて提示している。以上の二点において『就任論文』は，まちがいなく批判哲学の成立に関わる，きわめて重要な地位を占めていると確言できる。

だが同時にまた，『就任論文』に展開されている純粋な知性的認識としての形而上学説に見られる，如何ともしがたい独断論的性格は覆い隠しようもない。この点はとりわけ，『就任論文』で示された知性の「論理的使用」（II 393）と「実在的使用」（ibid.）の区別に関するカントの理解に起因するところが大きい。カントによれば，知性の論理的使用とは，他から与えられる諸概念，諸認識を知性が矛盾律に従って整序することであり，これに対して知性の実在的使用とは，事物やその関係についての概念そのものを知性自身が与えるような使用を意味する。前者の使用はすべての学問に共通であるのに対し，後者の使用は純粋な知性的認識としての形而上学の場合にのみ見られる（vgl. ibid.）。ここで『批判』と比較した場合に，もっとも特徴的であるのは，『就任論文』では「多くの現象を知性によって比較することで得られる反省的認識が経験と呼ばれる」（II 394）と言われ，したがって，空間・時間の形式に従って与えられる多様な現象に知性の論理的使用が加わるだけで，経験が成立すると考えられている点である。ここには，経験の対象がそもそも対象として成り立つためには，「純粋悟性概念」（A76/B102）による多様な直観の総合統一のはたらきが必要であるとする，『批判』における対象構成の理論がまったく欠けている。他方，純粋な知性的認識としての形而上学における対象の認識には，知性の実在的使用が関与すると言われてはいるものの，形而上学の対象

に関する知性概念の実在的使用がいかにして可能か，という問いは立てられておらず，そうした使用の可能性が独断的に前提されているだけである。要するに，72 年のマルクス・ヘルツ宛書簡の中ではじめて発せられた「形而上学の全秘密を解く鍵となる」（X 130）問い，すなわち「われわれの内にあって表象と呼ばれるものが，対象と関係することはいかなる根拠にもとづくのか」（ibid.）という，批判哲学の核心に関わる問いが，『就任論文』ではいまだカントの問題意識に上っていない，ということである。

もう一点，自然哲学と形而上学との関係という観点からみたとき，『就任論文』は致命的な問題を抱えている。上述したように，カントは処女作以来，近代自然科学の形而上学的基礎づけという問題を自己の哲学の重要なテーマとしてきた。では『就任論文』では，この問題はどのように論じられているか。カントは一方で，ニュートンの重力法則が自然界すなわち感性界において成立することを認めている。他方でカントは，知性界における諸実体が実在的な相互作用を介して結合していることも認めている。だとすれば，自然界と知性界とでは同様の実在的な結合原理が見られるがゆえに，感性的自然界を支配する「自然法則」（II 404）が，知性界を支配する形而上学的原理によって基礎づけられていると理解することは，ごく自然なことのように思われる。だが，このような理解は『新解明』の場合には妥当であっても，『就任論文』の場合には成立しえない。それはなぜか。『新解明』では，形而上学が関わる実体的世界と，自然哲学が関わる自然界とでは，考察レベルに差があるものの，両世界はいわば地続きであって，そこに断絶は見られない。したがって，両世界に関する存在論的考察だけにもとづいて，安んじて自然哲学を形而上学の上に基礎づけることができた。これに対して『就任論文』では，感性界と知性界に関して，感性的原理と知性的原理とが互いに独立に各々の世界を支配しており，両世界は互いにまったく没交渉であり断絶している。だからこそカントは，感性界がニュートン的な重力法則に支配されているという事実とはまったく無関係に，知性界を実在的な相互作用を介して結合する諸実体から成る世界として描いているのである。むしろ，感性的原理の知性的原理に対する影響を阻止することこそが『就任論文』の眼目であった。要するに，近代自然科学の形而上学的基礎づけというテーマから見たとき，『就任論文』の形而上学は，けっしてカントの意に沿うものではなかったのである。この問題の決着は，批判期の著作『原理』によって与えられることになる。

カントは『就任論文』をもって批判哲学への扉を開く地点に達したが，けっしてそこにとどまることはできず，批判哲学の確立に向かって，さらに茨の道を歩むことになる。その意味で『就任論文』は，批判哲学の本丸へと向かうカントの思索の途上における過渡期の姿を鮮明に表した著作であると結論できるであろう。

以上，批判哲学へと向かうカントの哲学的思索の歩みを空間論という観点から追跡す

る試みを行ってきた。空間という概念は自然哲学と形而上学とのインターフェイスに位置する。それゆえに自然哲学と形而上学との関係を自らの哲学的営為の，生涯にわたる重要なテーマとしたカントにとって，空間論がその中心に据えられてきたのは当然であった。したがってまた，ライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学の枠組の下で思想形成を図った若きカントが，ライプニッツ的な空間の関係説の土台の上で自然哲学と形而上学との関係を考えようとしたことも当然であった。それゆえに 68 年の『方位論文』で絶対空間の存在論証を行ったことは，単に幾何学の実在的世界への適用に対して哲学的な根拠を与えたというにとどまらず，それまでにカントが確立していた自然哲学と形而上学との関係を一から考え直さざるをえない状況へとカントを追いやった。『方位論文』がカントの哲学的営為にもたらした衝撃は，きわめて大きかったと思われる。しかし，それは同時にまた，批判哲学へと至る，決定的に重要な一歩でもあったのである。

《注》

カントからの引用は『純粋理性批判』については慣例に従って第一版を A，第二版を B で表記し，それ以外の著作資料についてはアカデミー版カント全集の巻号をローマ数字で表記する。なお訳出にあたっては，岩波書店版『カント全集』を底本としたが，そのつど断ることなく訳文を変更した箇所がある。カント以外の著作の引用については，邦訳がある場合には邦訳者の氏名を表記して著作名に替えた。

（1） M. Kühn, *Kant. A Biography,* Cambridge UP 2001, 菅沢龍文・中澤武・山根雄一郎（訳）『カント伝』（春風社，2017 年）372 頁。

（2） I. Polonoff, *Force, Cosmos and Other Themes in Kant's Early Thought,* Bonn 1973.
G. B. Sala, *Kant und die Frage nach Gott,* Walter de Gruyter 1990.
M. Friedman, *Kant and the Exact Sciences,* Harvard UP 1992.
M. Schönfeld, *The Philosophy of the Young Kant,* Oxford UP 2000.

（3） 高橋昭二『カントの弁証論』（創文社，1969 年）。浜田義文『若きカントの思想形成』（勁草書房，1967 年）。

（4） 高橋昭二は前掲書において，アンチノミー論こそがカントに対して批判哲学への方向を与えた根本的なテーマであるとする持論を展開している。きわめて興味深く，また啓発される点の多い論考であるが，『批判』の弁証論をすべてアンチノミーの問題として捉え直そうとしている点など，いささか強引な解釈も目につく。

（5） なお，批判期におけるカントの空間論については，以下のものを参照。犬竹正幸『カントの批判哲学と自然科学』（創文社，2011 年）特に第 6 章「カントの動力学的空間論」。

（6） I. Newton, *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica,* 1686, trans. A. Motte, rev. F. Cajori, University of California Press 1946, p. 546. 河辺六男訳『世界の名著 26　ニュートン　自然哲学の数学的諸原理』（中央公論社，1971 年）564 頁。以下，『プリンキピア』からの引用は邦訳による。

（7） I. Newton, *Optics: or A Treatise of the Reflections, Refractions and Colours of Light,* 1717. 田中一郎訳『科学の名著 6　ニュートン　光学』（朝日出版社，1981 年）230 頁。

（8） R. Descartes, *Principia Philosophia,* 1644, 井上庄七他（訳）『科学の名著第 II 期 7　デカルト　哲学の原理』（朝日出版社，1988 年）83 頁を参照。ただし，よく知られているよう

にデカルトは，運動量をベクトル量としてではなくスカラー量として捉えているために，力学的な意味での厳密な運動量保存則をあつかっているとは言えない。

（9） Vgl. G.W. Leibniz, *Specimen Dynamicum,* 1695, hrsg. von H. G. Dosch, PhB339 1982.

（10） 米山優・佐々木能章（訳）「ライプニッツとクラークとの往復書簡」『ライプニッツ著作集 9 後期哲学』（工作舎，1989 年）263–423 頁を参照。

（11） 絶対空間を要請することなしにニュートンの運動の三法則に客観的な意味を与えるために提案された「慣性系」の概念は，19 世紀に入ってからのものである。内井惣七『空間の謎。時間の謎』（中央公論新社，2006 年）97–98 頁を参照。

（12） 犬竹正幸「ライプニッツの自然哲学 ──『動力学試論』に見られる力と運動」酒井潔他（編）『ライプニッツ読本』（法政大学出版局，2012 年）92–102 頁を参照。

（13） 山本義隆『古典力学の形成 ── ニュートンからラグランジュへ』（日本評論社，1997 年）160 頁。

（14） ニュートンは『光学』第二版の序文中で，「私が重力を物体の本質的属性と考えてはいないことを示すために，その原因に関する疑問を一つ付け加えた」（田中訳，前掲書，3 頁）と語って，重力が物質の本質に属する規定ではないことを明言している。

（15） 山本道雄『カントとその時代』（晃洋書房，2008 年）72 頁。

（16） 『批判』のうちでは次のような文言が見られる。「幾何学と哲学とは互いにまったく異なった代物であるが，自然科学のうちでは互いに提携し合っている」（A726/B754）。さらに批判期の著作『原理』は，自然科学における数学と形而上学とのこうした提携の諸相を論じた書であると解することができる。犬竹正幸，前掲書，28–51 頁を参照。

（17） 松山壽一「自然モナド論解説」『カント全集 2 前批判期論集 II』（岩波書店，2000 年）514–520 頁。

（18） この問題についても以下のものを参照。犬竹正幸，前掲書，177 頁以下。

（19） 犬竹正幸，同上書，102 頁以下を参照。

（20） 河辺訳，前掲書，65 頁。

（21） カントは青年期に抱懐したこうした非ニュートン的な力概念を終生，手放すことがなかったのであり，それゆえにニュートン力学の完全な理解に至ることが遂になかった。

（22） 犬竹正幸，前掲書，第五章および第六章を参照。

（23） カントは本著作で，こうした実在的対立の実例として，外的自然に関する物理学的事象の例だけでなく，内的自然すなわち人間の心に関する心理学的事象も含めて，数多くの実例を挙げている。

（24） 本著作中でカントは，「哲学者はよく，悪を単なる否定性とみなす」（II 182）と語って，この問題に関する伝統的形而上学の立場について承知していることを仄めかしている。

（25） カントは実在的対立の実例として，貸金と借金の例を挙げ，本来ならば貸金をプラス，借金をマイナスの符号で表すべきなのに，借金を否定性と見てゼロで表すならば，いくら借金をしても合計はプラスのままになってしまう，といった明白な不合理となる実例をいくつも挙げている（vgl. II 174ff.）。

（26） この問題については以下の論著が多くの示唆を与えてくれる。山本道雄，前掲書，第 13 論文「カントはいつ「デヴィッド・ヒュームの警告」を受けたか」342–359 頁。

（27） N. Huggett (ed.), *Space from Zeno to Einstein,* MIT Press 1999, pp. 203–212.

R. L. Poidevin, *Travels in four Dimensions,* Oxford UP 2003, 植村恒一郎，島田協子（訳）『時間と空間をめぐる 12 の謎』（岩波書店，2012 年）74–87 頁。

石黒ひで『ライプニッツの哲学』（岩波書店，1984 年）136–140 頁。

植村恒一郎「「位置解析の前に立つカント ──『方位論文』の切り拓いたもの」日本カント協会（編）『日本カント研究』No. 18（知泉書館，2017 年）105–120 頁。

（28） たとえば以下のものを参照。M. Friedman, *op cit.* p. 28f.

（29） B. Falkenburg, *Kant's Cosmology,* Springer 2020, p. 86.

（30） 犬竹正幸，前掲書，143–145 頁を参照。

（31） 石黒ひで，同上。

（32） Vgl. E. Görg, *Raum, Gott, Gravitation,* Franz Steiner Verlag 2018, S. 120–138.

（33） 我が国では石川文康の解釈がこれにあたる。石川文康『カント　第三の思考』（名古屋大学出版会，1996 年）18 頁以下を参照。さらに岩波版『カント全集 3　前批判期論集 III』（2001 年）の中の山本道雄解説（408–409 頁）も参照。

（34） カントは『方位論文』で絶対空間の存在論証の根拠とした不一致対称物の存在を，『就任論文』では空間の根源的直観性の根拠として挙げている（vgl. II 403）。

（35） なお付言すれば，こうした議論が成り立つ前提として，以下の点を指摘しておきたい。カントは『就任論文』では，感性界と知性界の区別を二つの別個の世界として理解しているのではなく，同一の世界を感性と知性という二つの認識源泉の区別にもとづいて，（高橋昭二の表現を借りるなら）「二元的に」把握している。だからこそカントは，感性界の存在者である物体について，「物体は単純実体から成る」という，（『批判』では明確に否定された）命題が成り立つと考えているのである。高橋昭二，前掲書，189 頁を参照。

（36） さらに，「覚書」中に見られた「知性の自己欺瞞」（Illusion des Verstandes）という表現と，『就任論文』中に見られた「知性の自己欺瞞」（praestigiae intellectus）という表現とがまったく同一であることも，こうした解釈を支える有力な傍証として挙げておく。

（原稿受付　2021 年 10 月 7 日）

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 29–49　　March 2022

亡霊の語り ── 中間航路の死者の声

三　井　美　穂

Ghost Narratives
── Echoing the Victims of the Middle Passage

Miho MITSUI

要　旨

トニ・モリスンの『ビラヴィド』は，タイトルが示す通り，2歳で殺され，肉体をもって蘇ったビラヴィドが記憶した物語として読むことができる。その記憶は，ビラヴィド自身の記憶とともに，中間航路の死者を含む，沈黙を余儀なくされた多くの死者の記憶でもある。それはモリスンがエッセイで論じた「語られなかった，語りえないこと」の記録である。本稿では，言語化できないこの記憶をモリスンがどのように『ビラヴィド』で表現したかについて論じる。言語化が不可能なものは，「記号」や「絵画」等のビジュアル化をもって読者に提示されており，ビラヴィドの肉体がその最も重要な表象と考え，その詳細を論じる。

キーワード：トニ・モリスン，『ビラヴィド』，中間航路，亡霊，スレイヴ・ナラティヴ，記号，記念碑

はじめに

2020年アメリカの俳優サミュエル・L・ジャクソンがホストを務めるドキュメンタリー *Enslaved* が公開された。アメリカの奴隷制度を辿る場合，アメリカ国内や西インド諸島にその跡を見るというのが通常だが，このドキュメンタリーは，アフリカから新大陸へと向かう中間航路で大西洋に沈んだ奴隷船から奴隷制度を振り返るという，これまでとは異なる視点で制作された。だがそれより30年前，中間航路の死者に光をあてたフィクションがトニ・モリスンの『ビラヴィド』（*Beloved* 1987 以下引用では *B* と記載）だった。『ビラヴィド』は奴隷の子殺しという実際の事件からヒントを得て書かれた，奴隷解放前後の時代を背景とした物語だが，子どもを殺した母親に焦点を当てると同時に，あるいはむしろ，中間航路を含む奴隷制度下の死者の声を描いた物語と言えよう。「死者を語る」ではなく「死者が語る」物語である。この点で『ビラヴィド』は，元奴隷が語るスレイヴ・ナラティヴや，想像力によって奴隷の声を回復したネオ・スレイヴ・

ナラティヴとは違った側面から当時の人々を描き出している。ただし中間航路を描いているとはいえ，「中間航路」や「奴隷船」という言葉は，小説の中には一度も出てこない。「船」が最終章に 1 度登場するだけだ. また小説の舞台設定も奴隷貿易廃止後の時代であるため，中間航路を想像させる描写が唐突に出てくることに，読者は戸惑う。

スレイヴ・ナラティヴとは，19 世紀半ばに奴隷制度廃止論者たちが，運動の一環として逃亡奴隷や解放奴隷のインタビューを編集し発表したものである。スレイヴ・ナラティヴの出版は，プロパガンダとしては大きな意義があったものの，元奴隷たちの「本音」となると，そこには空白が目立った。白人読者を想定したインタビューであれば，同じ白人の奴隷所有者を誹謗することははばかられたであろうし，そもそも元奴隷の言葉は善意の白人編集者によって「検閲」を受けている。その結果，発表されたスレイヴ・ナラティヴはどれも似たような内容になっている。つまるところ，スレイヴ・ナラティヴは善意の白人社会のイデオロギーを映し出すマスター・ナラティヴだったと言えよう。

読者や編集者に配慮し，おぞましい事実にベールを掛けたために現れた空白のほかに，スレイヴ・ナラティヴにはもう 1 つ別の重大な空白がある。どのように表現すべきかわからない，言いようのない事柄もやはり，空白とならざるを得ない。誰も経験したことのない奴隷の体験を，どんな言葉で表したらよいのか. そのような出来事がそれまでになかったのなら，それを表す言葉も当然ない。しかしそれを言語化しない限り，記録として歴史には残らない。モリスンがエッセイ “Unspeakable Things Unspoken” で論じた「語られなかった，語りえないこと」は，奴隷が体験した出来事だけでなく，そのような体験を過去に共有するアフリカ系アメリカ人の存在そのものも指す。アフリカ系アメリカ人の存在自体が，「奴隷」という記号に落とし込まれ，言語化の対象になっていなかったのだ。

この言語化に重点を置いたのが，ネオ・スレイヴ・ナラティヴである。奴隷の歴史を共有するアフリカ系アメリカ人作家たちは，奴隷の生の声を想像力で回復し，記録しようとした。トニ・モリスンも『ビラヴィド』でスレイヴ・ナラティヴの空白を埋めるべく，プランテーションの日常，逃亡，その後の生活を通して，奴隷の過去をフラッシュバックで蘇らせながら，彼らが何を感じながら生きたのかを描き出している。しかし『ビラヴィド』がネオ・スレイヴ・ナラティヴの中でも特殊なのは，生き残った人間だけでなく，中間航路で命を落とした人々に光を当てて語らせているところであろう。生き残り奴隷となった者たちには，わずかにでも語る機会があったが，死者たちにはこれまで言語化の機会すら与えられていなかった。このように見ると，中間航路の死者は，言語化できない存在という点において，アフリカ系アメリカ人の存在の原型と言えるだろう。

死者の言葉，すなわち亡霊の語りは，ひとつには生き残った者たちの記憶にないこと

を思い出させ，生き残った者たちが経験しなかったことを教える。モリスンの小説では，賢者としての亡霊が語ることが多い。例えば『タール・ベイビー』（*Tar Baby* 1981）の沼の女や盲目の騎士などは，後世の者たちにあいまいにではあるが過去を示唆する。一方，『ソロモンの歌』（*Song of Solomon* 1977）のパイレトの父親は，命の価値について直接娘に囁きかける。『マーシィ』（*A Mercy* 2008）の亡霊も娘に直接語る。『マーシィ』は 1690 年代のアメリカ植民地時代の物語だが，主人公である奴隷のフロレンスに，おそらく亡霊となった母親が，アフリカでの生活から，拉致され中間航路を運ばれ，バルバドスに到着し，アメリカ大陸へと売られていくまでの過去を語る。母親の独白は，おそらく娘に届いただろう。フロレンスは自分のルーツを知り，自らの歴史を残そうと壁に文字を刻む．ただ，フロレンスの母親の名前は言及されない。「ミニャ・マイ」つまり「私のお母さん」という呼称が与えられているだけだ．この匿名性が示唆するのは，個のアイデンティティを持たない母親は「私のお母さん」という記号としてのみ存在しえる一方で，「私のお母さん」と呼ばれるすべての母親を含むということだ．つまりフロレンスの母親の声に，中間航路を生き抜いた母たちの声を反響させることになる。また『ラヴ』（*Love* 2003）の料理人 L は，亡霊となり，ホテル王一家の物語を語る。家族が見ていないことや話さなかったことを，L は語り手として読者に証言する。L は物語の途中で「ラヴ」という名前を持つことが示唆されるが，読者はこの名前を固有名詞というよりむしろ，愛情にあふれる人物，あるいは母親的な人物の総称として理解する。

このような死者の語りの中で『ビラヴィド』が特異なのは，賢者たる亡霊が語るのではなく，赤ん坊の亡霊が語るところだ．この亡霊は母親に殺された 2 歳の赤ん坊で，中間航路で死んだ人々の声を代弁するしくみになっている。この亡霊にも固有名詞はなく，“Beloved” つまり「愛された」者と呼ばれるだけである。『ラヴ』の亡霊の語り手が “Love” と呼ばれ愛する側だったのに対し，『ビラヴィド』の赤ん坊は愛される側の立場，そこに確かに存在したことの証明であることがわかる。モリスンはこうして，個の語りに全体の声を反響させ，ユングの「集合的無意識」を彷彿とさせる手法をとっている。記録されなかった人々，つまりアメリカに渡る前の，奴隷としての記号も持たない，言語化されないまま人生を絶たれた人々の声を『ビラヴィド』で描き，その人たちが単なる死者の数ではなく「愛されて」存在した者であることを描いている。亡霊となった子どもの声は，中間航路に限らず，歴史から抹消された人々も含み，その人たちが確かに存在したことを証明することになる。

『ビラヴィド』は 1856 年，ケンタッキーから家族とともに逃亡した奴隷のマーガレット・ガーナーが，オハイオ川を渡りシンシナティ近くで追手に捕まったときに，子どもたちの 1 人の幼い娘を殺したという事件からヒントを得て書かれたものだ．ガーナーは，子どもたちが奴隷の生活に連れ戻されることに耐え切れず，心中するつもりだったとい

う。モリスンはそのガーナーを思わせるセサを主人公にして『ビラヴィド』を書いたように見える。そのため，これまでの評論の論点は，奴隷制度や人種問題，歴史の書き直しなど，通常ネオ・スレイヴ・ナラティヴの作品について論じられるトピックに加え，子殺しの倫理的問題，罪悪感に苦しむ母親の再生，母子関係，フェミニズムなどが中心になっている。しかし本稿では，亡霊の語りに焦点を絞り，ビラヴィドが何をどのように語ったのかを読み解きたい。

『ビラヴィド』はタイトルになっている殺された子どもビラヴィドの物語であり，ビラヴィドが肉体をともなって蘇り，中間航路を含む死者の記憶を語る物語と考えられる。作品中には奴隷殺害の場面がちりばめられているが，そのほかにもアフリカから大西洋を渡ってアメリカに奴隷を運ぶ中間航路の船内の様子が，唐突と思われるタイミングで描かれている。中間航路のエピソードの挿入に関してはこれまで多くの批評家たちが指摘してきたが，ビラヴィドとオーバーラップさせながら詳しく論じたのはワイアットである。小説の中心は中間航路であり（“Slavery, and in particular the Middle Passage, is at the heart of the novel”），奴隷船の子どもの声を描いている（“Beloved speaks…in the voice of a child on a slave ship during the Middle Passage”）とワイアットは論じる（Wyatt 29)。本稿では，ワイアットの論を補完する形で，モリスンの言う「語られなかった，語りえないこと」をキーワードとして，ビラヴィドはなぜ死者を象徴するのか，中間航路はどのようにビラヴィドの記憶として描かれているか，死者の記憶はどのようにして言語化されているのか，の 3 点について論じたい。

1. 死者の表象としてのビラヴィド

モリスンは『ビラヴィド』執筆当時，「奴隷を記憶するための記念碑どころか道路わきのベンチすらなかった」ため，『ビラヴィド』を記念碑として書いたと Melcher Book Award acceptance speech で言っている。

> There is no place you or I can go, to think about or not think about, to summon the presences of, or recollect the absences of slaves; nothing that reminds us of the ones who made the journey and of those who did not make it. There is no suitable memorial or plaque or wreath or wall or park or skyscraper lobby. There’s no 300-foot tower. There’s no small bench by the road. (“A Bench by the Road” 下線部筆者)。

奴隷を追悼するための記念碑がないなら，中間航路で沈んでしまった，奴隷でもなかっ

た人々の記念碑などありえない。奴隷の記録が残らなければ，人々は負の遺産を簡単に忘れる。奴隷制度は，「登場人物も，私も，黒人も，白人も，忘れてしまいたいこと」で，モリスンはこの状態を「国民的記憶喪失」と呼んだ。

> I thought this has got to be the least read of all the books I'd written because it is about something that the characters don't want to remember, I don't want to remember, black people don't want to remember, white people don't want to remember. I mean, it's national amnesia. (“The Pain of Being Black” 2)。

この失った記憶を回復させるために，マスター・ナラティヴを書き直し，スレイヴ・ナラティヴの空白を埋めようとしたのが『ビラヴィド』である。

小説は “124 was spiteful. Full of a baby's venom.”（*B* 3）で始まる。この数字が何かは読者にはわからないが，次の文で “the house” が出てくると，これは番地ではないかと予測できる。モリスンは小説の最初の一文で，読者を未知の世界に敢えて引きずり込む手法をとる。それはアフリカ人が前触れもなく拉致され奴隷船に乗せられ，未知の大陸へと運ばれた感覚を，読者に共有させるためと言う。

> It is abrupt, and should appear so. No native informant here. The reader is snatched, yanked, thrown into an environment completely foreign, and I want it as the first stroke of the shared experience that might be possible between the reader and the novel's population. Snatched just as the slaves were from one place to another, from any place to another, without preparation and without defense. (“Unspeakable” 195)

唐突に読者を未知の世界に放り出すこの手法は，「国民的記憶喪失」を癒す手段でもあり，『ビラヴィド』で最も成功していると言えよう。なぜなら『ビラヴィド』では，「恨みを抱いた」(“spiteful”)「赤ん坊の悪意」(“a baby's venom”) が死者の記憶を語るため，アフリカ人と同様に突然奴隷船に乗せられた読者は，被害者として恨みや悪意を共有することになるからだ。

小説の舞台は 1873 年，オハイオ州シンシナティ近くのブルーストーン通り 124 番地の家で，そこではセサとデンヴァー母娘が亡霊に悩まされながら暮らしている。なぜ亡霊がこの家に住み着いているのかは，冒頭では読者に知らされない。2 歳で死んだ赤ん坊の亡霊ということはじきに語られるが，小説の後半になってようやく，セサが娘を殺したという真相が明かされる。

1855年，セサはケンタッキー州の農園スウィート・ホームの奴隷だった。農園主ガーナーが亡くなり，代わりに農園を管理するためにやってきた「教師」の非人間的なやり方に耐えきれず，セサは夫ハリー，ポールA，ポールD，シクソーら奴隷たちとともに逃亡を計画する。先に地下鉄道の支援で逃がした3人の子どもたちと，のちにひとりで逃げた身重のセサだけが，ハリーの母親ベイビー・スグスが待つ124番地にたどり着くことができた。しかし逃亡中にお産をし，その赤ん坊をつれて124番地について28日目，セサを捕獲しにやって来た「教師」らから，すなわち奴隷制度から子どもたちを守るために，セサは2歳の娘の首を掻き切り，息子2人にもけがを負わせる。

これははじめ，新聞記事という言語化された客観的事実，いわばマスター・ナラティヴとして提示され，その後セサの義母ベイビー・スグスと，セサの逃亡を助けた地下鉄道のエージェントであるスタンプ・ペイドの証言が，回想の形で示される。またマスター・ナラティヴとしての3人称の語りの形式をとった，固有名詞のない記述（スタンプは“the old nigger boy”として，ベイビー・スグスは“the nigger with the flower in her hat”として記載されるなど）がさらに積み重ねられ，読者は事件の詳細を理解する。そして，かつて同じプランテーションの奴隷だったポールDに，セサは事件の核心のまわりをぐるぐる回りながらも，ようやく告白するのである。

> Otherwise she would have said what the newspaper said she said and no more. Sethe could recognize only seventy-five printed words (half of which appeared in the newspaper clipping), but she knew that the words she did not understand hadn't any more power than she had to explain.（*B* 161）

このあたりのモリスンの構成はスレイヴ・ナラティヴの形式を利用していて秀逸である。この場面では読み書きのできないポールDに新聞記事が見せられるため，記事の内容，つまりマスター・ナラティヴはポールDにも読者にもわからない。しかしマーガレット・ガーナーの子殺しの記事を参考にすると，1856年1月29日付の *The Cincinnati Gazette* 紙には，逃亡奴隷がわが子を殺したこと，その奴隷は所有者に返されたことのみが書かれている。所有者の名前は記載されているが，ガーナーの名前はなく，「奴隷」「財産」としか書かれていない。これがマスター・ナラティヴにおける事件の核心であり，先に述べた，固有名詞を省いて描写された事件の様子と類似している。セサにはそのような形で事件を説明することができない。また書かれた文字が理解できないため，セサにとっては記事そのものに意味がない。

セサにとっての子殺しの真相は，追手の姿を見た瞬間，条件反射のように行動したことだった。

> No. No. Nono. Nonono. Simple. She just flew. Collected every bit of life she had made, all the parts of her that were precious and fine and beautiful, and carried, pushed, dragged them through the veil, out, away, over there where no one could hurt them. Over there. Outside this place, where they would be safe.（163）

結局セサが口にしたのは，子どもたちを安全な場所へ避難させたいという思いだけだった。セサにとっての事件の核心は，条件反射（“No. No. Nono.”）で子どもたちを救ったということであり，それ以外に説明のしようがない「語りえない」ものだった。マスター・ナラティヴとの違いは明らかである。言葉で説明できない子殺しのシーンは，娘の蘇りとしてビジュアル化されているとマクダーモットは論じる（McDermott 85）。また子殺しの直前セサの頭上に現れる鳥の大群もそのビジュアル化の 1 つである。このようなビジュアル化でしか，セサの行動を説明することはできないのだ。

3 カ月監獄にいたセサは，奴隷解放運動家であるボドウィン氏のおかげで釈放されるが，セサが殺した娘の亡霊もセサと共に戻ってきて，この家の住人を脅かし始める。すでに母親を恐れていた 2 人の息子は，亡霊の悪意に耐えられず家を出ていき，ベイビー・スグスは生きる力を失い，亡くなっていた。ベイビー・スグスは「語りえない」人生を乗り越え，教会を持たない説教師としてコミュニティの人々に生きることの喜び，自分を愛することの喜びを伝えていたが，意味を持つはずの言葉を失い，「語られなかったこと」は結局言葉では「語りえないこと」を認め，自らの命もあきらめて表舞台から退いてしまった。こうして現在，セサとデンヴァー母子と亡霊が 124 番地に暮らすこととなる。

そこにある日，スウィート・ホームからの逃亡の際行方が分からなくなっていたポール D が訪ねてくる。小説は事件から 18 年後の 1873 年，ポール D が 124 番地を訪れるあたりから始まる。ポール D が赤ん坊の亡霊を追い出し，入れ代わりに住み始めたところ，ビラヴィドと名乗る 20 歳くらいの女性が 124 番地にやって来る。2 歳のビラヴィドの亡霊が 18 年後，死者の語り部の役割を担って大人の肉体で戻ってきたのである。

小説はやがてビラヴィドがポール D を追い出し，母娘 3 人の生活を経た後，ビラヴィドが消滅しポール D が再び戻ってきたところで終わる。その間にそれぞれの人物が経験したことを回想する。セサの回想はもちろん，なんとか生き延びたポール D，セサの義母ベイビー・スグス，セサの逃亡を助けた地下鉄道のエージェントであるスタンプ・ペイドやエラの回想，また奴隷制度廃止のために奔走した白人のボドウィンの回想まで挟まれているが，結局奴隷解放宣言後に生き残った者だけが回想することを許されている。スウィート・ホームで死んだ奴隷たちには語る機会が与えられていない。例えばセ

サの夫ハリーは，セサが教師の甥に凌辱されるのを目撃し，精神に異常を来す．奴隷として役に立たなくなったハリーは，おそらく生かされてはいないだろう。ベイビー・スグスやセサの回想に登場するだけで何も語らない。またポール D の目の前で火あぶりにされ射殺されたシクソーは，はやくからマスター・ランゲージである英語を話すことをやめていたため，ポール D の視点で描き出されるだけだ．シクソーが死の間際にあげた叫び声「セブン・オー」は，未来を託した記号としての子どもの名前だが，それを知っているのはポール D だけである。衣服でしか判断できない変わり果てた姿で木に吊るされたポール A は，死に際でさえアイデンティティが明らかでない。最後まで周囲からの証言でその人生がうかがわれるだけだ．このスウィート・ホームに関わった死者たちの中で唯一回想し語りを許されているのが，2 歳のビラヴィドだ．言葉を知らない，「もうハイハイできるようになった？子」は，生きた 2 年間の出来事をどのように語るのだろうか。

ビラヴィドの亡霊はまず小説の冒頭に赤ん坊の “spiteful” “hatred” “evil” な霊として描かれ，124 番地に憑りついている。だがセサはポール D に説明するとき，“sad” だと言う。確かに，ビラヴィドが戻ってきた目的はセサに復讐するためではなかった。ビラヴィドは殺されたことを理解していない。微笑みかけてもくれず，取り残されたことを嘆き，母親のもとに戻ってきたのだ（“She left me behind. By myself” *B* 75）。甘えるためだけにセサから離れないビラヴィドを見ると，このような憎しみや悪意に満ちた形容詞はふさわしくない。そこでこの亡霊がビラヴィド以外の魂を内包していることが想像できる。ベイビー・スグスの言葉 “Not a house in the country ain’t packed to its rafters with some dead Negro’s grief”（5）がヒントとなる。124 番地に亡霊はひとりだが，その亡霊は，語る機会を与えられなかったスウィート・ホームの死者たちをすべて吸収した集合体と言えるのではないだろうか。

またビラヴィドは，セサの語りの中でも「もうハイハイできるようになった？子」と言われるだけで，2 歳になっても名前で呼ばれない。「ビラヴィド」とは通常墓碑銘に使われる「愛された」という意味で，名前とともに “beloved son” “beloved mother and wife” などと墓石に刻まれる。つまり，ビラヴィドという名はセサの子どもであると同時に，“beloved” の墓碑銘を与えられた死者たちと，“beloved” だったにもかかわらず正しく埋葬されなかった多くの死者を象徴することになる。スウィート・ホームのシクソーもポール A も，酷い殺され方をした。彼らには “spiteful” “hatred” “evil” がふさわしいだろう。そのような人々を正しく埋葬するためにも，モリスンはビラヴィドという墓碑銘を用意したのだ．更にこの墓碑銘は，小説にも歴史の表舞台にも登場しない，中間航路で命を落とした人々を正しく埋葬するためでもあっただろう。ビラヴィドが前触れもなく，セサの条件反射によって瞬時にこの世から連れ去られてし

まった状況は，拉致されたアフリカ人と同じである。そもそもモリスンは小説の献辞に「6 千万とさらに多く」という犠牲者の数字を出している。ビラヴィドひとりの物語でも，スウィート・ホームの奴隷たちだけの物語でもなく，6 千万の人々の物語と言えよう。

2. 中間航路の証言

献辞の「6 千万とさらに多く」の数字も，モリスンが『ビラヴィド』創作の際に意図した奴隷の記念碑としての役割を果たしている。アンジェロとのインタビューで，この数字は確かな数字かと聞かれ，モリスンは次のように答えている。

> Some historians told me 200 million died. The smallest number I got from anybody was 60 million. There were travel accounts of people who were in the Congo — that's a wide river — saying, "We could not get the boat through the river, it was choked with bodies." That's like a logjam. A lot of people died. Half of them died in those ships.（Morrison and Angelo 2）

モリスンが聞いたコンゴ川での死者の数字は含まれないが，Smithsonian National Museum of American History によると，16 世紀から 19 世紀にわたり，1,100 万人から 1,500 万人のアフリカ人がヨーロッパ列強により新大陸に運ばれたという。アフリカで拉致されたときに命を落とした人の数は不明だが，中間航路で命を落とし，新大陸に到着しなかった人たちの数は，Statista によれば 180 万人（14.5%）と言われる（"Estimated share of African slaves"）。また The Lowcountry Digital History Initiative（LDHI）によると，奴隷船の積み荷の 26%が子どもだったという。男たちは反乱を起こさないように鎖でつながれ，女たちは船員に凌辱され，劣悪な環境のもと 13〜19%のアフリカ人が中間航路で命を落としたと言われる。先にあげた数字とほぼ同じである。新大陸に運ばれた人々の子孫は，300 年以上に渡り奴隷とされたため，その数は 1860 年の国勢調査では 395 万人に上った。このような数字からみると，献辞の 6 千万人というのは，奴隷制度の始まりから終わりまでのすべてのアフリカ系アメリカ人を指すとも考えられる。一方このような数字は記録から概算された数字であるため，コンゴ川での死者数のように「歴史から削除された」部分があるとすれば，6 千万という数字は，歴史の空白に挑戦する意味とともに，名前を持った個として認識されなかったより多くの人々を，ひそかに歴史の表舞台に呼び出そうとするモニュメントとも言えよう。

最も古いスレイヴ・ナラティヴの 1 つとして，オラウダ・イクイアーノの *Interesting*

Narrative of the Life of Olaudah Equiano（1789）があげられる。イクイアーノの長い手記は，アフリカでの生活からイギリスで自由を獲得するまでを扱っている。１１歳のときに拉致され，中間航路を経験するのだが，手記全体に占める中間航路の割合は非常に少なく，生々しい描写はさらに少ない。

> The closeness of the place, and the heat of the climate, added to the number in the ship, which was so crowded that each had scarcely room to turn himself, almost suffocated us. This produced copious perspirations, so that the air soon became unfit for respiration, from a variety of loathsome smells, and brought on a sickness among the slaves, of which many died, thus falling victims to the improvident avarice, as I may call it, of their purchasers. This wretched situation was again aggravated by the galling of the chains, now become insupportable; and the filth of the necessary tubs, into which the children often fell, and were almost suffocated. The shrieks of the women, and the groans of the dying, rendered the whole a scene of horror almost inconceivable.… I expected every hour to share the fate of my companions, some of whom were almost daily brought upon deck at the point of death, which I began to hope would soon put an end to my miseries.… One day…, two of my wearied countrymen who were chained together…, preferring death to such a life of misery, somehow made through the nettings and jumped into the sea.（Equiano 76–78）

体の向きを変えることもできないほど狭く暑い場所に詰め込まれ，汗の匂いが充満し，息もできないという。だがもっとひどい匂い，おそらく排泄物にまみれて不潔な状態であったことは，“a variety of loathsome smells” としか言わない。また “The shrieks of the women” は船員に襲われた女性たちの叫び声だろうが，明らかにしていない。死んでしまいたいと思うほどの光景は阿鼻叫喚の地獄絵のはずだが，イクイアーノは「信じられない」（“inconceivable”）と言うにとどめる。このようなオブラートに包んだ描写が，典型的なスレイヴ・ナラティヴである。

中間航路の詳細な描写は，のちの小説に委ねられる。アレックス・ヘイリーは『ルーツ』（*Roots* 1976）で自身のルーツをさかのぼり，200 年前の祖先クンタ・キンテの生涯を描いた。全 120 章のうち，35〜39 章の 5 章を中間航路の様子に割いている。クンタ・キンテはアフリカで拉致され，かせをはめられ丸坊主にされ，裸で鎖に繋がれて船に乗せられる。焼き印を押され，鞭打たれ棒で殴られる。ネズミや虱，汚物という不衛

生な環境で伝染病が蔓延する中，けが人や病人はますます衰弱しゾンビのように見える。仲間となった者たちの翻訳リレーで反乱の計画を立てるが失敗し，死んだ者は海へ投げ捨てられ，生きる気力を失った者は自ら海に飛び込みサメの餌食になる。死にたいと願いながらも，クンタ・キンテは恨みや怒り，恐怖に耐え，正気を保って生き延びようとする。

このような描写はリサーチを重ねたうえでの創作だが，歴史の空白部分を埋めようという試みである。まさにイクイアーノのスレイヴ・ナラティヴを補ったネオ・スレイヴ・ナラティヴの典型と言える。しかしもちろん，生き残った者の証言としてしか中間航路は描かれなかった。

モリスンもこの中間航路を『ビラヴィド』の中心に据えているが，ヘイリーとは異なり，事実の記録はしていない。モリスン独特の描写であることを本論では詳細に指摘していくが，根本的な違いは，ヘイリーは中間航路を生き延びたクンタ・キンテの視点から描いているのに対し，モリスンは中間航路で海に捨てられた，あるいは海に飛び込んだ人間の視点で描いているところである。この死者の視点を提供するのがビラヴィドと名のる娘の語りである。ワイマンはトム・フィーリングスが描いた奴隷船の絵画とともに『ビラヴィド』を論じ，ビラヴィドは中間航路の死者だけでなく，その事象そのものを体現している（“She manifests the phenomenon itself of taking a Middle Passage journey” Wyman 304）と述べているが，その事象を誰かの視点で説明するとすれば，それは死者の目だろう。死者の視点で描いた物語はどのような描写になり，どのように文字で書かれるのであろうか。

3. 中間航路の表象

スウィート・ホームの奴隷たちは少なくとも名前が与えられているが，中間航路の死者は無名のまま大西洋に沈んでいる。その人々を浮かび上がらせるのがビラヴィドである。中間航路を思わせるビラヴィドの語りは，まず序盤のデンヴァーとの会話の中に登場する。デンヴァーに名前と，どこから来たかを聞かれ，ビラヴィドは “In the dark my name is Beloved.”（*B* 75）と答える。そこでは赤ん坊のように丸くなっていたという。ビラヴィドの名前は先に述べた通り，墓の下の死者を象徴する。ビラヴィドが語る内容は，1 つのストーリーにビラヴィド自身の過去も現在も，奴隷船の死者の記憶も入り混じった，時空を超えた曖昧な物語の断片の寄せ集めとなる。それは次にあげる描写でもわかる。

“Hot. Nothing to breathe down there and no room to move in.”

“You see anybody?”

“Heaps. A lot of people is down there. Some is dead.”（75）

これはビラヴィドが実際に経験したことのない奴隷船内部の様子である。非衛生的な船内では，病気や伝染病で命を落とすケースは多かった。また反抗的な場合は殺されることもあった。その死体の山の中にビラヴィドはいるのだ．この集合的記憶ともいえるような死者の記憶を，ビラヴィドは語るのである。

さらにビラヴィドは水の中にいたという。“I was in the water. I saw her diamonds down there. I could touch them.”（75）。脈絡がない語りだが，2 歳のビラヴィドが 124 番地でセサに見せられたガラスのイヤリングの記憶は，奴隷船から海に投げ捨てられた人々の記憶と交じり合う。この水の中で，ビラヴィドはセサを待ち続ける。ビラヴィドが覚えているのは，いつも “my woman” と呼ぶ女のことで，“She left me behind. By myself.” と言う。また別のときには “she［Beloved］remembered a woman who was hers, and she remembered being snatched away from her”（119）と言う。「置き去りにされた」ことと「引き離された」ことは，ビラヴィド自身におきた出来事と必ずしも一致しない。これもビラヴィドが待つ母セサのことだけでなく，海に沈められた人々が大切にする母，娘，妻などを象徴するだろう。そして何度も出てくるはっきりとしたイメージは橋だ．水から出ると次の瞬間橋の上に立ち，下を眺めている。この橋は奴隷船を係留する橋を想像させる。身動きのできない奴隷船から降り立った子ども，あるいは海に沈んで母親を見失った子どもの魂は，桟橋を渡りながら母親を探すのかもしれない。このように，ビラヴィドは序盤で唐突にも，中間航路の様子を語り始めるのである。この突然の奴隷船のエピソードは，小説の冒頭と同様，アフリカ人が拉致された体験を読者に追体験させようというモリスンの意図によるものだろう。

中間航路は，セサの母親のエピソードにも見られる。ビラヴィドは 124 番地にたどり着いてしばらくすると，セサの母親の話を聞きたがった。セサの母は子育てを許されていなかった。生まれて 2, 3 週間我が子の面倒を見た後は，子守り専門の奴隷に任せて農園で働かなければならなかった。セサは数回しか見たことのない母の顔を思い出せないが，ある時母親から肋骨のあたりに押された焼き印を見せられ，“I am the only one got this mark now. The rest dead. If something happens to me and you can’t tell me by my face, you can know me by this mark.”（61）と言われる。反抗的な奴隷，おそらく逃亡を企てた奴隷たちは，連れ戻されて焼き印を押されたのだろう。母親もそのひとりだった。長い間はみをかまされていたようで，いつも笑った顔をしていたが，最後にはほかの奴隷たちとともに木からつるされた。木から降ろされた死体の山からは，焼き印のついた体を見分けるのは無理だった。この死体の山もビラヴィドが語った奴隷

船の死体の山“Heaps”を彷彿とさせるが，このような仕打ちを受けたのは，おそらく母親が再び逃亡を試みたためだろう。娘をおいて逃げようとしたのだ。“She left me”と嘆くビラヴィドと幼いセサの記憶はここで重なる。セサはその死体の山の中から母親を探そうとするが，片腕のナンという女に腕を引っ張られ，母の目印の焼き印は確認できなかった（“The woman called Nan who took her hand and yanked her away from the pile” 62）。死体の山の中の母親から引き離されたセサの記憶は，“being snatched away from her”と嘆いたビラヴィドの記憶だ．このように，ビラヴィドの記憶はビラヴィド自身の記憶だけでなく，重層的な意味を持つことになる。

当時はセサもナンの言葉が理解できたが，英語ではなかったため今は思い出せない。だが解読した「記号」のメッセージだけは記憶に残る。セサの母とナンは中間航路から一緒だったこと，2 人は何度も船員に凌辱されたこと，船員にはらまされた半ば白い子どもは島に捨て，その後も白人との間にできた子どもは名前も付けずに全部捨てたこと，セサだけが愛するアフリカ人との子で，その男の名前をつけたことなどを思い出す。セサの母には顔も名前もない。セサは母を大人の女性を呼ぶ「マアム」と呼んでいた。「マアム」は奴隷の女性すべての象徴となる。地下鉄道組織のエラのエピソードもセサと重なる。つまり女たちはレイプで生まれた子どもを殺した。その殺された子どもたちには語るべき過去も記憶もない。言葉のない暗い世界をさまよい，奴隷船の死者という数字で，生き残った者たちに記憶されるしかない。それをビラヴィドが代弁するのである。

この数字/記号は『ビラヴィド』全体にちりばめられている。それは「語られなかった，語りえないこと」は口に出すことも文字に書くこともできないからだ．セサの母とナンの異なる言語，焼き印，セサの背中の「木」，ビラヴィドの墓などが，語ることもできず沈黙の中に置かれた奴隷制を表す記号（“the silent ‘text’ of slavery” McDermott 82）であり，それらの記号を体現するものとして，ビラヴィドは肉体をもって蘇ったのである（“Beloved’s reappearance represents the return of a visual trace” McDermott 84）。ゆえにビラヴィドはこの物語の中心に位置し，“silent center”（McDermott 85）として「語られなかった」死者の言葉を代弁する。ノーマンはこのビラヴィドの語りを腹話術師の人形の語りと呼んでいる（Norman 89）。

4. 中間航路の死者の声

言葉にならない記号は，ビジュアル化されるだけでなく，音としても登場する。その 1 つの例が，124 番地から聞こえる声である。124 番地ではじめて味わう母娘 3 人の暮らしは，愛と嫉妬と贖罪に満ち，やがて立ち行かなくなっていく．様子を見に来た地下

鉄道のエージェントであるスタンプ・ペイドは，家の中から聞こえてくる声が理解できなかった。

> Out on Bluestone Road he thought he heard a conflagration of hasty voices — loud, urgent, all speaking at once so he could not make out what they were talking about or to whom. The speech wasn't nonsensical, exactly, nor was it tongues.（*B* 172）

聞き取れたのは“mine”という言葉だけだった。大勢が一度に言語ではないものを話していているようで，内容はわからないが，意味がわからないわけでもない。その後再び 124 番地を訪れたときも結局その 1 語しか聞き取れなかったが，誰が話しているかはわかった。

> This time, although he couldn't cipher but one word, he believed he knew who spoke them. The people of the broken necks, of fire-cooked blood and black girls who had lost their ribbons.（181）

話しているのは首を折られた人たち，火で血を炙られた人たち，そして赤いリボンを失くした黒人少女たちだとスタンプは理解する。

スタンプは逃亡に成功した元奴隷だったが，白人の主人に凌辱され続けた妻を残して，1 人で逃亡した。その償いとして地下鉄道のエージェントとなり，セサを含め多くの逃亡奴隷を助けてきた。しかし，奴隷制度が法律上廃止された後の 1874 年になってもなお，ケンタッキー州ではリンチが続発し，犠牲者は絶えない。血の焦げる匂いには耐えてきたスタンプの活力を本当に奪ったのは，船に張り付いた赤いリボンだった。頭皮ごと引きちぎられ毛髪がこびりついたリボンもまた，死者の記号である。そのリボンをスタンプは常にポケットに忍ばせ，死んでいった人たちの無念を思いつつ，124 番地から聞こえてくる声を，犠牲者の声として聞くことができた。スタンプに聞こえた声は，セサの母親のように絞首刑で首を折られ，シクソーのように火あぶりで処刑された奴隷の声だが，そこに赤いリボンの子どもの声も混じる。ビラヴィドが代弁し，幼いセサの記憶が同化した，死者の声である。124 番地で見たのは 2 人の娘の背中だけだったが，その声は多くの奴隷の怒りの声だとスタンプは考える（“he believed the undecipherable language clamoring around the house was the mumbling of the black and angry dead” 198）。生前のベイビー・スグスの言葉「黒人の家は垂木まで死者の嘆きがあふれている」がスタンプの目の前で現実となる。6 千万の人々の魂の声が 124 番地で共鳴

しているのだ。

124 番地はセサが外界から遮断し，そこだけが時間の制約から解き放たれた，過去と現在の死者が入れ乱れる空間である。閉じた空間で発せられる言葉は “recognizable but undecipherable to Stamp Paid, were the thoughts of the women of 124, unspeakable thoughts, unspoken”（199）である。スタンプにはその声が何を言おうとしているかはわかるが，それを言葉に置き換える（decipher）ことはできない。閉じた空間の外は言語に支配された，文字で表すことが可能な世界であるから，“angry dead” がそこで怒りの声を上げても，翻訳されることはない。124 番地もまた「無言のテクスト」（“silent text of slavery”）なのだ. ビラヴィドは奴隷船の事象であり，124 番地そのものである。言語によるナラティヴの外にあるテクストである。

この閉じられた空間でスタンプが聞いた母娘 3 人の声は，続くセサの独白の章，デンヴァーの独白の章，2 歳のビラヴィドの独白の章，２０歳のビラヴィドの独白の章として，連続して提示される。このモノローグで構成される 4 つの章を，マクダーモットは “silent chapters”（McDermott 80）と呼ぶ. つまりこの 4 章も「無言のテクスト」となる。ビラヴィドが 6 千万人の死者となって語るように，3 人の女たちの声はあらゆる死者の声を呼び寄せ増幅する。家族と引き離された恨みと嘆きから，愛する者を取り戻し独占したいという，死者の叶わなかった欲望 “She’s mine” を代弁するからである。

最初のビラヴィドの語りは舌足らずな，あいまいな表現，象徴的な表現が多く，コンマもピリオドもない。2 歳のビラヴィドのナラティヴは，アフリカのシーンから始まる。ビラヴィドが見ている女性は “she” としか言われないが，このシーンを体験した死者の母親だ。

> I see her take flowers away from leaves　she puts them in a round basket　the leaves are not for her　she fills the basket　she opens the grass　I would help her but the clouds are in the way　how can I say things that are pictures（*B* 210）

平和な生活をしていたところに，銃を持った男たちがやってきて，発砲し威嚇する。またこの雲は奴隷船が難破する原因にもなった嵐を呼ぶ雲でもある。ビラヴィドは目撃したシーンを「どう言えばいいの，絵でしかないものを」と戸惑う。「語りえない」からこそ浮かび上がる絵は，セサがメッセージとして理解したナンの言葉と同様に，それを翻訳して口にすることはできない。ただ光景が広がるだけだ. そのためビラヴィドは，言語化できない「無言のテクスト」 をビジュアルで提示する。つまり，解読すべき記号の提示である。

ビラヴィドの絵画の中の女性は，ビラヴィドと一体化している（“I am not separate from her　there is no place where I stop　her face is my own” 210）。ビラヴィドはつまりアフリカから拉致された母であり，その娘でもあり，その意識が混然一体となってひとりの死者の目となる。その意識はビラヴィドが戻ってきた 1873 年も，殺された 1857 年も飛び越え，さらに過去へとさかのぼっているが，124 番地の空間が具現するように，「いつも今」（“All of it is now　it is always now　there will never be a time when I am not crouching and watching others who are crouching too” 210）なのだ. 死者たちは狭い奴隷船の中で身をかがめ，奴隷主の前で身をかがめる。過去も現在も，すべての死者の様子も，1 枚の絵画に凝縮される。ビラヴィドが現在形で語るのは，記憶が絵画だからである。

ビラヴィドはさらに奴隷船の回想を続ける。“the man on my face”（210）は死んでしまうが，何日もビラヴィドの顔の上にかぶさったままだ. 死者の魂はその肉体から抜け出そうとし，顔の上の男はそれに成功するが，死にきれない者も多い（“the man on my face has done it　it is hard to make yourself die forever　you sleep short and then return” 210）。死体の山の下敷きになりながらも，ビラヴィドはまだ死んでいない。ビラヴィドは甲板に連れ出されるが，足かせをはめられている。そこには “the little hill of dead people”（211）があり，船員が棒で突いて海に落とす. 母親の首のまわりには枷がはめられており，ビラヴィドはそれを食いちぎれたらと願う（“I would bite the circle around her neck” 211）。森の空き地へ母娘 3 人で行ったとき，ビラヴィドがセサの首を絞めたように見えたのは，おそらくこの首枷を食いちぎろうとし，逆に枷が強く締まったというようにも考えられる。ビラヴィドには過去と現在の境界がないため，森の中でも同じシーンが目の前に広がったのだろう。甲板にいたビラヴィドは再び船倉で身をかがめるが，母親は海の中へ自ら飛び込む. 涙を流し，娘を見つめ，微笑みかけようとした瞬間，飛び込むのだ. そして嵐が起こり，顔の上にかぶさっていた父親らしき男がビラヴィドを背負い，海に漂う。男が先に死んだのか，女が先に飛び込んだのか，1 つの家族の話なのか，様々な人々の話なのか，時系列も人物も不明だが，阿鼻叫喚の船上の様子は理解できる。この描写が記号/絵画であり，理解できるけれども説明（decipher）できない「無言のテクスト」 と言える。

誰も名前を呼んでくれないから，橋の上で待ったとビラヴィドは言う。橋の下に母親がいるからだ。走馬灯のようにアフリカから始まった航海の景色が，124 番地に続く。ここではじめてセサの名前が出され，船上の女と一致する。124 番地ではセサが待っており，そのセサと一体になることがようやく叶えられる（“Sethe’s is the face that left me　Sethe sees me see her and I see the smile　her smiling face is the place for me　it is the face I lost　she is my face smiling at me　doing it at last” 213）。奴隷

船から 124 番地までが一気に 1 枚の絵に描かれた形となる。これが言語化を試みてもできない，死者の語りと言えよう。

2 つ目のビラヴィドの語りは 20 歳で蘇ったビラヴィドの語りで，過去形が使われている。1 つ目の幼子の語りよりはわかりやすいが，数百年の間に起こったことが 1 枚の絵にまとめられている点は変わらない。アフリカの場面から振り返るが，登場する女はすべてセサとして語られる。アフリカでの花摘みの光景の描写の後，船員が死んだ人たちを突き落とした甲板で，セサは微笑もうとした瞬間自分から海へ身を投げ，子どもを残して行った。橋の下の水の中へセサを追って行くが，セサは浮かび上がって水となる。だが家を見つけ，セサの笑顔に迎えられる。この間，3 度セサを見失っている。アフリカでは銃の発砲で，奴隷船では身を投げたことで，最後は橋の上だ．セサと呼びはしても，やはり何人もの子どもの声が入り混じっていると考えられる。

この章では，ビラヴィドの回想の後，セサとビラヴィド，デンヴァーとビラヴィドの，互いを求める引用符のない会話が続き，スタンプが言ったように，最後には誰が誰に話しているのかわからない会話で終わる。アフリカ，中間航路，18 年前，そして現在と，さらに多くの死者の記憶が混然一体となった会話である。一枚の絵の中に過去から現在がすべて閉じ込められた，語るに語れないものは，言語化ではなく，ビジュアル化のみが可能である。

第 1 部の冒頭は “124 was spiteful” 第 2 部は “124 was loud” 第 3 部は “124 was quiet” で始まる。124 番地を描写するこれらの形容詞を見ると，現在（spiteful）から奴隷船（loud）へ，そしてアフリカ（quiet）へと，時間をさかのぼっていることがわかる。124 番地の人々の変化，つまり 124 番地が象徴する「無言のテクスト」は，すべての時代を内包する。第 3 部ではビラヴィドの記憶にあるアフリカでの平和な暮らしが再現され，ビラヴィドはセサのために籠一杯に花を摘む。しかし二人の諍いは絶えない。デンヴァーが外に助けを求めに行くのは，この閉ざされた絵画の世界から現実世界へ戻ることを意味する。

助けにやって来た 30 人の女たちは，124 番地の前で声を上げるが，その声は言葉ではなく，“In the beginning there were no words. In the beginning was the sound, and they all knew what that sound sounded like”（259）であった。歴史を記す言語の前に，記号として理解される音があったと女たちは思う。すすり泣き，号泣，叫びなど，言葉で表す以前に存在する感情がある。メッセージの内容だけが記憶に残っているナンの言葉やセサの母親の言葉と同じだ。意味はあるけれど言語化できないものが，言語の前にあったのだ。アフリカ人にとっての奴隷の経験は，言語化する前に突然に始まったことだったため，「語りえない」ことだった。それはまたビラヴィドが 1 枚のキャンバスに描いた，アフリカから 124 番地までの長い旅の絵のようなものである，言語が

なくとも，見られることによってその「無言のテクスト」は自らの存在証明をする。

おわりに

この女たちがあげる声の中，まるで逃亡時のセサをなぞるような大きなおなかを抱えたビラヴィドは消滅する。最終章はビラヴィドが 124 番地から消えた後，コミュニティにとってビラヴィドという存在がどのようなものかを，3 人称の語り手が物語る。そこにはビラヴィドという呼び名さえも登場しない。

> Everybody knew what she was called, but nobody anywhere knew her name. Disremembered and unaccounted for, she cannot be lost because no one is looking for her, and even if they were, how can they call her if they don't know her name? Although she has claim, she is not claimed.（*B* 274）

呼び名は知っていても，本当の名前はこの物語では明かされていない。人物が特定できないため，誰も彼女を “she is mine” と求めない。この要求は閉ざされた 124 番地ではかなえられたが，一歩外の世界に出ると，ビラヴィドは消滅せねばならず，コミュニティの人々には忘れられ，彼女を愛した 124 番地の住人にさえも忘れられる。

ビラヴィドの物語は “It was not a story to pass on”（274）と説明されるが，2 度は過去形で，最後は現在形で繰り返されている。思い出しそうなときや記憶の跡に触れようとしたとき，あえて人々は否定する。なぜなら “they know things will never be the same if they do”（275）だからだ.「語り伝えられる種類の物語ではなかった」というフレーズは，モリスンが言った「国民的記憶喪失」に結びつく. ビラヴィドについて，つまりはビラヴィドが体現した死者の記憶について，今や誰も思い出すことがない。それは死者の物語が言語をもって伝えられるような物語ではなかったからだ. 言語にしてしまうと，ガーナーの子殺しの新聞記事のように，事件の核心を伝えることができないからである。このフレーズにある “pass on” は，これまで批評家の多くが「語り伝える」（tell, communicate）「死に絶える」（die）の相反する意味を表す語として解釈してきた。つまり「伝えられる種類の物語ではなかった」けれども「死に絶えるべき物語ではない」ということになる。例えばスミスは “The multiple meanings of the phrase ‘to pass on,’ suggesting that this is a story that cannot be told yet must be told, encapsulate the dilemma posed by this kind of reading.”（Smith 353）と解釈している。

しかし私はビラヴィドの蘇りの物語も，中間航路を含めた奴隷制度下の死者の物語も，

そして歴史で存在を証明されなかった人々の物語も，「語り伝えられる種類の物語ではなかった」し，「この先も永遠に語ることができる物語ではない」と解釈する。つまり時制の違いは，過去の事実と，時の流れに影響されない不変の事柄を表すと考える。現在形で表す 6 千万の死者の「語られなかった，語りえないこと」は，「死に絶えるべき物語ではない」けれども，結局のところ言語で表すのは不可能だということだ. モリスンはその「語りえないこと」を記号/絵画で表すことで，「無言のテクスト」の存在を明らかにしたのである。モリスンもセサと同じように，自身が提示した命題「語られなかった，語りえないこと」の周りをぐるぐる回っているように見える。しかし「語られなかった，語りえないこと」の記念碑は建てられた。記念碑が言語である必要はない。

124 番地の裏手の小川にはビラヴィドらしき足跡がときどき現れるが，それもやがて消え，ビラヴィドの息遣いも消え，風となる。3 度目に「語り伝えられる物語ではない」を繰り返したあとの描写である。今や風という自然現象にしかこの物語を思い出すことはできないが，しかしそこにはかすかにだがビラヴィドの存在，すなわち死者の存在が感じられる。そのような記念碑が『ビラヴィド』という小説なのである。

この最終章は語り手がはっきりしない 3 人称だが，ギリシャ劇のコロスの様相を呈している。ビラヴィドが体現した 6 千万の死者たちからなるコロスが，伝えきれない物語を嘆きつつ解説していると考えられないだろうか. 最後の一語 “Beloved” は墓碑銘そのものだろう。モリスンが建てた記念碑に刻まれた銘文と考えられる。“Beloved” にはピリオドがあり，先の “It is not a story to pass on.” と同じタイミングと形式で書かれている。つまり「語ることができる物語ではない」その物語自体が記念碑となって，すべての人を指す “Beloved” 一語だけがそこに刻まれているのである。

本論のはじめに述べたように，「語られなかった，語りえないこと」はアフリカ系アメリカ人の存在そのものであり，中間航路の死者は言語化できないという点でアフリカ系アメリカ人の存在の原型と言える。語りえない存在を体現するために，Beloved は肉体をもって蘇った。肉体そのものが「無言のテクスト」としてアフリカ系アメリカ人の存在，つまり語りえないものの存在証明をしている。ゆえに『ビラヴィド』は中間航路の死者を記憶するための記念碑であり，だからこそ，その小説のタイトルは墓碑銘につく “Beloved” なのである。さらにモリスンは「道路わきのベンチ」どころか，大きな記念碑を建てている。124 番地は閉ざされた死者の空間だった。1 部，2 部，3 部の冒頭の文が表す通り，“124” はオハイオにも，大西洋にも，アフリカにも，記念碑として建てられている。

Equiano, Olaudah. “The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano, or Gustavus Vassa, the African. Written by Himself,” *Slave Narratives,* William L. Andrews and Henry Louis Gates, eds. (New York: The Library of America, 2000).

Fisch, Audrey, ed. *The Cambridge Companion to the African American Slave Narrative,* (Cambridge: Cambridge UP, 2007).

Fowler, Doreen. “‘Nobody Could Make It Alone’: Fathers and Boundaries in Toni Morrison’s *Beloved,*” *MELUS,* 36. 2 (2011), pp. 13–33.

Fuston-White, Jeanna. “‘From the Seen to the Told’: The Construction of Subjectivity in Toni Morrison’s *Beloved,*” *African American Review,* 36. 3 (2002), pp. 461–473.

Haley, Alex. *Roots,* (London: Vintage, 1991)

McDermott, Ryan P. “Silence, Visuality, and the Staying Image,” *Angelaki: Journal of Theoretical Humanities,* 8.1 (2010), pp. 75–89.

Morrison, Toni. *A Mercy,* (New York: Knopf, 2008).

_____. *Beloved,* (New York: Penguin, 1988).

_____. Love, (New York: Vintage, 2005).

_____. “On Beloved,” *The Source of Self-Regard: Selected Essays, Speeches, and Meditations,* (New York: Knopf, 2019), pp. 280–284.

_____. *Song of Solomon,* (London: Vintage, 1998).

_____. *Tar Baby,* (London: Vintage, 2016)

_____. “Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Lit erature,” *The Source of Self-Regard: Selected Essays, Speeches, and Meditations,* (New York: Knopf, 2019), pp. 161–197.

Norman, Brian. *Dead Women Talking: Figures of Injustice in American Literature,* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 2013).

Pérez-Torres, Rafael. “Knitting and Knotting the Narrative Thread — *Beloved* as Postmodern Novel,” *Toni Morrison: Critical and Theoretical Approaches,* ed. Nancy J. Peterson, (Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1997), pp. 91–109.

Reeves, Roger. “Minor Characters, Major Silences, or Against the Compulsion to Talk,” *The Black Scholar: Journal of Black Studies and Research,* 51.1 (2021), pp. 43–50.

Smith, Valerie. “‘Circling the Subject’ : History and Narrative in *Beloved,*” *Toni Morrison: Critical Perspectives Past and Present,* Eds. Henry Louis Gates, Jr., and K. A. Appiah, (New York: Amistad, 1993), pp. 342–355.

Wyatt, Jean. *Love and Narrative Form in Toni Morrison’s Later Novels,* (Athens, U of Georgia P, 2017).

Wyman, Sarah. “Imaging Separation in Tom Feelings’ *The Middle Passage: White Ships/ Black Cargo* and Toni Morrison’s *Beloved,*” *Comparative American Studies An International Journal,* 7. 4 (2013), pp. 298–318.

峯真依子『奴隷の文学誌　声と文字の相克をたどる』(青弓社 2018)

ウェブサイト

Morrison, Toni. “A Bench by the Road,” Melcher Book Award acceptance speech, *UUWorld,* August 11, 2008.
https://www.uuworld. org/articles/a-bench-by-road

_____, and Bonnie Angelo. “Toni Morrison: The Pain of Being Black,” *TIME,* Monday, May 22, 1989.
http://content.time. com/time/subscriber/article/0,33009,957724-1,00.html

The Cincinnati Gazette, January 29, 1856, Guide to African American Resources at the Cincinnati History Library and Archives.
http://library.cincymuseum.org/aag/bio/garner.html

“Estimated share of African slaves” who did not survive the Middle Passage journey to the Americas each year from 1501 to 1866,” Statista.
https://www.statista.com/statistics/1143458/annual-share-slaves-deaths-during-middle-passage/

Slavery and Remembrance, UNESCO.
https://slaveryandremembrance. org/

Voyage of the Echo: The Trials of an Illegal Trans-Atlantic Slave Ship, Lowcountry Digital History Initiative.
http://ldhi.library.cofc.edu/exhibits/show/voyage-of-the-echo-the-trials/the-echo-slave-traders

DVD

Enslaved: The Lost History of the Transatlantic Slave Trade, BBC, 2020.

（原稿受付　2021 年 10 月 27 日）

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 50–79　　March 2022

英語文化とポピュラー・ジオポリティクス

── 非英語圏日本の文化的アイデンティティ交渉過程の観点から ──

小　林　敏　宏

EIGO Culture and Popular Geopolitics in Japan:

Negotiating Cultural Identities Through a Contingent and Ironic Language in a Liquid Modern World

Toshihiro KOBAYASHI

要　旨

現在のリキッド化する世界の中で，非英語圏日本のローカルな「英語文化（“EIGO Culture”）」は否応なくグローバルな「英語の文化（Multiple Cultures of Global/Translocal/Transcultural Englishes）」へと液状化し続けている。ハイカルチャー領域で権威化される英語（Standard English）を用いたトランスカルチャラル・コミュニケーション。それに対抗しポピュラーカルチャー領域で承認される英語（World Englishes）を通じたトランスカルチャラル・コミュニケーション。日本の一般英語学習者・ユーザーはそのどちらか領域の English を軸に自らの「文化的アイデンティティ」交渉を行うのではなく，常にそのどちらにも領域にも帰属しない「位置取り（positioning）」によって自らの「英語文化（EIGO Culture）」的アイデンティティの序列化・固定化・烙印化の回避を続けていくことが重要かつ可能な時代となっている。情報技術の急速な発展によって生産消費者（prosumer）となった現在の日本の英語学習者も自国語と英語（EIGO/ English/World Englishes）を含めた複数の言語をもって，「英語」がもたらす「安定（＝連帯）」と「不安定（＝自由）」の両空間を双方向に往来し，英語学習者の言語的身体感覚（linguistic bodies）の中心を学校の外のポピュラーカルチャーの「共同的状況」の位相へと移動させ，国内で権威化された「英語文化」の流動化を一層加速させていくことが肝要である。そこではリベラル・アイロニストの「位置取り」戦略を言語実践モデルの１つとしながら，多言語文化とパラレルな「対話」の不断の継続がその必要十分条件となっている。

キーワード：英語，アイデンティティ交渉，ポピュラーカルチャー，ジオポリティクス，アイロニー

はじめに

一般に膾炙されている「英語文化」という日本語表現は，英国と米国を中心とした英語圏の言語，文学，社会，歴史，思想を包括する英語圏の文化全般を意味することばとして理解されている。その英訳は差し当たり the cultures of the English-speaking world としておいて問題はないであろう。日常感覚の領域では「英語文化」という日本語表現自体に不自然なニュアンスはあまり感じられないようになっている。だが，この一見「あたりまえ」に何気なく使われている四字熟語もエスノメソドロジーや民俗学などの観点[1]から眺めてみると，そこには外延的意味以上の語感が帯び始める。

元来，この「英語文化」という概念自体が「日本の英語」の〈界〉[2]に属する「英語研究」の専門家集団によって再生産され年々更新されてきた主要概念の 1 つとなっている。現に「英語文化」という用語が大学の学科や学会の名称の一部として用いられていることからも分かるように，それは今日においてもアカデミック界（専門領域）内のディスクール空間において用心深く統制され続けているように思われる[3]。

文化意味論の観点からいえば「英語文化」とは「日本語文化」との「境界」線上を行き来しながら日本の文化記号体系の中で機能している表現である。「英語文化」を「英語の文化」と言い換えてもさほど意味は変わらないよう思えるかもしれないが，そこには大きな差異が存在する。ここでは「英語の文化」とはグローバル空間において英語によって表象されている各国の諸文化を包括する一般用語として扱う。それに対して「英語文化」は English の日本語訳である英語（EIGO）[4] と Culture の訳語である文化（BUNKA）という 2 つの「分節」した概念が「接合」され[5]，土着の英語界の価値体系の中で承認された一種の専門用語と見なし，議論を展開していくことにする。「英語文化」とは往々にして非英語圏日本の地政文化的文脈の中でより強固に特殊な認識作用を生み出す複合概念（＝記号）となっている点が重要である[6]。日本国内の英語界の多くの専門家によって日本語によって語られ，客体化されていく「英語文化」。それによって辺縁化されながらも，日本国内の英語の学び手によって日常の文化領域の中で「いま・ここ」にダイレクトにイングリッシュのままで経験されている「英語の文化」。このように，英語界の内部で静かに制度化されてきた「英語文化」とその外部領域において「越境し，抗争し，共振」[7]し続ける「英語の文化」の重層的な位相が存在している。このような事情から，我々は日本の土着のディスクール空間内に生成されている「英語文化」という概念の内包的意味を今一度ここで再検討を行っておくことは有益である。

本稿の主な目的は，すでに国内外において十分に蓄積されてきている文化研究とコミュニケーション理論の学際的な議論を援用しつつ，現時点（2021）に至るまで非英語圏日

本の英語界で醸成されてきた「英語文化」を，集団的かつ個人的な「文化的アイデンティティ交渉」[8] に絡む地政学的問題との連関の文脈において批判的に再検討（脱構築）することにある。

1. 比較「英語文化」論への視角

非英語圏である日本では，従来，「英語文化」は日本の英語界の専門家たちによって「英語圏の文化」の〈紹介〉と〈解説〉いう文脈の中で扱われてきた。「英語文化」が語られる時，その概念の対立項には「日本語文化」または「日本文化」という概念が自明の前提として措定されている。そこでは比較文化的・対照言語学的観点から「A 文化」と「B 文化」の〈差異〉について語られるという形式を取っている。他国の文化を理解する上で，「比較」という方法は非常に有効かつ必要不可欠な手段である。一方で，「比較」という認識方法は，研究対象とされた「文化」そのものを固定的なものとして本質化してしまうリスクを多分に含んでいる手法でもある。比較文化論では，往々にして「静態的文化モデル」が無反省に用いられてしまうため，そこではおのずと「文化本質主義」という問題を抱え込むことになる[9]。日本の土着文化の中に設定された「英語文化」という概念自体が，学び手の意識を「日本語文化」と「日本文化」というカテゴリーに自動的に還流させる文化装置になっているのである。比較文化という方法によって二項対立的で静的固定的な「英語文化」のイメージが構造的に生産・再生産されてしまうリスクについて今ここで再考しておくことは重要であると思われる。1990 年代以降，多くの先行研究において「文化本質主義」や「日本文化論（日本人論・日本語論を含む）」の静態的文化モデルに対する批判がおこなわれてきた[10]。にもかかわらず，非英語圏の「日本の英語文化」論の扱い方に対する批判的議論は十分には行われてきているとはいえないのが現状である。馬渕仁は 2008 年の時点において非英語圏日本の「英語教育」の中に表象されている「英語文化」の比較文化論上の認識の枠組みに注目し，それが「静態的文化モデル」に依って立った文化本質主義的なテクストとして扱われている点を問題化している[11]。

管見によれば，その後もこうした「英語文化」に関する議論は十分に深化されぬままに現在に至っているように思われる。ここでいう「英語文化」とは主に日本の「学校」空間において英語圏の諸文化を認識の対象として扱うディスクールを指す。それは日本の「英語文化パワーエリート（ECPE）」層[12] によって国内の主軸言語（国語）で語られ，英語界の「象徴システム」[13] のアーカイブの中に保存され，日本の「英語教育」の道具として活用されてきた「英語文化」テクストの総体を意味している。「英語文化」のディスクールは「日本文化」を客体化し，自国語による「文化的アイデンティティ」

形成を再帰的に促進する効用価値をもっている[14]。その一方で，同質性の高い「学校」空間の中で日本の「英語文化」を戦略的に活用しながら，他者（外国人）にも開かれるような可変的な文化的アイデンティティ形成へと導く契機はなかなか作りにくい現実がある。

我々は，〈日本人〉の眼差しによって客体化された「英語文化」を認識論の観点からむやみに批判するのではなく，それを英語の学び手側の文化的アイデンティティ交渉に絡むコミュニケーション論の文脈において展開してみることが重要である。その狙いは，非英語圏日本の英語界内に醸成されてきた「英語文化」（EIGO Culture）とその界外に躍動する「英語の文化」（Multiple Cultures of Global/Translocal/Transcultural Englishes）[16] を，その関係性の中で同時に捉える比較「英語文化」論の視角を切り開くことにある。その際に，日本の「英語文化」概念を通念的な解釈の枠組みの中で安易に論じてしまわないよう細心の注意を払っていくことが必要である[15]。というのも，そこでは，〈日本人〉の文化的アイデンティティを暗黙のうちに同質化してしまいがちな「英語文化」空間のコミュニケーションから，アイデンティティの差異化を明示的に承認・推奨する「英語の文化」空間のコミュニケーションへと，価値観と実践アプローチの転換が要請されているからである。非英語圏日本の国内で醸成されてきた「英語文化」を越境し，〈自己〉と〈他者〉の「英語の文化」を縫合[17] し「連帯」するオルタナティブでトランスカルチャラルなコミュニケーション[18] の実践が求められているのである。急速に変容し続ける日本社会の中にあって，日本の土着の〈英語文化〉空間をその外側から改めて捉え直してみることは時宜に適ったアプローチであると思われる。

文化的アイデンティティ

「英語文化」を認識論からコミュニケーション論の文脈に位置づけるために重要な鍵概念の 1 つとなるのは「文化的アイデンティティ cultural identity」である。この「文化」と「アイデンティティ」を 1 つに結合したコトバは研究領域や研究者の視点の置き方によってその意味合いも様々変化する多義的な概念である。梶谷真司はグローバリゼーションの中における「文化的アイデンティティ」の性質を論究するにあたり，ドイツの哲学者ヘルマン・シュミッツの現象学的解釈の「内属的（implantierend）共同状況」概念を援用し，それをシュミッツのいう「共同的状況（gemeinsame Situation）」として捉えている[19]。ここで重要なのはその概念の核には共同体の中における「具体的に生きられている生活様式，利害・問題，関心のあり方」[20] が据えられているという点にある。本論でもこの「内属的共同状況」という概念を用いることによって，「文化的アイデンティティ」がもつ「状況依存的性格」や，そこに生じる「複数のアイデンティティの衝突・葛藤」のメカニズムを捉える視座を得ることができるようになる。梶谷の

解釈に従えば[21]，「文化的アイデンティティ」を生み出す「内属的共同状況」とは，行為者の生がより安定するような基盤と「根本的な連帯感と帰属感」が与えられる場である。それは「多かれ少なかれ自由を制限する」が，その「方向づけや制約は，その中で生きる個々の人をむしろ自由にする」ものとなる。したがって「共同的状況」に在るのは「たんなる従属ではなく，もっと積極的で生産的なもの」となる。そこでは「矛盾・対立を ── 解消するわけではなく ── 共存させつつ，それ自身は安定性を保つことができる」社会空間になっている。またその中に生きている「個人的状況」も「共同的状況」と相俟って「矛盾を孕みながらもかなり安定して持続」させることが可能であり，「そこで生まれる葛藤によって，自らを発展させ，更新していく」ことさえできる，一種の創発の場となっている。我々はここで，「共同的状況」の特質が「矛盾に対する寛容さ」にあることを確認しておこう。というのも，これは前稿で詳細に論じた社会学者 P. ブルデューの「場」（または「界」）概念と，その中で「構造に無意識に制約されつつも同時に自らの意思で新たに構造化する生成図式」であるハビトゥスの概念にも深く重なり合う考え方になっているからである[22]。これらの諸概念を足場にすることで，「文化的アイデンティティ」交渉という営みも，個人が生きる特定の「共同的状況」という「場」（社会空間）の中で生成される〈自己–他者〉認識と実践行為として了解することが可能となる。本論考の狙いは「共同的状況」としての「文化的アイデンティティ」論に比較「英語文化」論を結節させていくことにある。

〈異文化〉シミュレーション空間内の「英語文化」

非英語圏日本の英語界の中で「文化的アイデンティティ」問題を考究した数少ない先行研究の 1 つに浅井亜紀子の『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』（2006）がある。浅井は非英語圏内の異文化接触（intercultural contact）の場である「学校」の英語クラスの教室空間内で，外国人英語指導助手（ALT）と日本人英語教師（JTE）と日本人学生との間に働く文化の政治力学に注目し，「新しい文化的アイデンティティ理論の生成」を試みている[23]。そこでは ALT の非英語圏日本の学校内の「英語文化」空間における「位置取りのゆらぎのメカニズム」の解明が行われている。浅井自身が断わっているように[24]，この研究の主眼をなしているのは，非英語圏日本の「英語文化」空間の中で「マイノリティの立場」に置かれた外国人英語指導助手の「文化的アイデンティティ」問題と彼らの「位置取り（positioning）」[25] 戦略についてである。一方で，「非英語母語話者の立場」にある日本人英語教師と学習者が，「学校」の教室[26]という日本の特殊な「英語文化」空間内においてどのような「文化的アイデンティティのゆらぎ」問題を抱え込んでおり，それに対してどのような心的態度をもっていかなる「位置取り」戦略が取られているのかという点については論じられていない。

本論考の焦点の１つとなっているのが，日本国内の「学校の英語クラス」という，教育システムの固有の論理[27]が働く「英語文化」空間と，その中における日本人英語指導者と学習者にとっての「文化的アイデンティティ」の問題である。多くの日本人英語学習者にとって「学校」の「英語文化」シミュレーション空間は，自国「文化的アイデンティティ」を再帰的に認識させる同質的な〈異文化〉教育の場所となってきた。しかし，20 世紀後半から 21 世紀にかけてマルチメディア空間には英語情報が過剰に溢れかえり，在留外国人・訪問者との接触の機会ももはや特別な経験ではなくなっている。そのような社会環境の変化を真面目に考えるならば，学習者が学校の英語クラス内で英語圏出身の ALT や JTE を相手に集団規模で “英語コミュニケーション” を強いられるような現行の制度は根底から批判的に問い直されなければならないのである。というのも，現在の「学校」という空間ではかつてのように「文化」教育のための権力は機能しない時代になってしまっているからである。「学校」における「文化権力」の衰退については半世紀も前にすでにミシェル・ド・セルトーが以下のように指摘している通りである。

> 今日，情況は変化している。文化権力はもはや学校という場所には存在していない。それはテレビ画面をとおして，どんな農家，どんな部屋にもしのび入っている。それは「パーソナル」化しているのだ。この文化権力はいたるところに自己の製品をさしはさむ。それは親密で内的なものになっている。こうした事態が学校の地位を変えているのである［中略］もはや教師たちは文化の中心ではなく，末端にいる[28]。

プラグマティストであるリチャード・ローティも四半世紀以上も前に，世界秩序の再編成の過程において文化権力の中心が移動することを予見しつつ，次のように語っている。

> この過程は，見知らぬ人びとがどのような人びとなのかについて描写し，私たち自身がどのような人々なのかについて描き直す，という問題なのである。理論によってではなく，エスノグラフィ，ジャーナリストによるレポート，漫画，ドキュメンタリードラマ,そして小説といったジャンルによって担われる任務なのだ［中略］道徳上の変化と進歩を伝達する手段における主役の座が，説教や論文から小説，映画，テレビ番組へと徐々にではあれ，確実に移ってきている。私のいうリベラル・ユートピアにおいてはこうした交代劇に，現在はまだ認められていないある種の承認が与えられることになる。その承認は，理論に対抗し物語を支持するという，より一般的な方向転換の一部を成すことになる[29]。

上記の「テレビ画面」と「テレビ番組」という部分を「インターネット画面」や「スマートフォン画面」や「YouTube 動画」などに置き換えて考えてみれば，この論点はまさに今日の「教室」空間内の「教師」の役割についてもそのままそっくり当てはまることが理解できよう。「日本文化」自体が「日本の文化」へと多元化・流動化していく今日にあって，「日本人」の文化的アイデンティティ交渉に絡む問題を教室の特殊な「英語文化」空間に閉じ込めて論じること自体に無理があることはいうまでもない。むろん，教室の中の「英語文化」的アイデンティティに絡む問題群を英語界における「英語文化パワーエリート（ECPE)」層（マイノリティーとなる外国人英語講師も含む）の「共同的状況」の喫緊の課題として扱うことは可能であろう。しかしそれが英語界の教え手/語り手側の〈異文化〉問題として論究されているかぎり，教室内の制約に束縛されている学び手側にとってそれがいったいどれだけ有意義な意味を持ち得るのかは大いに疑問が残ることは否めない。英語界の外側の日常に生きている大多数の一般の日本人にとって，「学校の教室」という「共同的状況」内に劇場化した「異文化」接触と「英語文化」が自らの「文化的アイデンティティ」感覚に与える影響は一時的かつ限定的である，というのが現実の在り様ではなかろうか。

日本の学校の「英語教育」空間は教育制度のパラダイムの中に人為的に演出されている〈異文化〉のシミュレーションの「場」と見なすことができる。当然のごとくそこには現実的にも理論的にも解決し難い多くの問題が渦巻くことになる。浅井はそうした日本の学校の「英語文化」の背後に不可視された〈差別文化〉に潜む問題群に注目し，カルチャラルスタディーズのコミュニケーション理論の諸概念を適用しながら，「教室」内で“マイノリティー”の地位に置かれる外国人英語指導助手が抱える文化心理的葛藤に関する研究を行った。本論考では浅井が提起した学校の「英語文化」空間に存在する文化・政治的問題群が，実は英語界の「英語文化パワーエリート」のパワー（権力）の源水となっている「文化資本」の問題，すなわち日本の「英語文化」権力の象徴システムの構造と動態と密接に連関しているという視点に立っている。我々は以下の節において，「日本の英語文化」を英語界の外側の日常の「共同的状況」へと引き出すことによって，この議論の文脈を非英語圏日本の「英語文化的アイデンティティ」の問題系にまで拡張していくことにする。

2. 英語文化的アイデンティティ

我々がここで「日本の英語文化」という時，その「英語文化」とは必ずしも英語圏諸国の「英語の文化」を指し示すものでないことは既に説明した通りである。そこには日本国内の文化・政治的文脈の中で生成された，日本人による日本人のための「英語文化」

という特殊な意味合いが含まれている。それは「日本文化」の対立項に布置された概念でもない，「日本文化」としての「英語文化」であり，個人または集団の無意識レベルで土着文化と外来文化の狭間に生成される「日本の英語文化」的性向（パビトゥス）のことを意味している。このハビトゥスとしての「日本の英語文化」こそが，英語界の「英語文化エリート（ECPE）」層のアイデンティティの資源となってきたものである。それは ECPE の「卓越化」戦略のためになくてはならない文化資本＝象徴権力（symbolic power）として機能した(30)。従来の英語界では，日常生活から一定の距離を取ったハイカルチャーのディスクールが，より付加価値の高い「英語文化」テクストとして扱われていた。しかし，20 世紀後半のポストモダン思潮の影響下の中でハイカルチャーのもつ文化権力が次第に衰退し始めると，それに反比例するかのように，英語界の「英語文化」ディスクールの中に英米の大衆文化も次々と取り込まれていくようになった(31)。今日において，大衆の「英語の文化」は学校の英語コンテンツの一部としてパッケージ化され，カリキュラムの中で単位化される主力商品となっている。

本来，個人にとって「文化」が何かしらの意味をもつためには，それが誰かに解読される前に，日常感覚の領域で自ら「経験」できることが理想である。しかし，非英語圏日本では「英語の文化」は必ずしもリアルに経験される生活文化ではないため，長い間の水先案内人である英語界の専門家による解読・解説というガイダンスが必要となってきた。かくして，「学校」で語られる「英語文化」は ECPE の文化資本運用のための「商品」となったのである(32)。しかし，そうした状況はマルチメディア・テクノロジーの急速な発展により大きく様変わりすることになっていく。現在では英語の学び手側は「学校」空間の外側において主体的に「英語の文化」を経験し，それを自ら解釈（「意味理解と意味的秩序の構成」(33)）しながら ECPE との間に対抗的な「卓越化」戦略を実践することが可能な時代になっている。「英語」の「文化資本」の運用と「卓越化」戦略はもはや ECPE の専売特許ではなくなっているのである。

英語界の専門家の媒介を必要とせず，学び手が主体的に経験できる「英語の文化」領域がトランスナショナルなポピュラーカルチャーである(34)。日常性に満ちた「英語の文化」であるポピュラーカルチャーは SNS，YouTube，Instagram，TikTok，Facebook などのソーシャルメディアを通じて，音楽，映画，ファッション，スポーツ，コメディーなどのエンターテーメントのコンテンツによってつくられている。それは「越境し，抗争し，共振」する，つまりトランスナショナル/カルチャラル化する性質をもつ。かつてマーシャル・マクルーハンは「英語はマスメディアである。あらゆる言語はマスメディアである」(35) といったが，メディア空間の中で「英語の文化」というランゲージは Global Englishes により世界の広範囲に拡散され「越境し，抗争し，共振」しやすい性質をもっている。今日では，非英語圏日本の中にあっても英語圏のポピュラーカ

ルチャーのコンテンツを自ら能動的に「日本語化」して受信するだけでなく，「日本文化」のコンテンツを「英語化」し，それを「英語の文化」に転換し英語圏の文化空間の中に向けて発信したりすることが容易にできる時代である。こうしたトランスナショナル・カルチャラルな「英語の文化」空間がグローバルに日々膨張する時代にあって，教育システムの制約に縛れている「学校」の教室空間で扱える「英語文化」コンテンツの境界の線引きの可能性と限界を再定義・認識しておくことは焦眉の急となっているように思われる。

このように，トランスナショナルなポピュラーカルチャーのコミュニティ空間に拡がる「英語の文化」に直接参加する者たちは，そこで自ら主体的に「意味理解と意味的秩序構成」を自由に行っているわけである。彼らは「いま・ここ」で「具体的に生きられている生活様式，利害・問題，関心のあり方」をたしかに共有しており，そこにはおのずと新たな「文化的アイデンティティ」を生成し身体化する契機（「共同的状況」）が存在しているといってよいだろう。

英語文化の語り手の「場所」

日常的なコミュニケーションの文脈において「文化的アイデンティティ」の生成過程を分析するにあたり，ここでいくつか問いを立ててみる。この議論をオーディエンス研究[36]の文脈に接続させていくと，「英語文化」は誰によって誰のために語られる文化であるのか，それは誰にとって意味をもつ「文化」なのか，という問題系に繋っていく。さらに，スチュワート・ホールが『カルチャラル・アイデンティティの諸問題 ── 誰がアイデンティティを必要とするのか？』（2001）で提起した問題意識に倣って問うならば「誰が英語文化的アイデンティティを必要とするのか？」となる。つまり，誰が「英語」とその「文化」や「アイデンティティ」についてどの「場所」のいかなる立場（ポジション）から誰に対して語るのか？という発話の位置（speaking position）と文化権力に関する問いが非常に重要になってくるわけである。「英語文化」や「英語の文化」が語られる「場所」と語り手の「位置」によって「文化」の意味合いは大きく変化するのが文化の政治力学である。ミシェル・ド・セルトーはアカデミズムという「文化を論じる場所」について以下のように指摘する。

> アカデミズムというものは，つねに虚構の普遍主義であります。ですから議論の領域とその限界をあきらかにしておかなければなりません。わたしが指摘したいと思いますのは，文化を考える場所が一体どこに位置しているのか，その場所についてであります。［中略］文化を語り，そのグローバルな様相を語る前にまずもって認識しておかなければならないのは，わたしたちが，もっぱらひとつの場所，すなわ

ち，わたしたちの場所から文化を論じているにすぎないということです[37]。

セルトーによる性格付けに従えば，アカデミズムという「特殊な場所」とは「専門家どうしが文化を論じる際に，いったい誰にたいし，何を語ることができるのか，境界は定められている，そうした諸規定要因の総体」である。ゆえに，その「特殊な場所」から語られる文化が「どれほど科学的であろうと，それぞれの分析はあくまでローカルな実践であり，地域的言説をうみだすもの」でしかありえないものとなる。つまり，文化に関する「分析は，みずからの限界を明示し,自己の領域とそれぞれ他に還元できないほかの領域分野との連携を図らないかぎり，真のものとはならない」のである[38]。同様に，我々は非英語圏日本の英語界という「特殊な場所」から語られる「英語文化」に関する語りの「限界を明示」し，「ほかの領域分野（＝英語界の境界を越えたところに生成されている「英語の文化」）との「連携を図る」ことが自ずと不可欠となってくる。

このように，アカデミズムに属する語り手が，「英語文化」について何かを語ろうとする時，その語り手はその「場所」の外側に拡がる「英語の文化」空間との狭間で自らの「英語文化的アイデンティティ」交渉を行うために文化の政治力学を働かせていることが分かる。またそれは同時に，学び手側が英語界内に限界をもつ「英語文化」の語りを脱構築し，界の境界を越えた日常空間にある「英語の文化」共同体と「連帯」する契機にもなっている点が重要である。

3. 英語界のオーディエンスの動態

ハイカルチャーとポピュラーカルチャー

英語界のアカデミックなプラットフォームでハイカルチャー化[39]される「英語文化」の外側で，一般国民によって自由に受容されてきた「英語の文化」がポピュラーカルチャーである[40]。ここにおける我々の目的はハイカルチャーとポピュラーカルチャーを図式的に描出することではなく，英語界の非日常領域においてアカデミック・ティーチングのために生成されている「英語文化」と日常領域においてポピュラー・ラーニングにおいて受容される「英語の文化」という 2 つの異なる「場所」に作動する「英語文化」の政治力学の析出にある。

我々は先に，英語界の「英語文化」の語り手の「場所」と「位置取り」の政治性について言及した。しかし現在の非英語圏日本内のトランスカルチャラル・コミュニケーション[41]の観点からすると，それ以上に重要なってくるのが，学び手側の「場所」と「位置取り」の問題，すなわち〈オーディエンス〉の動態に絡む問題である。オーディエンス研究ではメディア情報の生産者（作り手・語り手）と消費者（受け手・学び手）とい

うカテゴリーの中で，オーディエンス（消費者）側の能動性についての多くの研究が行われてきた。ジョン・フィスクは 20 世紀後半に英語圏のデレビ文化に焦点を当てながら，メディア空間の「文化権力」支配に対するオーディエンス（視聴者）の「受容と抵抗」力学に関する論究を行った(42)。我々はここでフィスクの議論の対象メディアであるテレビをインターネットに置き換えて議論を敷衍してみることが有益である。というのも，まさに「メディアはメッセージ」（M. マクルーハン）であり，20 世紀のテレビに代わってインターネットが 21 世紀の英語界のオーディエンス（受け手）の「身体に拡張されたメディア」となっているからである。新しいメディアが持つメッセージを本論の主題に沿って読み解いておくことがどうしても必要なのである(43)。

日本の英語界の中で制度化された「英語文化」を相対化する「英語の文化」がポピュラーカルチャーである。フィスクはポピュラーカルチャーの本質が支配文化に対する「抵抗の快楽」にあると分析した。そしてそのメディア文化空間のプラットフォームをコントロールする「支配勢力（power-bloc）と民衆」の間に「均一性と異質性の対立」の力学を析出した(44)。ポピュラーカルチャー自体が「支配的な社会構造」との関係性の中に生み出されているものである。フィスクが指摘したように，体制文化の中に「均一性」を目指す支配勢力のヘゲモニー的権力は，「民衆側からの異質性をめざす抵抗」に常に直面する状態にある。また，オーディエンスの行動は「抵抗か逃走」という形態となって発現する。前者は支配文化から押し付けられる均一性と抑圧に対して異質性を求める抵抗であり，後者は抑圧から逃走する快楽を意味している(45)。このように，ポピュラーカルチャーには本質的に常に「対抗文化（counter-culture）」的要素が多分に含まれていることが分かる(46)。

この視角から日本の「英語文化」空間を眺めてみると，英語界の総体として「英語文化」が制度内でハイカルチャー化され均一化されることで支配勢力側の文化権力の「押し付け」機能が作動し，オーディエンス側に「受容と同化」作用が働きやすくなる構造が見えてくる。さらに，「英語文化」の表舞台からは「抵抗と逃走」というポピュラーカルチャー（「対抗文化」）という「英語の文化」の位相が辺縁化されてしまう動態も把握できるようになる。

歴史的にみても，英語界内の「支配勢力」側に位置する ECPE のハビトゥスとしての「英語文化」は現在の大衆の「英語の文化」のハビトゥスとは大きく異なるものであった。本来，ECPE にとっての「英語文化」とは日本社会のエリート層の育成を意図して醸成されたものであったため，学びの対象が日常空間では簡単には手に入らない（希少性が高い）ハイカルチャーに向かっていったことは当然の成り行きであった。しかし，20 世紀後半にかけて「英語教育」が加速的に「大衆化」されていく過程で，従来のエリート文化の伝統に根差した「英語文化」の効用価値を巡り，英語界の ECPE と外部

（実業界）の有識者の間において英語教育論争が繰りされるようになっていく。ところが，それも結局のところは体制（「支配勢力」）側で「国民教育」を名目に行われたエリート間の一種の「イデオロギー抗争」であったことから，ECPE（「支配勢力」側）の特権化された「発話の場所」の問題やオーディエンス（「民衆」側）の「対抗文化（抵抗–逃走）」の位相が議論の俎上に載らないままに論争が終結してしまうことになった。我々はここで日本の ECPE 側の支配的な「英語文化」論の死角となってきたオーディエンス（「民衆」）側の「抵抗–逃走」文化の位相にもっと注目していく必要がある。

本来，「文化」とは日常経験を「ことば」で解釈するための「場所」である。「ことばと文化」とはそれ自体が目的でもありプロセスそのものでもある。自らの経験に対する自らのことばによる解釈こそが「抵抗の快楽」となり，自らの文化的アイデンティティの源水にもなっている。我々は「文化」の解釈という行為によって自らの「場所」の中における自らの「役割」も認識しているからである。その点において，英語のポピュラーカルチャーという「場所」は自らの文化的アイデンティティに絡む「意味」の交渉の場となっている。フィスクは云う ──，

> そもそも文化とはわたしたちが自分の社会的経験を解釈するたえまないプロセスのことである。そして，その解釈によってわたしたちの社会的アイデンティティは支えられている。いかなるものであれ，それが何であるかを理解することは同時にそのプロセスにかかわる自分自身が何であるかを理解することでもある。意味を理解することは主体と対象との差異をいったん解消して，それぞれを他方との関係の中で組みかえることであるといってもよい。解釈をしたり，解釈にもとづいて実践することに快楽がともなうのは，この組みかえ自体が快楽だからである(47)。

ここで我々が注目すべき点は，自分自身の解釈とは「主体と対象との差異をいったん解消」して「それぞれの関係の中で組みかえる」営みであり，それ自体が「快楽」となっているということである。なぜポピュラーカルチャーの中で「主体と対象」のテクストの網目を組み直す必要があるのであろうか？　その理由をフィスクは次のように説明する。

> ポピュラー・テクストはまた矛盾に満ちており，読者にはその矛盾を利用して自分なりに解釈を行うための創造性が必要とされる。ポピュラー・テクストはまた精神や意識よりも身体や感覚に焦点をあてる。【中略】いいかえれば，身体や感覚はヘゲモニーのもっとも弱い民衆的領域，あるいはヘゲモニーの手の及ばない領域を構成しているのである。【中略】ようするにポピュラーカルチャーの創造性とは日常

生活とつながりのある自分なりの解釈を行うということである。つまり各人にとっての有意性はポピュラーカルチャーにとっての核心である[48]。

このように，ポピュラーカルチャーの「有意性」はテクストの「矛盾と対立」[49]を契機にした「創造性」にある。また，文化的アイデンティティ交渉に伴う「解釈」は〈形式知〉領域（「精神や意識」）ではなく〈暗黙知〉領域（「身体や感覚」）において行われている。そこはハイカルチャーの象徴権力のヘゲモニーが及びにくい「場所」となっているのである。

ポピュラー・ジオポリティクス

ポピュラーカルチャーの中の「権力/抵抗」と文化的アイデンティティ交渉に絡む諸問題はジオポリティクスという「場所」の力学の問題である。それはポピュラー・ジオポリティクス研究で扱われる重要な論点の 1 つとなる。ディトマーとボスの *Popular Culture, Geopolitics, & Identity* (2019) の定義にしたがえば，ポピュラー・ジオポリティクスとは「日常経験の地政学（the everyday experience of geopolitics）」[50]のことである。

非社会エリート層である一般民衆のアイデンティティはポピュラーカルチャーのジオポリティクスの力学の中で生成されている。20 世紀には比較的安定していた「人種・国民・階級」的なアイデンティティ[51]の基盤もグローバリゼーションによって不可逆的に流動化することになった。その結果，現在において個人的・集団的なアイデンティティ交渉の「場所」として唯一残されているのが，グローバルなメディア空間に延々と拡がるポピュラーカルチャーの領域である[52]。

ポピュラーカルチャーは「二重の意味で地理的なもの（doubly geographical）」である[53]。それは「特定の場所に関する情報」を伝達するのみならず，特定の文脈で生み出さながらも次から次へと「他の異なる場所」へと移動し，複合的な文脈において消費されていくものである。それが「異なる場所におけるアイデンティティ」とそれに付随する権力を「多次元レベルで生起させる」要因となっている。

同様に，ジオポリティクスも「二重に地理的なもの」である。ジオポリティクスの力学によって「特定の場に特定の価値が付されて」いる。人々と彼らの生きる「場所」において，「より重要なものと重要でないもの」へと区別がなされ，序列化が行われている。つまり，「その場所に生きる人たちのアイデンティティを区分する人たちとそれによって区分される人たちへと識別する働きをもっている」ということである。英語界という ECPE の活動の「場所」に働いているジオポリティクスの力学についてはすでに前稿で論じてあるが，本稿の議論の論点はその「社会エリート層の営みと見なされてい

る」ジオポリティクスが「ポピュラーカルチャーを通して我々の日常の文脈の中に循環している」という点にある。この視点から見るならば，英語界のオーディエンスとなっている学び手側の「文化的アイデンティティの諸問題」（S. ホール）も，ハイカルチャー化された「英語文化」領域とポピュラーカルチャーの「英語の文化」領域の中にも循環していることになる。今日において，英語界のオーディエンス側の文化的アイデンティティ交渉に絡んだ問題が先鋭化している要因は，ECPE によって管理された「学校」の「英語文化」の形式知の中にではなく，日常のポピュラーカルチャーの暗黙知の中にある。これは「英語界」の動態力学に大きな地殻変動を引き起こしている社会現象である。「英語」研究者はポピュラー・ジオポリティクスの見えない位相にもっと注目すべきである。なぜならそこでは「英語文化」の「語り手の位置」と「学び手の位置」の再編制が否応なく要請される事態となっているからである。

以上の議論から，英語界の語り手の場所に対するオーディエンス（学び手）の場所であるポピュラー・ジオポリティクスの要諦も確認することができた。次節では，なぜ今ここで英語界の「英語文化」という「場所」に注目し，国内の「共同的状況」における「英語文化的アイデンティティ」のあり方を問い直すのか，という問題意識に戻り，議論を集約していくことにする。

4.「英語の文化」空間の自由と連帯

現在（2021）から半世紀前にイヴァン・イリチは『専門家時代の幻想（*Disabling Professions*）』（1977）の中で新しい専門家のエトス（the professional ethos）の在り様について以下のように語っている。

> 健康，教育，福祉，心の世界の行商人である専門家たちは誰がいかなる知識やサービスを受けるべきなのか，それなぜそうすべきなのかに関して統制する権威の確立ために半世紀近い時間を必要としてきた［中略］しかし彼らの気づかぬところでいつのまにか，専門家の信用基盤はますます揺らいできているのである［中略］今や，専門家による学びの社会・技術的環境の統制に対して多くの個人やグループが異議を申し立てる時代になっている。彼らは専門家への問いを投げかけることによって，そして自ら意識的に創造するライフスタイルによって対抗するのである(54)。

イリチがここで語っているのは知識・情報の生産者と消費者の支配/従属の関係性の変容についてである。AI・インターネットの時代にあって，知識やサービスを受け手は単なる受け身な消費者ではなく，自らのライフスタイルの中で能動的に生産・創造する

「生産消費者（prosumer）」[55]（A. トフラー）となっている。そこではすでに従来の生産者・消費者の関係性とそれに伴う支配・従属の力学が大きく変容している。現在，日常のポピュラーカルチャー領域には，英語界内における学び手（learner）が自由に「生産消費者」として ECPE に対して有利な「位置取り」が容易にできるポピュラー・ジオポリティクスの力学が働いている。英語界のハイカルチャー化された「英語文化」の学生・学習者・消費者（student/learner/consumer）であっても，界の外側のポピュラーカルチャーの領域では「英語の文化」の解説者・生産者（consumer/commentator/producer）になることができる。このように，界内の固有の論理に統制されやすい「英語文化」という「場所」で序列・固定化されてしまう「文化的アイデンティティ」と，その外界にある「英語の文化」という「異なる場所」で脱序列・流動化する「文化的アイデンティティ」が「多次元レベルで生起している」のである。先述したディトマーとボスの説明に従えば，非英語圏日本の「英語文化」の概念には英語界という「特定の場所に関する情報」が含まれており，それは「日本文化」内の特定の文脈の中から生み出されながらも，その文化の流れ（flows）は界の外側に拡がる「他の異なる場所」である「英語の文化」へと移動（越境）しているわけである。その文化の越境的流れ（transcultural flows）[56] によって「英語の文化」は新しい伝統（new traditions）を創出する「新しい場所（new places）」[57] となる「第三の空間」（third places/third spaces）[58] になっている。そこは非英語圏日本にあってもすべての参加者が自国の文化から越境しながら英語使用者（English user）として「文化的アイデンティティ」交渉できる代替「空間」となる。国内の英語界のオーディエンス（学び手）は，制度化された「学校」の「英語文化」の学び手・消費者としてのアイデンティティに縛られているわけではけっしてない。それどころか「英語文化」の外側において，自国文化を越境する「英語の文化」の生産者（transcultural producers）としてすでに自らの「英語文化的アイデンティティ」を自由に交渉できる存在でもあるのだ。このように，「英語文化」と「英語の文化」の空間は「二重の意味で地理的なもの」であることが分かる。「空間」とは「そこに何かを置き，名前を与え，あるいはそこに住む」ことによって「場所」へと変化する[59]。このように，「学校」制度の中で押し付けられる「英語文化」的アイデンティティの「場所」からポピュラーカルチャーの「場所」へと移動し，そこに生きる住人の「共同的状況」に関わることによって新たな「英語の文化」的アイデンティティが生み出される地平線が拓けてくるのである。

英語文化的アイデンティティの歪み

では何のために非英語圏日本の「英語文化」を主題にしてこのような議論を展開しているのかといえば，その狙いはこうである。先に指摘したように，ジオポリティックス

とは「場所に生きる人たちのアイデンティティを区分する人たちとそれによって区分される人たちへと識別」し「序列化」する力学のことである。非英語圏日本の英語界の中に歴史的に醸成された「英語文化」の風土（ethos）の中には，英語を「できるかできないか」「身に付けることができている人かそうでないか人か」という分類と序列化によるアイデンティティの「押し付け」の論理が働いている。この論理の刷り込みの結果，多くの日本人の「英語文化」的アイデンティティには大きな歪みが生じているといってよい。「序列化」の条件付けによって「英語ができる日本人とできない日本人」「英語の資格・スコアをもっている日本人ともっていない日本人」「英語が流暢に話せる日本人と話せない日本人」というような烙印が押されることになり，同文化内で英語による言語差別と偏見に基づく歪んだ「英語文化的アイデンティティ」が生じているのである(60)。

学び手側は必要に応じて（教え手側もそれに連動しながら）界の制度によって統制されてきた日本型「英語文化」と，その中で固定化されている「英語文化」的アイデンティティの歪みを，新しいボキャブラリーをもって脱構築し，日常の自由な「英語の文化」空間へ移動することによって，序列階級的な日本の「英語文化」を相対化していく「位置取り」戦略を採っていくことが必要である。体制側の「英語文化」のジオポリティクスに無抵抗のままに条件づけられ固定化されていた「英語文化的アイデンティティ」から「自由」になる「空間」を作り出すこと。そして自国内の「英語文化」のジオポリティクスによって「非英語使用者」や「非英語母国語話者」のカテゴリーへと暴力的に分類され，他者化されてしまう日本語使用者・多言語使用者は，そこに伴う「苦痛」をできるだけ減少させるためにも多様な「英語の文化」の広場（「場所」）で「連帯」することが重要である。

そのような連帯と自由を生み出す「英語の文化」とアイデンティティ交渉のイメージを掴む上で非常に有効であるのが，近年注目されるようになっている EMF（English as a Multilingua Franca）という考え方であろう。J. ジェンキンズの暫定的な定義によると，EMF とは「多文化コミュニケーションの中では英語が接触言語の 1 つとして選択できる状況にあるが，必ずしも選択されるわけではない（“Multicultural communication in which English is available as a contact language of choice, but is not necessarily chosen”）」という英語観のことである(61)。

W. ベイカーと石川友和は *Transcultural Communication Through Global Englishes*（2021）の中で EMF によって英語（Global Englishes）の機能を多言語間/異文化間/越境文化的コミュニケーション（multilingual/intercultural/transcultural communication）の一定の文脈に制限する議論を展開している(62)。現在の日本国内の英語界の「英語」使用に対するアプローチといえば，依然として異文化コミュニケーション

（intercultural communication）の場において実務的価値を前提としたESL（English as a Second Language：第二言語としての英語）と英語の教養的価値に趣をおいたEFL（English as a Foreign Language：外国語としての英語）の2つのパラダイムが支配的であるように思われる。しかし，EMFの概念を持ってすれば，非英語圏日本の国内における異文化コミュニケーションの共通語が英語でなく自国語（日本語）を含むその他の言語を混ぜ合わせながらおこなう形態を，より正当に承認することができるようになる。特殊な場面を除けば，それが非英語圏日本のローカルな文脈における多言語コミュニケーションの実態（“a normal part of many of our lives”）[63] なのである。

だが，私見によれば，このEMF概念の暫定的定義にも問題がないわけではない。EMF概念の多文化コミュニケーションでは，まず先に英語が接触言語の筆頭として利用可能な状況が想定されており，他の言語は第二義的な選択肢となっているようにも解釈できてしまう点に注意を向けておく必要がある。また，ベイカーと石川が推奨する“英語（Global Englishes）を通したトランスナショナル・コミュニケーション”も新しい「英語の文化」形態の1つとして有用であることは認めつつも自国の文化を越境するコミュニケーションが英語（Global Englishes）で行われる「英語の文化」でなければならない必然性はどこにもないはずである（そこにあるのは英語のヘゲモニーを正当化する効率性・利便性という功利主義的価値だけであろう）。アカデミズムの中で活動をする英語研究者・関係者は（意識的にも無意識的にも）英語が共通語の選択肢としていつでもどこでも最初から存在していると考えたがる“ポジション・トーク”，つまり歴史的に形成された現在の英語優位なポジションに「ただ乗り（freeriding）」[64] をした議論を展開してしまうことが多くなりがちである（英語圏のイングリッシュスタディーズでは自らの言語の優位性（dominance）を暗黙の「公理」とせざるを得ないところがこの種の議論の泣き所となっている）。しかしながら，トランスナショナル・コミュニケーションのコンテクスト上の「自由＝偶然性（contingency）の承認」[65] とともに，「共同的状況」内のヘゲモニー言語（English/Global Englishes）の暴力性の緩和に向けた実践を本気で推奨するのであれば，EMF概念の定義の中においても，英語が生み出す象徴権力を是正する付帯条件を以下のように明記しておくことが必要であろう。

> ポストモダン時代の非英語圏内の多文化コミュニケーション環境とは，接触言語としてどこでも利用可能な選択肢と見なされやすい現在の英語の優位な状況が所与の条件として黙認されることがない「場所」となる。そこではヘゲモニー言語としての英語が事実上の筆頭の接触言語の選択肢として不必要に押し付けられることがなく，ローカル言語使用の自由が抑圧されない空間である。同時に，不測の事態に利用できる選択肢として英語も完全に排除されてはならない言語の1つとなっている

(Multicultural communication in which the already advantageous position of English or Global Englishes as a universally available choice is not to be taken for granted in the non-English speaking sphere; the hegemonic language is being not unnecessarily imposed and chosen a priori as a first contact language of post-modern choice at the expense of viable local languages; and yet, the varieties of English as a contingent option are, as a last resort, not to be categorically rejected either.)[66]

つまり，非英語使用者の間で行われる多文化コミュニケーションにおいて「英語（English/Global Englishes）」が最も利用可能な共通言語とする状況（英語のヘゲモニー）を暗に所与のものとして設定しておく必然性も道徳的義務も存在しない，ということである。我々は英語のヘゲモニー性を是正・牽制しておくためにも，その点を事前に定義の中に明文化し，相互承認を行っておくことが肝要なのである。この明示的な定義に基づいた合意に向けて，EMF のプロトコール上でもあえて「英語（English/Global Englishes）」を Multilingua Franca の主役のポジションからあえて外しておき，そのヘゲモニーを是正するために英語以外の現地語を優位に設定してくことが要請されているのである。特に日本のような非英語圏の言語空間であっては Japanese が自ずと筆頭の共通語（Multilingua Franca）のポジションに据えられているのであり，同様の非英語圏である韓国であればそれは Korean であり，中国ではそれは Chinese となっているのである。英語以外の現地語が中心となっている言語空間内において EMF の定義を強引に適用することはできない。非英語圏の「英語文化的アイデンティティ」と多文化コミュニケーションの歪みを是正するためにも上記のような言語態度（language attitude）は必要不可欠となる。

いうまでもなく，英語圏内のトランスカルチャラル・コミュニケーションの「共同的状況」にある英語母語話者と非英語母語話者の間では英語（Global Englishes）が共通語 Multilingua Franca の優先選択肢となることは自然な成り行きでありそれ自体に大きな問題はないであろう。問題となるのは，英語を使用せずに自国語で日常生活を営んでいる非英語圏の非英語使用者・他言語母語話者の「共同的状況」の場合なのである。多言語・文化主義を取り込んだ EMF 概念の中では，閉鎖的な「英語文化」を多言語によって越境する「自由」は担保されてはいるのだが，問題の解決にあたってはそれだけでは不十分であると言わざるを得ない。そこには非英語者話者自身が優先的に自国語や母語を用いて「英語の文化」と「抗争し共振」する「自由」が積極的に推奨されていなければならない。トランスカルチャラル・コミュニケーションが行き着く「場所」では，多様な英語（Global Englishes）使用の「自由」が承認されているだけではなく，英

語話者が優位となってしまう不均衡な言語差別状況に対する対抗的な言語実践の「自由」までが承認されていなければならないのである。英語を優位言語として暗に承認したままの状態で，接触言語の「選択の自由」を形式的に認めるだけでは不十分なのである。そこには英語の「ただ乗り（free-riding）」のポジションを脱ヘゲモニー化（de-hegemonization）する「自由」がなければいけないのである。ゆえに，トランスカルチャラル・コミュニケーションでは，まずは現地語を優位言語とする「共同的状況」に身を置くことが相互理解の大前提になっていることが重要である。この原則が認められた上で，はじめて第三の「英語の文化」を創り出す「自由」も正当に承認されることになる。このように非英語的な「共同的状況」のプロトコールに沿って相互接近（「連帯」）を図っていくことを脱英語ヘゲモニー化のための実践形態として積極的に推奨しておくことが肝要である。そうすることではじめて EMF の持ち味も最大限に活かしていくことができるようになるのである。

このように，EMF という魅力的な概念も批判的に吟味しておくことが必要である。そうでないと，非英語圏日本国内におけるトランスカルチャラル・コミュニケーションの文脈では多元的な英語（Global Englishes）の使用によって却って「英語一極集中状況」が増長されてしまい，英語中心主義的な「英語の文化」を黙認したままになりかねないからである。我々は単一価値的な英語（English）から多元的価値をもつ英語（World Englishes）を経由し，同時に「英語一極集中状況」も回避させるべく，現地語（日本では日本語）使用を大前提にするトランスカルチャラルな「英語の文化」の在り様を当然のこととして希求すべきなのである。ここには，ラジカルな「英語の否定（＝現地語の推奨）」によって却ってトランスカルチャラルな「英語の肯定（＝現地語の越境）」への道が開かれる，という「英語の文化」のアイロニーがある。いやしくも EMF 概念を活かしたトランスカルチャラル・コミュニケーションが非英語圏内において推奨されるならば，ヘゲモニー言語の象徴権力に起因する「英語的アイデンティティの歪み」の是正からその解消に向けた努力が意識的になされていかなければならない。EMF の理念を追求するにあってそうできない理由はないはずである。

リベラル・アイロニストの新しいボキャブラリー

以上のような議論は，越境する「第三の空間」に拡がる「英語の文化」の中にあって，グローバルな英語（Global Englishes）の使用の「自由」を消極的に承認しつつ，同時にローカルな非英語圏日本の土着の「英語文化」における英語の不使用（自国語の使用）の「自由」も積極的に承認[67]していくという立場の表明でもある。これは開かれた「英語の文化」の中で多様な英語のコミュニケーション形態を追求しながら，循環的にはそれも否定するという自己矛盾を含んだ，相反する価値観を同時に擁護するポジショ

ンとなっている。これはプラグマティストのリチャード・ローティに象徴されるリベラル・アイロニストの「位置取り」戦略であり，自由主義に関する思想・実践でよく知られた哲学的・政治的立場でもある(68)。本稿の主題である「英語文化」と「文化的アイデンティティ」の諸問題に対する向き合い方もこのリベラル・アイロニストの立場に賛同するものである。リベラル・アイロニストは「公理」のような根拠（本稿では英語＝English/Global Englishes がそれにあたる(69)）をもって矛盾に孕む社会問題を合理的に解決しようとする主知主義的なスタンスを拒絶する。ローティによれば，リベラル・アイロニストは常に「終極の語彙」(70) によって導き出される「究極」の真理（解決策）というものを信じることができずに，自分が今使っているボキャブラリーやそれによって紡ぎ出される思想自体を徹底的に疑い続けている。そうしたアイロニカルで「私的」な思想的なポジションを常にもちつつ，他方では「公的」な空間における不情理や差別や不平等から生み出される「残酷さ」と「苦痛」を軽減するために「他者」に寄り添うリベラルで実践的なスタンスを同時に採っている。私的な思想的ポジションの延長線上で公的な問題を強引に解決しようとせずに，自ら使用する「終極の語彙」の有効性と妥当性を常に疑い続けながら，自己が他者との間で双方にとってよりよい「共同的状況」を生み出す新しいボキャブラリーをひたすら求め続けている。「場所」に働く偶然性（contingency）の中にある実存的なコンテクストの「網目を組み替える」ためにも他者との対話を継続し，共存のために「連帯」していくことが何よりも重要であるとリベラルアイロニストは考えている。

非英語圏日本のトランスナショナル・コミュニケーションの「場」において英語（Global Englishes）を用いるという「自由」が暗黙のうちに非英語使用者に押し付けられ，自国語が使えない「不自由」が生み出され，「苦痛」が伴う「英語の文化」であってはより望ましい「共同的状況」を生み出す助けにはならないだろう。そこでは「英語ができる人とできない人」「英語が話せる人と話せない人」といった「英語文化的アイデンティティ」の「序列化」を回避することができないままになってしまうからである。非常に魅力的な EMF 概念や「世界の英語論＋トランスカルチャラル・コミュニケーション」論も，詰まるところはアカデミズムというハイカルチャー領域から語られる「英語」論であることに変わりはない。「英語中心主義的文化」のパラダイムをラジカルに転換できるような，真の意味でトランスな「英語」論にまではまだ行き着いていないように思われる（本稿もその例外ではなく，本テーマの議論の限界点の周辺を右往左往しているだけにすぎないものである）。

アイデンティティの固定化回避のアイロニー

日本の英語界のハイカルチャー化された「英語文化」には「序列化」の論理によって

歪んだ「英語文化」的アイデンティティが刷り込まれている。現在の社会状況にあってそれは客体化し脱構築されねばならないものである。そのためにも国内のハイカルチャーの外側にある「英語の文化」の位相に注目していくことが有益である。制度の中で固定化されてしまう「英語文化」的アイデンティティを相対化し流動化させる「場所」となるのが日常のポピュラーカルチャー領域である。ポピュラー・ジオポリティクスの中では対抗文化（counter-culture）のボキャブラリーをもって自己のアイデンティティを戦略的に再定義できるポジションを取ることが何よりも重要になってくる。ここで急いで補足しておくならば，その狙いは体制側のハイカルチャーの象徴権力によって押し付けられてしまう「英語文化」的アイデンティティを破壊し，それにとって代わってポピュラーカルチャーによる文化的アイデンティティを形成するということではない。文化のジオポリティックスに働く象徴権力の〈作用と反作用〉は常に相互補完的でアイロニカルな協力関係（complicit and complementary）にあるからである。

ハイカルチャーの「英語文化」とは均一性や普遍性を志向する単一価値的で規範的なStandard English の効用価値を最大化させる空間である。自ずとそこには排除の論理が作動し，それによって言語差別と不平等が生み出されることになる。そこで押し付けられてしまう序列文化的なアイデンティティを回避するために，トランスカルチャラルで多文化主義的な World Englishes の議論が生まれてきたわけであるが，皮肉にもその対抗言説自体がすべて Standard English によって語られているのである。World Englishes やトランスカルチャラル・コミュニケーションといったオルタナティブな議論でさえも Standard English によって「普遍化」されているという，「英語の文化」内の象徴権力のアイロニカルな循環構造をここに見て取ることができる。であるならば，Standard English でもそれを相対化する World Englishes であってもトランスカルチャラル・コミュニケーションという点においてはどちらも同じトランスな効用価値を持っていることになる。ハイカルチャー領域の「英語と文化」の均一性や普遍化に抵抗するポピュラーカルチャー領域の「英語と文化」の異質性や特殊性が，ぐるりと一巡して均一性や普遍化を志向するシステム全体の秩序の安定に貢献しているという構造がそこにはある。ポピュラーカルチャー領域で自らの文化的アイデンティティを英語の異質性をもって差異化する作業を行うわけであるが，その行為自体がハイカルチャー空間の英語の均一化に貢献することによってのみ達成されるものなのである。

では，どちらのスタンスがより望ましいアプローチとなりうるのかといえば，それはどちらでもありどちらでもないということになる。なぜなら，ハイカルチャーが志向する均一性とそれに対抗するポピュラーカルチャーの異質性を巡る「二元論」自体が「幻想」に過ぎないからである(71)。Standard English も World Englishes もどちらも英語という言語であるという点では同質な位相を観ることができるし，「ハイカルチャーと

ポピュラーカルチャー」や「書き言葉と話し言葉」の観点からみればそこには異質の言語形態がもつ異なる効用価値の位相を確認することができよう。つまり，これは各々が「共同的状況」の中でどのような立場に置かれており，英語文化のジオポリティクスの序列化から生じる「抑圧」や「苦痛」を低減させるためにはどのような「位置取り」が実際に可能であるのか，というプラグマティックな問題なのである。如何なる立場の如何なる価値観から「英語文化」や「英語の文化」を捉えることができるのかどうかということ自体が，すべて各々の「場所」の実存的な条件（contingency）によって大きく左右されているのである。

以上の議論を踏まえていうならば，「英語文化」的アイデンティティの問題についても同様の考え方をしていくべきであろう。現在の「リキッド化する世界[72]」の中で非英語圏日本のローカルな「英語文化（“EIGO Culture”）」は否応なくグローバルな「英語の文化（Multiple Cultures of Global/Translocal/Transcultural Englishes）」へと液状化し続けている。ハイカルチャー領域の管理下におかれた英語（Standard English）によるトランスカルチャラル・コミュニケーション。それに対抗するポピュラーカルチャー領域の英語（World Englishes）を通じたトランスカルチャラル・コミュニケーション。非英語圏日本の一般英語学習者・ユーザーであればそのどちらかの領域のEnglish をもって自らの文化的アイデンティティ交渉を行うのではなく，常にそのどちらにも領域にも帰属しない「位置取り」によって「英語文化」的アイデンティティの固定化・烙印化の回避[73] を続けていくことがますます重要になってくる。トランスカルチャラル・コミュニケーション空間では英語（English/World Englishes）のみならず，他者に開かれたローカル言語（日本語）でもって「英語文化」的アイデンティティの固定化を回避する自由も担保しておくことが要請されている。英語界のハイカルチャーの位相で EIGO の象徴権力[74] によって序列化されてしまいがちであった「英語文化」的アイデンティティをトランスカルチャラル・コミュニケーションの文脈の中で相対化・脱構築・再編成していかなければならない[75]。そのためには英語の学び手の言語的身体感覚（linguistic bodies）[76] の中心軸を学校の外側にあるポピュラーカルチャーの「共同的状況」の位相（ローカル言語を含む多言語によって創造される「英語の文化」空間）へと移動させ，そのポジションから国内の制度内で権威化された静態的な「英語文化」の流動化を加速させていくことが必要になってくる。そこではリベラル・アイロニストの流動的な「位置取り」戦略を言語実践モデルの 1 つとしながら，「英語文化」的アイデンティティを「英語の文化」的アイデンティティをもって相対化し，同時にその「英語の文化」的アイデンティティさえも「多言語（非英語）文化」的アイデンティティによってさらに相対化しみる，といった多言語文化とのパラレルな「対話（「抗争と共振」）」の継続がその必要十分条件となっている[77]。日本の「英語文化」に対する

こうしたアイロニカルなアプローチは，「英語文化」的アイデンティティの脱構築に有効であるのみならず，「日本語文化」的アイデンティティを多言語文化的なものへと「越境」させる契機にもなり得るのである。

マルチメディアの急速な発展によって生産消費者（prosumer）となった日本の英語学習者は，英語（English/World Englishes）のみならず日本語と複数の言語をもって，トランスカルチャラル・コミュニケーション空間内の「安定（＝連帯）」と「不安定（＝自由）」の文化領域を自由に往来しながら，「英語文化」的アイデンティティの固定化の回避が実践できる時代となっている(78)。

おわりに

日本の「英語文化」に関する本稿の解釈も決して固定的なものではなく，論者が日本国内で現在置かれた特定の場所から見える風景の１つにすぎないものである。こうした議論はあくまでも自国の歴史文化社会的条件と個人の実存的な環境条件が交差する「場所」において成立しえるものであり，異なる「共同的状況」の中の異なる立場から眺めてみればまたそこには異なる様相を呈する性質をもっている。そのような議論の特性と限界を踏まえつつ，ここでは非英語圏日本の比較「英語文化」論に，ポピュラー・ジオポリティクスの視座を導入し，そのコンテクストの中で「英語文化」的アイデンティティをトランスカルチャラル・コミュニケーション上の問題として解釈する枠組みの設定（reframing）を行った。その上で日本の「英語文化」空間内の「共同的状況」における文化的アイデンティティ交渉の「場所」と「位置取り」問題に対する批判的検討を行うことができた。この一連の作業を通じて，非英語圏日本の「英語文化」とポピュラー・ジオポリティクスによって流動化し続けるオーディエンス側の「位置取り」の動態も認識し，「英語文化」的アイデンティティの歪みの「網目の組み換え」をおこなう「自由」が要請されていることを確認した。最後に，トランスカルチャラル・コミュニケーションの空間において私的な立場から言語選択の「自由」を求めつつも，不自然で場違いな英語使用によって他者に苦痛を与えるリスクを最小限に抑えながら文化的に「連帯」可能な「場所」へと移動していく重要性についても理解を深めることができたように思う。リベラル・アイロニストの立場から見たこのような暫定的な解釈も常に新しいボキャブラリーをもって批判的に検討し続けていくことが求められている。

《注》

（１） エスノメソドロジーの視点については『エスノメソドロジー』（ガーフィンケル，1987 年）を参照。「『エスノメソドロジーという“学問”をする』のではない。『エスノメソドロジー

という“現実”を生きる』ことなのだ。（中略）「あたりまえ」の領域に“あたりまえでなく”降り立ち，『なぜ，どのようにして“あたりまえ”が“あたりまえ”として気づかないかたちで人々が行為しているのか』を克明に記述し，『あたりまえ』の領域にはらまれたさまざまな問題を摘出し，それを解体・再編していく遅々とした営みが『エスノメソドロジーという“現実”を生きること』だ。」（1987：298–299 頁）また，民俗学の視点については『民俗学の思考法 ──「いま・ここ」の日常と文化を捉える』（岩本通弥［他］，2021 年）を参照。「民俗学の仕事の一つは『ヴァナキュラーな日常』の生成過程を観察することである」（21 頁）。中村敬（2004；1999）は英語社会論の〈空洞化理論・戦略〉において日常の「英語問題」の所在を明らかにする有効な方法として上記のアプローチを挙げている。

（2） 非英語圏日本の「英語文化」に関するディスクールの多くが〈英語–界〉の専門（professionals）のよって生成されてきた。筆者は前稿（小林 2021）においてこの専門家集団（cohorts）を「英語文化パワーエリート（the EIGO-Culture Power Elites＝ECPE」と概念化し，彼らの文化資本である「英語文化」の権力とその〈象徴システム〉の構造と動態について論じておいた。

（3） Illich（1971：80）“The teacher is jealous of the textbook he defines as his professional implement.…School removes things from everyday use by labeling them educational tools.”（「教師は教科書を自らの職業上の重要な道具として位置付けている。［中略］学校ではそれを教育のための道具と呼ぶことによって，物事を日常的用途の文脈から切り離してしまうのである。」―訳は筆者）

（4） 非英語圏日本における EIGO と ENGLISH の概念は異なっている。詳細については小林（2020）を参照のこと。

（5） カルチャラル・スタティーズでいうところの「切り離され，また繋がれる」という「分節＝接合」（articulation）という概念で捉えてみることが重要である。なぜなら，後述するようにアーティキュレーション概念自体が日本の権威主義的な「英語文化」的アイデンティティ形成と密接に関っているからである。

（6） 佐藤成基（2010：93–95 頁）は「文化社会学の課題 ── 文化の社会理論に向けて ──」の中で「文化社会学」と「文化の社会学」との方法論上の差異について語り，前者を「社会的現実の意味構成・意味秩序」を全般的に扱うことばとして用いている。本稿の議論では同様の「分節＝接合」の思考法を用いて，「英語文化」と「英語の文化」の概念を区別し，前者を日本の英語界の特殊な「英語文化」の「意味構成・意味秩序」にかかわる局面全般を析出するための概念として用いている。

（7） 吉見俊哉『アフター・カルチャラル・スタディーズ』2019 年，青土社

（8） 日本では「文化的アイデンティティ」に関する研究は 1990 年代末から 2000 年代初頭にかけて多く行われている。

（9） 西川長夫『地球時代の民族＝文化理論 ── 脱「国民文化」のために』（1995：140–141 頁）

（10） この議論の争点については青木保（1999）「『日本文化』論の変容–戦後日本の文化とアイデンティティ」と小田亮（1997；1999）「文化相対主義を再構築する」「文化の本質主義と構築主義を越えて」に詳しい。

（11） 馬渕仁「英語教育にみられる文化の捉え方」2008 年，4–12 頁。

（12） 小林，2021 年。注（2）を参照のこと。

（13） 同論文

（14） 武本（1993：223 頁）「外国語学習の生涯にわたる思考形式や生き方をも左右するものであること［中略］単なる英語運用力の習得という次元をはるかに超えて，本来，人間教育そのものであるからである。」

（15） 長谷川典子「『文化本質主義』をめぐる一考察 ── 異文化コミュニケーション研究の視点

から ──」2017 年

(16) 本稿の「英語の文化」とは「トランス言語的展開（translinguistic turn)」によって生み出されたリキッド化（流動化）した複数形の英語によって多元化された英語文化のことを意味している。この論点については Lee and Dovchin（2019）と Dovchin（2020：83–90）を参照。

(17) 文化的アイデンティティ論の文脈における「縫合」概念についてはスチュアート・ホール＋ポール・ドゥ・ゲイの『カルチャラル・アイデンティティの諸問題 ── 誰がアイデンティティを必要とするのか？』（2001 年，15–16 頁）を参照。

(18) 現時点（2021）において海外のイングリッシュスタディーズ研究者と日本の「英語」研究者による共同研究の最新文献となるのが Baker and Ishikawa（2021）*Transcultural Communication Through Global Englishes* であろう。そこでは「世界の英語」論やカルチャラルスタディーズなどのその他の議論の争点がトランスカルチャラル・コミュニケーション論の中で丁寧に整理されている。

(19) 梶谷真司「文化的アイデンティティとグローバリゼーション」2004 年，130–133 頁，144 頁。

(20) 梶谷，前掲論文，126 頁：144–145 頁（傍点原文）

(21) 梶谷，同論文，130–134 頁

(22) ブルデューの社会理論と英語社会論との連関性については前稿（小林 2021）を参照のこと。

(23) 浅井亜紀子『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』2006 年，171–194 頁

(24) 前掲論文，193–194 頁

(25) 「位置取り（positioning)」とはカルチャラルスタディーズのパイオニアのスチュワート・ホールが用いた概念。そのポジションの取り方の図式は①支配/服従 ②折衝・妥協 ③対抗という 3 つの軸に整理することができる（正村俊之［他］『コミュニケーション理論の再構築 ── 身体・メディア・情報空間』2012 年，13–14 頁

(26) 「教室」という特殊な学習の場に働く権力については Ivan Illich の *Deschooling Society*（1971）〔『脱学校の社会』1977 年〕と Hywel Coleman（ed.）*Society and the Language Classroom*（1996）を参照。

(27) 小松田儀貞「ブルデュー社会学における「場」概念についての一考察」（2004 年）を参照。

(28) セルトー，ミシェル・ド『文化の政治学』1990 年，岩波書店，156–157 頁。本書はブランスの五月革命（1968〜1973）に書かれ 1980 年に出版された日本語訳である。

(29) リチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・リベラリズム』（2000 年，7–8 頁）；Richard, Rorty (1989) *Contingency, Irony, Solidarity.* Cambridge University Press. p. xvi.

(30) 小林，前掲論文

(31) 毛利嘉孝『ストリートの思想 ── 転換期としての 1990 年代』（2009 年）を参照。

(32) 「英語の文化」が ECPE の管理化に置かれ，商品化されるとき，それは「英語文化」という複合概念に仕立て上げられていることが多い。そこにはおのずと排除・差別や権力・抵抗という地政学的な力学が働き始めることになる。

(33) 佐藤成基，前掲論文，93–102 頁。文化研究における「意味理解と意味的秩序構成」については文化社会学（cultural sociology）の方法論的枠組みを参照。

(34) 日本文化のトランスカルチャラルな動きについては『越境する文化・コンテンツ・想像力 ── トランスナショナル化するポピュラーカルチャー』（高馬京子・松本健太郎，2018 年）と『トランスナショナル・ジャパン ── ポピュラーカルチャーがアジアをひらく』（岩渕功一，2016 年）を参照。

(35) マクルーハン，カーペンター『マクルーハン理論 ── 電子メディアの可能性』2003 年，

150 頁

(36) オーディエンスのアイデンティティ形成の視点については池上賢（2014）を参照。

(37) セルトー，1990 年，261–262 頁

(38) 同書同頁

(39) 大学受験という高等教育の序列・選抜構造中で単位化され，教養化され，資格試験化され，その「取り扱い」には専門家集団からの承認が不可欠な「高級商品」となっているという意味である。

(40) ハイカルチャーとポピュラーカルチャーは二項対立的なものではなく，ポピュラーカルチャーもハイカルチャー化することもあれば，その反対も起こり得るのが文化のダイナミズムである。そのダイナミックで相補完的な関係性については小藪明生・山田真茂留の「文化的雑食性の実相 ── ハイ＝ポピュラー間分節の稀薄化 ──」（2013）を参照。

(41) この文脈でインターカルチャル/トランスカルチャラル・コミュニケーション international communication と述べた理由は，「日本文化」の中に醸成されたている「英語文化」と「英語の文化」との間のコミュニケーション論という意味と前者から後者への移動（越境）という意味合いを含んでいるからである。intercultural communication と transcultural communication の概念の差異については Baker, and Ishikawa（2021：75–97）に詳しい。

(42) フィスク 1996 年，76–124 頁

(43) 服部桂『マクルーハンはメッセージ-メディアとテクノロジーの未来はどこに向かうのか？』（2018）。今この時点で半世紀以上も前に 21 世紀のマルチメディアのテクノロジーの進化によって「グローバル・ヴィリッジ」を予見したマクルーハンの言説を，現在の英語界内の agent や player のアイデンティティ諸問題にも適用することは非常に有益であろう。また，アルビン・トフラーは『第三の波』（1980）で生産者と消費者が一体化したプロシューマー（生産消費者）の出現を予言していたが，まさにそれが現実化した社会となっている。

(44) フィスク 1998 年，18 頁

(45) 同書：10 頁

(46) 同書同頁

(47) 同書，8 頁

(48) 同書，15–16 頁

(49) 同書，9 頁

(50) Dittmer and Boss（2019: xix）

(51) ウォーラースタイン，バリバール『人種・国民・階級 ── 揺らぐアイデンティティ』（1997）。これらの問題を現在の日本の社会問題の文脈に節合させながら再考している文献に，『壊れゆく資本主義をどう生きるか ── 人種・国民・階級 2.0』（若森章孝・植村邦彦，2017 年，唯学書房）がある。本稿のテーマの問題意識と視点も若松・植村らに共有するものである。

(52) Strinati, Dominic（1995: 220–221）*An Introduction to Theories of Popular Culture.*

(53) Dimmer and Bos, op. cit., xix

(54) Illich（1977: 38–39）

(55) トフラー，1980 年，265–288 頁

(56) Baker and Ishikawa（2021: 84–86）

(57) Pennycook（2007: 132）

(58) Baker and Ishikawa, loc. cit.

(59) 「これはフランスのすぐれた地理学者オーギュスタイン・ベルクが，ハイデガーの考え方を導入しつつ論じていることである。天安門広場「広場は「事件」の後，空間から場所へと変質したのである」（宇波彰による解説：ホール，2001 年 332–333 頁）

(60)　ハイカルチャー領域（非日常次元）の「高級商品」（それに対抗する実業界では「専門道具」）のメタファーでもって，所有する Can（能力）の問題として認識されている。だが，そもそも外国語とは日常の「共同的状況」の必要度のレベルに応じて「使うか使わないか」または「必要に応じて使っている人か使っていない人か」という生活の次元のプラグマティックな問題にすぎないものである。非英語圏においては英語の能力には市場の原理において付加価値が付きやすい。その付加価値に比例するように「英語文化的アイデンティティ」も高級化することになっている。しかし，それは本来日常次元の「日用品」のメタファーでもってシンプルに Do（行動）の問題として語られるべきものである。「高級品」として扱われてきた「英語文化」も「日常品」である「英語の文化」もそれは同じものにすぎない。非英語圏日本の英語界の特殊な「英語文化」において「高級商品」として扱われている「英語文化」も母国語と同じレベルの「日用品」として扱えるポピュラーカルチャーの中の本来の「英語の文化」に場所に戻すことが必要となる。

(61)　Baker and Ishikawa（2021: 64; 148; 317）; Jenkin（2015）

(62)　ibid., 2021: xii; 64, 247–268, 270–288

(63)　loc. cit.

(64)　「ただ乗り（freeriding/free rider）」の概念を援用しながらグローバル・イングリッシュの「位置取り」戦略を歴史的・政治経済的な視座からを論じた議論は O'Regan（2021）に詳しい。

(65)　大賀祐樹，2012 年，『リチャード・ローティ ── リベラル・アイロニストの思想』，154 頁

(66)　英訳は筆者。

(67)　大賀，前掲書，152–153 頁

(68)　同書，126–194 頁

(69)　小林，2020 年，11–13 頁

(70)　仲正昌樹，2007 年，191 頁。終極の語彙とは「人が自らの行為や信念, 生活を正当化するうえでもっとも究極的と考える語彙」のことを意味する。

(71)　リチャード・ローティ『連帯と自由の哲学–二元論の幻想を超えて』（1988 年，岩波書店）を参照。

(72)　現代の「リキッド化（液状化）」する世界では，「文化」の役割も，国民国家システム内における人間教育のためのハイカルチャーから，グローバルな経済システムの中で消費し続けるポピュラーカルチャーへと変容してしまっている。この文脈における「文化的アイデンティ」の議論の詳細については Bauman（2011）を参照。

(73)　「ポストモダンの人生戦略の中心となるのは，アイデンティティの形成ではなく，アイデンティティの固定化の回避である。」（ボーマン 2001：48 頁）

(74)　注（2）を参照のこと。

(75)　この視点から展開された詳細な議論については，『節英のすすめ ── 脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ！』（木村護郎クリストフ，2016 年，112–274 頁）を参照のこと。

(76)　言語身体的感覚については Di Paolo, Ezequiel A. の *Linguistic Bodies: The Continuity between Life and Language.*（2018）を参照。

(77)　「アイデンティティは常に関係的で不完全なものであり，進行中のものなのである。いかなるアイデンティティも，何か他の項と自らの違い，自らによる何か他の項の否定に依拠しており，それはちょうど後者のアイデンティティが，前者との違い，前者の否定に依拠しているのと同じことである。」［中略］アイデンティティは常に，差異を生じさせることによってアイデンティティを定義する諸関係の，一時的で不安定な効果なのである。」（グロスバーグ「アイデンティティとカルチャラルスタディーズ ── それがすべてか？」2001 年，155 頁）

(78)　これはまさに中村敬の英語社会論の「対抗・空洞化」理論/戦略ですでに語られていることでもある（2004 年，69–70 頁）。中村は現在から 40 年前に，英語界の中にあっていちはやくポピュラーカルチャーの領域に接近し，それまではハイカルチャーから排除されていた「英語の文化」のエトス（二律背反のナンセンスやアイロニー）の導入の必要性を説いている。我々は，現在の非英語圏日本の中の「英語社会」の内属的共同状況（「場所」）に身をおきながらも，時には英語界のハイカルチャー領域の「英語文化」を突き放し（「対抗理論/戦略」），また時にはポピュラーカルチャー領域の「英語の文化」をもって自国の「英語文化」を客体化しながら，その循環的なネットワークの中で「世界の大言語」の「英語の文化」と深く付き合っていく（「空洞化/戦略」）ことでそれを「飼い馴らしてしまう」しかないことになる。その意味で，中村自身は非英語圏日本の英語界のジオポリティクスの中にあってまさにリベラル・アイロニストの「位置取り」戦略を実践していたように思う。

引用・参考文献

青木保（1999）『「日本文化」論の変容 ── 戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論新社

浅井亜紀子（2006）『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』ミネルヴァ書房

池上賢（2014）「メディア経験とオーディエンス・アイデンティティ：語り・パフォーマンス・エスノメソドロジー」『マス・コミュニケーション研究』84, 109–127

岩渕功一（2016）『トランスナショナル・ジャパン ── ポピュラーカルチャーがアジアをひらく』岩波書店

岩本通弥［他］（2021）『民俗学の思考法 ──「いま・ここ」の日常と文化を捉える』慶応義塾大学出版会

ウォーラースタイン，イマニュエル/バリバール，エティエンヌ（1997）『人種・国民・階級 ── 揺らぐアイデンティティ』大村書店

大賀祐樹（2012）『リチャード・ローティ ── リベラル・アイロニストの思想』藤原書店

梶谷真司（2004）『文化的アイデンティティとグローバリゼーション』帝京国際文化，第 17 号，121–152

小田亮（1997）「文化相対主義を再構築する」『民族學研究』62 (2)，184–204，日本文化人類学会

――――（1999）「文化の本質主義と構築主義を越えて」成城大学文芸学部，20 巻，111–173

ガーフィンケル，ハロルド（1987）『エスノメソドロジー』（山田富秋・好井裕明＋山崎敬一監訳）せりか書房

木村護郎クリストフ（2016）『節英のすすめ ── 脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ！』萬書房

グロスバーグ，ローレンス（2001）「アイデンティティとカルチャラルスタディーズ ── それがすべてか？」『カルチャラル・アイデンティティの諸問題』（ホール＋ゲイ，2001 年，151–186）

小林敏宏（2020）「非英語圏日本の言語空間における〈英語〉概念の『特殊性』について」拓殖大学人文科学研究所『人文・自然・人間科学研究』(44)，1–30

――――（2021）「グローバル イングリッシュと〈英語界〉の象徴システムの構造と動態について ── 非英語圏日本の英語社会論の立場から ──」拓殖大学人文科学研究所『人文・自然・人間科学研究』(47)，37–69

小松田儀貞（2004）「ブルデュー社会学における「場」概念についての一考察」秋田県立大学総合科学研究彙報（5), 77–83

小藪明生・山田真茂留（2013）「文化的雑食性の実相 ── ハイ＝ポピュラー間分節の稀薄化 ──」

社会学評論，63 (4)，536–551
高馬京子・松本健太郎（2018）『越境する文化・コンテンツ・想像力 ── トランスナショナル化するポピュラーカルチャー』ナカニシヤ出版
佐藤成基（2010）「文化社会学の課題 ── 社会の文化理論にむけて ──」『社会志林』法政大学社会学部学会，56 巻，4 号，93–126
鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店
セルトー，ミシェル・ド（1990）『文化の政治学』岩波書店
武本昌三（1993）『英語教育のなかの比較文化論』鷹書房弓プレス
唐須教光（1988）『文化の言語学』勁草書房
トフラー，アルビン（1980）『第三の波』日本放送出版協会
仲正昌樹［他］（2007）『現代思想入門』PHP 研究所
中村敬（1980）『私説英語教育論』研究社
――――（2004）『なぜ「英語」が問題なのか？ ── 英語の政治・社会論』三元社
西川長夫（1995）『地球時代の民族＝文化理論 ── 脱「国民文化」のために』新曜社
長谷川典子（2017）「『文化本質主義』をめぐる一考察 ── 異文化コミュニケーション研究の視点から ──」北星論集，第 54 巻，第 2 号
服部桂（2018）『マクルーハンはメッセージ ── メディアとテクノロジーの未来はどこに向かうのか？』イースト・プレス
フィスク，ジョン（1996）『テレビジョンカルチャー ── ポピュラー文化の政治学』梓出出版
――――――（1998）『抵抗の快楽 ── ポピュラーカルチャーの記号論』世界思想社
ボーマン，ジグムント（2001）「巡礼者から旅行者へ，あるいはアイデンティティ小史」『カルチャラル・アイデンティティの諸問題』（ホール＋ゲイ，2001 年，37–67）
ホール，スチュアート＋ゲイ，ポール・ドゥ（2001）『カルチャラル・アイデンティティの諸問題 ── 誰がアイデンティティを必要とするのか？』大村書店
マクルーハン，M.＋カーペンター，E.（2003）『マクルーハン理論 ── 電子メディアの可能性』平凡社
正村俊之［他］（2012）『コミュニケーション理論の再構築 ── 身体・メディア・情報空間』勁草書房
馬渕仁（2008）「英語教育にみられる文化の捉え方」，大阪女学院大学紀要，第 4 号，4–12
毛利嘉孝（2009）『ストリートの思想：転換期としての 1990 年代』日本放送出版協会
吉見俊哉（2019）『アフター・カルチャル・スタディーズ』青土社
ローティ，リチャード（1988）『連帯と自由の哲学 ── 二元論の幻想を超えて』岩波書店
若森章孝・植村邦彦（2017）『壊れゆく資本主義をどう生きるか ── 人種・国民・階級 2.0』唯学書房
Baker, Will, and Ishikawa, Tomokazu (2021) *Transcultural Communication Through Global Englishes.* New York: Routledge.
Bauman, Zygmunt (2011) *Culture in a Liquid Modern World.* Cambridge: Polity.
Coleman, Hywel (ed.) *Society and the Language Classroom.* Cambridge: Cambridge University Press.（『リキッド化する世界の文化論』青土社，2014 年）
Di Paolo, Ezequiel A. (2018) *Linguistic Bodies: The Continuity between Life and Language.* Cambridge, MA: The MIT Press.
Dittmer, Jason and Bos, Daniel (2019) *Popular Culture, Geopolitics, and Identity.* New and London: Rowman & Littlefield Pub Inc.
Dovchin, Sender (2020) *Language, Social Media and Ideologies: Translingual Englishes, Facebook and Authenticities.* Cham: Springer.

Jenkin, J（2015）Reconsidering English and multilingualism in English as a Lingua Franca. Englishes in Practice, 2, 49–85. Doi:10.1515/eip-2015-0003.

Illich, Ivan（1971）*Deschooling Society*. London and New York: Marion Boyars.（『脱学校の社会』1977 年，東京創元社）

————（1977）*Disabling Professions*. New York and London: Marion Boyars.（『専門家時代の幻想』1984 年，新評論）

Lee, Jerry Won, and Dovchin, Sender（2019）*Translinguistics: Negotiating Innovation and Ordinariness*. New York: Routledge.

O'Regan, John P.（2021）*Global English and Political Economy*. London and New York: Routledge.

Pennycook, Alastair（2007）*Global Englishes and Transcultural Flows*. New York: Routledge.

Richard, Rorty（1989）*Contingency, Irony, Solidarity*. Cambridge: Cambridge University Press.（『偶然性・アイロニー・リベラリズム』岩波書店，2000 年）

Strinati, Dominic（1995）*An Introduction to Theories of Popular Culture*. New York: Routledge.

（原稿受付　2021 年 11 月 2 日）

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 80–94　　March 2022

英語体験学習が「コミュニケーション不安」に及ぼす影響

～東京都英語村（TGG）における調査から～

長　尾　素　子

The Influence of English Experiential Learning on Communication Apprehension:

A Comparative Study of TGG's Programs

Motoko NAGAO

要　旨

一般的に，英語に関して語彙力や文法力は高くても，話すのが苦手と感じている日本人は少なくない。コミュニケーションの際に感じる心理的バリアーの１つが「コミュニケーション不安（Communication Apprehension, 以下「CA」と表記）」であり，日本人が英語を不得意と感じるのは，知識が不足しているからではなく，CA が高いからではないだろうか。このような問題意識のもと，英語によるコミュニケーション能力の育成に CA を低下させる試みとして，体験型英語学習プログラム（以下「体験プログラム」と表記）に注目した。

東京都教育委員会が民間企業と共同で運営する東京都英語村 TOKYO GLOBAL GATEWAY（以下「TGG」と表記）における体験プログラムに参加した大学１年生（実験群）と参加しなかった同１年生（統制群）の CA を比較した。その結果，実験群の CA は有意に低かった。また，体験プログラムに参加する前の実験群と統制群の CA には有意な差がみられなかったことから，体験プログラムの効果があったことが推測される。

実験群の参加前と参加後の CA に有意差は見られなかったが，場面ごとの CA を精査すると，プレゼンテーションの場面における参加前後の差は顕著であった。この結果から，プレゼンテーションにおける CA に効果があったことが推測される。実験群の参加後におけるヒアリングからは，認知面と情動面で影響があったことが明らかになった。

キーワード：コミュニケーション不安，異文化，自己効力感，英語教育

1. はじめに

内閣府（2012）がまとめたグローバル人材に必要な要素の冒頭に挙げられているのが，外国人とやり取りをする道具としての「語学力・コミュニケーション能力」である。非

言語が重要な意味をもつ高コンテクストの日本において，言語を用いたコミュニケーションに不安を覚える日本人は珍しくない。 コミュニケーションの際に感じる心理的バリアーの 1 つが「コミュニケーション不安（Communication Apprehension, 以下「CA」と表記）」であり，日本人は他国と比べて CA が高く，外国語習得の障壁になっているという調査がある[(1)]。また，CA と「コミュニケーション能力（Communication Competence, 以下「CC」と表記）」 は負の相関関係にあり，CC を上げるためには，CA を低下させる必要があるのではないかと考えられる[(2)]。

一般的に，日本人は英語に関して語彙力や文法力は高くても，話すのが苦手と感じている。英語を不得意と感じるのは，知識が不足しているからではなく，CA が高いからではないだろうか。さらには，CA は大学生の退学率や成績とも関連性があるとされており，グローバル人材の育成や大学教育において，CA を低下させる試みは注目に値すると思われる[(3)]。

筆者は，大学教員であると同時に東京都英語村 TOKYO GLOBAL GATEWAY（以下「TGG」と表記）の運営に関わっている。TGG については後ほど詳述するが，小学生から社会人まで多くの来場者が TGG の施設とプログラム（以下「体験プログラム」と表記）を利用して外国人とのコミュニケーションを体験する。来館時には不安そうな表情を見せる児童，生徒，学生たちが，プログラムを体験し，会場を後にするときには笑顔になり，さらには自信に満ちた表情に変化するのを筆者は観察してきた。また，引率者のアンケートによると，教室ではおとなしい児童や英語が得意でない生徒が，教室とは異なる様子を見せることもしばしばあり，また，体験プログラムに参加前と後では明らかな行動変容があることに驚くという。

TGG における外国人とのコミュニケーションの体験は，たとえ数時間であっても，参加者の態度に明らかに変化を生じさせていることがわかる。それは，参加者のコミュニケーションに対する不安を低下させ，コミュニケーションに対する意識に変化を生じさせている何かがあるからではないだろうか。このような問題意識のもと，本稿では，体験プログラムは，参加者の CA にどのような影響を及ぼすのか，について明らかにすることを試みる。

2. 東京都英語村（TOKYO GLOBAL GATEWAY）（TGG）の体験型学習施設とプログラム

TGG は，東京都教育委員会が英語でコミュニケーションが図れるグローバル人材の育成を目指して，民間企業と共同し，2018 年 9 月に東京都江東区に開業した施設である。英語を共通語とし，外国人とコミュニケーションを体験する「英語体験学習」を実

践する場として，施設やプログラムが設計されている。機内，ホテル，レストランなどが再現され，海外にいるかのような雰囲気の「アトラクション・エリア」と，日本文化，ニュース報道，ものづくりなどを学ぶために用意された茶室，スタジオ，クラフト室などの「アクティブイマージョン・エリア」の二つのエリアから構成され，場面に応じたオーセンティックなコミュニケーションが展開される。8 人のグループに 1 人の「エージェント」と呼ばれる英語インストラクターがグループでのやり取りをファシリテートする。「アトラクション・エリア」では，海外で実際に起こり得るコミュニケーションを実践，また，「アクティブイマージョン・エリア」では，国際問題，企業分析，プログラミング，日本文化，演劇などを英語で学習する。

TGG で展開されるプログラムの多くは，CLIL メソッドがベースとなっている。CLIL とは，Content and Language Integrated Learning（内容言語統合型学習）の略であり，言語「を」学ぶのではなく，言語「で」内容を，または言語と内容を同時に学習するというアプローチである。例えば，SDGs の考え方や実践例などについて英語を使いながら，知識や気づきなどを深める，という学習方法である。

さらに，CLIL は「4 つの C」① Content（学習内容），② Communication（コミュニケーション），③ Cognition（気づき），④ Community/Culture（協働・異文化理解）を意識しながら，プログラムが進められる。内容の学習に加え，他者とのコミュニケーション能力を育成し，学習者の気づきを促すことも重要な目的である。

TGG では，このような学習方法に基づき，エージェントと参加者の間で双方向のコミュニケーションが展開される。しかしながら，コミュニケーション不安（CA）が一般的に高いとされる日本人にとって，体験プログラムに参加している間，参加者は大きな心理的負担を感じるのではないだろうか。プログラム開始直後に参加者が見せる緊張感は，CA に起因するかもしれない。また，体験プログラムが進むにつれ，参加者の CA にどのような変化が生じるのであろうか。「コミュニケーション不安」「経験学習モデル」に関する先行研究を整理し，説明を試みたい。

3.「コミュニケーション不安」と体験プログラム

人前でスピーチをするときや，見知らぬ人と会話をしなければならないときに，誰しも不安を感じることはあるだろう。これが，外国語で外国人とコミュニケーションをとる場合は，なおさらである。このような不安な気持ちを，McCroskey（1978）は，「コミュニケーション不安（CA）」と呼び，「実際の，あるいは想像上の対人コミュニケーションに関連した恐怖あるいは不安のレベル」と定義づけている。スピーチにおける不安から始まった CA の概念は，より広く，様々な対人コミュニケーションの場面で感じ

る不安に適用されるようになった。以来，McCroskey に続き，他の研究者によってもCA の研究が行われてきた。例えば，CA は大学入学後の中退率と成績に関連していることを明らかにした研究がある（McCroskey, Booth-Butterfield & Payne, 1989）。また，コミュニケーション能力（CC）と CA は，負の相関関係にあり，CA が高い大学生は CC が低いと指摘している研究もある（Rubin, Rubin and Jordan, 1997）。

日本人に目をむけると，Klopf（1984）の調査で，オーストラリア人，フィリピン人，韓国人，ミクロネシア人，中国人の中では，日本人が最も高い CA を示したという。また，調査対象者のうち，強度の CA の割合は，日本人が最も多かった。日本人の発話が他の国の人々と比較して少ないのは，文化的な側面もあるかもしれないが，CA が高いことに要因がある可能性も否めない。

外国語学習と CA の関係性については，Matsuoka（2008）は，CA の高さが学習効果を阻害しているのではないかと指摘する。つまり，効果的に外国語を習得するには，CA を低下させることが重要といえよう。日本人以外の外国人は，総じてブロークンな英語でも積極的に発話するが，豊富な語彙力や十分な文法力があっても，日本人がなかなか英語で発話できないのは，CA が原因だとも考えられる。

さらに，外国語学習の際に生じさせる不安として，Horowitz et al.（1986）は，「コミュニケーション不安」「テスト不安」「社会評価」の 3 つを挙げている。実際にコミュニケーションを行うときに感じる不安，テストを受ける際に感じる不安，指導者または仲間から受ける評価がそれに当たる。学校で英語を学習するということは，CA に加えてテストや評価を受けるといった側面も不安を増加させる要因となっている。

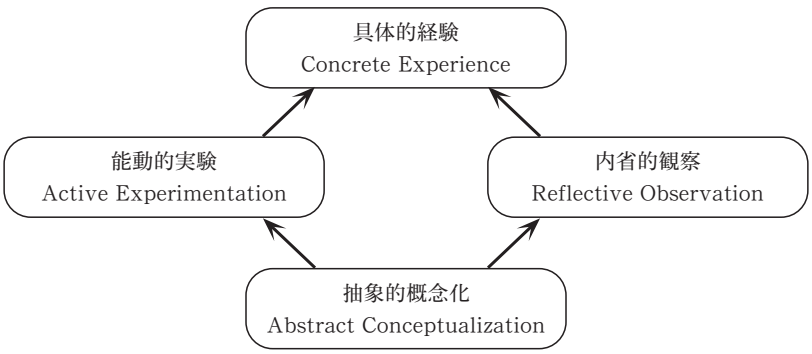
このように学校で生じる「不安」について，TGG ではどうであろうか。TGG ではテストは行われず，またエージェントからの評価的なフィードバックも行われない。TGG で展開される英語でのコミュニケーションは，文法や音声上の完璧さを求めない。常に，“That’s right!” “Great job!” など，発話にチャレンジできたことに対する肯定的な言葉がエージェントから参加者にフィードバックされるのである。Maclyntyre & McDonald（1998）は，肯定的フィードバックは，CA を低下させ，発話を促す効果があると述べる。さらに，親しみやすい雰囲気，寄り添ってくれる指導者の存在，間違いは普通の学習プロセスであるといった指導者からのメッセージもまた，不安を低下させる働きがある（Brophy, 1996）。TGG の体験プログラムは，上記のようなコミュニケーションが展開されるよう訓練を受けたエージェントによってファシリテートされるため，コミュニケーションにおける不安度が低下されるのではないだろうか。これが，来場者が見せた表情の変化の要因と考えられる。

次に，TGG における体験プログラムは，どのような学習効果が想定されるか，「経験学習モデル」から説明を試みたい。

4. 経験学習モデルから見た体験プログラムの効果

経験学習モデルの提唱者としてよく知られているのは，コルブ（Kolb, 1984）であろう。コルブは，「学ぶというのは経験の変容をとおして，知識を構築していくプロセス」だと述べ，4つの段階，①具体的経験，②内省的観察，③抽象的概念化，④能動的実験を示している（図1）。コルブのモデルを体験プログラムに当てはめれば，①TGGでの外国人との出会い（具体的経験），②言いたいことがうまく言えなかったくやしい経験（内省的観察），③英語力がもっとあれば通じたかもしれないという思い（抽象的概念化），④英語力を身につけるために学校や家で勉強する（能動的実験），⑤ネイティブの先生や留学生に英語で積極的に話しかけてみる（具体的経験）というような行動変容を起こす可能性がある。⑤で最初の「具体的経験」に戻るが，その時の意識は，最初と異なり，経験への動機付けも英語力も一段階上のレベルに向かっているはずである。このように，体験プログラムに参加して外国人とコミュニケーションをとってみた，という最初の経験学習がきっかけとなって，学習者は螺旋的に4つの段階を繰り返しながら，学びを高めていくことになる。

図1　コルブの学習サイクル



大学生の経験学習の場として一般的なものは，インターンシップと留学であろう。学生は，インターンシップを通じて，職場体験する（具体的経験）ことで気づきを得て（内省的観察），職業に就くために必要な知識とスキルはどのようなものかを概念化するだろう（抽象的概念化）。そして，それらを体得しようと学習に向かう（能動的実験）。留学においては，語学力のみならず，日常的な異文化を「内省的観察」することになる。留学当初は日本とは異なる生活様式そのものに馴染みがなく，自信がない状態に陥るが，自分に何が不足しているのか，次に何をやればよいのか，と「抽象的概念化」することで，能動的な行動につながる。小西（2017）は，そのようなプロセスを経て，次第に

「自分にはできる」といった新たな自分の発見と自己効力感を得ると述べる。

また，小林（2017）は，留学はたとえ短期間であっても，英語学習へのモチベーションや態度に好ましい影響を与えるとしている。つまり，留学という経験学習は，認知レベル（例えば「新たな自分を発見」）と情動レベル（例えば「自己効力感」）に影響を及ぼしていると言えよう。そして，帰国後には，さらに高度な英語への取組や海外インターンシップに挑戦するなど，行動レベルでの変化が起きる。

以上から，経験学習は，認知と情動において変化をもたらし，結果的に行動変容につながることが予想される。TGG の体験プログラムは，海外にいるかのような環境で，実際の場面に近いやり取りがなされるようデザインされている。留学体験が認知レベルと情動レベルにも影響を及ぼし，さらには行動レベルにも変化を生じさせることから，TGG で体験プログラムに参加した学生たちも同様に，認知，情動，さらには行動に何等かの影響を受けるのではないだろうか。

5. 調査方法と結果

以上の観察と先行研究から次のリサーチクエスチョン（RQ1, RQ2）が導かれる。

RQ 1. 体験プログラムは，参加者の「コミュニケーション不安」に影響を及ぼすのではないか

RQ 2. 体験プログラムは，参加者の認知・情動・行動に影響を及ぼすのではないか

上記のリサーチクエスチョンを明らかにするために，次の仮説（H1, H2, H3）を設定した。

H1. TGG の体験プログラムに参加した学生は，参加する前と比較して参加後の「コミュニケーション不安」が低下する

H2. TGG の体験プログラムに参加した学生の方が参加しなかった学生より「コミュニケーション不安」は低い

H3. TGG の体験プログラムに参加した学生の認知・情動・行動になんらかの変化が生じる

仮説 1 と 2 を検証するために，McCRosky（1974）によって考案されたコミュニケーション不安を測るアセスメント Personal Report of Communication Apprehension（以降 PRCA 24 と呼ぶ）を用い，大学生の不安度を調査した。PRCA 24 は，「グループディスカッション」「ミーティング」「1 対 1 の会話」「プレゼンテーション」の 4 つ

の状況に関する不安度を尋ねる 24 項目からなる質問紙である。それぞれの項目については，1：「全くそう思わない」から 5：「とてもそう思う」の 5 件法となっている。PRCR 24 は，これまで繰り返し使用されており，信頼性は高い（笠原，2006）。本調査では，近藤・ヤン（1996）の翻訳による簡易版を使用した。また，「小グループの討論」を「グループディスカッション」，「集会」を「ミーティング」とするなど，一部大学生にわかりやすい表現に変更を加えた。

調査対象者は，新入生オリエンテーションの一環として TGG の体験プログラムに参加した大学 1 年生 144 名（実験群）と参加しなかった 1 年生 164 名（統制群）である。実験群グループは，約 1 週間のオリエンテーションプログラムのうち，1 日を TGG において，3 時間半の英語によるプログラムに参加した。統制群グループは，キャンパスで行われる約 1 週間のオリエンテーションプログラムにのみ参加した。実験群 144 名のうち，22 名については，参加して 2 週間後にヒアリングを行った。

まず，TGG に参加する予定の 1 年生 53 名について，TGG 体験プログラム参加前の CA を参加前日に PRCA 24 質問紙で測った。新入生オリエンテーション期間のスケジュールの関係から，参加予定 144 名の一部しか実施できなかった。さらに，53 名を含む 144 名に対し，TGG 参加後に CA を測り，比較した（Step 1）。日本人の CA を調査対象とするため，国籍で「日本」と示した回答のみ抽出し，結果的に，参加前の有効回答数は 53 名，参加後は 118 名となった。参加しなかった 164 名に対しても，同じ質問紙を用いて CA を測った。有効回答数は 146 名であった。そして，参加した 118 名と参加しなかった 146 名の CA を比較した（Step 2）。なお，参加する，しない，については，本人の希望ではなく，学科による方針であることを補足しておく。

さらに，参加した実験群と参加しなかった統制群の CA にもともと差があったかどうかについて比較した（Step 3）。実験群の 118 名のうち 22 名については，TGG に参加した 2 週間後に，外国人とコミュニケーションするイメージをテーマにグループディスカッションを行ってもらい，その結果についてヒアリングした（Step 4）。ヒアリングのポイントは，「体験プログラムに参加した前と後で，外国人とのコミュニケーションに関してどのようにイメージが変化したか」である。調査フローおよび回答者の詳細は，それぞれ図 2，表 1 のとおりである。

まず，正規性を確認するために Shapiro-Wilk 検定を行った。その結果，正規性が認められた。そこで，2 つの群を比較するために対応のない t 検定を実施した。仮説 1「TGG の体験プログラムに参加した学生は，参加する前と比較して参加後の「コミュニケーション不安」が低下する」については，実験群の参加前後の間に有意差は見られず，支持されなかった（表 2）。

図 2　調査フロー

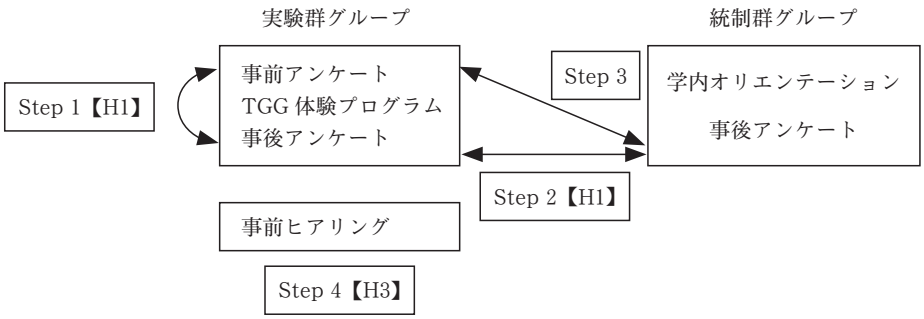


表 1　回答者（日本人学生）

	N	年齢（平均）	年齢（S.D）
実験グループ（参加前）	**53（100%）**	18.23 歳	0.47
性別 男性	30（56.6%）		
女性	23（43.4%）		
実験グループ（参加後）	**118（100%）**	18.21 歳	0.53
性別 男性	64（54.2%）		
女性	53（44.9%）		
統制グループ	**146（100%）**	18.18 歳	0.43
性別 男性	92（63.0%）		
女性	54（37.0%）		

表 2　実験群の TGG 前後の CA の変化

	N	MEAN	SD
実験グループ（参加前）	**53**	3.10	.721
実験グループ（参加後）	**118**	3.01	.756

$t(169) = 0.483,\ p > 0.05$

仮説 1 は支持されなかったが，どの場面についての不安度であるか，について詳細に見たところ，プレゼンテーションにおける不安度については，$p = .05$ に近い数字を示し，他の場面とは異なる傾向を示した（表 3）。

表 3　各場面における CA の変化

	参加前 平均値（S.D）	参加後 平均値（S.D）	*t* 値	自由度	有意確率
グループディスカッションにおける CA	2.93（1.09）	2.91（1.07）	.072	168	.943
ミーティングにおける CA	3.06（1.06）	2.98（1.01）	−.084	168	.933
会話における CA	2.96（1.13）	2.88（1.03）	.102	168	.919
プレゼンテーションにおける CA	3.20（1.21）	3.10（1.07）	−1.956	168	.052

次に，仮説 2「TGG の体験プログラムに参加した学生の方が参加しなかった学生より「コミュニケーション不安」は低い」について差があるのか，確認した。こちらも正規性が認められ，対応のない t 検定を実施したところ，実験群と統制群に有意差が見られ，本仮説は支持された（表 4）。

表 4　実験群と統制群の CA の比較

	N	MEAN	SD
実験群（参加後）	118	3.01	.756
統制群（不参加）	146	3.19	.639

$t(262) = 0.39,\ p < 0.05$

ここで，実験群と統制群では，参加前にそもそも CA に差があったのではないだろうか，と疑問がわく。そこで，実験群の参加前 53 名の CA と統制群 146 名の CA を比較してみたところ，両者の間に CA についての有意差は，どの場面においても見られなかった（表 5）。従って，実験群の学生も統制群の学生も，もともとは同じ程度の CA をもった学生たちであることがわかる。

表 5　実験群と統制群の各場面における CA（参加前）

	実験群 平均値（S.D）	統制群 平均値（S.D）	t 値	自由度	有意確率
グループディスカッションにおける CA	2.93（1.09）	2.90（1.10）	.752	197	.453
ミーティングにおける CA	3.06（1.06）	2.97（1.02）	.213	197	.832
会話における CA	2.96（1.13）	3.00（1.09）	1.108	197	.269
プレゼンテーションにおける CA	3.20（1.21）	3.25（1.20）	.968	197	.334

最後に仮説 3「TGG の体験プログラムに参加した学生の認知・情動になんらかの変化が生じる」を検証するために，実験群 22 名に「TGG の体験によって何か変化はあったか」について，「1-2-4-ALL」を用い，ヒアリングを行った。「1-2-4-ALL」というのは，まず，ひとりで質問に対する回答を考えたのち，ペアになって共有し，さらに 4 人一組で共有する。最後に全員の前で発表する，というディスカッションツールである。個人の回答から，ディスカッションしたことをすべて記録にし，提出してもらった。その記録された回答をいくつかのカテゴリーに分けた。その結果，認知および情動において，いくつかの変化を認めることができたが，行動についての言及はなく，行動面における変化については，確認することができなかった（表 6）。

表 6　実験群の認知，情動，行動における変化

認知・情動・行動	カテゴリー	ヒアリングの回答（22 名）
認　知	英語・コミュニケーションに関する理解	・英語がコミュニケーションツールだとわかった
		・単語でも通じることがわかった
	自己に関する理解	・自分の英語でも通じた
		・自分の英語のレベルがわかった
情　動	英語・コミュニケーションに対する気持ち	・英語の時間に発言することがこわくなくなった
		・外国人に話しかけることがこわくなくなった
	外国（人）に対する気持ち	・留学したくなった
		・海外に行きたくなった
		・留学生の気持ちがわかった
		・エージェントの出身国（バングラデシュ）に行きたくなった
行　動	—	—

6. 体験プログラムは参加者のコミュニケーション不安に影響を及ぼすのか

TGG における英語体験学習は，コミュニケーション不安の低下に影響を及ぼすのではないか，との疑問から，本研究はスタートした。調査結果からは，1 日の体験だけでは，不安度を低下させる効果は見られなかった。しかしながら，場面ごとに見ていくと，「グループディスカッションにおける不安」，「ミーティングにおける不安」，「会話における不安」，「プレゼンテーションにおける不安」のうち，「プレゼンテーションにおける不安」に変化が見られた。過去の研究でも，4 つの場面のうち，「プレゼンテーションにおける不安」が一般的に最も高い（(McCroskey, 1974, 笠原，2006)。たとえ，1 日の体験であったとしても，英語経験学習は，最も不安度が高くなる「人前で発表する」場面に効果的である可能性がある。TGG 体験プログラムでは，各セッションの最後に発表する機会が設けられている。これまで英語を使って人前で発表する機会がなかった，または少なかった学生たちが，人前で発表を経験することで，自分にもできた，という達成感が他の場面よりも得られたのではないだろうか。それによって，CA が低下し，これからもできそうな感覚が得られたと考えられる。

このように，達成感が次のパフォーマンスに影響を与える認知的要素を「自己効力感」（self-efficacy）と呼ぶ（Bandura, 1977）。Edwards（2021）は，英語学習者の「自己効力感」を上げるためには，「達成感（mastery of experience）」「追体験（vicarious experience）」「励まし（encouragement）」「不安度の軽減（reduced anxiety）」が重要であると述べる。TGG のエージェントは，常に肯定的なフィードバックを行い，励

まし，不安を軽減するようなフィードバックを行う。また，英語力が同等のメンバーとグループ分けされていることから，他者の発話を「自分にもできる」「自分も同じように間違えたかも」などと追体験した可能性もある。以上のように，体験プログラムに参加し，自己効力感が上がることによって，CA が低下した可能性を指摘したい。

次に，実験群が参加する前に測った CA と統制群の CA にはほとんど差異がなかった一方で，実験群が TGG に参加した後に測った CA と統制群の CA には有意差が見られた。これは，実験群の学生は，TGG に参加したことで，CA が低下した可能性を示す。仮説 1「TGG の体験プログラムに参加した学生は，参加する前と比較して参加後の「コミュニケーション不安」が低下する」では有意差が見られなかったことで，矛盾しているように思われる。が，実験群の一部の学生にしか，参加前の不安度を測ることができなかったため，有意差が出なかった可能性がある。仮説 1 は支持されなかったが，場面ごとに見ていくと，「プレゼンテーションにおける不安度」においては，変化が見られたことは指摘したとおりである。それらを合わせると，体験プログラムが CA の低下に影響を及ぼした可能性は十分にあると説明できるものである。

最後に，実験群の認知・情動・行動について変化があったか，について説明を試みたい。

異文化に出会ったときに起きる変化について，石井（2013）の示したモデルを参考にする。石井は，「認知」とは，文化に関する知識やものの見方，「情動」とは，異文化に接した際の感情，「行動」は関係性を築く際の実際的な行動と説明する。そして，この 3 つを異文化における重要な「コミュニケーション能力」であると述べる。これは，Spitzberg and Cupach（1984）が提唱した「コミュニケーション能力」の 3 つの構成要素，「知識」「動機」「技能」を異文化という状況に設定して当てはめたものである。本調査で示した大学生 22 名のヒアリングの回答内容を見ると，「認知」「情動」「行動」の 3 側面のうち，「認知」と「情動」の 2 つにおいて変化があったものの，「行動」については言及がなく，行動面の変化については確認することができなかった。つまり，1 日だけの体験プログラムでは，即効的な行動にまで影響を及ぼさないが，その前段階の認知と情動においては変化を生じさせる。「単語だけでも通じることがわかった」（認知）や「発言することがこわくなくなった」（情動）という変化が次の行動の変化につながる可能性は十分にある。実際の行動の変化に現れるまでタイムラグが生じるか，または，行動に変化を起こすためには，さらにハードルが上がり，別の刺激または要素が必要になるのかもしれない。しかしながら，体験プログラムが終了するころには，参加者がリラックスした明るい表情を見せるというのは，本人も意識していないレベルの行動の変化であったとも言えよう。

認知レベルの変化として，「自己理解」がある。「自分の英語でも通じた」「自分の英

語のレベルがわかった」である。「英語ができない」と思っていた自分から「英語ができる」自分へ，また自分の英語力を客観視および相対化する自分である。宮原（2006）は，「コミュニケーション能力」には，「適正な自己理解」が必要と述べる。体験プログラムでエージェントと英語で通じ合えた経験から「内省的観察」が起き，「英語が全然できないわけじゃないよね」といった「抽象的概念化」によって「適正な自己理解」への認知の修正がはかられたのではないだろうか。

この認知の修正は情動にも影響を及ぼすと考えられる。「意外と英語ができる」自分へと自己理解が修正されると，「コンプレックス」は「自信」へとつながる。さらには，次はもっとできるかもしれないといった将来のパフォーマンスへの予測「自己効力感」の向上にも結びつくかもしれない。言語へのコンプレックスは，“Inferiority Complex”とも呼ばれ，言語習得の際の障害となり得る。言語はパワーであり，言語の流暢さが権力関係を決定づける（津田，1990）。つまり，英語を使用している間は，ネイティブスピーカーは「先生」であり，ネイティブでない自分は「生徒」である。このような関係性を認知している間は，「間違いを指摘されるのではないか」「評価されるのではないか」といった心理的不安が働きやすい。しかしながら，ヒアリングから「こわくなくなった」「海外に行きたくなった」のように，コミュニケーションに対する不安感が軽減され，むしろ相手に対して関心をもつようになり，さらには「留学生の気持ちがわかった」など共感を示すようになったのは，情動の大きな変化である。TGG では，英語スピーカーを「先生」「インストラクター」とは呼ばず，「エージェント」と称する。「エージェント（Agent）」というのは，「仲介者」という対等な関係性を示す。参加者は，英語を話す「エージェント」を対等な関係性にある「個人」と見なし，どうすれば相手と分かり合えるのだろう，協働者としていかにタスクを達成できるのだろう，といった視点でコミュニケーションを体験していったのではないだろうか。

以上からわかることは，TGG の体験プログラムは，情動面に起きる CA に影響を及ぼす可能性があるということである。参加者は，プログラムの開始直後と終了時では，明らかな変化を見せる。その正体は，体験プログラムによって「認知」「情動」が刺激され，CA が低下したことによるものではないだろうか。

7. おわりに

本稿の目的は，TGG の体験プログラムはコミュニケーション不安に影響を及ぼすかについて明らかにすることであった。大学行事である新入生オリエンテーションの一環として TGG に参加する初めての機会だったこともあり，調査人数に偏りがあるなど，調査方法および結果に限界があったことは否めない。しかしながら，調査結果からは，

TGG の体験プログラムには，コミュニケーション不安を低下させる効果があると十分に推測できる。特に，不安度が一般的に高いとされる「プレゼンテーションの場面」での低下が期待される。すぐに 4 技能が上達したり，コミュニケーションが流暢になったりするものではないが，「認知」と「情動」において変化を生じさせるものであり，その結果として，積極的に 4 技能の向上に取り組んだり，コミュニケーションを図ろうとする態度に向かわせる可能性がある。

ただ，このコミュニケーション不安の低下は一時的なものなのか，もし，一時的なものであるとすれば，長期的，継続的に低下に結びつくような学習方法にはどのようなものがあるのか，明らかにする必要がある。また，アンケート調査によってコミュニケーション不安の低下が見られたとしても，実際のコミュニケーションの場面ではどうなのか，という疑問もわく。さらに，大学生のみならず，TGG には多くの小学生，中学生，高校生が参加している。大学生と同じ傾向を示すのか，といった点についても今後の課題として考えていきたい。

以上の課題を認識しつつ，日本人のコミュニケーション不安を低下させ，コミュニケーション能力を育成するための方法として，体験プログラムを活用する価値は十分にあると思われる。

《注》

（1） 日本人が他国と比較してコミュニケーション不安（CA）が高いというのは，Klopf（1984），Pryor 他（2005）の調査で明らかにされている。また，外国語を習得する際に感じる不安を “foreign language anxiety” と呼び，英語のみならず，一般的に外国語を学習するときに障壁となることがいくつかの先行研究で指摘されている（Chia, S. A., 2021 など）。日本人の CA が他国と比較して高いことからも，外国語運用において日本人が苦手意識を取り除くためには，不安度の低下が課題にになると考えられる。

（2） CA と CC の負の相関関係については，いくつかの調査で明らかになっている。ここでは，代表的なものとして，Rubin, Rubin and Jordan（1997）と Rachmi and Khotimah（2010）をあげておく。

（3） 例えば，McCroskey, Booth-Butterfield and Payne（1989）の調査では，CA が高い学生ほど中退率が高く，また成績も低い傾向があるとするが，Blume, Baldwin and Ryan（2012）の調査では，GPA と直接関連性が見られなかった。しかしながら，リーダーシップ，多様性への理解などには負の相関関係が見られるとし，CA とパフォーマンスとの関連性には引き続き研究が必要としている。

参考文献

浅井亜希子（1996）「異文化コミュニケーション教育としてのステレオタイプ研究」『駒沢女子短期大学研究紀要』第 29 号，111–120 頁.

石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人（2013）『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣選書.

笠原正秀（2006）「コミュニケーション不安と自己認識との関係性について」『椙山女学園大学論集』第 37 号，137–152 頁.

小林千穂（2017）「短期留学の外国語学習モチベーションへの効果」『天理大学学報』第 68 号第 2 号，1–19 頁.

近藤真治・ヤン・インリン（1996）『コミュニケーション不安の形成と治療』ナカシヤ出版.

竹内美由紀・横川絹恵（2000）「体験学習による学習効果」『香川県立医療短期大学紀要』第 2 巻，107–114 頁.

津田幸男（1990）『英語支配の構造』第三書館.

内閣府『グローバル人材育成戦略』https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf（2019 年 5 月 2 日参照）

宮原哲（2006）『入門コミュニケーション論』松柏社.

Blume, B. D., Baldwin, T. T., & Ryan, K. C. (2012) Communication apprehension: A barrier to students' leadership, adaptability, and multicultural appreciation. *Academy of Management Learning & Education, Vol. 12 (2),* https://journals.aom.org/doi/abs/10.5465/amle.2011.0127（2021 年 10 月 17 日参照）

Brophy, J. (1996) Working with perfectionist students. (Report No. 4) Urbana IL, ERIC Cleaning House on Elementary and Early Childhood (ERIC Document Reproduction Service NO. ED 40024).

Caffery, J. A. (1993) Independent effectiveness and unintended outcomes of cross-cultural orientation and training, In R. Michael Page (Ed.), *Education for the Intercultural Experience,* Yarmouth, Maine: Intercultural Press.

Chia, S. A. (2021). Overcoming Foreign Language Anxiety (FLA) (part 1)『城西短期大学紀要』第 38 巻 1 号，pp. 65–78.

Donovan, L A., & Maclyntyre, P. D. (2004) Age and sex differences in willingness to communicate, communication apprehension, and self-perceived competence. *Communication Research Reports, 21,* pp. 420–247.

Edwards, M. (2021) Developing Speaking Efficacy Beliefs in Japanese University Students with Repetitive Information Exchange Tasks.『実践女子大学短期大学部紀要』第 42 号，pp. 25–34.

Ericson, P. M. & Gardner, J. W. (1992) Two longitudinal studies of communication apprehension and its effects on college students' success. *Communication Quarterly, 40,* pp. 127–137.

Frymier, A. B. (1993) The relationships among communication apprehension, immediacy and motivation to study. *Communication Reports, 6,* pp. 8–17.

Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope J. (1986) Foreign language classroom anxiety. *Modern Language Journal, 70 (2),* pp. 125–132.

Klopf, D. W. (1984) Cross-cultural apprehension research: A summary of Pacific Basin studies. In J. A. Daly & J. C. McCroskey (Eds.), *Avoiding Communication: Shyness, Reticence, and Communication Apprehension.* Beverly Hills: Sage. pp. 157–169.

Kolb, D. (1984) Experiential learning: *experience as the source of learning and development,* Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall.

McCroskey, J. C. (1978) Validity of the PRCA as an index of oral communication apprehension. *Communication Monographs, 45,* pp. 192–203.

McCroskey, J. C., Booth-Butterfield, S, & Payne, S. K. (1989) The impact of communication apprehension on college student retention and success. *Communication Quarterly, 37*

(*2*), pp. 100–107.

MacIntyre, P. D., & MacDonald, J. R. (1998) Public speaking anxiety: Perceived competence and audience congeniality. *Communication Education, 47,* pp. 359–365.

Matsuoka, R. (2008) Communication apprehension among Japanese college students. *Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, 12* (*2*), pp. 37–48.

Pryor, B., Butler, J., & Boehringer, K. (2005) Communication apprehension and cultural context: A comparison of communication apprehension in Japanese and American students. *North American Journal of Psychology, Vol. 7* (*2*), pp. 247–252.

Rubin, R. B., Rubin, A. M., & Jordan, F. F. (1997) Effects of instruction on communication apprehension and communication competence. *Communication Education, 46* (*2*), pp. 104–114.

Spitzberg, B. H., & Cupach, W. (1984) *Interpersonal Communication Competence.* Beverly Hills: Sage Publications.

Wiemann, J. M. (1977) Explication and test of a model of communicative competence. *Human Communication Research, 3,* pp. 195–213.

McCroskey, J. C., Booth-Butterfield, S, & Payne, S. K. (1989) The impact of communication apprehension on college student retention and success. *Communication Quarterly, 37* (*2*), pp. 100–107.

MacIntyre, P. D., & MacDonald, J. R. (1998) Public speaking anxiety: Perceived competence and audience congeniality. *Communication Education, 47,* pp. 359–365.

Matsuoka, R. (2008) Communication apprehension among Japanese college students., *Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, 12* (*2*), pp. 37–48.

Rachmi, E. & Khotimah (2010) Reducing public communication apprehension by boosting self-confidence on communication competence. *Health Science Journal of Indonesia, Vo.1* (*1*), pp. 37–42.

Rubin, R. B., Rubin, A. M., & Jordan, F. F. (1997) Effects of instruction on communication apprehension and communication competence. *Communication Education, 46* (*2*), pp. 104–114.

Spitzberg, B. H., & Cupach, W. (1984) *Interpersonal communication competence.* Beverly Hills: Sage Publications.

Wiemann, J. M. (1977) Explication and test of a model of communicative competence. *Human Communication Research, 3,* pp. 195–213.

（原稿受付　2021 年 10 月 26 日）

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 95–125　　March 2022

英語の自動詞と他動詞の区別について
―― to screen を出発点として

渡　辺　　勉

On the Transitive and the Intransitive Verbs in English: "to screen" as an Example

Tsutomu WATANABE

Summary

This research looks into the background in which the following sentence is used: This funny, and harrowing, American-made cameo of Japan's domestic dolphin hunt has screened in Australian cinemas and in 14 countries. To the non-native speakers of English, the underlined part "has screened" appears to be a mistake for "has been screened," which is not the case. The rationality of employing the active form instead of the passive one in the above sentence is pursued in terms of Jespersen's (1949) idea of "activo-passive" and Lyons' (1968) idea of ergativity. The pros and cons are discussed about applying the idea of ergativity to the analysis of English.

キーワード：自動詞，他動詞，activo-passive, COBUILD (1987), ergative

目　次

1. 始めに：奇妙な自動詞
2. 伝統文法による説明
3. 理論言語学による説明
4. COBUILD（1987）における ergative verbs の分析
5. COBUILD の文法書における ergative verbs の記述
6. 結び

1.　始めに：奇妙な自動詞

大学用の英語教科書で(1)のような英文に出会った。

(1) This funny, and harrowing, American-made cameo of Japan's domestic dolphin hunt has screened in Australian cinemas and in 14 countries. (Andrew Darby, *The Sydney Morning Herald,*[1] March 10, 2010　下線は筆者による)

下線部は "has been screened" の誤りではないかという疑問がわいた。

screen を英和辞典で調べてみると，収録語数の多い辞書には自動詞用法が記述されている。『リーダーズ英和辞典』(第 3 版) は「上映される；映画に向く」という語義記述に続いて次のような例文を記載している。

(2) This play [actor] screens well [badly]. (リーダーズ英和辞典 2012: 2104)

例文(2)では，well, badly という副詞が付いているのが特徴的である。

『ジーニアス英和大辞典』(2001: 1935) では「〈劇・俳優が〉映画になる」という語義の前に，[様態の副詞を伴って] という記述があり，例文(2)の副詞は偶然使われているのではないということが推定できる。

『新英和大辞典』(第 6 版) には次のような例文が記載されている。

(3) The film screened from coast to coast. (新英和大辞典 2002: 2210)

例文(3)には様態の副詞はない。しかも screened は過去形で使われていて，例文(1)に対すると同じように "was screened" にする必要はないのかという疑問がわく。さらに，『新英和大辞典』(第 5 版) には(3)の例文は出ていない。1980 年と 2002 年の間に編集部で発見された用例であろうと推定できる。比較的新しい用法であるかもしれない。

例文(1)はオーストラリアの新聞が出典である。The Macquarie Dictionary (1991) を引いてみると，語義 21 に自動詞として "to be projected, or suitable for projection, on a screen" と定義されている。オーストラリア用法であるとか，様態の副詞をともなうなどの注記はない。

screen のこの自動詞用法がいつ頃生まれたのかを探るために OED on line を調べてみる。screen[2] を引いてみると，語義 15b で "To be shown at the cinema or on television, esp. at a particular time or place" と記載されている。用例を年代と使用地域を入れて引用する。

(4) The film will screen at the Brooklyn Apollo in the near future.

（1940 アメリカ）

⑸ The series will screen between 5.30 pm and 7 pm.（1986 ニュージーランド）

⑹ ‘Scandal’ (1950), the most rarely seen of all Kurosawa films, screens only at the Nuart as part of its Kurosawa Festival.（1986 アメリカ）

⑺ The second series of *Kath & Kim* will screen in the US from April.（2003 イギリス）

OED での初出年代は 1940 年であるが，残りの 3 例は 1986 年と 2003 年で比較的新しい用法であることが分かる。アメリカ 2 例，ニュージーランド 1 例，イギリス 1 例で，1 地域に限定された用法ではないと言える。

他動詞用法は，語義 15a で “To project on to, show, or broadcast on a screen; *spec.* to show at the cinema or on television” と記載されている。用例の初出は 1912 年である。用例は 5 個出ている。受動態が 4 件，能動態が 1 件である。それぞれ，典型的な例を 1 つずつ引用する。

⑻ ‘Tommy Atkins’, a stirring patriotic picture, will be screened at an early date.（1915 イギリス）

⑼ Beydler screened the film in a gallery to little interest.（2015 アメリカ）

辞書類，特に OED の情報により明らかになったことを図式的にまとめる。動詞 screen は「上映される，上映する」の語義で 3 つの用法が可能である。⒜主語＋screen（自動詞），⒝主語＋be screened（他動詞の受動態），⒞主語＋screen＋目的語（他動詞）の 3 つである。

小論の目的は，screen で例示された自動詞，他動詞の受動態，他動詞の 3 つの用法は，同じ動詞の中で併存するものなのか，意味や用法の違いはあるのかを明らかにする手がかりを探ることである。さらに，辞書の中で 1 つ 1 つの動詞を記述すれば十分なのか，あるいは文法理論で対応できる問題かどうかも明らかにしたい。

2. 伝統文法による説明

『リーダーズ英和辞典』と『ジーニアス英和大辞典』では自動詞用法の screen は「様態の副詞を伴う」と記述し，前者は次のような例文を示している。

⑽ ［＝⑵］This play［actor］screens well［badly］.

類似の記述が学習文法で扱われているかどうかを探ってみる。江川（1991: 186）は，peel, pour, read, roast, sell, wash, write の 7 語[3] を例文つきで取り上げている。sell の例文を引用する。

⑾ This book sells well.（江川 1991: 186）

江川は例文⑾について，「この sell は「（人が本を）売る」から「（本がよく）売れる」と自動詞化したもので，肯定文ではふつう様態を示す副詞を伴う」と説明している。さらに次のような例文を挙げてこの用法に制限があると指摘している。

⑿ The house sold yesterday.（江川 1991: 187）
⒀ The house was sold yesterday.（江川 1991: 187）

江川は⑿は⒀の意味では使えないと指摘している。
筆者も⑿はアステリスクかクエスチョンマークがつく文だろうと考えた。ところが，念のために Google 検索オプション[4] で調べてみると⒁のような例が見つかった。

⒁ Hi Barb. The house sold yesterday. I know, I know, the market's depressed. Anyway, I'm leaving the area. Some things I have to do. Things I couldn't do while you were here. Maybe you would have approved. Hell, I know you wouldn't have.（beat）I've tried everything and I can't seem to get their attention. But now they'll learn how it feels on the other side. Let's hope it elevates their thinking.（下線部は筆者）

Jonathan Hensleigh による THE ROCK[5] という映画の台本の一部である。1995 年 10 月 10 日に作成したもののようである。⒁の当該文は「昨日売れた家」とも解釈できるが，「その家は昨日売れた」という解釈は排除できない。BNC Online と Wordbanks Online で検索してみると “house sold” と “sold yesterday” という連鎖は見つからない。

なお，この種の動詞に副詞が伴わない例があり得ることを（江川 1991: 186）は次の例文で示している。

⒂ This sweater looks beautiful. Will it wash?（江川 1991: 186）

「様態の副詞を伴う自動詞」については，まだ調査が必要である。

綿貫（2008: 586–587）は「能動受動態」という概念を紹介している。能動受動態になれる動詞を 21 個挙げている。bake, clean, compare, cook, cut, eat, feel, handle, keep, lock, open, read, rent, reprint, ride, sell, show, shut, tear, wash, wear の 21 語[6] である。このリストには sell は入っている。残念ながら例文(1)で取り上げた screen は入っていない。

綿貫は能動受動態を次のように記述している。「能動態の形の動詞が受動態の意味を表すことがある。日本語では「売れる」「読める」などの意味になる動詞で，well, poorly などの副詞を伴うか，否定の形で用いられるのがふつうである。」5 つの例文には全て副詞が伴っている。能動受動態と受動態を比較して次のような例を挙げている。

⑯ This car handles well.（綿貫 2008: 586）

⑰ This car was handled well.（綿貫 2008: 586）

例文⑯は「車」自体に優れた操作性が備わっていることを示すと説明している。これに対して⑰は車を「運転する人」の操作する力がすぐれていること，あるいは扱いがよくて長持ちすることを示すと説明している。綿貫は同じ動詞の自動詞用法と他動詞用法の受動態の双方が可能な場合があるとして次のような例を挙げている。

⑱ The doors open at 8 : 00.（綿貫 2008: 587）

⑲ The doors are opened.（綿貫 2008: 587）

例文⑱について，綿貫は，だれかが開けるわけだが，特に行為者を示さずにこの形で用いられていると述べている。例文⑲については綿貫の記述はないが，受動態を使うことで行為者がいることを暗示しているということだろう。例文(1)の has screened は has been screened にも置き換えられそうだが，意味の違いはどうなるのかと考えるきっかけになる。

綿貫が用いている「能動受動態」という用語は，Jespersen（1949: 350）の activo-passive を市川（1953）が訳したものである。大塚（1970）でも使われている。ここでは，原典である Jespersen（1949）第 III 巻の pp. 347〜352 の記述を紹介する。

Jespersen は句動詞を含む 35 個の動詞が能動受動態として使われている例を例文と共に取り上げている。act, add up, beggar, brush off, button, compare, cook, cut, digest, draw, drink, eat, feel, form, hook, let, listen, pawn, photograph, read, rhyme, rub off, sell, smoke, stain, strike, tear, tell, translate, transmit,

transplant, wash, wear, write の 35 語である。例文(1)の screen は出ていない。

Jespersen（1949: 350）は能動受動態の特色は形態上は能動態の動詞に受動態の意味が与えられていることだと指摘している。この用法には制限があると Jespersen は説明しながら，例えば，“this house sold yesterday” を “was sold yesterday” の意味で使うことができないと述べている。これは江川（1991）でも採用されている説明である。ただし，例文⑭で指摘したように，さらに検討を要する問題もある。

Jespersen（1949: 351）は，さらに能動受動態が使われる条件を述べている。次のような例を挙げている。

⑳ His novels sell very well.（Jespersen 1949: 350）

例文⑳では「小説」がよく売れるのは小説そのものが「活動的（active）」だからで，本屋の活動はあまり考えられていないということである。つまり，能動受動態では「主語（subject）」の特徴を記述するので，説明のための形容詞や副詞を伴うことが多いと説明している。形容詞や副詞の代わりに，will が使われることがあるとして，次のような例を挙げている。

㉑ The figures will not add.（Jespersen 1949: 351）

この説明は例文⑮で取り上げたように江川（1991）も採用している。

例文(2)で取り上げたように，『リーダーズ英和辞典』と『ジーニアス英和大辞典』は自動詞用法の screen を能動受動態の用法と扱っているようである。どちらの英和辞典にも activo-passive は見出し語として掲載されている。残念ながら，個々の動詞の記述には「能動受動態の用法」のような説明はない。

Jespersen の記述により，能動受動態の用法ではないかと見分ける基準は 2 つあることが分かった。1 つめは説明のための形容詞や副詞を伴っていること，2 つめは助動詞 will を伴っていることである。しかし，例文(1)と(3)の screen を能動受動態の用法であると断定する根拠としては弱いように思われる。また，35 の動詞が取り上げられているが，この用法が他の動詞にも広がっていくような生産性をもっているのかどうかも不明である。

3. 理論言語学による説明

2 節では screen の自動詞用法を伝統文法に出てくる能動受動態という概念で説明す

る可能性について議論した。3 節では伝統文法の後に発展した理論言語学の中の考え方で screen の自動詞用法を説明する可能性を検討する。

能格言語と呼ばれる言語がある。下宮（1979: 102）にはバスク語の次のような例が出ている。

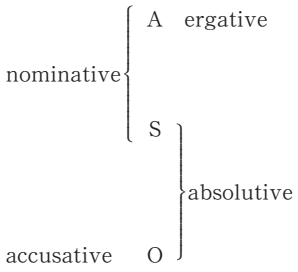
㉒	Ama	etorri	da（母が来た）［自動詞文］	
	母（主格）	来る	です（3 人称単数）	
㉓	Amak	ogi-a	erosi	du.［他動詞文］
	母（能格）	パン（主格）＋定冠詞	持つ（3 人称単数）（母がパンを買った）	

下宮（1979: 251）は，主格[7] には格語尾がなく，自動詞の主語，be 動詞の主語と補語，他動詞の目的語として用いられると述べている。例文㉒の ama，例文㉓の ogi- が主格に置かれている。さらに，下宮は能格の語尾は -k, -ek で他動詞の主語として用いられると述べている。例文㉓の amak が能格に置かれている。バスク語では能格の格語尾が存在する。形態論の領域の問題である。統語論の問題としては能格を取った名詞は他動詞文の主語になる。自動詞文の主語と他動詞文の目的語は主格に置かれる。バスク語では語尾はゼロである。

Dixon（1994: 6）は，普遍文法の立場から，世界の言語には全て intransitive subject（自動詞の主語：S と略称），transitive subject（他動詞の主語：A と略称），transitive object（他動詞の目的語：O と略称）の 3 つの文法関係があると言う。主格対格（nominative-accusative）の文法をもつ言語では S と A がひとまとまりになり，絶対格能格（absolutive-ergative）の文法を持つ言語では S と O がひとまとまりになると説明する。上の下宮（1979）の例では自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ格形，「主格」を取っている。後者の例である。

Dixon（1994: 9）は，この 2 種類の文法体系を下のように図示している。

図 1



Dixon（1994: 9）は主格対格の文法体系を持つ言語ではSとAが同じように扱われ，Oは別に扱われると説明している。次のようにラテン語で例示している。

㉔ domin-us veni-t. “the master comes”（Dixon 1994: 9）

㉕ domin-us serv-um audi-t “the master hears the slave”（Dixon 1994: 9）

㉔と㉕の -us は名詞の単数主格の語尾である。確かにSとAが文法上は同じように扱われている。㉕の -um は名詞の単数対格の語尾である。

Dixon（1994: 10）は絶対格能格の文法体系を持つ言語ではSとOが同じように扱われ，Aが別に扱われる様子をDyirbal（ジルバル語）で例示している。

㉖ ŋuma banaga-nʸu（Dixon 1994: 10）
father + ABS return-NONFUT
father（S） returned

㉗ ŋuma yabu-ŋgu bura-n（Dixon 1994: 10）
father + ABS mother-ERG see-NONFUT
mother（A） saw father（O）

㉖と㉗で ŋuma が使われている。㉖では自動詞の主語（S）に，㉗では他動詞の目的語（O）になっている。明示的な格語尾はないが絶対格（absolutive）を取っていると分析される。㉗の yabu-ŋgu は他動詞の主語（A）になっている。ŋgu は能格（ergative）の格語尾である。

なお，ラテン語でもジルバル語でも，格語尾で主語か目的語かの区別ができるので，上の㉕と㉗ではAとOを入れ替えても意味は通じる。しかし，次の英語の例では入れ替えで意味が変わってしまうとDixon（1994 : 10）は指摘する。

㉘ The master hears the slave.（Dixon 1994: 10）

㉙ The slave hears the master.（Dixon 1994: 10）

Dixon（1994: 11–12）は，英語ではSとAがひとまとまりになって統語的に機能している様子を次の例文で示している。

㉚ Father（S）returned.（Dixon 1994: 11）

㉛ Father（A）saw mother（O）.（Dixon 1994: 11）

(32) Father returned and saw mother.（Dixon 1994: 11）

(33) Father saw mother and returned.（Dixon 1994: 11–12）

(32)は(30)と(31)から father（A）を省略したものを and で結んで生まれたものである。(33)は(31)と(30)から father（S）を省略したものを and で結んで生まれたものである。S または A の役割を担っている主語名詞は片方を省略できるのである。

ところが同じ名詞でも，片方が主語（S）で，もう一方が目的語（O）の役割を担っている場合には省略ができないという。Dixon（1994: 12）は次のような例示をしている。

(34) Father（S）returned.（Dixon 1994: 12）

(35) Mother（A）saw father（O）.（Dixon 1994: 12）

(36) *Father returned and mother saw.（Dixon 1994: 12）
（“Father returned and mother saw him” の意味で）

(37) *Mother saw father and returned.（Dixon 1994: 12）
（“Mother saw father and he returned” の意味で）

英語では(36)で father（O）を削除したまま him を補わなければ意味不明である。(37)では father（S）を削除したまま he を補わなければ意図した意味は伝わらない。英語の世界では当たり前のことであろう。

しかしながらジルバル語では次のような文が可能だという。

(38)

ŋuma	banaga-nʸu	yabu-ŋgu	bura-n
father ＋ ABS	return-NONFUT	mother －ERG	see-NONFUT

father（S）returned and mother（A）saw him（O）（Dixon 1994: 12）

(38)では buran（“saw”）の目的語 ŋuma（“father”）が明示されていない。S の役割を果たす名詞 ŋuma と共通なので O の役割を果たす名詞の方が省略されたのである。つまり，(38)はジルバル語が S と O がひとまとまりになる（絶対格）能格言語であることを示す統語的証拠ということである。逆に英語は(34)〜(37)の証拠から（主格）対格言語であり，（絶対格）能格言語ではないということになる。

形態論的には英語はどちらのタイプの言語だろうか。Dixon（1994: 19）は次の 3 つの特徴に着目する。(a)英語の名詞には格変化はない。しかし，代名詞には主格（nominative）と斜角（oblique）の区別があり，主語になる名詞（S または A）は主格を取る。目的語（O または前置詞の目的語）は斜角を取る。(b)主語が S か A かに関

わらず動詞が 3 人称単数現在の場合には動詞に語尾 -s がつく。(c)S と A は動詞の前に来る。O は動詞の後に来る。これら 3 つは全て主格対格の文法体系を英語が持っている証拠だと Dixon は説明する。

Dixon は英語は統語論的にも形態論的にも能格言語ではないと分析している。しかし英語の分析に ergative という概念を持ち込む人々がいると批判する。Dixon は 3 種類の主張を批判している。

1 つめの批判は Lyons に向けられている。Lyons（1968: 352）は次のような例[8] に ergative を使っている。

(39) The stone moved.（Lyons 1968: 352）

(40) John moved the stone.（Lyons 1968: 352）

Lyons は(39)と(40)の 2 つの文の間の統語関係を ergative と呼ぶ。さらに自動詞の主語が他動詞の目的語になると Lyons は分析し，その他動詞の新しい主語を ergative subject（能格主語）[9] と呼ぶと提案している。Dixon は Lyons が主語の種類を表す記述のラベルに使っていると批判する。筆者も Lyons が「能格または使役変形（an ergative or causative transformation）」という表現を使っている部分に問題が内在していると考える。まず，使役（causative）という表現が使えることを自ら表明している。Dixon は触れていないが，Lyons は同じページで，動詞 move は自動詞文と他動詞文が使役性（causativity）によって結びついている例だと述べている。また，Lyons（1968: 359）では causative verbs の例として，move の他に begin, break, change, close, crack, develop, grow, open, split, start, stop, tear があると述べている。Lyons には ergative という用語は必須ではなさそうに思われる。

さらに「変形（transformation）」という概念を使っていることから，2 つの文(39)と(40)をありのままに観察しているのではなく，両者を「変形操作」によって結びつけようとしているということが分かる。

2 つめの批判は Burzio と Pesetsky に向けられている。

(41) John opened the window.（Dixon 1994: 20）

(42) The window opened.（Dixon 1994: 20）

Dixon によると Burzio と Pesetsky は(41)の window（O）と(42)の window（S）を “ergative set” と呼んでいるという。Dixon は S と O のまとまりを ergative と呼ぶのは不適切であり，敢えて言うならば absolutive だと批判している。

3 つめの批判は Halliday と Andersen に向けられている。

(43) Mary washed the woollens well. (Dixon 1994: 20)
(44) The woollens washed well. (Dixon 1994: 20)

Halliday[10] と Andersen[11] は(43)では washed の目的語 woollens (O) が(44)では washed の主語 woollens (S) になっていることを ergativity (能格性) と呼んでいる。それは不適切だと Dixon は批判する。

Dixon は次の(45)から 4 個の文を派生させることができると主張している。

(45) Mary washed the woollens with Softly in the Hoovermatic. (Dixon 1994: 20)
(46) Mary washed the woollens well (with Softly in the Hoovermatic).
(47) The woollens washed well (with Softly in the Hoovermatic).
(48) Softly washed the woollens well (in the Hoovermatic).
(49) The Hoovermatic washed the woollens well (with Softly).

毛織物衣類 (the woollens) の洗濯が上手く行った原因によって異なった文を使うことができると Dixon は主張する。(46)は Mary の働きがよかった場合，(47)は毛織物衣類の素材が優れていた場合，(48)は洗剤が優れていた場合，(49)は洗濯機の性能が優れていた場合というように使い分けられるというのである。Dixon はこれらの例を「主語でない名詞が主語に昇格すること (promotion of non-subject NP to subject)」と呼ぶことを提案している。確かに主語に昇格できるのは目的語だけではないということは分かる。しかし Dixon は統語論的に何が起きているのかという説明はしていない。

Dixon (1994: 18) は同じ動詞が自動詞または他動詞として使われる現象を 2 つのタイプに分けている。なお，例文中の S, A, O は筆者が追加した。

(50) He (S) is knitting. (Dixon 1994: 18)
(51) He (A) is knitting a jumper (O). (Dixon 1994: 18)
(52) The soldiers (S) marched. (Dixon 1994: 18)
(53) The officer (A) marched the soldiers (O). (Dixon 1994: 18)

Dixon は(50)と(51)で使われている動詞 knit を S＝A タイプと呼び，(52)と(53)で使われている動詞 march を S＝O タイプと呼ぶと提案している。Dixon は S＝A タイプの動詞の

例として，eat, help, know, speak, try, watch を挙げ，S＝O タイプの動詞の例として break, burst, cool, grow, hurry, move, open, twist, walk を挙げている。(1)の screen は例に挙がっていないが Dixon の分析に従えば，S＝O タイプの動詞だということになると思われる。なお，S＝O タイプの動詞 10 語は Jespersen（1949: 350）が能動受動態として使われる例に取り上げている 35 語とは一致しない。

これまでの議論から ergative という概念を使って自動詞文と他動詞文の関係を説明することは英語の分析には適切ではなさそうに思われる。英和辞典の記述を確認してみると，『ランダムハウス英和大辞典』（1994: 896），『ジーニアス英和大辞典』（2001: 738），『リーダーズ英和辞典』（2012: 784）では，ergative という用語が，バスク語，グルジア語，エスキモー語などに使われる場合と，Dixon が批判しているような意味で英語の記述に使われる場合とを区別して記述している。

ところが，ergative の概念を全面的に記述に取り入れた英和辞典が存在する。『ルミナス英和辞典』（2001）である。前書きで「同じ動詞が自動詞にも他動詞にも使われることが多いのが英語の特徴である」と述べ，能格動詞（ergative verb）と呼ばれると紹介している。特に重要な動詞には囲みをもうけて説明している。例えば，p. 307 では close[12] の見出しの発音記述に続いて語義記述の前に次のような囲みがある。

図 2

㊟ ㊐ の転換

㊟ 1. 閉じる，占める（to make（something）shut）

㊐ 2. 閉じる，閉まる（to become shut）

『ルミナス英和辞典』は本文中で能格動詞という用語を使っているわけではない。「他自の転換」という記述をしているだけである。巻末の文法解説の中に能格動詞という項目があり，boil と open を例に挙げて他動詞用法と自動詞用法を説明している。どの動詞に「他自の転換」の表示をつけているかはまだ未調査である。残念ながら例文(1)の screen には表示はない。『ルミナス英和辞典』が能格動詞という考え方を取り入れた理由は COBUILD（1987）が ergative verbs という記述を始めたからではないかと思われる。次の 4 節では COBUILD（1987）での記述の様子を詳細に検討する。

4. COBUILD（1987）における ergative verbs の分析

Collins Cobuild English Language Dictionary（以下 COBUILD（1987）と略称）は英語を学び使う英語を母語としない英語学習者のために編纂された辞書である。それ以前の英語辞書にはなかった特色がある。ergative verbs の記述を始めて取り入れた英語辞書である。その関連で小論と関係する 2 つの特色に言及する。

1 つ目の特色は，用例（examples）である。COBUILD（1987: xv）は “These examples are taken from actual texts wherever possible.” と述べている(13)。実際に使われた英語から用例を採用している。「実際に使われた英語」というのは決して古いものではない。COBUILD（1987: xxii-xxiv）の出典を見れば，おおよそ 1950 年代から 1980 年代の書籍からコーパスが作られたことが分かる。この辞書の出版時点で最新の用例を使ったと言ってよい。

2 つ目の特色は，Extra Column の採用である。COBUILD（1987: xvi）は，“The main aim of the Extra Column is to provide the more advanced students with structural information, extending the statements of the main entry. It gives a word class, and indicates the range of syntactic uses.” と述べている。上級の学習者のための文法情報の 1 つに V-ERG というものがある。ergative verbs（能格動詞）のことである。本文中（p. 1620）に V-ERG という見出しがある。説明と例文を以下に引用する。なお，説明の中の語例と例文を引用符で囲み，例文に(a)〜(i)を加えたのは筆者である。

> In this dictionary V-ERG is used in the grammar notes beside entries to describe verbs which are both transitive（V＋O）and intransitive（V）in the same meaning. They are described as V-ERG because there is restriction on the type of subject which can be used with the intransitive verb. With V-ERGS, the object of the transitive verb can be used as the subject of the intransitive verb. For example, “peas” is the object of the transitive verb “freeze” in (a) “You can freeze peas” and it is the subject of the intransitive verb in (b) “Peas freeze well.” Other examples are “open” and “boil.” EG (c) “We couldn’t open the window.” (d) “The window opened easily.” (e) “He had boiled the kettle.” (f) “The kettle boiled.” Some verbs are described as V OR V-ERG. Verbs described in this way have a transitive and intransitive use in the same way as the examples shown above and, in addition, they have an intransitive

use with a subject which is different from the object of the transitive verb. An example is “sail.” EG (g) “He sailed the boat towards Dover.” (h) “The boat sailed towards Dover.” (i) He sailed towards Dover.”

COBUILD（1987）は ergative verbs には厳しい制約が適用される場合と緩やかな制約が適用される場合があると主張している。例文(b)の主語 peas は例文(a)の動詞 freeze の目的語である。これは動詞 freeze へ対する制約（restriction）によって自動詞の主語には他動詞の目的語しかなれないからである。例文(h)の主語 boat は例文(g)の目的語である。これは動詞 sail に対する制約が働いているからである。しかし，動詞 sail に対する制約は動詞 freeze に対するほど強くない。その結果，例文(i)では動詞 sail は主語として boat ではなく he を取れるということになる。ただし，例文(g)の目的語を省略したのだという説明もできそうである。さらに，自動詞の例文の中に様態の副詞を伴っているものがあることに注意すべきである。(b)の well, (d)の easily である。(h)も様態の副詞ではないが，副詞句 towards Dover を伴っている。「様態の副詞を伴う」という特徴は能動受動態（activo-passive）と説明していたときから存在するものである。

COBUILD（1987）には CD-ROM 版がある[14]。検索機能[15] を使って GRAMMAR のウインドーに ergative と入力すると，例えば，次のような結果が表示される。

表 1

abate /əbeɪt/
abates, abating, abated
When something abates or when someone abates it, it becomes much less strong or widespread; a fairly formal word.
EXAMPLE: My terror abated a little…
The industry should use the best practicable methods to abate pollution.
GRAMMAR: ergative verb
SYNONYMS: lessen
ANTONYMS: increase
SUPERORDINATE: decrease

検索数合計は 739 件である。abate は検索 1 件目である。GRAMMAR の欄にある ergative verb という表示は COBUILD（1987）の V-ERG と V OR V-ERG とを包括した概念であると思われる。

『ジーニアス英和大辞典』は，ergative の記述の中で「この種の動詞は約 600 ある」と述べている。この記述では，はっきりした数字は不明で論拠も分からない。しかし，

COBUILD on CD-ROM のおかげで具体的な数を土台にして ergative verbs について論じることができる(16)。

COBUILD（1987）の記述は綿密である。英語の ergative verbs の総数は 739 件だと即断してはならない。COBUILD on CD-ROM で検索された ergative verbs には，quiet のような一語動詞と quiet down のような句動詞（動詞＋副詞）の両方が含まれている。その内訳であるが，手作業で数えてみると，739 件のうち，一語動詞の数は 640 件，句動詞の数は 99 件である。

収集した 739 件の ergative verbs の一覧は小論の末尾に付録として掲載されている。付録の一覧の中で，例えば，erode (1) erode (2) のように表記してある。この括弧付きの数字は筆者が便宜的に付けたものであるが，COBUILD（1987）の記述に基づいている。erode は 2 つの語義に分けて説明されている。語義 1 は “If rock or soil erodes or is eroded by the weather, sea, or wind, it cracks and breaks so that it is gradually destroyed.” である。語義 2 は “If someone’s power, authority, rights, etc. erode or are eroded, they are gradually destroyed or removed.” である。erode の場合には語義 1 と語義 2 それぞれに V-ERG の表示がある。turn は (1) から (7) までである。しかし turn の語義は 7 個ではない。COBUILD（1987）は turn に 39 個の語義を与えている。この中の語義 2, 3, 5, 9, 12, 13, 16 に V-ERG の表示がついている。小論ではこの 7 項目に (1) から (7) の通し番号をつけた。

この turn を例にして議論を進める。COBUILD（1987）は turn には 7 種類の ergative verb としての用法があると説明している。語義の細かい区分を捨象して 1 つの語彙素 turn は 1 つの ergative verb であるととらえて，739 項目を観察してみた。一語動詞の語彙素数は 491 件，句動詞の語彙素数は 81 件である。英語にはいくつの ergative verbs があるのかという質問に対する素朴な答えは 491 ということになる(17)。

さて，491 個の ergative verbs は慣用句（idiom）のように固定した表現の名称なのか，あるいは，次々と新しい動詞が ergative verbs になるような生産的な仕組み（productive process）なのだろうか。この疑問の答えを探るために，異なり語数 739 件の ergative verbs の用例を観察していて気になったことを検討する。

上に引用したとおり，COBUILD（1987: 1620）の記述によれば，V-ERG と表示された動詞は他動詞用法と自動詞用法の両方を持つ。それぞれの動詞に対して 2 つの用法が例示されていることが期待される。しかしながら，739 件の記述を見ていくと，どうも期待通りではないことが分かる。用例の示し方には 4 種類あることが分かった。つまり，⑴自動詞と他動詞の両方の用例を示している場合，⑵自動詞の用例のみを示している場合，⑶他動詞の用例のみを示している場合，⑷用例を示していない場合の 4 種類である。739 件を，この 4 つの基準に従って分類してみた。さらに自動詞と他動詞の両方の用例

を示している場合に，自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ名詞になっているかという基準も加えた。COBUILD（1987: 1620）では，例文(a) You can freeze peas と例文(b) Peas freeze well で peas は共通の名詞である。

調査結果は A4 で 28 ページに及ぶ大部なものになった。ここでは，open（1），open（2），open（3），open（4），advance を例にとって調査の様子を説明する。

表 2

	自動詞と他動詞	同じ名詞	自動詞	他動詞
open（1）	○	○ door		
open（2）			○	
open（3）				○
open（4）	○	×		
advance	×		×	×

open（1）に挙げられている用例は次の通りである。

⑸ She opened the door with her key.［他動詞］
⑸ The door opened.［自動詞］

他動詞用法と自動詞用法の両方が例示されている。共通の名詞 door が他動詞の目的語と自動詞の主語になっている。

open（2）に挙げられている用例は次の通りである。

⑸ He sat outside, waiting for the bar to open.［自動詞］
⑸ When does the library open?［自動詞］

2 つの用例は，どちらも自動詞用法のものである。しかも例文⑸は open の自動詞用法を例示しているが to 不定詞の意味上の主語で，独立文の主語ではない。

open（3）に挙げられている用例は次の通りである。

⑸ The allies opened a general offensive against them.［他動詞］

挙げられている用例は他動詞用法のものである。

open（4）に挙げられている用例は次の通りである。

⑸ It took three days to clear the snow and open the road.［他動詞］

⑹ The crowd opened and let us pass.［自動詞］

他動詞用法と自動詞用法の両方が例示されている。しかし，他動詞の目的語は road で，自動詞の主語は crowd と異なっている。

advance の場合は，“When prices or values advance, or when you advance them, they increase in amount” という定義文が与えられ，GRAMMAR で ergative verb と記述されているだけである。確かに定義文の前半で自動詞用法を例示し，後半で他動詞用法を示していると読むことは可能であるが，具体的な用例を示しているわけではない。

V-ERG と表示された動詞には他動詞用法と自動詞用法の両方の例文が COBUILD で提供されているだろうかという疑問に答えるために，739 件の ergative verbs を表 2 で示した基準に従って分類した。一語動詞と句動詞を分けて分類すると，以下の(A)から(H)のように 8 種類に分かれた。なお全ての語例はこの 8 区分に分けて末尾に付録として掲載されている。

(A) 自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞：407 語
(B) 自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている句動詞：47 語
(C) 他動詞の例文のみが掲載されている一語動詞：109 語
(D) 他動詞の例文のみが掲載されている句動詞：22 語
(E) 自動詞の例文のみが掲載されている一語動詞：104 語
(F) 自動詞の例文のみが掲載されている句動詞：25 語
(G) 例文が掲載されていない一語動詞：21 語
(H) 例文が掲載されていない句動詞：4 語

自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている割合であるが，ergative verbs 全体で見た場合は 739 語中 454 語で 61.4％を占める。一語動詞と句動詞を分けて考えてみる。一語動詞の場合は 641 語中 407 語で 63.5％を占める。句動詞の場合は 98 語中 47 語で 48.0％を占める。句動詞よりも一語動詞の方が自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている割合が高いことが分かる。しかしながら，一語動詞の 4 割近くでは片方の例文しか掲載されていないか，あるいは全く例文が出ていないというのは意外な発見である。

COBUILD（1987: 1620）で示されている厳密な V-ERG の定義では，他動詞の目的語と自動詞の主語は同じ名詞である必要がある。例文(a) You can freeze peas と例文(b) Peas freeze well で例示されている通りである。この条件を満たしている動詞は 22

件あった。以下に例文を引用する。当該の動詞には下線を引き，共通の名詞は斜体字にする。

(61a) The strain of looking after her had considerably aged *him.*［他動詞］
(61b) She was dismayed to see how much *he* had aged.［自動詞］
(62a) The questions raised by the new biology simply boggle the *mind.*［他動詞］
(62b) The *mind* boggles.［自動詞］
(63a) He boiled the *kettle* and made the tea.［他動詞］
(63b) The *kettle*'s boiling.［自動詞］
(64a) It was Ted who broke the *news* to me.［他動詞］
(64b) The *news* broke in Paris that Kennedy had been shot.［自動詞］
(65a) Her friends tried to cheer *her* up, telling she wasn't missing much.［他動詞］
(65b) *She* cheered up a little as Miss Livingstone went out.［自動詞］
(66a) He unbuttoned his shirt and contracted his stomach *muscles.*［他動詞］
(66b) The *muscle* contracts between these two points.［自動詞］
(67a) Remove all skin and bones, and flake the *fish.*［他動詞］
(67b) Simmer very gently until the *fish* flakes easily.［自動詞］
(68a) He tries to focus his *eyes* on a painting above Ellen's head.［他動詞］
(68b) His *eyes,* bandaged for twenty-four hours, would not focus.［自動詞］
(69a) As we cannot study all resources, I propose to focus *attention* on one.［他動詞］
(69b) *Attention* focused on Jack.［自動詞］
(70a) The pain of the disease caused him habitually to furrow his *brow.*［他動詞］
(70b) Sutherland's *brow* furrowed.［自動詞］
(71a) She honked her *horn* when she saw me.［他動詞］
(71b) *Horns* honked incessantly.［自動詞］
(72a) …the fear that knotted the pit of his *stomach.*［他動詞］
(72b) My shoulders tightened and my *stomach* knotted as I searched for the right path.［自動詞］
(73a) It lashes its *tail* in frenzy.［他動詞］

（73b） The *tail* lashed briefly.［自動詞］

（74a＝54） She opened the *door* with her key.［他動詞］

（74b＝55） The *door* opened.［自動詞］

（75a） The stones under our feet seemed to radiate *heat.*［他動詞］

（75b） We could feel the *heat* radiating from the sandstone walls.［自動詞］

（76a） He had to ring the *bell* several times before the door was opened.［他動詞］

（76b） In the distance a church *bell* was ringing.［自動詞］

（77a） Lynn glanced at Marsha, who rolled her *eyes* hopelessly.［他動詞］

（77b） His *eyes* rolled wildly.［自動詞］

（78a） How are we going to shift these *stains*?［他動詞］

（78b） If the *stain* still doesn't shift, try this.［自動詞］

（79a） I shut the *door* quietly.［他動詞］

（79b） When the ferret goes in, the *door* shuts behind him.［自動詞］

（80a） She went out slamming the *door* behind her.［他動詞］

（80b） Out in the street a car *door* slammed.［自動詞］

（81a） He stood the *bottle* on the bench beside him.［他動詞］

（81b） The empty wine *bottles* stand in a neat row against the wall.［自動詞］

（82a） Howard turns the *van* towards the exit.［他動詞］

（82b） The *van* turned into the Bristol Road.［自動詞］

「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」が 407 語ある中で，例文で他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ名詞を使っている動詞は 21 件であった。具体的には，age, boggle, boil, break, contract, flake, focus (1), focus (3), furrow, honk, knot, lash, open, radiate, ring, roll, shift, shut, slam, stand, turn の 21 件である。「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている句動詞」が 47 語ある中で，例文で他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ名詞を使っている動詞は，cheered up の 1 件だけである。それぞれ，全体数に対する比率を計算すると，一語動詞の場合は 5.15% であり，句動詞の場合は 2.13%となる。「他動詞の目的語と自動詞の主語に同じ名詞が使われる」ということが英語の ergative verbs のプロトタイプ的な特徴であるとするならば，あまりにも不十分な例示の割合だと思われる(18)。

他動詞に挙げられている例文にはもう 1 つ問題点がある。受動態の例文が多すぎないかということである。きちんとした受動態にもなっていなくて他動詞の過去分詞が例文に含まれているだけというものもある。

具体的な数を数えてみた。「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」では，他動詞の例文が受動態になっているものは 63 件，他動詞の例文が過去分詞になっているものは 7 件で，他動詞の例文が能動態で示されていないものは，407 例中の 17.2％を占める。

「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている句動詞」では，他動詞の例文が受動態になっているものは 7 件，他動詞の例文が過去分詞になっているものは 1 件で，他動詞の例文が能動態で示されていないものは 47 例中の 17.0％を占める。

「他動詞の例文のみが掲載されている一語動詞」では，他動詞の例文が受動態になっているものは 21 件，他動詞の例文が過去分詞になっているものは 5 件で他動詞の例文が能動態で示されていないものは 109 例中 23.9％を占める。

「他動詞の例文のみが掲載されている句動詞」では，他動詞の例文が受動態になっているものは 8 件で，他動詞の例文が能動態で示されていないものは 36.4％を占める。

全体としては，能動態[19] の例文が期待される 585 件の動詞の中で，112 件（19.1％）で能動態の例文が示されていない。

受動態または過去分詞が他動詞用法の例文に使われている例を示す。下線は筆者がつけたものである。

(83) He announced that the trial would be adjourned until the next morning.

(84) a *capsized* boat

112 件の例については小論末尾の付録で印をつけてある。他動詞の例文が受動態になっている場合は，adjourn のように下線を引いてある。他動詞の例文が過去分詞になっている場合は，*capsized* のように下線を引いた上で斜体字にしてある。

確かに能動態を受動態に言いかえることはできる。例えば，Quirk et al.（1985: 1176）は，目的語を 1 つ取る動詞（monotransitive verb）の説明で “Direct objects are typically noun phrases which may become the subject of a passive clause” と述べて次のような例を挙げている。

(85) Tom caught the ball.

(86) The ball was caught (by Tom).

しかし，Quirk et al. は直接目的語の定義をしているのであって，他動詞の定義をしているわけではない。

学習文法に目を向けてみる。江川（1991: 188–189）は，S＋V＋O の説明で 17 個の例

文を使っているが，受動態の例文は 2 つだけである。自動詞用法の marry と他動詞用法の be married の比較している。綿貫（2008: 38–39）は，S＋V＋O の説明で 6 個の例文を使っているが受動態の例文はゼロである。

COBUILD（1987）は外国人用の学習文法書ではない。しかしながら，英語を外国語とする人々が使うことを想定しているのだから，他動詞の典型的な使い方が分かるような例文を示す必要があるように思われる。

ergative verbs は生産的に生み出されるのかという疑問の答えはどうなるだろうか。一語動詞 620 語がある中で「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」は 407 語である。残りの 213 語では，他動詞または自動詞の一方の例文しか掲載されていない。同じ動詞に他動詞用法と自動詞用法の両方があるという COBUILD（1987）が規定する ergative verbs であるための緩やかな条件を満たしていない。ergative verbs であるための厳しい条件である「他動詞の目的語と自動詞の主語は同じ名詞である」を満たしている動詞は 21 語しかない。

残念ながら，COBUILD は ergative verbs の生産的な仕組みを記述しているとは言えないと思われる。

なお，例文(1)の screen であるが，COBUILD は V＝ERG の表示を与えていない。次のような例文が出ている。

(87) His earlier films were only screened in France.（COBUILD 1987: 1298）

他動詞の受動態である。自動詞用法は出ていない。

5. COBUILD の文法書における ergative verbs の記述

4 節では COBUILD（1987）での ergative verbs の記述は不十分であるという分析結果を得た。同辞書の編者は英文法書も編集している。本節では Sinclair（1996）と Sinclair（2004）における ergative verbs の記述を簡潔に紹介し検討する。

Sinclair（1996: 474–492）では，ergative verbs を意味によって分類し 28 のグループに分けている。例えば，グループ 1.1 “the change group” には alter, change, metamorphose, vary が入っている。COBUILD（1987）と同じ著者による文法書なので，ergative verbs の例にどのくらいの異同があるかを調べてみた。

28 グループに分けて提示されている例をアルファベット順に直して数えてみると次のようなことが分かった。一語動詞の延べ語数は 510 語である。延べ語数と言う理由であるが，Sinclair（1996）は COBUILD（1987）と同様に，動詞の語義ごとに ergative

であるかないかの記述をしている。例えば，blow はグループ 1.2 の “the break group” とグループ 1.26 の “the hoot group” の 2 か所に記載されているので語形は同じであるが，延べ語数としては 2 と数えられる。

グループ分類を度外視して，異なり語数で数えると 417 語である。COBUILD（1987）での ergative verbs の異なり語数が 491 語であるから，15%ほど減少している。両方のリストを比較すると，COBUILD（1987）に出ていない語が 95 語[20] ある。COBUILD（1987）の 491 語に加算すると 586 語となる。残念ながら，例文(1)の screen は追加に入っていない。

ergative verbs の定義であるが，Sinclair（1996: 474）は，V と Vn の 2 つのパターンで使われる動詞として次の例を挙げている。

⑻ John broke the vase.（Sinclair 1996: 476）
⑻ The vase broke.（Sinclair 1996: 476）
⑼ The vase was broken.（Sinclair 1996: 476）

⑻の目的語が⑻で主語になると指摘している。⑻の自動詞文と⑼の受動文との意味の違いについては，Sinclair（1996: 476）は次のように述べている。⑻では花瓶が自然に壊れたか誰かが壊したことを表している。⑼では花瓶が自然に壊れたのではないことは分かっているが誰が壊したかがわからないことを表現している。微妙な違いがありそうである。Sinclair（1996: 475）は⑻について，誰が壊したかを話し手や書き手は知っているのだが意図的に隠している場合にも使うと述べている。換言すると，受動文は行為者（破壊者）が分からない場合に使い，自動詞文は行為者を隠したい場合に使うということになる。

4 節では，COBUILD（1987）での ergative verbs の例示が不十分だという指摘をした。2 つの問題点があった。1 つめは「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」が 407 語ある中で，「例文の中で他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ名詞を使っている動詞」は 21 件（5.15%）しかないというように少ないということである。2 つめは他動詞の例文が受動態で示され，能動態で示されていないものは 63 件（17.2%）と多すぎるのではないかということである。

これらの問題点は Sinclair（1996）では改善されている。ergative verbs の異なり語数 417 語に対して，自動詞と他動詞を組にした例文は 85 組提示されている。その中の 36 組では，他動詞の目的語と自動詞の主語に同じ名詞が使われている。例えば次のような例である。下線とイタリックは筆者が追加した。

⑼① If there is a leader, will *the leadership* rotate among the members? (Sinclair 1996: 489)

⑼② The new party rules rotate *the leadership*. (Sinclair 1996: 489)

他動詞の例文が受動態で提示されているものは 36 組中，次の 1 例だけである。

⑼③ At one stage during the day there was every chance that *the meeting* might break up without any resolution being passed at all. (Sinclair 1996: 490)

⑼④ *The meeting* was broken up and was called again at six o' clock this morning. (Sinclair 1996: 490)

Sinclair（1996: 482, 508）は easily や well などの副詞を伴う ergative verbs があると述べて次のような例を挙げている。

⑼⑤ Marrows don't freeze well, but they can be stored by hanging in nets. (Sinclair 1996: 482)

Sinclair は 32 語[21] を取り上げているが，そのうちの bake, clean, cook, cut, read, sell, wash は Jespersen（1949）または綿貫（2008）で能動受動態（activo-passive）になれる動詞として取り上げているものと共通である。

Sinclair（2004: 110–111）の ergative verbs の定義も COBUILD（1989）や Sinclair（1996）と共通であり，他動詞の目的語が自動詞の主語として使われる動詞である。簡潔な記述のため，53 語が取り上げられているだけであるが，次の例文は注目に値する。

⑼⑥ He sells books. (Sinclair 2004: 110)

⑼⑦ This book is selling well. (Sinclair 2004: 110)

⑼⑧ She handled a machine gun. (Sinclair 2004: 110)

⑼⑨ This car handles very nicely. (Sinclair 2004: 110)

⑼⑥と⑼⑦は他動詞文の目的語と自動詞文の主語が共通の名詞であることを例示している。⑼⑧と⑼⑨は両者が共通でない場合もあることを示している。⑼⑦と⑼⑨の自動詞文には，それぞれ well と nicely という様態の副詞が使われている。⑼⑦は江川（1991:186）の⑾にそっくりであり，⑼⑨は綿貫（2008: 586）の⑯に類似している。両者とも能動受動態を議論

している部分で使われている。Sinclair（2004）が様態の副詞が必要としている動詞の中で，handle は綿貫と共通であり，stain は Jespersen と共通である。ergative verbs の下位分類として能動受動態になる動詞があると考えてもよいかを，さらに研究する必要がある。

6. 結　び

小論の目的は次の英文で has screened という能動態がなぜ使われているのかという疑問に答えることであった。

(100＝1) This funny, and harrowing, American-made cameo of Japan's domestic dolphin hunt has screened in Australian cinemas and in 14 countries.

2 節の終わりでは，2 つの英和辞典が screen の自動詞用法を能動受動態と説明しているが，例文(1)を能動受動態と分析しようとしても，Jespersen の 2 つの基準に当てはまらないのではないかと疑問を呈した。1 つめの基準は「説明のための形容詞や副詞を伴っていること」である。(1)では説明のための副詞，または様態の副詞は使われていない。しかし，in Australian cinemas and in 14 countries という場所を表す副詞句は使われている。Jespersen の条件を「副詞句を伴うこと」と緩やかにすれば，能動受動態と分析することができる。Sinclair（2004）は副詞類（adverbial）を必要とするという緩やかな条件をつけている。

screen を ergative verbs と扱っていいかという問題であるが，5 節の終わりで議論したように，能動受動態になる動詞が ergative verbs の下位分類であるならば，正しい扱いということになる。

最後に(1)の has screened が has been screened と受動態になっていない理由を考察する。Lyons（1968: 366–367）は次のような例を取り上げている。

(101) The books were sold quickly.（Lyons 1968: 366）

(102) The books sold quickly.（Lyons 1968: 366）

受動文(101)は agent-oriented であり，自動詞文(102)は process-oriented だと述べている。つまり，(101)では本が売れたのは表現されていない行為者のおかげであり，(102)では本そのものが売れる性質を持っていたということになる。類似した議論は綿貫が(16) “This car

handles well.” に対して行っている。車自体に優れた操作性が備わっているという議論である。

さて，⑴の cameo（珠玉の短編映画）は，「自然に上映される優れた性質を持っている」ということだろうか。⑴がでている新聞記事は，オスカー賞を取った The Cove というアメリカ映画が，その舞台となっている日本では，まだ公開されていないことを批判している。⑴の直後には “But it has never had a commercial release in the country it portrays.” という英文が続いている。「日本でも自然に公開せよ」という記者の主張と思われる。もしも has been screened と受動態にすると表現されていない行為者（映画の公開者）に視点が移る可能性がある。⑻の自動詞文と⑼の受動文について，受動文は行為者が分からない場合に使い，自動詞文は行為者を隠したい場合につかうと議論した。映画の配給会社は分かっているが，それに焦点を当てないために他動詞文や受動文を避けて，自動詞文を選択したと考えられる。

《注》

（1） 竹村日出夫　他（2021: 32）に出ている英文を使用した。

（2） “screen, v.“. OED Online. September 2021. Oxford University Press. https://www.oed.com/view/Entry/173441 (accessed September 23, 2021).

（3） 下線を引いた単語は，後述する Jespersen（1949: 347–349）で取り上げられている 35 語の中にある。

（4） 渡辺（2016: 50–53）と同じ調査法を使った。衣笠（2010: 31–37）と赤野（2014: 30–34）の教える方法に従って，Google をサイト内検索した。検索する語群は “The house sold yesterday.” で「語順も含めて完全に一致するもの」と指定した。検索する言語は「英語」，検索する地域は「アメリカ合衆国」，検索するサイトは「.edu」とし，アメリカの大学内で発信される英語を検索対象とした。

（5） http://nldslab.soe.ucsc.edu/charactercreator/film_corpus/film_2012xxxx/imsdb.com/Rock,-The.html（2021 年 9 月 28 日 にアクセス）

（6） 下線を引いた 10 語は，後述する Jespersen（1949: 347–349）で取り上げられている 35 語の中にある。残りの 11 語の由来は不明である。

（7） 後述する Dixon（1994）にある通り，自動詞の主語と他動詞の目的語に共通する「格」は絶対格（absolutive）と呼ぶ方が普通と思われる。ここでは下宮の名称を尊重した。

（8）『新英和大辞典』(2002: 824）は ergative の説明に Lyons のこの 2 つの英文を使っている。ただし，『新英和大辞典』は，この英文を説明のためのメタ言語として使っている。「能格」はエスキモー語，バスク語などで他動詞文の主語の格を指し，⑶⑼と⑷⑽の the stone（自動詞の主語と他動詞の目的語）は絶対格を取っているというように，英語とは別の言語における文法現象であることを記述している。

（9） OED Online は Lyons（1968: 352）を ergative の用例として引用している。“ergative, adj.“. OED Online. August 2021. Oxford University Press. https://www. oed.com/view/Entry/63978?redirectedFrom=ergative (accessed August 29, 2021).

(10) Halliday（1967: 46–47）が該当箇所と思われるが，⑷⑶と⑷⑷は出ていない。Halliday は次のような例を取り上げている。(a) She washed the clothes. (b) The clothes were washed.

(c) The clothes washed easily. (d) This material doesn't / won't wash. Halliday は(a), つまり，他動詞文の主語を ergative と呼んでいる。(b)と(c)の違いに着目して，受動文(b)は agent-oriented であり，自動詞文(c)は process-oriented だと述べている。

(11) Andersen（1968: 12–13）が該当箇所と思われるが，(43)と(44)は出ていない。類似例として(a)She polished the table. と(b) The table polished well. が出ている。Andersen は(a)と(b)は Jespersen の 'activo-passives' の例であると述べ，自動詞の方には様態の副詞（manner adverbial）が必要であることにも言及している。ergative という用語の使い方であるが，Andersen は次の(c)と(d)で他動詞の主語 he を ergative と呼んでいる。(c)He polished the table with his cream. (d)He cut the bread with a knife. Andersen は(c)の the table と(d)の the bread を non-ergative と呼んでいる。

(12) ergative というと open が例に使われることが多いようだが，Cambridge Dictionary on line では次のように close を取り上げている。

> For example, close is an ergative verb : I closed the door | The door closed）（https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/ergative）

(13) 小島（1989: 56–57）は COBUILD（1987）が用例は全て引用文とする原則を貫いている理由は 2 つあるとしている。1 つ目は OED より受け継がれている記述的辞書編集の態度があるから。2 つ目は語用論や社会言語学などからの影響を受けて単語の語法だけでなく，その単語が用いられている文脈や場面を引用文によって示そうとしたからと小島は説明している。

(14) Collins Cobuild on CD–ROM は 1995 年に発行された。筆者が確認する限り，内容は COBUILD（1987）のものである。同年に出版された紙版の辞書の第 2 版の内容ではない。

(15) COBUILD on CD–ROM は windows 95 の時代に開発されたソフトウェアである。Windows 7 では動作したが，Windows 10 では筆者が確認する限り動作しない。

(16) Collins Cobuild English Language Dictionary が出版されたのは 1987 年と今から 35 年前である。古い資料だという批判を受けそうである。しかし，土肥（1989: 96）が指摘するとおり，ergative という概念を記述に取り入れた学習辞典は COBUILD が最初である。また，CD–ROM 版で ergative という項目を検索できる資料は他にないと思われる。Fontenelle（1997: 231）は，"The Cobuild dictionary is, to my knowledge, the only dictionary that explicitly distinguishes ergative verbs, which are coded as V–ERG." と述べている。Fontenelle（1997）の記述は Sinclair（1995）Collins Cobuild English Dictionary New Edition でも V–ERG という表示が取り入れられていることを含めていると思われる。

(17) cleave（1）と cleave（2）は語源の異なる同音異義語であるので，2 つの独立した語彙素として数えた。

(18) 土肥（1989: 101）は COBUILD（1987）で V OR V–ERG の表示がついている動詞 bake について，Atkins（1988: 108）を典拠として，問題点を指摘している。「コーパスの中で実例数が 291 件ある中で，自動詞用法は 9 件しかない。他動詞構文の方が圧倒的に多い中で，COBUILD が V–ERG または V OR V–ERG という表示を用いて学習者に提示するほどの重要な構文であるのか」と述べている。

(19) COBUILD（1987）には，USU PASS（usually passive）という文法表記がある。この表記がある場合には例文を受動態で提供する方が望ましいことになる。「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」の中で，「例文が受動態になっている動詞」は 70 件ある。この中で USU PASS の表記があるものは "distort, erode (2), fossilize (1), fuse (2), interrelate, intertwine, interweave, lodge, transfer, unionize, waft" の 11 件である。「他動詞のみの例文が掲載されている一語動詞」の中で「例文が受動態になっている動詞」は 26 件ある。この中で USU PASS の表記があるものは "entwine, fossilize (2), polarize,

refract” の 4 件である。受動態で例文を提供する必然性がない例の方が多いように思われる。

(20) Sinclair (1996) に新しく記載されているのは次の 95 語である。つまり，blacken, blare, build, char, chink, clench, collect, concertina, constrict, convene, convulse, crash, crash, crash-hand, crisp, curve, decompose, deform, degrade, dehydrate, demerge, demobilize, depreciate, derail, detach, digest, dilute, disengage, dissipate, dissolve, distend, ditch, empty, feed, flare, fog, globalize, grow, hush, interview, jumble, jut, light, lower, macerate, manifest, mend, mist, mobilize, mutate, naturalize, navigate, overstretch, panic, perish, premiere, quieten, ratchet, recommence, reconvene, redden, redeploy, redouble, regenerate, reorganize, restart, retrain, reunite, revolve, rewind, rot, ruffle, sail, scorch, scuff, shake, short-circuit, sign, slosh, snag, steam, still, stir, substitute, swerve, tack, taper, tauten, thrash, tie, tinkle, unscrew, unwind, vary, worry の 95 語である。

(21) 32 語は，apply, bake, boil, brown, char, clean, cook, crisp, cut, defrost, display, dissolve, drain, fold, freeze, glue, grill, infuse, lift, macerate, marinade, marinate, mature, melt, percolate, read, reduce, sell, simmer, steam, thaw, wash である。

参照文献

赤野一郎　堀正弘　投野由紀夫　2014 『英語教師のためのコーパス活用ガイド』大修館書店

市川三喜　1953 『英語学事典』研究社

江川泰一郎　1991 『英文法解説』改訂三版　金子書房

大塚高信 編　1970 『新英文法辞典』改訂増補版　三省堂

衣笠忠司　2010 『Google 検索による英語語法学習・研究法』開拓社

小島義郎・竹林滋・大沢ふよう・斎藤弘子・土肥一夫・浅田幸善・中尾啓介 1989「*COBUILD* の分析」Lexicon No. 18. pp. 39–154　岩崎研究会（『英語の辞書の比較と分析　第 5 集』pp. 1–116 に採録）

下宮忠雄　1979 『バスク語入門』大修館書店

綿貫陽　2008 『ロイヤル英文法』改訂新版　旺文社

岩崎研究会　編　2002 『英語の辞書の比較と分析　第 5 集』研究社

Atkins, Beryl, et al. 1988. “Anatomy of a verb Entry: from Linguistic Theory to Lexicographic Practice” *International Journal of Lexicography,* Vol. 1, No. 2, pp. 84–126.

Andersen, J. M. 1968. “Ergative and nominative in English” *Journal of Linguistics,* Vol. 4, pp. 1–32.

Burzio, L. 1981. “Intransitive verbs and Italian auxiliaries” PhD dissertation, MIT.

Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity.* Cambridge University Press.

Fontenelle, Thierry. 1997. *Turning a Bilingual Dictionary into a Lexical-Semantic Database.* Max Niemeyer Verlag: Tübingen.

Halliday, M. A. K. 1967. “Notes on transitivity and theme in English, part 1” *Journal of Linguistics,* Vol. 3, pp. 37–81.

Jespersen, Otto. 1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles.* Part III. George Allen & Unwin Ltd.: London (reprinted in 1983 by Meicho Fukyu kai, Tokyo)

Lyons, John. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics.* Cambridge University Press.

Pesetsky, D. 1982. “Paths and categories” PhD dissertation, MIT.

Quirk, Randolph. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman: London and New York.

Sinclair, John. 1996. *Collins Cobuild Grammar Patterns* 1: Verbs. Harper Collins Publishers: Glasgow and London.
Sinclair, John 2004. *Collins Cobuild Intermediate English Grammar.* Harper Collins Publishers: Glasgow.

辞書

Delbridge, Arthur. 1991. *The Macquarie Dictionary.* Second edition. The Macquarie Library Pty Ltd.
Sinclair, John. 1987. *Collins Cobuild English Language Dictionary.* Harper Collins Publishers: Glasgow.
_____ 1995. Collins Cobuild on CD-ROM Harper Collins Publishers.
Sinclair, John. 1995. *Collins Cobuild English Dictionary.* New Edition. Harper Collins Publishers: Glasgow.
小稲義男　1980 『新英和大辞典』第 5 版　研究社
小西友七　安井稔　國廣哲也　堀内克明　1994 『ランダムハウス英和大辞典』第 2 版　小学館
小西友七 南出康世　2001 『ジーニアス英和大辞典』大修館書店
高橋作太郎 2012 『リーダーズ英和辞典』第 3 版　研究社
竹林滋　小島義郎　東信行　2001 『ルミナス英和辞典』研究社
竹林滋　2002 『新英和大辞典』第 6 版　研究社

付録（COBUILD が V-ERG と表示している動詞 739 の一覧）

(A) 自動詞と他動詞両方の例文が掲載されている一語動詞：407 語

abate, abort (1), abort (2), accelerate, accrue (1), accrue (2), accumulate, adjourn, age, alter, anchor, approach, arch, atrophy (2), audition, awake, awaken (1), bake (1), balance (1), bank, beach, begin, bend (3), bend (5), benefit, blast, bleach, blink, blow (1), blow (2), boggle, boil (1), boil (2), bowl, break (1), break (4), broaden (1), brown, bruise (1), bruise (2), buckle, budge, burn (1), burn (3), burst (1), burst (2), bus, calm, *capsize*, catch, chafe, change, chill, chip, choke, churn, circulate (1), circulate (2), clang, clatter, clear (2), click, clip, clog, clonk, close (1), cloud, coarsen, coil, colour, combine (1), combine (3), compress, conclude, continue (1), continue (2), continue (3), contort, contract, convert, cook, cool (1), correlate, corrode, crack (1), crease (1), crumble, crumple, crunch, crush, crystallize (1), curdle, cure, curl (1), dangle, darken (1), decrease, defrost, derive, detonate, *develop*, dig, dim (1), diminish, disband, discolour, disperse (1), disperse (2), distort, divide (1), divide (2), dock (1), double, drain, dribble, drill, drip, drop, drown, dry, ease, end, enlarge, enlist, erode (1), erode (2), escalate, evaporate, evolve, expand (1), explode, fade, fasten (1), fasten (2), fire, flail, flake, flap (1), flap (2), flash, flatten, flick, float (1), flood (1), flood (2), flush, focus (1), focus (3), fold (1), form (1), form (2), form (3), *fossilize (1)*, foul, fray (1), fray (2), freak, freeze (2), freeze (5), furrow, fuse (1), fuse (2), fuse (4), germinate (2), grate, graze, group, halt (1), halt (2), halve, handle, hang, harden (1), harmonize, *hatch*, heal, heighten, hold, honk, hoot, hurt, improve, inch, increase, incubate (1), incubate (2), inflate (1), integrate (1), intensify, interlock, interrelate, intertwine, interweave, jam (1), jam (2), jerk, jingle, jolt, knot (2), lack, lash, lean, lengthen (1), lengthen (2), lessen, lift (3), lighten, lock, lodge (1), lodge (3), loosen, mark, mass, mature, mellow (1), mellow (2), melt, merge, metamorphose, *mingle*, mix, moderate, move, multiply, narrow (2), near, nurse, obtrude, ooze, open (1), open (4), operate (1), operate (2), overflow (1), overflow (2), overheat, overturn, overwork, pack, part, petrify (2), plunge, propagate, pucker (1), puff, quadruple, qualify, quicken (1), quiet, radiate, rally (1), rally (2), rank, rattle, reassemble, recline, reflect, reform, register, relate, relocate, report, resettle, rest, resume, rev, reverse, revive (1), revive (2), ring, rip, ripen, ripple, roast, rock (1), roll (1), roll (2), rotate, rub, run (1), run (2), run (3), rustle, scatter, screw (1), screw (2), scrunch, set, settle (1), settle (2), sharpen, shatter, shift (1), shift (2), shift (3), shorten, show (1), show (2), show (3), shrink (1), shrivel, shut (1), shut (2), singe, slacken (2), slam, slide, slot (1), slow, smash, snap (1), snap (2), soak, soften (1), soften (2), soften (3), sound, sour, spill, spin, splatter, *splay*, splinter, split (1), split (2), spoil, spout, spread (1), spread (2), spread (3), sprout (1), sprout (2), spurt, square, squirt, stabilize, stampede, stand, start (1), steer, stick, stiffen (2), stop (1), stop (2), stop (3), straighten, stream, strengthen (1), stretch, strike, submerge, suffocate (1), suffocate (3), *swell*, swing (1), swing (2), swing (3), swish, tear, tense, thaw, thrill, thump, tighten (1), tilt (1), tilt (2), tire, toot, topple, toss, trail, train, transfer, transplant (1), transplant (2), triple, turn (1), turn (2), turn (3), turn (4), turn (5), turn (6), twang, twine, twirl, uncoil, unfurl, unionize, unite (1),

unite (2), unlock, unroll, vibrate, waft, wake, wake up, waken, warm up, wash, wash out, whirl, whisk, widen (1), widen (3), withdraw, work, wrinkle

(B) 自動詞と他動詞両方の例文が掲載されている句動詞：47 語

break off, break up (1), break up (2), broaden out, build up, burn down, calm down, cave in, center around, centre on, centre round, check in, cheer up, cool down (2), double up, fan out, get out, get through, hold together, line up, move down, open up (1), open up (2), pair off, perk up, pile up (1), pile up (2), pull out (1), pull out (2), pull out (3), pull through (1), put up (1), put up (2), quieten down, rain down, settle down, show up, show up, silt up, slow down, speed up (2), *spread out (1)*, spread out (2), tie up (2), tip over, turn against, turn up, wind up (1)

(C) 他動詞の例文のみが掲載されている一語動詞：109 語

ail, air, assimilate, awaken (2), bake (2), balance (2), ball, bang, beat, bend (1), bend (2), blanch, blur (1), blur (2), bolt, bounce, *break (3)*, brighten, broaden (2), catapult, circulate (3), clack, cleave (1), clink, close (3), *clot*, concentrate, consolidate, crease (2), crop, crystallize (2), darken (2), deepen (1), de-escalate, deflect, diffuse (1), diffuse (2), dim (2), dip, elongate, entwine, exude, fatten, filter, focus (2), form (4), *fossilize (2)*, fracture, freeze (4), frizzle, fry, grill, ground, harden (2), harden (3), hunch, ignite, impact, inflate (2), jar, kink, knot (1), land, lift (1), lift (2), lodge (2), marinate, narrow (1), normalize, open (3), ossify, poke, polarize, pop, puncture, quicken (2), reduce, reflate, *refract*, relax (3), rouse, scrape, simmer, sink, slop, slot (2), solidify (2), start (2), steady (1), steady (2), strengthen (3), swivel (1), tarnish, telescope, terminate, thicken, thin, twist (1), twitch, unfold, unstick, unzip, wag (1), wag (2), waggle, whiten, widen (2), wiggle, yellow

(D) 他動詞の例文のみが掲載されている句動詞：22 語

blow out, boil down, break down, close down, close up, dry up, erode away (1), even out, freeze over, get across, liven up (2), move up, narrow down, puff out, pull through (2), rev up, shut down, slow up, spill out, split off, wear away, wind up (2)

(E) 自動詞の例文のみが掲載されている一語動詞：104 語

angle, assemble, atrophy (1), back, bend (4), berth, blister (1), break (2), burn (2), circulate (4), clank, clash, clear (1), clear (3), clear (4), cleave (2), climax, close (2), close (4), clump, combine (2), condense, congeal, cool (2), crack (2), crinkle, curl (2), curl (3), deepen (2), deflate, dilate, dull, engage, enroll, expand (2), ferment, float (2), flutter, fly (2), fold (2), fragment, freeze (1), funnel, fuse (3), gather, germinate (1), graduate, industrialize, infuse, integrate (2), interchange, jangle, liquefy, marinade, mould, muster, open (2), originate, oxidize, pan, parade, perch, play (1), push, quiet down, rearm, re-form, refuel, regroup, relax (1), relax (2), reopen (1), retract, rock (2), root, run (4), rupture, shrink (2), slacken (1), slur, solidify (1), split (3), stall, stiffen (1), sting, strengthen (2), suffocate (2), sweep, swirl, swivel (2), tan, tangle, tighten (2), ting, toll, toughen, treble, twist (2), unravel, vaporize, warp, weaken, weather, wither, worsen

(F) 自動詞の例文のみが掲載されている句動詞：25 語
band together, blare out, blast out, cool down (1), dry out (1), dry out (2), erode away (2), form up, freeze up, get away, get off, get together, hold back, hot up, liven up (1), pull back, pull up, roll up, speed up (1), spread out (3), string out, tie up (1), wear down, wear out

(G) 例文が掲載されていない一語動詞：21 語
advance, balance (3), blister (2), blow (3), blow (4), bond, coagulate, dock (2), emulsify, federate, fill, fly (1), freeze (3), freeze (6), passivize, percolate, petrify (1), play (2), pucker (2), reopen (2), turn (7)

(H) 例文が掲載されていない句動詞：4 語
fetch up, run off, turn off, wind down

（原稿受付　2021 年 10 月 27 日）

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 126–141　　March 2022

20 世紀ベルギーにおける言語事情とバイリンガル作家ジャン・レー／ジョン・フランダースの関係

井　内　千　紗

Influence of Linguistic Situations on a Bilingual Writer Jean Ray/ John Flanders in the 20th Century Belgium

Chisa INOUCHI

要　旨

本稿は，20 世紀のベルギーにおいて，使用言語が小説家の活動および作品の受容にどのような影響を与えていたのか，バイリンガル作家ジャン・レー（Jean Ray）／ジョン・フランダース（John Flanders）を対象に考察することを目的とする。フランスおよびベルギー・フランス語圏を中心に，「ベルギー幻想文学の大家」として知られるジャン・レー（1887–1964）は，ジョン・フランダースという別のペンネームを使い，母語であるオランダ語でも多くの作品を世に残した。オランダ語の作品は，主に雑誌や新聞に掲載するための短編がほとんどで，なかでも青少年向けの作品が多いのが特徴である。その影響もあり，ジャン・レーとジョン・フランダースは同一人物であるにもかかわらず，そのイメージは，言語圏によって大きく異なる。本稿ではその差異に注目し，ベルギーの言語事情と照らし合わせながら同小説家の活動遍歴をたどり，文芸作品における言語の使い分けと受容の関係を探る。

キーワード：ベルギー，オランダ語，ダイグロシア

1. はじめに

ベルギー北部フラーンデレン地域の都市，ヘント出身のレイモント・ジャン・マリー・デ・クレーメル（Raymond Jean Marie De Kremer, 1887–1964）は，ジャン・レー（Jean Ray）名義でフランス，ベルギーのフランス語圏を中心に「ベルギー幻想派（l’ école belge de l’étrange）」を代表する作家として，国際的にも広く知られる小説家である。1971 年にオーソン・ウェルズやシルヴィ・バルタンを出演者に迎えて映画化

もされた長編小説『マルペルチュイ（*Malpertuis*）』（1943 年）を筆頭に，『新カンタベリー物語（*Les Derniers contes de Canterberry*）』（1944 年），『幽霊の書（*Le Livre des fantômes*）』（1947 年）といった著作を発表し，これまで，ベルギー版エドガー・アラン・ポーやヨーロッパ版ラヴクラフト等，国外の作家とも肩を並べる怪奇・幻想小説の作家として認識されている。日本でも，すでに作品の多くが翻訳出版されている(1)。また，青少年向け SF 推理小説の分野においては，イギリスを舞台とする通称「ハリー・ディクソン（Harry Dickson）」シリーズの作者としても知られており，日本では岩波少年文庫から 3 編が翻訳出版されている。

ここまで紹介してきた「ジャン・レー」は，デ・クレーメルが使用したペンネームの一つにすぎない。彼は生涯にわたり，約 200 に及ぶペンネームを用い，匿名で発表した作品も多数ある。このうち，ジャン・レーに次いで広く使用したペンネームに，ジョン・フランダース（John Flanders）がある。本稿では，日本に限らず，本国ベルギーでもあまり研究対象として注目されていないジョン・フランダース名義での活動にも注目する。このペンネームは，主に自身の母語であるオランダ語で書かれた作品で使用されるが，フランダース名義の作品は，レー名義で広く認知されるフランス語圏のみならず，オランダ語圏の文学史でもほとんど取り上げられることがない。しかし，生前発表した約 1,500 の作品のうち，オランダ語の作品は 1,000 近くと，作品数の面では全体の三分の二を占めるという事実からも，ジョン・フランダース名義での作家としての活動は，決して無視できるものではない。

ジョン・フランダースは文学史においてはあまり注目されないが，フラーンデレン地域では一般的にどのように認識されているのだろうか。例えば，直近でジョン・フランダースを特集した大衆週刊誌では，「フラーンデレンの青少年を恐れさせた男」，「忘れ去られた作家」といった見出しで紹介されている(2)。この時点で，すでにフランス語圏のジャン・レーとジョン・フランダースの間では，印象が異なることがわかる。まず，ジョン・フランダース名義で発表された作品は，そのほとんどが青少年向けの雑誌に掲載されたもので，なかでも，後述する青少年向け短編小説雑誌『フラームス・フィルムプェス（*Vlaamse Filmpjes*）』の作家，というイメージがフラーンデレン地域の人々のあいだでは定着している。このことも影響して，ジョン・フランダース名義の作品の中には単行本として出版した小説もいくつかあるが，ジャン・レー名義の作品と比べて数も少なければ知名度も低い。これが，「忘れ去られた作家」と呼ばれる所以と捉えることもできる。加えて，フランス語で書かれたジャン・レー名義の作品は隣国フランスでも広く認知されているが，オランダ語の方はフラーンデレン地域内での活動に終始しており，隣国オランダまで活動の範囲を広げることはなかった。そもそもジャン・レーとジョン・フランダースが同一人物であるという事実は，ベルギー本国でも一般的に知ら

れていない。したがって，出身地であり生涯暮らしたフラーンデレン地域では，ジョン・フランダースがジャン・レー名義では国際的に高い評価を受ける幻想派の作家であるとも認識されていないのである。

このように，ジャン・レー／ジョン・フランダース（以降，両名義を併記する際は「レー／フランダース」と表記）は紛れもなく同一人物であるが，言語圏によってそのイメージは乖離しているのが実情である。その背景として，当然のことながら，各言語圏における読者層や出版の形態が，それぞれのイメージ形成に影響を与えたのは言うまでもない。一方，レー／フランダースが活動した 1920 年代から 1960 年代初頭という時期は，ベルギー国内はフランス語とオランダ語の言語対立のさなかにあった，という社会・政治・文化的背景を考慮に入れると，ベルギー（特にフラーンデレン地域）の言語事情が，その活動や受容に多少なりとも影響を与えたと推察することもできる。しかしながら，従来のレー／フランダースの研究では作家の使用言語に関する考察はある一方，ベルギーの言語事情と関連づけて論じるものはほとんど見られない。そこで，本研究では，レー／フランダースを事例に，言語事情にも着目しながらバイリンガル作家の活動及び受容への影響について，検討を試みる。

本稿の流れは以下のとおりである。まず，レー／フランダースの活動遍歴を，当時のベルギーにおける言語事情や政治・社会的背景にふれながら，オランダ語での活動を中心に整理する。特に，フラーンデレン地域における作品発表の場であった雑誌での活動に着目し，ジョン・フランダースが同地域においてどのように受容されていたのかを探る[(3)]。次に，翻訳出版を事例に，言語圏別の活動が国際的な受容にどのような影響を与えたのかについて検討する。以上をとおして，レー／フランダースが歴史的に対立してきた二つの言語で活動したからこそ見えてくる，20 世紀ベルギーにおける言語事情と二言語で活動する作家の関係の一端を明らかにする。

2. レー／フランダースと言語

ベルギーは北部フラーンデレン地域においてはオランダ語，南部ワロニー地域ではフランス語と東部にドイツ語，そして首都ブリュッセルはフランス語とオランダ語の二言語を公用語とする多言語国家である。このような領域別に公用語を規定する言語政策は，ベルギーの政治，社会，および文化を特徴づけ，国家の歴史および現在を知る上で無視できない背景である。ベルギーでは，1 世紀以上にわたる言語対立の後，1970 年から 1993 年の間に中央集権制から連邦制へと国家再編する過程で，教育や文化の分野は言語を母体とする「共同体」が政策主体を担うようになった。その結果，言語境界線を境に，言語によってそれぞれ異なる公共圏が構築されている。

この言語事情は，個人の言語使用にも当然のことながら大きな影響を与えている。言語境界線があるとはいえ，ベルギーで生活する個人がフランス語，オランダ語に限らず複数の言語を操ることは珍しくなく，状況に応じて言語を使い分けるダイグロシア（あるいはポリグロシア）は，公私問わず日常的に観察される。しかし，言語を用いる表現活動である文芸作品やメディアにおいて，作家が複数の言語で作品を発表したり，自己の作品を自ら翻訳する現象が見られるかというと，必ずしもそうとは限らない(4)。これには先述の政策のみならず，その原因であり 1830 年の国家独立とともに始まったベルギー国内の言語をめぐる対立の歴史が影響している。例えば，今日のフラーンデレン地域において，公用語であるオランダ語ではなく，歴史的に支配され，対立関係にあったフランス語を使って作品を発表することは，作者本人が意図せずとも，特定の政治的意図や社会的意味を想起させるとして問題視される可能性がある。生活圏において個人が使用する言語とは異なり，文芸作品やメディアにおけるダイグロシアは，ベルギーのように言語間のパワーバランスが歴史的に問題となってきた国や地域では一筋縄ではいかないのである。これは 20 世紀のベルギーにおいても同様で，レー／フランダースのように両言語圏で活動する作家は，ベルギーの文学史においても数えるほどしか存在しない。

レー／フランダースは 2 度の世界大戦を経験し，20 世紀の中でもベルギーが国家として経済・政治・社会とあらゆる面において大きな変化・発展を経験した時期に活動していた。その点も考慮に入れながら，本章ではレー／フランダースの活動遍歴を，フフチエ（Huftier）が提示する計 4 期の区分(5) にならい，概観する。その際，ベルギー国内の言語事情を軸とする政治的・社会的背景を参照することで，レー／フランダース個人の活動言語とベルギー社会の相互関係を検討する。

2.1. 第 I 期（1904–1925）

第 I 期はレー／フランダースが初めて作品を発表した 1904 年から，1925 年に初めて単行本『ウィスキー奇譚集（*Les Contes du Whisky*）』を出版し，専業作家として成功を収めるまでの時期にあたる。

まず，レー／フランダースはまだ学生であった 1907 年頃までは，主にオランダ語で作品を書いていたことに触れておきたい。なぜオランダ語で書いていたのか。何よりもそれが彼の母語であることが大きな理由であるのは間違いないが，最初に作品を発表した 1904 年以前の自身の体験から，オランダ語の使用に社会的・政治的な意味を見出していたことがうかがえる。

1904 年，ヘントで高等教育を受ける学生であったレー／フランダースは，学生新聞『デ・フーデンダフ（*De Goedendag*）』に散文と詩からなる作品を発表している。「寄

宿学校生活を振り返って，秋の日々（Uit het Kostschoolleven, Herfstdagen）」と題するこの作品は，1901 年から 1903 年まで過ごしたフランス語圏トゥルネー近郊の町にある寄宿学校での体験を綴っている。彼がオランダ語圏であるヘントを離れ，フランス語圏で寄宿学校生活を送ることになった背景には，ベルギーの「柱状化（verzuiling）社会」の影響が見て取れる。

柱状化社会とは，主に社会学や政治学の分野において，オランダやベルギーの社会構造を説明する際に用いられる概念である。19 世紀末以降，ベルギー国内には宗教や経済をめぐる世界観の違いを基盤にカトリック，社会主義，自由主義という三つの部分社会（＝柱）が存在していた。学校，教会，政党，労働組合，同好会といったさまざまな団体がこのイデオロギー別に組織化され，ベルギー人はまさに「ゆりかごから墓場まで」，一つの柱の中で生活するよう社会が機能していた(6)。

特に，レー／フランダースは，この柱状化社会の影響を強く受けた家族のもとで生まれ育ったと言える。なぜなら，彼の両親は中産階級であったが，母方の叔父であるエドゥアルト・アンセーレ（Edouard Anseele）は，国内の社会主義飛躍の立役者であり，また，政治家としては大臣の職も務めた有力者であったためである。一家は社会主義の影響もあり，当時のフラーンデレンでは主流であったカトリック系，すなわち宗教的要素の強い教育を避けると同時に，フランス語での教育を重視したことから，初等教育が終わった子どもたちをフランス語圏の非カトリック系寄宿学校に送った。そこには，「フランス語の知識は労働者の解放を加速させるための手段である(7)」という，フラーンデレンの社会主義者ならではの考えが作用していた。中等教育の段階で親元を離れてフランス語圏に住み，フランス語で教育を受けたという経験が，その後の人生において，二言語を使い分けて活動する原点となったことは間違いない。

ここで，当時のフラーンデレン地域における文学と言語の関係を簡単に整理しておきたい。まず，19 世紀末から 20 世紀初めにかけて，フラーンデレン出身の作家は土着の言語であるオランダ語ではなく，フランス語で活動するのが一般的であった。当時，フランス語は上流階級のことばとして社会的に優位に置かれ，文化の領域においても，フラーンデレンではフランス語で書かれた文学が主流を占めていた。1880 年頃，ベルギー・フランス語文学は「ベルギールネサンス」と呼ばれる転換期を迎え，フランスに対するベルギーの独自性を追求する作品が発表されていた(8)。その中には，フランス語圏ワロニー地域やブリュッセルの作家だけでなく，フラーンデレン人も多数含まれていた。例えば，この時期を代表する作家であり日本でもよく知られる『青い鳥（*L'Oiseau bleu*）』の著者モーリス・マーテルリンク（Maurice Maeterlinck）もその一人で，レー／フランダースと同じヘント出身であるが，発表した作品の言語は全てフランス語である。マーテルリンクのように，上流階級出身のフラーンデレン人は，フラーンデレン地域で生ま

れ育っても，フランス語で教育を受け，家庭内でもフランス語を使用していたのである。

他方，被支配の立場におかれていたオランダ語で作品を発表するという行為は，このフランス語支配の社会に抵抗する「フラーンデレン運動」と結び付けられる傾向にあった。フラーンデレン運動とは，フランス語が優位な状況で推し進められた国家独立と体制づくりに対するオランダ語（フラーンデレン語）復権の要求に始まる，フラーンデレン人によるオランダ語の地位向上と権利の獲得を求める運動である。この運動と関連して，国家独立以来，フラーンデレンではオランダ語で民族主義の作品を発表する作家が活動していた(9)。

レー／フランダースの使用言語に話を戻すと，前述の作品を投稿した学生新聞はヘントのフランス語化に反対し，ヘント大学のオランダ語化を擁護するという，政治性を有する発行物であった。さらに，高等師範学校進学後の 1907 年には，教権反対・自由主義系の学生団体の刊行物に詩を掲載している。ここで発表した作品も寄宿学校時代の経験に関連する内容であるが，1904 年の作品との違いは，フランス語でも作品を投稿している点にある。この言語選択は，自身が参加していた自由主義の団体と敵対する「社会主義」が，元々フランス語の使用を推奨しながらもフラーンデレン語の復権も求めるという，言わばダブルスタンダードを批判するためのものだったとフフチエは分析している(10)。このように，レー／フランダースは前述したフラーンデレン運動に参加していたことになるが，当時の学生がこの種の活動に参加することは特別なことではなかった。同時に，この学生時代を最後に，彼は政治性を有する活動には参加しておらず，むしろそれを避けるような動きも見せている。

その後，高等師範学校を落第したレー／フランダースは，1919 年までヘントの市役所に勤めるかたわら，演劇の批評を中心に執筆活動を行い，徐々に新聞や雑誌等でも短編小説を発表するようになる。この時期から，ジャン・レーというペンネームを用いて，言語も一貫してフランス語を使用している。その間，私生活では 1912 年に結婚，一女をもうける等，転換期を迎えるなか，1919 年には市役所を辞職する。この年が，作家ジャン・レーとしての本格的な活動開始の年と言える。

公務員を辞職した後は，1920 年から 1923 年にかけて，バイリンガルの自由主義系日刊紙（*Journal de Gand / Echo des Flandres*），そして 1923 年から 1925 年の間は文芸雑誌（*l'Ami du Livre*）で，それぞれ短編小説や文学批評を掲載している。しかし，両誌ともに売上が低迷していたために彼の収入は安定していなかった。

そのような状況のなか，1925 年，ジャン・レーは上記 2 誌に掲載していた作品を編纂したアンソロジー『ウィスキー奇譚集』を出版する。同書は国内はもとより隣国フランスでも商業的成功を収め，フランスのメディアでは「ベルギーのエドガー・アラン・ポー」と称され注目を集める存在となった。

以上，彼が小説家として成功を収めるまでの活動をたどった。これまで述べたとおり，特に学生時代のレー／フランダースにとって，言語やイデオロギーが彼の作品執筆の動機に与えた影響は大きかった。また，中産階級出身の彼が，社会主義や自由主義の影響でフランス語使用を選択し作品を発表したという点が，他の上流階級出身のフランス語で活動したフラーンデレン人作家とは一線を画していると捉えるべきである。レー／フランダースが作家として活動を本格化させた 1919 年は，第一次世界大戦が終わった直後と言うタイミングでもある。この時期からフラーンデレン運動の政治化が加速し，ヘントでは大学のオランダ語化を求める運動が拡大するなど，言語事情の面で大きな変化の過渡期にあった。法的には 1898 年にフランス語とオランダ語の平等が規定されたとはいえ，それはあくまで域内の二言語主義が法制化されたに過ぎず，実社会ではフランス語が依然として優位な状況にあった[11]。そのような状況から，先述した 19 世紀末の「ベルギー・ルネサンス」とは時期がずれているものの，この当時においても，レー／フランダースはフラーンデレン人がフランス語で表現することに大きな価値を見出していたことを示唆している。

2.2. 第 II 期（1927–1942）

第 I 期では，作家として活動するにあたり，母語であるオランダ語ではなく，フランス語を選択し，専業作家の出発点に立つまでの動向を追った。第Ⅱ期はレー／フランダースが最も多くの作品を残した時期であるが，本節では特にフランス語に加えてオランダ語でも活動を開始した点に注目する。

そもそも，なぜレー／フランダースがフランス語に加え，自身の母語であるオランダ語でも作品を発表するに至ったのか。その背景には，1926 年の共謀罪による逮捕とその後 4 年にわたる獄中生活がある。レー／フランダースは作家として執筆活動を行うかたわら，第一次世界大戦中に知り合ったとされる両替商アウフステ・ヴァンデンボハールデ（Auguste van den Bogaerde）と両替詐欺を繰り返し行い，不正に収入を得ていたとされている。逮捕によって作家としての名誉を失い，文学界からも追放され，金策に走らなければならない事態に陥ったのが，結果としてオランダ語でも執筆活動を行うことになった直接の原因である。なかでも，前節で触れた叔父のアンセーレ氏による支援も受け，服役しながら記者として，社会主義系の新聞のために記事を執筆する機会を得たのが，オランダ語で作家活動を行うきっかけとなっている。

また，この一件により，当然のことながらこれまでどおり「ジャン・レー」を名乗り執筆活動を継続することが困難となる。代わりに，匿名やさまざまなペンネームを用いるようになるが，そのうち最も頻繁に使っていたとされるのが，「ジョン・フランダース」である。ちなみに，出所した 1929 年にはフランス語でも記者として活動を再開さ

せるが，フランス語の作品や記事においても，しばらくの間はジョン・フランダースの名義を使用している。

出所後の 1930 年代，レー／フランダースは一人の仕事量とは思えない数の記事や作品を継続的に発表し，文芸作品の翻訳も多数手がけている。最も作品数の多い 1937 年には，年間計 108 編のフィクションを発表し，記者としては 300 本以上の記事を各紙に掲載している。1930 年代，レー／フランダースが記事あるいは文芸作品を掲載した定期刊行物をまとめると，以下の表のとおりとなる。

表 1　第Ⅱ期にレー／フランダースが携わった雑誌・新聞[12]

発行年	誌名	媒体	言語
1925–1935	La Revue Belge	雑誌	フランス語
1928–1937	Ons Land	雑誌	オランダ語
1930–1939	Le Bien Public	新聞	フランス語
1930–1933	La Flandre Libérale	新聞	フランス語
1931–現在	Vlaamse Filmpjes	雑誌	オランダ語
1934–1939	Presto Films	雑誌	フランス語
1935–1943	De Dag	新聞	オランダ語
1936–1940	Bravo!	雑誌	オランダ語

この表から当時，レー／フランダースはバイリンガルの作家として，どちらの言語に偏ることもなく執筆活動を行なっていたことがうかがえる。第一次世界大戦後，ベルギーは政策面では二言語主義から地域別単一言語主義へと徐々に移行していく段階にあったが，現実には同一の出版社が二言語で別の雑誌や新聞を発行するケースもあったため，二言語で執筆することで仕事の機会を増やすことができたのである。

また，第Ⅱ期の活動の大きな特徴として，青少年を対象とする作品を多数手がけたことも忘れてはならない。その代表作としてあげられるのが，1931 年から 1938 の間に社会主義系の出版社（Hippoliet Janssens）で発行された先述の「ハリー・ディクソン」シリーズである。この推理小説シリーズ（計 178 編）は，元々翻訳の依頼で仕事を受けたドイツ語原作のオランダ語版を，翻案・改変，そして自らフランス語で創作するに至った作品となっている。この時期からレー／フランダースは，青少年向けの雑誌に多く関わるようになり，オランダ語での活動において，その傾向は強くなる。

なかでも，ベルギー・オランダ語圏において，ジョン・フランダースが今なお青少年向けの小説家であるという印象を決定づけている背景には，彼の作家としてのキャリアの中でも最も長く関わった雑誌，『フラームス・フィルムプェス』[13] の存在がある。同誌は 1875 年創業のカトリック系修道院を母体とするアーヴェルボーデ（Averbode）

社が 1931 年に創刊した青少年向け（10 歳〜14 歳を対象とする）短編小説雑誌で，現在も定期刊行されている。前述のとおり，レー／フランダースは反教権主義的な教育を受けたが，作家としては，ジョン・フランダースの名を広めたアーヴェルボーデ社と強い信頼関係を構築した。その関係は，第二次世界大戦中の中断を経て，彼が亡くなる前年の 1963 年まで続いていた。それは，この雑誌がカトリック系の出版社から発行されていたが中立性を重視し，教条的な学びをカトリック系の青少年に求めないという編集方針をとっていたためであると推察できる(14)。

戦間期のフラーンデレン地域において，教会はオランダ語で書かれた青少年向け図書の普及に重要な役割を担っていた(15)。1930 年代，ベルギーでは行政，教育，裁判といった領域において地域別に使用言語を定める法律が制定され，フランス語・オランダ語，両言語集団の「平等」が公的空間において確保されるようになっていた。なかでも，1930 年にはフラーンデレン地域で初めて，大学のオランダ語化（ヘント大学）を実現させたことが象徴するように，教育におけるオランダ語の使用は，社会的にも政治的にも非常に重要視されていた。そのような状況の下，フラームス・フィルムプェスはカトリック系の学校向けに販売する手法をとっていたため，青少年が学校で手にとる雑誌として定着し，発行部数も約 6 万部におよんだ。また，同誌はカトリック系の青少年に，母語で小説を読む機会を与えるだけでなく，雑誌が存在することにより，フラーンデレンの若手作家に作品を発表する機会を与えるのに一役買っていた。若い世代のリテラシー向上を推進したという点で，フラーンデレン運動の歴史においても評価されている(16)。

この時期，レー／フランダースが発表した作品は，言語問わず推理小説，サイエンス・フィクションや怪奇小説等，ジャンルは多岐にわたる。当時のフラーンデレンにおいて，オランダ語の作品といえばロマン主義の影響を受けた歴史小説が主流であるなか，悪党や必要であれば暴力も辞さない人物，冒険家が登場する物語を数多く発表し，教育上よくないとされるような場面や行為も遠慮せずに描いた。例えば，1936 年に刊行し，自ら編集局長もつとめた自由主義系青少年雑誌『ブラボ！（*Bravo!*）』に掲載された短編小説では，得体のしれない物体，目に見えない生物との遭遇・対峙に対する恐怖や不安から錯乱する精神状態を描く作品や，独身主義，女性に対する嫌悪感，処刑，裏取引など，青少年向けとは言えない視点やテーマも多く取り上げている。このようなかたちで，第Ⅱ期のレー／フランダースは，オランダ語ではフラーンデレンの青少年に歴史小説以外の読みものに対する需要を満たす役割を担うと同時に，大衆小説作家として，新たな活路を見出していったのである。

2.3. 第 III 期（1942–1946）

前節で述べた第Ⅱ期では，雑誌や新聞を中心に，ジャン・レー以外のペンネームある

いは匿名で多くの短編小説を発表し，特にオランダ語圏においては青少年向けに娯楽としての読み物を提供する役割を担っていたことを確認した。しかし，表 1 で示した雑誌や新聞を舞台とする幅広い活動は，第二次世界大戦とともに中断を余儀なくされる。同時に，今度は第Ⅱ期では封印していたジャン・レー名義を復活させ，作家として新たな転換点に立つことになる。

第Ⅲ期のレー／フランダースは，「黄金期」と評されるが，次の 2 点において他の時期と活動の性質が異なる。まず，1940 年 5 月以降ドイツの占領下におかれたことにより，ベルギーにおける出版事情は当然のことながら一変した。レー／フランダースは戦時中，携わっていた雑誌・新聞の廃刊あるいは休刊の影響でオランダ語での活動を中断している。一方，フランス語に関しては，新たな活動の場を得ることになる。それが，1940 年から参加した「作家連合（d'édition les auteurs associé）」である。

フランス語文学の中心であるフランスとの流通が途絶えたことにより，自国内でフランス語の娯楽を提供することを目的に設立された同組織は，新たに小説を刊行することを推進した。特に，推理小説や幻想小説の出版がもてはやされ，レー／フランダースは戦時中，フランス語での作家活動に専念する。またこの時期，作品の出版形式がこれまでと大きく異なることも忘れてはならない。前述したとおり，第Ⅱ期までの活動では主に新聞や雑誌で短編小説を発表することを軸としていたが，1942 年に短編集『夜の主（*Le Grand Nocturne*）』を出版したのを皮切りに，1943 年には代表作となる長編小説『マルペルチュイ（*Malpertuis*）』，短編集『恐怖の輪（*Les Cercles de l'épouvante*）』等，第Ⅲ期では単行本の出版を次々と実現させている。この作家連合には他にも 20 世紀に活躍した同分野を代表する作家が名を連ねており，戦時中，彼らの仲間入りを果たすことで，フランス語圏で再び作家としての地位を回復することに成功する。

第Ⅲ期のレー／フランダースの作家としての活動は，フランス語圏の文学史においては「ベルギー幻想派」の中心を担う作家として飛躍したという点において高い評価を受けているが，同時にオランダ語による作家としてのキャリアが途絶えたことも無視できない。戦時中，フラーンデレンにおいても「作家連合」のような出版社が組織され，フランス語圏と同様に娯楽を提供するための作品の出版が推進されていた。しかし，ここでレー／フランダースがオランダ語ではなく，フランス語で，そしてジャン・レー名義を再び使用し始めたという事実からも，レー／フランダースは基本的にはフランス語作家としての成功を目指していたことがうかがえる[17]。

2.4. 第 IV 期（1947–1964）

第二次世界大戦中という特別な状況の中で，フランス語圏において幻想文学の作家として地位を確立したレー／フランダースは，戦後，批評家から対独協力者のレッテルを

貼られ，再び地位・経済面ともに不安定な状況に陥る。

その結果，戦後のレー／フランダースは第Ⅱ期に関わっていた雑誌・新聞の復刊あるいは新たに刊行された定期刊行物を舞台に，大衆小説作家として活動を再開させることになる。第Ⅲ期でフランス語圏の文壇に名を連ねたレー／フランダースの戦後は「低迷期」と言われている。確かに，作品数や関わる雑誌・新聞の種類は第Ⅱ期よりも減少しているものの，フランス語，オランダ語と言語によって活動が隔たることもなく，晩年まで短編小説を軸に，継続的に作品を発表している。そして第Ⅱ期と大きく異なるのは，フランス語ではジャン・レー，オランダ語ではジョン・フランダースと作品の言語によって名義を明確に使い分けている点にある。戦後，ベルギーは地域別単一言語主義，すなわち領域別に使用言語を厳格化するために国家再編を推し進め，1963 年には言語境界線を画定する。レー／フランダースはオランダ語圏であるヘントで活動を続けていたが，このベルギーの動きと連動するかのように，言語圏別に作家のアイデンティティを確立させていた。いわば，レー／フランダース自身も地域別一言語主義を実践していたとも言える。

また，この時期になると第Ⅱ期まで影響を受けていた社会主義色は排除され，宗教観を作品のテーマにおく作品もみられるようになる。これは戦後復刊したフラームス・フィルムプェスの出版元であるアーヴェルボーデ社との再接近，そして出版社の母体となっている修道院との親密な関係が影響している。その関係は，同社がレー／フランダースの死後，彼の功績をたたえ，若手作家の発掘を目的とする「ジョン・フランダース賞」を設置したことからもうかがえる。

このように，戦後のレー／フランダースに第Ⅲ期までのような勢いは見られない。しかしその一方で，晩年は言語別にエージェントを立てて，過去に発表した作品の復刊，アンソロジー出版を計画し，その成果は，フランス語圏において実を結ぶ。1961 年，フランスのマラブー（Marabouts）社から主要作品を復刊することに成功し，「ベルギー幻想派」の作家として，隣国フランスで「再発見」されたのである。これは次章で取り上げるレー名義の作品の国際的な受容に直接結びつくものともなっている。1963 年には全集も出版され，本稿の冒頭で述べた「ベルギー幻想派の大家」として，再び地位を取り戻した。他方，ジョン・フランダース名義でもフランス語圏と同じような展開をもくろむものの，道半ばで 1964 年にその生涯を閉じる。

以上，レー／フランダースの活動遍歴を 4 つの時期に分けて概観した。名義と使用言語を軸に改めて作家としての活動の変遷をまとめると，以下の表のとおりとなる。

表 2　活動名義と使用言語の変遷

<table>
<tr><td rowspan="2">時期</td><td rowspan="2">特徴</td><td colspan="2">言語と名義</td></tr>
<tr><td>フランス語作品</td><td>オランダ語作品</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第Ⅰ期
（1904–1925）</td><td rowspan="2">執筆活動開始～小説家として成功</td><td colspan="2">ジャン・マリー・デ・クレーメル</td></tr>
<tr><td>ジャン・レー</td><td></td></tr>
<tr><td>第Ⅱ期
（1927–1942）</td><td>大衆小説作家，記者として再出発</td><td colspan="2">ジョン・フランダース，他
（ジャン・レー以外の複数名義）</td></tr>
<tr><td>第Ⅲ期
（1942–1946）</td><td>黄金期，幻想派の作家として地位確立</td><td rowspan="2">ジャン・レー</td><td></td></tr>
<tr><td>第Ⅳ期
（1947–1964）</td><td>低迷期，晩年の再評価</td><td>ジョン・フランダース</td></tr>
</table>

フランス語作品の絶頂期が第Ⅲ期であることは間違いないが，オランダ語作品の黄金期は第Ⅱ期にあったといえる。この時期の活動が，青少年をターゲットとする作品を創作するという彼のオランダ語圏での活動の方向性を決定づけた。また，レー／フランダースの言語使用や名義には，自身の家族や逮捕によって置かれた境遇等，個人的な事情だけでなく，社会的な背景とも密接に関わっていたことがわかる。それは，彼が第Ⅲ期の戦時中は例外として，雑誌や新聞に掲載する大衆小説を軸に活動したことが作用したと言える。レー／フランダース自身は生前のインタビューにおいて，フランス語話者でもオランダ語話者でもなく，あくまでベルギー人作家として，二つの言語で作品を発表していたと語っている[18]。しかし，受容される過程で結果的に言語事情の影響を受けることになった，と捉えることも可能ではないだろうか。

3. 言語圏別の受容がもたらす翻訳出版への影響

前章では，レー／フランダースが時期や状況によって言語を使い分け，二つの言語圏にまたがり作家として別のアイデンティティを構築し，同じベルギー国内であっても言語圏によって受容が異なることを示した。以上をふまえ，本章では言語が作家活動に与える影響の事例として，他言語による翻訳出版の実態からベルギー国内における受容の差異が，国際的な認知にどのような影響を与えるのかについて事例を交えながら分析する。

2.4. 節で述べたとおり，レー／フランダースは 1960 年代以降，フランスの出版社で過去に発表した短編小説のアンソロジーや全集を出版し，ベルギー幻想文学の作家として改めて注目を集めることになるが，翻訳出版も，このフランスでの成功をきっかけに広がりを見せた。したがって，今日に至るまで翻訳されているのは当然のことながらフランス語で発表されたジャン・レーの作品がほとんどである。ジョン・フランダース名

義で書かれたオランダ語の作品は，レー名義のフランス語作品がフランスでひととおり出版された後に出版されているが，フランス語以外の言語については，オランダ語作品のみを扱う翻訳出版は管見のかぎり見当たらない。

では，ジョン・フランダース名義のオランダ語作品はフランス語作品に劣るのかというと，同一人物が書いた作品に，そのような違いが生まれるはずもない。ここで具体例として，レー／フランダースがフランス語・オランダ語の両言語で発表した短編小説「金歯（[蘭] Gouden Tanden/[仏] Dents d'or）」の翻訳出版をめぐる展開を取り上げ，レー／フランダースの作品が他国でどのように受容されるのかを見ていきたい。

「金歯」は，1950 年 11 月 25 日発行の青少年向け週刊誌「オンス・ゾンダフスブラット（*Ons Zondagsblad*）」に，ジョン・フランダース名義で掲載された怪奇推理小説である。フランス語圏において，同作品は元々ジョン・フランダース名義のオランダ語で書かれた作品であるとしばしば紹介されていることから，あたかもジョン・フランダース名義の代表作であるように見受けられる。しかしながら，同作品について，当時オランダ語圏で特に話題になったという記録は残っていない。

レー／フランダースは 1956 年，同小説を自ら翻訳したフランス語版を文芸雑誌『オーダス（*Audace*）』に投稿し，読者賞を受賞している。先述したとおり，当時，レー／フランダースはエージェントを介してこれまでの作品をアンソロジーとして出版する計画を立てており，「金歯」も 1961 年フランスのマラブー社から出版された『ジャン・レーの怪奇幻想物語 25 選（*25 Histoires noires et fantastiques*）』をはじめ，いくつかのアンソロジーに収録されている。したがって，オランダ語圏では雑誌でしか読むことのできない「金歯」が，フランスで出版された単行本に収録されることで国境を超えて多くの読者を得ることになる。さらに，『25 選』に収録された同短編は，これまで様々な言語に翻訳出版されており，日本語にも翻訳されている(19)。しかし当然のことながら，オランダ語ではなくフランス語版を底本としており，ジャン・レーの作品として紹介されている。

この翻訳出版に関してさらに興味深いのが，1964 年にオランダのブルーナ（Bruna）社から出版されたアンソロジー『フラーンデレンの怪奇物語（*Vlaamse griezelverhalen*）』に収録されている「金歯」である。このオランダ版「金歯」は，同じオランダ語圏であるジョン・フランダース名義で書かれたオランダ語版ではなく，フランス語訳版からオランダ語に重訳されたテクストが収録されている。これは，フランスで出版されたアンソロジーを底本としていることも当然影響している。他方，先述したとおり，ジョン・フランダースはあくまでフラーンデレン地域での活動に終始したため，同じ言語圏である隣国オランダにおいても他国と同様，フランス語で活動していた「ジャン・レー」の作品が受容されていたことも同時に意味する。また，ベルギーとオランダは同じ「オラ

ンダ語圏」といっても，レー／フランダースのオランダ語テクストにおいては，オランダで使用されるオランダ語とは異なり，フラーンデレンのことばや方言が多く使用されていることも影響したと考えられる。現在は隣国オランダとのオランダ語標準化の成果もあり，フラーンデレン人の書いた文芸作品は，オランダでも広く読まれ，文学賞も共同で実施されるなど，ベルギーのフランス語圏とフランスのように，市場を共有している。しかし，レー／フランダースが活動していた時代は，フラーンデレン人が使用することばは「フラーンデレン語」であるという認識が一般的で，両地域の間にはまだことばの壁があったことが，この翻訳出版の成り行きからも見てとれる。

4. まとめ・今後の課題

以上，レー／フランダースの活動遍歴及び翻訳出版の展開をとおして，ベルギー国内の言語事情と文芸作品をめぐる活動や受容の関係を探った。レー／フランダースは作家として活動を進める中で，ベルギー国内における言語をめぐる政治・社会的影響を少なからず受けていたことは明らかである。ベルギーにおけるフランス語とオランダ語の社会的地位の不均衡は，1930 年代以降，徐々に是正されていた。一方，レー／フランダースの事例を見る限り，文学の分野において，フランスを中心とするフランス語文学は，オランダ語文学よりも作家の地位確立という側面においては優位と捉えられていたと言える。また，言語圏による受容の差異は，翻訳出版をとおしてさらに広がることも指摘した。作家個人としてはフランス語・オランダ語と言語圏の境界を超えて活動することができても，作品が同様に言語の境界を越え，超域的な評価を受けることは困難であったこともわかった。

また，活動遍歴をたどるなかで，レー／フランダースの言語使用には，言語だけでなく，イデオロギー別に構成される柱状化社会の影響もあったことが明らかとなった。特に，レー／フランダースはオランダ語での活動において，活動の軸を雑誌や新聞においていたが，ベルギー国内の伝統的なカトリック系・社会主義系・自由主義系，といずれの出版社とも関わっていたことから，言語だけでなくイデオロギーの境界をも超えた活動を実践していた。この点については，本稿で深く掘り下げて分析することができなかったが，大衆小説の作家を取り上げる際，このようなベルギーにおける社会構造との関係は見逃せない論点である。この点も含めて同時代のフラーンデレン出身の他の作家の状況も調査し，20 世紀ベルギーにおける言語事情とフランス語，オランダ語と二つの公用語を使用して活動した作家の関係をよりダイナミックな視点で示すことを，今後の課題としたい。

《注》

（1） 日本語に翻訳された作品に関する最新の情報は，ジャン・レー／ジョン・フランダース『マルペルチュイ ── ジャン・レー／ジョン・フランダース怪奇幻想作品集 ──』岩本和子，井内千紗，白田由樹，原野葉子，松原冬二訳（国書刊行会　2021）の解説（pp. 509–527）で参照可能である。

（2） “Vergeten volksverteller John Flanders: de man die de Vlaamse jeugd bang maakte” *Knack,* 31. 07. 2019, pp. 88–92.

（3） 本研究に関するレー／フランダースの活動遍歴をまとめるにあたっては，先行研究としてフフチエの研究を中心に，次の三点を参考にした。Baronian, J.-B., Levie, F., *John Flanders. Jean Ray. 1887–1964* (Brussel: Koninklijke Bibliotheek Albert I, 1981). Huftier, Arnaud, *Jean Ray: l'alchimie du mystère,* (Clamecy: Les Belles Lettres, 2010). Vandamme, Geert “Soms overtreft de werkelijkheid de fantasie: RAYMOND DE KREMER 1964 (alias Jean Ray/John Flanders)”, *Gandavum² Online tijdschrift m.b.t. de Gentse stadsgeschiedenis,* 2020. (http://geertvandamme.blogspot.com/2015/11/jean-ray-john-flanders-1887-1964-een.html) (2021 年 10 月 20 日最終確認).

（4） ただし，作品自体はオランダ語で書かれているが，テクストの中でベルギーの言語事情を反映しフランス語や他の外国語を織り交ぜるポリグロシアは，ベルギーのオランダ語作品においてよく見られる現象である。この点については以下の拙稿で論じている。井内千紗「ポリグロシアを有するテクストの蘭和翻訳に関する比較文化学的一考察 ── ベルギー・オランダ語圏の現代小説を事例に ──」（比較文化研究 No. 142，日本比較文化学会）pp. 67–78.

（5） Huftier, *op. cit.,* pp. 15–16.

（6） 作内由子「柱状化社会」（津田由美子，松尾秀哉，正躰朝香，日野愛郎編『現代ベルギー政治 ── 連邦化後の 20 年 ──』ミネルヴァ書房　2018）pp. 77–86.

（7） Vanschoenbeek, Guy “Anseele, Edward”, *Nieuwe Encyclopedie van de Vlaamse Beweging A-F,* (Tielt, Lannoo, 1998) pp. 296–299.

（8） 岩本和子『周縁の文学 ── ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』（松籟社　2007）pp. 346–348. 三田順『想像された北方 ── 象徴主義におけるベルギーの地詩学を巡って』（松籟社　2018）pp. 37–39.

（9） *ibid.*

（10） Huftier, *op. cit.,* p. 19.

（11） 石部尚登『ベルギーの言語政策 ── 方言と公用語 ──』（大阪大学出版会　2011）pp. 94–99.

（12） Huftier, *op cit.,* pp. 584–594 の情報をもとに筆者作成。

（13） 『フラームス・フィルムプェス（*Vlaamse Filmpjes*）』は現在の名称である。発刊当時は *Vlaamsche Filmkens,* 1947 年以降は *Vlaamse Filmkens,* そして 1960 年以降は *Vlaamse Filmpjes* と時期によって綴りが変更されている。

（14） Simons, Ludo, *Het boek in Vlaanderen sinds 1800: een Cultuurgeschiedenis,* (Tielt: Lannoo [e-boek], 2013).

（15） Literatuurgeschiedenis.org “Jeugdliteratuur in de 20e eeuw” Literatuur-geschiedenis (https://www.literatuurgeschiedenis.org/20e-eeuw/jeugdliteratuur-in-de-20e-eeuw) (2021 年 10 月 23 日最終確認).

（16） De Wever, Bart, “De Vlaamse Filmpjes” *Nieuwe Encyclopedie van de Vlaamse Beweging R-Z,* (Tielt, Lannoo, 1998) p. 3448.

（17） 第二次世界大戦中，レー／フランダースがなぜオランダ語で活動しなかったのかについては，先行研究ではほとんど触れられていないこともあり，本稿では取り上げなかった。第二

次世界大戦下の言語事情と文芸作品の関係については，別稿にゆずりたい。

（18） van Hageland, Albert, “Quand Jean Ray commente John Flanders”（John Flanders, *Visions Nocturnes,* Paris: Neo, 1984）pp. 18–19.

（19） ジャン・レイ「金歯」平岡敦訳（若島正編『エソルド座の怪人 ── アンソロジー／世界編』早川書房 2007）pp. 191–210.

（原稿受付　2021 年 10 月 26 日）

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 142–156　　March 2022

自発的な活動を促す「子ども向けミュージカル」の開発及び改善

山田　克已・萬　　司

Development and Iimprovement of “Musicals for Children” that Encourage Voluntary Activities

Katsumi YAMADA・Tsukasa YOROZU

要　旨

本稿は，子どもが自発的に鑑賞し表現する「子ども向けミュージカル」の開発及び改善を行い，幼児教育段階での取扱いを考察するものである。その基盤となる幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領は，2017 年度の全面実施から 5 年が経ち，幼児期の学校教育としての位置づけがますますクローズアップされてきている。こうした現状を踏まえ，幼児期の学校教育としての幼稚園等の学びや小学校教育との連携，幼児教育段階での「子ども向けミュージカル」の取扱いを明らかにすることを試みた。

キーワード：幼小連携，幼児教育における音楽，小学校教育における音楽，幼稚園教育要領，小学校学習指導要領，教育課程の編成

1. 研究の動機・概要

近年「5 歳児の教育プログラム」(1) の必要性が報道されるなど，文部科学省は幼小連携(2) を推進する方針を強く打ち出している。そのため，幼稚園教育要領等(3) と小学校学習指導要領に示される指導内容について連続性を図り，幼児の活動と小学生の学習との具体的な接続を研究する必要性が高まっている。萬（2020）は，『子どもの音楽表現から考える幼小連携』(4) で文科省検定教科書である小学校音楽科の教科用図書（教育出版）の編集意図や指導内容を分析した。これを市販の子ども向けの曲集と比較することから，幼児期から小学校低学年の子どもの音楽表現について言及している。その概要は，子どもの音楽活動では声や楽器の音色などを聴き取り簡単なリズムや旋律を音楽で表現するだけではなく，言語活動や身体表現などと関連させることが重要であり，活動意図を踏

まえた音楽の開発も不可欠としている。

本研究はこれを引き継ぎ，子どもの言語活動，音楽表現，身体表現の関連を図った「子ども向けミュージカル」のあり方を探求するものである。そこで，山田克巳「リズミック王国 〜パークスの箱〜（以下，「リズミック王国」と示す）」[5]（2020）を対象として開発及び改善することを試みた。「リズミック王国」は，3 歳児以上向けのミュージカルとし，上演時間約 30 分，子どもたちが出演者と一緒に言葉，音楽，身体で表現をする「子ども向けミュージカル」である。出演者は拓殖大学北海道短期大学の「特別研究（身体表現）」を履修する 1 年生 32 名で，子どもの鑑賞や表現の実際を想定し自発的・主体的な活動をめざして創意工夫する授業となる。その実践研究として，新型コロナウイルス感染症の拡大防止措置を行いながら深川市近郊の幼児教育施設を本学に招いての公演を計画した。

2.「5 つの領域」の選択と取扱い

幼児教育では，幼稚園教育要領等に示される「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の各領域（以下，「5 つの領域」と示す）による指導で教育課程を編成する。その際，5 つの領域は相互に関わっているとしているため，単独の領域で指導を計画するのではなくいくつかの領域を関わらせて指導を構築することになる。また，幼稚園教育要領は「幼稚園教育において育みたい資質・能力」[6] と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[7] を対にして示し，「指導と評価の一体化」を図った教育課程の編成も求めている。実践にあたっては，子どもの自発的な活動としての「遊び」とこれを支える「環境」を設定し，いくつかの領域が関連する活動によって「幼稚園教育において育みたい資質・能力」に迫ることになる。ここで課題になるのは，「子ども向けミュージカル」で展開される学びを想定して領域の選択と具体的な取扱いを検討することである。今回は，領域「人間関係」「言葉」「表現」の取扱いについて検討することとした。

2.1　領域「人間関係」の検討

領域「人間関係」で示される内容は 13 項目[8] で，その中から次の 3 点の取扱いを検討した。

① いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
② 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
③ よいことや悪いことがあることに気付き，考えながら行動する。

子どもが出演者の言葉やリズムなどに合わせて表現することは，ミュージカルのストーリーに導かれて友達と目的を共有して最後までやり遂げたり，一緒に表現して達成感を得たりする活動となる。そのため，①と②の内容に係るとしたが，重視したのは子どもがミュージカルのストーリーに促されて自発的に活動することと，その機会をできるだけ多く設定することである。また，ストーリーの内容は，協力することや粘り強く取り組むことの大切さ，人を騙すことが悪いことなどの気付きを促すものとなっていて，③の内容に係るものとした。「リズミック王国」のストーリーは次の通りである。

遠い昔，あるところに「リズミック王国」という名の国がありました。この国にはパークスという不思議な力を持ったオブジェがあり，そのおかげで平和が保たれていました。しかし，この平和がとても長く続いたことで，国を守るために結成された BLUE, RED, GREEN の戦士たちの統率が乱れ，もめ事さえ見られるようになっていました。

困った王様は，パークスが収められている箱を 50 年毎に交換する儀式を利用することを思いつき，「この儀式が成功しなければ箱は開けられない」と戦士たちに団結して取り組むよう命じます。その儀式とは，オノマトペなどを唱えながら三三七拍子にのって身体で表現することでした。

戦士たちは何度も何度も挑戦し失敗しましたが，大勢の子どもたちの力も借りて難関を突破していきます。最後の試練では，力を合わせてリズミックパワーをパークスに浴びせ，儀式は見事に終えることができました。ところがパークスの箱は開きません。すると王様は鍵を使って箱をすんなり開けてしまいました。拍子抜けした戦士たちは，王様に儀式は本当に必要だったかと詰め寄ります。すると，王様は「協力することやあきらめないことの大切さに気づいて欲しかった」と本心を語ります。王様の気持ちを知った戦士たちは，再び一丸となって国を守る誓いを立てました。

こうしたストーリーによる学びは，紙芝居や絵本の読み聞かせなどでも同様で，登場人物の心情とその変化をたずねたり，ところどころでこれまでのストーリーを振り返ったりするなどし，フィードバックする活動が有効である。今回は，出演者によってこうしたフィードバックをする場面を設定した。

2.2　領域「言葉」の検討

領域「言葉」で示される内容は 10 項目[9] で，その中から次の 2 点の取扱いを検討した。

① いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
② 絵本や物語などに親しみ，興味をもって聞き，想像をする楽しさを味わう。

「リズミック王国」では，子どもの活動と関連させながら擬音語や擬声語等[10]（オノマトペ：onomatopoeia）で表現する活動を多く取り入れるように改善を図った。日本語には多種多様な擬音語や擬声語等があり，ひとつの語がたくさんの意味または用法を持つことや，日常的に無意識のうちに多用されている実態があるのも特徴である。幼児期は語彙数が飛躍的に増えるため，これに擬音語や擬声語等を用いることによって言葉の表現力を向上させることが期待できる。また，萬（2020）は，『子どもの音楽表現から考える幼小連携』の子ども向けの曲集の調査で歌詞に擬音語や擬声語等が認められる割合は掲載曲の半数を超えると報告している。そして，「日常で多用される繰り返し言葉（畳語）であること，言葉のリズムと音楽のリズムとの関係性がよく表現しやすいこと，などから多用される傾向にあると推測できる」と述べている。そして，子どものうたの歌詞に使われる擬音語や擬声語等を表 1 のように 4 分類として出現の割合を調べ，分類 2 と分類 4 とで 80%近くを占めると報告している。以上から，歌唱活動においても使用頻度の高さが指摘できる。

表 1 擬音語や擬声語等の四分類と出現の割合

（%）

分類 1 音	分類 2 状態や様子	分類 3 動きや気持ち	分類 4 鳴き声
12.7	50.8	7.9	28.6

実践研究では，出演者（ミュージカルでの王様や戦士）が公演に向けて検討し表現した擬音語や擬声語等は表 2 となり，計 52 種類を三三七拍子のリズムに合わせ，言葉と身体とで表現することとした。身体で表現することを加えたことは，子どもたちに擬音語や擬声語等が表す状態や様子を具体的にイメージさせ，正しく理解できるようにする意図がある。

表 2 検討し使用した擬音語や擬声語等

分類 1 音（9）	分類 2 状態や様子（22）	分類 3 動きや気持ち（5）	分類 4 鳴き声（16）
エンエン，ドンドン，ポキポキ，ビリビリ，トントン，カシャカシャ，	ピカピカ，クネクネ，ガキガキ，フラフラ，ブラブラ，ビカビカ，	ワクワク，ニコニコ，ドキドキ，コチョコチョ，メソメソ	ガオガオ，ウホウホ，ワンワン，ウッキーウッキー，ホウホウ，ヒヒ

ドスドス，パチパチ，コツコツ	ビシビシ，モリモリ，グルグル，キラキラ，ピョンピョン，シュッシュッ，ムニムニ，パンパン，ギスギス，チョキチョキ，ツンツン，パタパタ，ユラユラ，ギュッギュッ，サッサ，ドカン		ンヒヒン，シャーシャー，ニャンニャン，ブヒブヒ，コケコッコー，ゲロゲロ，カーカー，モーモー，パオーン，ミーンミン，チューチュー

2.3　領域「表現」の検討

領域「表現」で示される内容は 8 項目[11] で，その中から次の 2 点の取扱いを検討した。

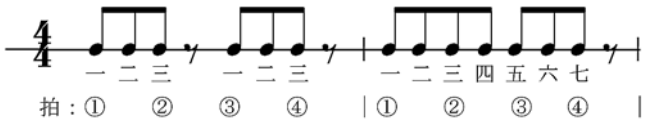
① 音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
② 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり，演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

子どもが音楽を表現したり鑑賞したりする活動の多くは領域「表現」に係るもので，出演者に合わせて手拍子などで表現する活動を多く取り入れるよう改善を図った。こうした表現は，①の内容に示される「簡単なリズム楽器」を使うことと関連し，体を叩くなど体を楽器にして音楽表現するボディパーカッション（Body percussion）の概念とした。楽器を演奏するための技能は，子どもの発達段階に応じて取り扱うことが重要であるが，演奏技能の習得は運動機能が十分に発達していない子どもにとって難しい活動となる。そのため，本研究では楽器演奏に係る操作を軽減した表現活動となるように，自分の手や足などを使って拍やリズムを表現することを多く取り入れた。また，擬音語や擬声語等が現しているものを身体で表現することは，②の内容に係るとした。出演者が擬音語や擬声語等からイメージされる様子などを言葉とともに身体で表現し，それらの表現を子どもたちが模倣することによって自発的・主体的な活動となることをねらった。

さらに三三七拍子を活用して，拍に合わせボディパーカッションで表現することを繰り返し行えるようにした。三三七拍子の由来や起源は諸説あるが，日本古来の「手締め」の文化と関係し，そろって手を打つことに大きな意味がある。三または七という奇数の数で現されると音楽的なまとまりをイメージしにくいが，実際はまとまりがよく子どもにとっても表現しやすい。本研究では三三七拍子を譜例 1 に示すように，4 分の 4 拍子，

八分音符と八分休符による2小節のまとまりとして取り扱っている。この反復によって4小節の安定感ある音楽的なまとまりが形成される。さらに，このリズムを唱歌[12]で「チャチャチャ，チャチャチャ，チャチャチャチャチャチャチャチャ」と言葉で表すことも，子どもにとって有効な表現方法のひとつといえる。なお，こうした我が国の文化に係る取扱いとして領域「環境」の一部に述べられている[13]。

譜例1　本研究での三三七拍子の取扱い



3. 小学校との連携に関して

萬（2021）は，「5つの領域」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関係性を表3とし「人間関係」「環境」への偏りを指摘しつつ，「指導と評価の一体化」の概念から今後の整理の必要を述べた[14]。本研究では表3に「小学校以降の教科との関連」を加え，領域「人間関係」からは「道徳」，領域「言葉」からは「国語」，領域「表現」からは「音楽」，との連携を考察することとした。また，今回はさらに具体性を求めて小学校学習指導要領は〔第1学年及び第2学年〕の指導内容に基づいて検討している。

表3　「5つの領域」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関係性

領　域	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	小学校以降の教科との関連
健　康	⑴　健康な心と体	体育（保健体育）
人　間 関　係	⑵　自立心	道徳
	⑶　協同性	
	⑷　道徳性・規範意識の芽生え	
	⑸　社会生活との関わり	生活・社会・道徳
環　境	⑹　思考力の芽生え	生活・理科
	⑺　自然との関わり・生命尊重	
	⑻　数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚	算数（数学）・国語
言　葉	⑼　言葉による伝え合い	国語・外国語・外国語活動
表　現	⑽　豊かな感性と表現	音楽・図画工作（美術）

「リズミック王国」のあらすじは，あきらめずに粘り強く取り組むことや善悪の判断などを取り上げている。これを子どもたちが理解することで領域「人間関係」に係るとし，小学校「道徳」で関連する具体を下線で示し表4に例示した。

表 4　領域「人間関係」と小学校「道徳」との関連の例

幼稚園「人間関係」	小学校「道徳」
⑷　いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。 ⑻　友達と楽しく活動する中で，共通の目的を見いだし，工夫したり，協力したりなどする。 ⑼　よいことや悪いことがあることに気付き，考えながら行動する。	〔善悪の判断，自律，自由と責任〕 よいことと悪いこととの区別をし，よいと思うことを進んで行うこと。 〔友情・信頼〕 友達と仲よくし，助け合うこと。

※表中の番号等は，幼稚園教育要領や小学校学習指導要領に示されているもの（以下，同じ）

また，挿入曲の歌詞の理解や劇中に用いられる擬音語や擬声語等の理解について領域「言葉」に係るとし，小学校「国語」で関連する具体を下線で示し表 5 に例示した。

表 5　領域「言葉」と小学校「国語」との関連の例

幼稚園「言葉」	小学校「国語」
⑻　いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。 ⑼　絵本や物語などに親しみ，興味をもって聞き，想像をする楽しさを味わう。	〔知識及び技能〕 ⑴　ア　言葉には，事物の内容を表す働きや，経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。 〔思考力，判断力，表現力等〕 A　話すこと・聞くこと ⑴　エ　話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き，話の内容を捉えて感想をもつこと。

そして，挿入曲やリズムを表現することなどについて領域「表現」に係るとし，小学校「音楽」で関連する具体を下線で示し表 6 に例示した。

表 6　領域「表現」と小学校「音楽」との関連の例

幼稚園「表現」	小学校「音楽」
⑹　音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。 ⑻　自分のイメージを動きや言葉などで表現したり，演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。	A　表現　⑵　器楽　〔技能〕 ウ　㋐　範奏を聴いたり，リズム譜などを見たりして演奏する技能を身に付けること。 B　鑑賞　〔思考力，判断力，表現力等〕 ⑴　ア　曲や演奏の楽しさを見いだし，曲全体を味わって聴くこと。

別の視点では，こうしたミュージカルなどを鑑賞する機会の設定は，幼稚園は「行事の指導」で，小学校は「特別活動」での取扱いとなる。特に小学校の「特別活動」[15] には，「平素の学習活動の成果を発表し，自己の向上の意欲を一層高めたり，文化や芸術に親しんだりするようにすること」（2017：167）とあり，学校全体の教育課程を編成す

る際に文化的行事の設定が求められ，ミュージカルなどの総合芸術の鑑賞が該当すると考える。

このように小学校以降の教育課程は，幼稚園の領域による教育課程と連携させることが可能と考えられ，子どもの体験やレディネスを踏まえることで有効性は高まるとも考える。ただし，小学校以降の教科の独自性を加味すると，特に〔第 1 学年及び第 2 学年〕では教科間の横断的な取扱いが実現に向けた鍵となるだろう。しかし，中学校以降では教科担任制を導入し教科の専門性が高くなるに従い，横断的な取扱いの難しさが顕著となる。ここに，それぞれの校種間連携を図る際の課題があると考える。いずれにしても，子どもの発達を連続的に捉え，これに応じた適切な教育課程は求められる。

4.「リズミック王国」の開発及び改善

「リズミック王国」の挿入曲は，「どうすればいい」「守れよ王を」「平和の戦士」「魔法のリズム」の 4 曲である。音楽をより聴きやすくするために編曲（アレンジ）と収録を専門家[16] に委託し，各シーンと曲想がマッチングするよう音楽（伴奏）を改めて開発した。ここで検討を要したのが使用する音源の選択である。例えば，同じ旋律をストリングス系とブラス系のそれぞれの音源で比較聴取した場合，感じ取る曲想に大きな違いが生じる。そして，挿入曲が使われるシーンに応じて音源を選択することは，聴き取りやすさにとどまらずシーン全体の雰囲気に大きく影響する。そして，『子どもの音楽表現から考える幼小連携』を参考に，拍子は「4 分の 4 拍子」，旋律は音階上の隣り合った音へ進行する「順次進行」，最低音と最高音の音程間は 8〜10 度程度，調性は音程間を優先して不問，を基盤とし改善を図った。

4.1　第 1 曲：どうすればいい

「どうすればいい」はオープニングの曲で，拍子・速度・調性は表 7 とした。その特徴は表 8 の台詞と挿入歌の構成で，冒頭の台詞に接続して 4 小節の短い挿入歌が入り，直ぐに台詞に戻るものである。そのため，台詞表現のスピードと挿入歌の速度が一致するように速度の設定を調整し，さらに台詞と挿入歌で声の音域が滑らかに接続するように設定した。このことで子どもたちが聴き取りやすくなるよう配慮し，台詞と音楽（歌）とで展開されるミュージカルの導入を図っている。

表 7　拍子・速度・調性

拍　子	4 分の 4 拍子
速　度	♩＝76
調　性	調号なし（ハ長調）

表 8　台詞と挿入歌

あ〜困った，どうすればいい　どうすればいいんだ
お父様！お母様！私に力をお貸しください！

挿入歌（4 小節）　ついにやって来たこの時が　50 年というその節目が

だけど，だけど，戦士たちの気持ちがバラバラなのです
パークスの力に頼りすぎていたのでしょうか
どうすれいい，どうすればいい

4.2　第 2 曲：守れよ王を

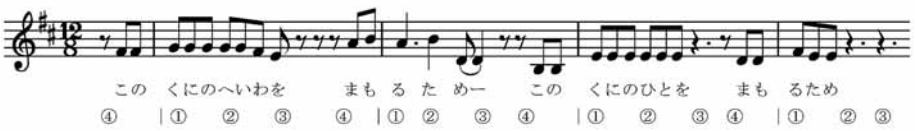
拍子・速度・調性は表 9 とし，言葉の自然のまとまりを重視して 8 分の 12 拍子でゆったりとした雰囲気を醸し出す曲想を優先した。音楽理論上，8 分の 12 拍子は 4 分の 4 拍子に書き換えることは可能で，拍子の違う譜例 2 と譜例 3 に示す楽譜を実際に演奏しながら検討した。4 分の 4 拍子の記譜では，三連符によって 8 分の 12 拍子と同様のリズムを表すことは可能となるが，譜例 3 中の実線枠の八分音符と八分休符の表記，点線枠のシンコペーション（syncopation, 切分法）のリズムに微少な差違が生じる。

しかし，8 分の 12 拍子の拍のカウントは 4 拍となり，理論的には 8 分の 12 拍子は「複合 4 拍子」となる。したがって，8 分の 12 拍子は 4 分の 4 拍子系に含まれるとし，書き換えを採用しなかった。そして，アウフタクト（Auftakt, 弱起）による旋律と歌詞との関係，言葉が聴き取りやすい速度設定，順次進行を基本としつつ跳躍進行を効果的に配置するなどして改善を図った。

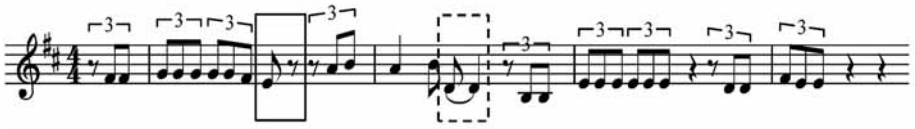
表 9　拍子・速度・調性

拍　子	8 分の 12 拍子
速　度	♩＝102
調　性	2♯（ニ長調）

譜例 2　8 分の 12 拍子　※○数字は拍のカウント



譜例 3　4 分の 4 拍子



4.3　第 3 曲：平和の戦士

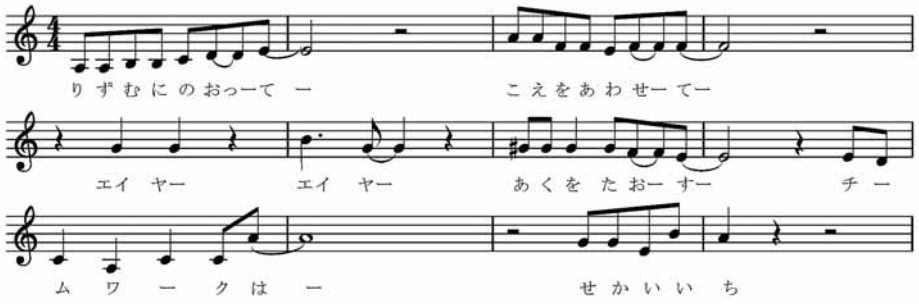
3 組の戦士たちが登場する際のテーマ曲で，登場後に子どもたちと三三七拍子で擬音語や擬声語等を表現する重要な場面へと続く。拍子・速度・調性は表 10 とし，譜例 4 に示す旋律は 4 分の 4 拍子で順次進行ではじまるが，強調したい歌詞「チームワークは世界一」は跳躍進行で強調した。なお，萬（2020）の小学校音楽科用教科書（低学年）の掲載曲の分析から，音程は 95%近くの楽曲が 9 度に収まるとの報告を踏まえこれに準じ譜例 5 に示す音程とし，フレーズを 4 小節でまとめることによる聴き取りやすさに配慮した。速度の設定をやや速めにしたが，歌詞（言葉）の発音や言い回しがむずかしくならないように十分な長さの休符を入れ，言葉のリズムに応じてシンコペーションによって表現するようにした。

ストーリーの進行では，Blue, Red, Green の戦士たちの登場ごとに「平和の戦士」が表現され，王様や戦士たちが三三七拍子で擬音語や擬声語等を表現するように設定している。例えば，王様が見本として「クネクネクネ（三拍子），ガキガキガキ（三拍子），フラフラ・フラフラ・フーラフラ（七拍子）」と示し，その後は戦士や子どもたちが与えられた課題を表現することになる。この時，子どもが複数回にわたり表現活動が行われるように設定することが「子ども向けミュージカル」としての特徴となる。

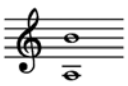
表 10　拍子・速度・調性

拍　子	4 分の 4 拍子
速　度	♩＝152
調　性	調号なし（ハ長調）

譜例 4　「平和の戦士」の旋律



譜例 5　最低音と最高音の音程（9 度）



4.4　第 4 曲：魔法のリズム

拍子・速度・調性は表 11 とし，伴奏は第 3 曲以降の活動で取り上げた三三七拍子のリズムを多用する音楽となっている。また，表 12 に示す歌詞は，ミュージカルのフィナーレを意識して改善を図った。

表 12 の「A」部分の歌詞は，ミュージカルのテーマとして重要な歌詞となり譜例 6 に示す旋律を 3 回反復し印象に残るようにした。また，表 12 に示す冒頭旋律部と主要旋律部ともに，各 4 小節で 4 つの旋律として 16 小節の楽節となり音楽的に安定した構成になるよう配慮した。「A 繰り返し：1 回め」の後の歌詞「おはよう！元気！だいじょうぶ！すてきだね！」「心を込めて誰かに伝えよう」の部分は，各 5 小節で 2 つの旋律に変化することで曲想も大きく変化させ，「A 繰り返し：2 回め」では歌詞「魔法の魔法のリズム」をさらに反復することでミュージカルのフィナーレを予感できるように改善を図った。その結果，穏やかな曲想のイントロダクションから，三三七拍子のリズムを力強く明示して冒頭旋律部がはじまり，主要旋律部を 3 回展開する構成とした。

表 11　拍子・速度・調性

拍　子	4 分の 4 拍子
速　度	♩＝140
調　性	1♭（ヘ長調）

表 12　歌詞及び全体の構成

冒頭旋律部

一人の力でできること　沢山たくさんあるけれど　（4 小節）
一人の力じゃできないことは　もっといっぱいあるんだ　（4 小節）
それは仲間をつくること　それは友達をつくること　（4 小節）
そしてたくさん話をすること　（4 小節）

主要旋律部

A
- やさしい言葉が笑顔をくれる　あかるい言葉が勇気をくれる　（4 小節）
- 平和な国をつくろうよ　争いなんてやめようよ　（4 小節）
- なぜかこころがひとつになる　魔法の魔法のリズムにのって　（4 小節）

チャチャチャ，チャチャチャ，チャチャチャチャチャチャチャチャ
チャチャチャ，チャチャチャ，チャチャチャチャチャチャチャチャ　（4 小節）

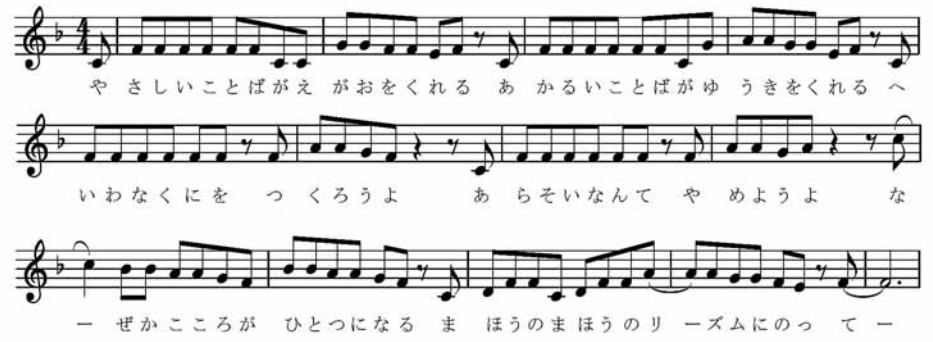
A 繰り返し：1 回め

ありがとう！元気！だいじょうぶ！すてきだね！　（5 小節）
心を込めて誰かに伝えよう　（5 小節）

A 繰り返し：2 回め

魔法の魔法のリズムにのって　（4 小節）
チャチャチャ，チャチャチャ，チャチャチャチャチャチャチャチャ
チャチャチャ，チャチャチャ，チャチャチャチャチャチャチャチャ　（4 小節）

譜例 6 「魔法のリズム」の旋律



5. まとめと今後の研究

本研究は，『子どもの音楽表現から考える幼小連携』との継続を意識しながら，幼児教育段階における表現活動について探求してきた。子どもの歌の表出に係る坂井ら（2001）の研究や紙屋（2003）の子ども向けミュージカルの取り組みを参考にしたが，2017 年（平成 29 年）告示の幼稚園教育要領等に準拠する先行研究は極めて少ない実態がある。これが本研究の困難さとなり独自性でもあり，この度の成果は意義あるものだと考える。また，「リズミック王国」の開発及び改善は，市販のシナリオや楽譜が少ない実態から貴重な教材であるとともに，今回出演者のために模範となる歌を録音したことで実用性が高くなった。

子どもが音楽表現する際は，音色やリズム，旋律などを聴き取り，歌詞の内容を理解したり言葉のまとまりと音楽のまとまりに気づいたりし，そこから曲想を感じ取りながら行われる。子どもの音楽表現を段階的にあるいは分析的にとらえ，それらを構造化したことは領域の相互関連を構築するヒントにもなった。実践研究として 2020 年 10 月 9 日拓殖大学北海道短期大学にて深川幼稚園の招待公演，11 月 8 日深川市教育委員会主催「子どもまつり」にて公演を行ったが，コロナ禍の感染対策により十分な検証とならず今後の課題としたい。

幼稚園教諭，保育士等の養成課程では学生が出演者となるが，自らの表現を子どもたちが模倣して合わせることを理解する必要がある。その際，適切な発音や発声を意図した歌い方，リズムや旋律の特徴を理解した表現，子どもの運動機能の発達を踏まえた表現などを創意工夫することが学習内容となる。その目的は，子どもたちが自発的・主体的にミュージカルを鑑賞・参加することで，面白さや楽しさを味わうことができるようにすることである。これらによって領域の相互関連を図る意味への理解が深まり，理論と実践のバランスが取れた確かな学びになると考える。

今次幼稚園教育要領により幼稚園と小学校の連携が明確に示され，文部科学省から具体的な取り組みが求められている。こうした動向から，幼児教育の目的や内容が次のステージに移ろうとしていることが推測できる。幼稚園等と小学校の教育課程の違いに着目した考察も行ったが，連携に取り組むのは幼稚園等のみの課題ではない。学習活動レベルで言えば，幼稚園教育要領に示される幼児の自発的な活動としての「遊び」とこれを支える「環境の整備」から，小学校学習指導要領に示される「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」への滑らかな連続性が必要になるだろう。これを意図した幼児教育段階での実践研究はますます求められる。

謝辞

本研究は 2020 年度の拓殖大学人文科学研究所個人研究助成を受けた。関係の皆さまに心より感謝申し上げる。（山田）

《注》

（1） 朝日新聞デジタル 2021 年 7 月 20 日『5 歳児の教育プログラム　文科省が作成へ　慎重論も』伊藤和行

（2） 本稿では「幼小連携」と示すが，「幼」は幼稚園，保育所，認定こども園，特別支援学校幼稚部等の幼児教育施設を，「小」は小学校，特別支援学校小学部等の小学校段階の教育施設を意味し，これらの連携を図る意で用いる。

（3） 本稿で「幼稚園教育要領等」と示す場合，幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領の 3 歳児以上の内容を指している。

（4） 萬司　2020『子どもの音楽表現から考える幼小連携 ── 子ども向けミュージカルの実践から ──』拓殖大学論集人文・自然・人間科学研究 44 号

（5） 山田克巳　2020『リズミック王国 〜パークスの箱〜（シナリオ・楽譜）』拓殖大学北海道短期大学

（6）「幼稚園教育要領に示される「幼稚園教育において育みたい資質・能力」は以下の通り。

1　幼稚園においては，生きる力の基礎を育むため，この章の第 1 に示す幼稚園教育の基本を踏まえ，次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。

1）　豊かな体験を通じて，感じたり，気付いたり，分かったり，できるようになったりする「知識及び技能の基礎」

2）　気付いたことや，できるようになったことなどを使い，考えたり，試したり，工夫したり，表現したりする「思考力，判断力，表現力等の基礎」

3）　心情，意欲，態度が育つ中で，よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力，人間性等」

（7）「幼稚園教育要領に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は以下の通り。各項目の説明文は省略。

3　次に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は，第 2 章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり，教師が指導を行う際に考慮するものである。

1）　健康な心と体

2）　自立心

3）　協同性

4） 道徳性・規範意識の芽生え
5） 社会生活との関わり
6） 思考力の芽生え
7） 自然との関わり・生命尊重
8） 数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚
9） 言葉による伝え合い
10） 豊かな感性と表現

（8） 領域「人間関係」に示される 13 項目は以下の通り。
1） 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
2） 自分で考え，自分で行動する。
3） 自分でできることは自分でする。
4） いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
5） 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
6） 自分の思ったことを相手に伝え，相手の思っていることに気付く。
7） 友達のよさに気付き，一緒に活動する楽しさを味わう。
8） 友達と楽しく活動する中で，共通の目的を見いだし，工夫したり，協力したりなどする。
9） よいことや悪いことがあることに気付き，考えながら行動する。
10） 友達との関わりを深め，思いやりをもつ。
11） 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き，守ろうとする。
12） 共同の遊具や用具を大切にし，皆で使う。
13） 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

（9） 領域「言葉」に示される 10 項目は以下の通り。
1） 先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち，親しみをもって聞いたり，話したりする。
2） したり，見たり，聞いたり，感じたり，考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
3） したいこと，してほしいことを言葉で表現したり，分からないことを尋ねたりする。
4） 人の話を注意して聞き，相手に分かるように話す。
5） 生活の中で必要な言葉が分かり，使う。
6） 親しみをもって日常の挨拶をする。
7） 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
8） いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
9） 絵本や物語などに親しみ，興味をもって聞き，想像をする楽しさを味わう。
10） 日常生活の中で，文字などで伝える楽しさを味わう。

（10） 本稿で「擬音語や擬声語等」と示す場合，金田一（1978）の整理「擬音語」「擬声語」「擬態語」「擬容語」「擬情語」を意図して示している。

（11） 領域「言葉」に示される 8 項目は以下の通り。
1） 生活の中で様々な音，形，色，手触り，動きなどに気付いたり，感じたりするなどして楽しむ。
2） 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ，イメージを豊かにする。
3） 様々な出来事の中で，感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
4） 感じたこと，考えたことなどを音や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりなどする。
5） いろいろな素材に親しみ，工夫して遊ぶ。

6） 音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
7） かいたり，つくったりすることを楽しみ，遊びに使ったり，飾ったりなどする。
8） 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり，演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

（12） 唱歌は「しょうが」と発音し，「口唱歌（くちしょうが）」ともいう。日本語のもつ固有の音感によってリズムや旋律を表す。

（13） 領域「環境」 3 内容の取扱い に次のように述べられている。
4） 文化や伝統に親しむ際には，正月や節句など我が国の伝統的な行事，国歌，唱歌，わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり，異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて，社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。

（14） 萬司 2021『幼稚園教育要領における「指導と評価の一体化」に関する考察』拓殖大学北海道短期大学研究紀要第 1 号

（15） 文部科学省 2017『小学校学習指導要領』同発行の 第 6 章 特別活動 第 2 各活動・学校行事の目標及び内容 〔学校行事〕 2 (2) 文化的行事 の記述内容

（16） 工藤江里菜，ピアノシンガーソングライター・作編曲家（株式会社ハツミミ 代表取締役）

参考文献・引用文献

厚生労働省 2018『保育所保育指針解説』 同発行

厚生労働省 2017『保育所保育指針』 同発行

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 同発行

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2017『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 同発行

文部科学省 2018『幼稚園教育要領解説』 同発行

文部科学省 2017『幼稚園教育要領』 同発行

文部科学省国立教育政策研究所 2019『学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編』 同発行

文部科学省国立教育政策研究所 2020『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校国語』 同発行

文部科学省国立教育政策研究所 2020『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校音楽』 同発行

紙屋信義 2003『保育者養成における子どもミュージカル発表の実際』千葉大学教育学部研究紀要 51

衣川久美子・山崎和子・坂井康子 2013『保育士，幼稚園，小学校教諭養成校で用いられている子どもの歌』甲南女子大学研究紀要第 49 号人間科学編

金田一春彦著・浅野 鶴子 1978『擬音語・擬態語辞典 角川小辞典〈12〉』角川書店

坂井莉野・萬司 2018『幼稚園教育要領改訂後の教員養成の在り方：三つの幼児教育施設の関係性と小学校との接続から』拓殖大学北海道短期大学研究紀要創立 50 周年記念号

坂井康子・五味克久 2001『子どもの歌唱におけるフレーズの長さと息継ぎについて』神戸大学発達科学部研究紀要 9

萬司 2020『子どもの音楽表現から考える幼小連携 ── 子ども向けミュージカルの実践から ──』拓殖大学論集人文・自然・人間科学研究 44 号

萬司 2021『幼稚園教育要領における「指導と評価の一体化」に関する考察』拓殖大学北海道短期大学研究紀要第 1 号

（原稿受付 2021 年 10 月 25 日）

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 157–176　　March 2022

神奈川県の旧制中学校における英語教育史（２）

── 第四中学校以降の外国人講師を中心に ──

保　坂　芳　男

English Education at Middle Schools in Kanagawa Prefecture before WWII（２）:

With a Focus on Native English Teachers at Middle Schools（No. 4–No. 6）

Yoshio Hosaka

Abstract

Before WWII Kanagawa Prefecture hired native English teachers at middle schools, in order to enhance the quality of English education. I have decided to publish two papers: one covers from No. 1 to No. 3 middle school, and the other from No. 4 to No. 6 school. In this paper I focus on the last three middle schools （No. 4 to No. 6 middle school）.

Kanagawa Prefecture founded a middle school in 1887, the last among 47 prefectures. This prefecture, however, was very much influenced by an international climate encouraging English education owing to Yokohama city having importance as an international port. At that time, generally, the quality of English education was high, also in the last middle school, as Hosaka（2021）stated.

According to this research, I've come to the following conclusions.

⑴ The prominent principals at the three middle schools decided to hire native English teachers, despite having to pay them high salaries.

⑵ Many of the native English teachers working at middle schools were not novice and they had long teaching experiences, despite being part-timers. M. Duncan, for example, had worked at Atsugi（1932〜?）, Kawasaki（1935）, Yokosuka（1936）, Shonan（1936–1937）and Odawara middle schools（1937）.

⑶ Mr. Peake had taught English at Shonan middle school（1922–1923）and had many good memories. His teaching experiences at Shonan led to Fujisawa not being bombed during WWII.

⑷ Mr. Bavier was one of the staff who developed the excellent English Education well known as The Shonan Method in the history of English education in Japan.

キーワード：神奈川県の旧制中学校，英語教育史，湘南メソッド，キラス・H・ピーク

はじめに

保坂（2021）では，整備が遅れた神奈川県における旧制中学校の英語教育に関して，主に第一中学から第三中学までを研究対象とした。今回は主に第四中学から六番目の湘南中学校までを対象とする。さらに横浜商業学校も加えて論述を進めることにする。

江利川（2006）や保坂（2021）が述べているように，戦前の中心的な商業学校では多くの外国人講師を雇用しており，4 技能のバランスの取れた，ある意味では理想的な英語教育が行われていた。特に明治 15 年に設置された横浜商法学校は全国で 7 番目の設置であり東日本を代表とする商業学校として多くの外国人講師を雇用していた。

1. 保坂（2021）で明らかにされた神奈川県の旧制中学の英語教育

神奈川県が公立中学校を設置したのは，他県に比べて極めて遅く，明治 30 年の神奈川県尋常中学校が最初である。後の第一中学校（一中），現在の希望ケ丘高等学校である。二番目は第二中学校（二中），現在の小田原高等学校である。三番目は第三中学校（三中）で，現在の厚木高等学校である。

これらの中学の英語教育史の研究から以下の 5 点が明らかにされた。

① 3 校とも校長の語学教育に関する卓見した考えにより外国人講師採用が促進された。
② 一中では，外国人講師は他校に比べて長期に勤務している傾向にある。それぞれの経歴を調査すると多くの講師は他校での経験が豊富であり，前任校で授業の評判が良く口コミで採用された可能性がある。
③ 一中の英語教育の発展には木村校長を初め隈部富良ら日本人英語教師の貢献が大きかった。
④ 二中，三中では，兼務の制度が取られていた。
⑤ 神奈川県の旧制中学校での教授経験がその後の人生に大きな影響を与えた場合が見られた。戦後，駐日大使として赴任した Allison である。一方で宣教師としての親の赴任に伴い日本に居住することになり英語教師になった M. Benninghoff の例も見られた。

神奈川県の中等教育は，明治 30 年代に上記の 3 校が設置されたが，他府県に比べてなお低調の観を免れなかった（『神奈川県教育史』通史編上巻，p. 903）。

2. 神奈川県内の旧制中学校（第四中学校以降）

明治 41 年 4 月，横須賀市に神奈川県立第四中学校が開校した。さらに五番目の公立中学校として，大正 3 年 4 月に神奈川県立第二横浜中学校[1] が，六番目の公立中学校として，大正 10 年 4 月に神奈川県立湘南中学校が藤沢町に開校した。第四中学校は，現在の横須賀高等学校である。五番目の第二横浜中学校は，現在の横浜翠嵐高等学校である。六番目の湘南中学校は，現在の湘南高等学校である。

3. 第四中学校

明治時代に設置された公立の中学校は，第四中学校（以下四中）までである。四中の沿革は表 1 のとおりである。

表 1　四中の沿革（学校 HP 等より筆者が作成）

明治 41（1908）年 6 月 20 日	神奈川県立第四中学校，開校式を行う
大正 2（1913）年 3 月 11 日	神奈川県立横須賀中学校に改称
昭和 23（1948）年 4 月 1 日	学制改革により神奈川県立横須賀高等学校に改称
昭和 25 年 4 月 1 日	男子校から男女共学校に移行
平成 20 年（2008 年）10 月 25 日	創立 100 周年記念式典を開催

3.1　厳格な校長，吉田庫三と生徒心得

初代校長は，吉田庫三（1867–1922）である。吉田庫三は，吉田松陰の甥である。

明治 41 年 2 月 26 日　吉田庫三，校長に任命される。明治 41 年 4 月 1 日，神奈川県立第四中学校が開校となる。二中の校長（明治 34 年～明治 37 年）等を経ての赴任であった。その他，吉田に関する詳細は保坂（2021）を参照のこと。大正 11（1922）年 6 月，吉田は現職のまま逝去，在職 15 年であった。

日清・日露戦争を経て急速に近代軍港都市として発展した横須賀は，人口も増加し商業も発達してきた。一方，治安の悪化，風俗の乱れ，特に生徒の居住地や通学路の大滝町や柏木田の遊郭の存在，伝染病など衛生上の問題など，都市としての発展にともなう横須賀の光（プラス面）と陰（マイナス面）が，純粋な生徒に及ぼす影響を危倶したことなどにより，以前，神奈川県立第二中学校の校長時代の武士の城下町小田原で行ったのと同様の厳しい方針で臨んでいったのではないだろうかと思われる（『創立百周年記念誌「百年の風[2]」』，pp. 247–248）。

吉田庫三初代校長の教育の厳格さを示すエピソードとしては，生徒数が入学時 90 名だったのが，卒業時には退学などで 48 名になっていたことがよく挙げられる。その主因として生徒に対して厳しく律したことが「生徒心得」から知ることができる。「生徒心得」は，吉田校長自身が作ったもので，敬礼の仕方，服装，自習方法など十二章六十カ条からなっていた。また，これは常時携帯が義務づけられ，忘れた者は家まで取りに帰らされた。遠方の者が学校に戻ったらすでに授業は終わっていたとの話も残る（同上）。

一方で吉田は生徒想いでもあった。明治 42 年の横須賀市の繁華街の大家では，吉田は被災家庭を一軒一軒見舞っている。生徒が重病にかかると自宅を訪問し，大けがをすれば「大変だろう」と声をかける（『わが母校わが友』，p. 77）。吉田の一徹さに対して多くの生徒は「高潔さ」を見出し吉田イズムが浸透し四中の伝統となっていった。

軍港のある横須賀の土地柄もあろうが，吉田イズムが徐々に浸透し，いつの間にか「軍人養成のための中学・横中」という言葉が定着するようになった。

3.2　四中の外国人教師

四中の外国人講師の一覧は表 2 のとおりである。吉田が赴任したのは明治 41 年，それから 15 年間在職しそのまま死去したので，四中の外国人講師採用は吉田が中心となって行ったと考えられる。最初の外国人講師[(3)] は，Smelser である。

表 2　四中に勤務した外国人教師（『百年の風』，p. 377 等）

F. L. Smelser	明治 44 年 1 月？～大正 2 年 8 月 13 日
A. M. デーセント	不明（～明治 43 年 12 月か）
スティーブンソン	大正 2 年 8 月～大正 9 年 4 月
P. B. Shoemaker	大正 9 年 6 月～大正 10 年 4 月
ヘンダーソン	大正 11 年 10 月～大正 13 年 3 月
J. C. Ross	大正 13 年 4 月～大正 15 年 3 月
ジェームス　フーバー	大正 15 年 4 月～昭和 2 年 3 月
エルク・S・ベル	昭和 2 年 4 月～昭和 3 年 3 月
メルカン・ダンカン	昭和 11 年 5 月～昭和 11 年 9 月

①　F. L. Smelser

『百年の風』の職員一覧表には，勤務年月日の記録がないが本文中に，「大正 2 年 8 月 13 日　かねて帰国中であった英語教師スメルサー氏の嘱を解き，同 25 日にスティブンソン氏を委嘱する」（p. 30）とある。

保坂（2021）によると明治 36 年の 1 年間は銚子商業学校に勤務した。また，大正 7

年まで第二横浜中（『美なりや翠嵐　神奈川県立第二横浜中学校横浜第二中学校横浜第二高等学校横浜翠嵐高等学校創立100周年記念誌[4]』，p. 735）に勤務している。四中に勤務し始めた時期は不明だが，創立当初の明治41年～大正2年，長くても6年，勤務した可能性が考えられる。しかし，後述のデーセントの記録からSmelserが四中に勤務したのは明治44年1月以降であると考えられる。

一方で，大正7年まで第二横浜中に勤務という記録がある。大正2年8月以前に帰国し再来日，それから第二横浜中に勤務したと考えられる。その他詳細は保坂（2021）を参照のこと。

②　A. M. デーセント

『百年の風』の職員録には，E. M. デーセントとある。他の資料（『山口県教育関係職員録』，1910, p. 25』）に，A. M. デーセントがいる。和歌山県から異動し下関商業学校に勤務したA. M. デーセントである。和歌山での資料では，イーエムデーセント（『和中・桐蔭同窓会　会員名簿』平成30年）であるが，彼が下関商業学校に異動したことは確認されている。「下関商業学校に明治44年9月1日～大正3年11月25日勤務（『下商百年史　資料年表編』）」，「大正3年11月25日　デーセント，英国に帰国」とある。従ってE. M. デーセントとA. M. デーセントは同一人物となる。両者の混同からA. M. デーセントの方が正しいように思われる。また履歴書が下関商業学校に残されている。その経歴から同一人物であることは間違いない。

和歌山中には明治44年1月～8月までの勤務なので，四中での勤務期間は不明であるが，退職はそれ以前の明治43年12月ごろと考えられる。そうなると，デーセントが四中に勤務した最初の外国人講師ということになる。勤務開始は創立当初の明治41年4月からか。さらに，Smelserの勤務は，デーセントが和歌山に異動した後の明治44年1月からと予想できる。履歴書等から年代別にデーセントの経歴を整理すると以下の通りである。

1882（明治25）年　イギリス，コンウォール州生まれ
　　セントポール及ラグバイ学校に学ぶ
1903（明治36）年　清国で商業に従事する
1907（明治40）年　来日，神戸クロニクル及ヘラルド両新聞社に勤務
　　東京に移動，正則英語学校及び法政大学校の英語教師に
　　横須賀市第四中学に勤務（～12月）
1911（明治44）年1月　和歌山中学の英語教師（～8月）
1911（明治44）年9月　下関商業学校，英語教師

1914（大正 3）年11月　退職，英国に帰国

③　スティーブンソン

四中に大正 2 年 7 月～大正 9 年 4 月，勤務。公立中学の非常勤の外国人講師で 7 年弱の勤務は異例である。他の資料なし。

④　James H. Shoemaker

『百年の風』（p. 377）には，Shoemaker のみの掲載なので父か子か不明である。ただし，ただし大正 9 年 6 月～大正 10 年 4 月の勤務であり，父 James が大正 9 年 6 月に小田原中学を退職してその後，四中に勤務したと考えられる。息子の Paul であるとすると，小田原中学と四中勤務が全く重なっている。保坂（2021）には，二中と三中の兼務が報告されており無理ではないと考えられるが，父か子かどちらかについては今後の研究を待ちたい。ただ，今の段階では，父 James が小田原中学を辞めてすぐに四中に勤務したと考えている。

⑤　ヘンダーソン

四中に，大正 11 年 10 月～大正 13 年 3 月，勤務，その他詳細は不明。

⑥　ジョン[(5)]. Christopher. Ross

四中に，大正 13 年 4 月～大正 15 年 3 月，勤務。横須賀高校には資料が残されていない。「年 2400 円で横須賀中学校と平塚高等女学校に勤務（『神奈川県教育関係職員録』大正 14 年，p. 15, p. 18）とあり，同時期に横浜商業学校にも勤務した。

大正 8 年 1 月～12 年 4 月，函館商業学校（『函商八十年史』，p. 156, p. 159）に勤務した。その後，大正 12 年 11 月～13 年 3 月，神奈川県立商工実習学校に勤務（『神奈川県立商工高等学校創立五十周年記念誌』，p. 109）。さらに，大正 14 年 3 月まで横浜商業学校に勤務した（『進交会会員名簿』，1942, p. 16）。同時期に，年 2,400 円で横須賀中学校と平塚高等女学校に勤務（『神奈川県教育関係職員録』大正 14 年, p. 15, p. 18），昭和 2 年まで横浜二中に勤務した記録もあるが，詳細は不明（『翠嵐百年史』p. 735）

「カナダ人のジョン・クリストファー・ロッス（大正九・九～一二・四）という木材商であったとかいう先生であった」（『函商八十年史』，p. 159）。一般的には，宣教師が雇用される場合が多いが，函館，横浜という港町故の人選だったと思われる。

⑦　ジェームス　フーバー

四中に大正 15 年 4 月～昭和 2 年 3 月，勤務。フーバーに関しては，保坂（2021）が

詳しい。ハミルトン・ゼームス・フーバー，後に日本に帰化して安藤英富となった。横浜高等商業学校や神奈川県立商工実習学校等々，神奈川県内の多くの学校で英語を教えた。

⑧　エルク・S・ベル

エリク・スチュアード・ベル（『進交会会員名簿』，1942, p. 25）。横須賀中学には，昭和 2 年 4 月～昭和 3 年 3 月勤務（『百年の風』，p. 377）。昭和 7 年頃，横浜市立横浜商業学校及び横浜市立横浜商業専門学校でも勤務していた記録があるが，詳細は不明（『横浜市立横浜商業専門学校横浜市立横浜商業学校一覧』p. 53）。

後に清水市商船学校（現在の国立清水海上技術短期大学校）に勤務（『Y 校八十周年記念誌』，p. 253）。

成城中学校に，大正 11 年 6 月 1 日～昭和 17 年 3 月 31 日，勤務した（『成城』（革新倍大号），p. 18）。約 20 年も勤務したため，『成城学校百年』等には回想が残されている（p. 94）。

エリック・S・ベル先生の思い出

当時成城に二人の外国人教師がおられた。ベル先生は多くのエピソードを残し，最近他界されたことは誠に残念でならない。私個人も関東中学校 E・S・S・出場のため，一方ならぬ指導をいただいたものである。スピーチの練習のために，各学級を引率巡回して一々生徒に聴かせてくださったものだ。英語部の活躍や体育館おける弁論大会の盛大さ，又駒込や巣鴨等に弁論大会に参加したことも何回かあった（校友　左近允正矩―昭和 5 年卒―記）。

⑨　メルカン・ダンカン

メルカン・ダンカン，横須賀中学に昭和 11 年 5 月～昭和 11 年 9 月，勤務した。他にも小田原中学や厚木中学，横浜二中，湘南中学にも勤務，詳細は保坂（2021）を参照のこと。

4. 第二横浜中学校

大正 2（1913）年 3 月 17 日　神奈川県立第二横浜中学校が認可された。これにより，県立神奈川中学校は第一横浜中学校に，神奈川第二中は小田原中に，神奈川三中は厚木中に，神奈川四中は横須賀中に改称した。神奈川県の公立中学校としては，五番目の開校となった。

4.1　滝沢又一校長と「大平凡主義」

第二横浜中の初期を語るのに外せないのは，滝沢又一初代校長（1868-1937）である。「翠嵐の歴史を振り返る時，先ず浮かぶものに“大平凡主義”がある」（『翠嵐百年史』，p. 518）。彼が推奨した「大平凡主義」を母校の伝統と回想する。

> 当時は「修身と呼ばれる授業があり，滝沢校長先生が直接授業をされていました。この授業の中で滝沢先生は「人をかき分けて生きていくようなことをしてはいけない。平凡主義で世の中を渡っていきなさい。」とお話になりました。集団生活の中で協調性を重視する先生の考え方は，当時先生が野球を禁止しサッカーを正規の授業として取り入れたことにも表れています。一人の人間が抜きんでるよりも大勢の人が協力していくことが大切であるという考えで，個人プレーが目立つ野球よりもサッカーを勧められたのです。

大平凡主義の基，「学歴の立派さよりも，人物本位に，又成るべく苦労力行の士自学自修の人，所謂立志伝中の人を可なり多く採用した」（『翠嵐百年史』，p. 517）。

卒業生の一人福田は，「『平凡も徹すれば非凡になる』というのが瀧澤校長の言葉ですね。当時一中は成績が良い者。二中は成績で若干落ちるので，それで「大平凡主義」を強調されたんではないかな」（p. 543）と述べている。個人の成績では一中に敵わないかもしれないが，二中が一丸となって努力すれば一中に勝る可能性があるのではと瀧澤校長は考えたのではあるまいか。

瀧澤校長の経歴に関しては『神奈川県史』（別編）（p. 453）が詳しい。長野県生まれ，松本中学を経て帝国大学文学部史学科を卒業，直ちに新潟中学校教諭になる。明治 30 年 4 月～34 年 3 月，東京府第一中学校教諭（修身，英語，歴史担当），福井県立大野中学校校長となり，大正 3 年神奈川県立第二横浜中学校校長になる。昭和 6 年に退職するまで約 18 年間校長を務めた。瀧澤校長を中心に第二横浜中学校の基礎は作られた。

第二横浜中学校の沿革は表 3 のとおりである。

表 3　第二横浜中の沿革（HP 等より筆者が作成）

大正 2（1913）年 3 月 17 日	神奈川県立第二横浜中学校設立認可
大正 3 年 1 月 7 日	初代校長瀧澤又市任命
大正 3 年 5 月 11 日	開校式挙行
大正 12 年 4 月 1 日	神奈川県立横浜第二中学校と改称
昭和 23（1948）年 4 月 1 日	神奈川県立横浜第二高等学校と改称

昭和 25 年 4 月 1 日	神奈川県立横浜翠嵐高等学校と改称，男女共学に
昭和 26 年 4 月 1 日	2 学期制導入
平成 26（2014）年 11 月 4 日	開校 100 周年記念式挙行

4.2　第二横浜中学の外国人教師

第二横浜中の外国人講師の一覧（『翠嵐百年史』pp. 737–738）は以下のとおりである。開校当時から外国人講師を採用したと考えられる。

表 4　第二横浜中学に勤務した外国人教師（『翠嵐百年史』等）

アルハード・バナード・ハインド	大正 3 年〜大正 7 年
スメルサー	〜大正 7 年
バジェット	〜大正 8 年
H. S. グローリー	〜大正 10 年
エラスタス・ドレーバー	〜大正 11 年
ウオーター・シー・ヤング	〜大正 12 年
ローラー・トネー	〜大正 13 年
タッピング	〜昭和元年
ロッス	〜昭和 2 年
マルコルム・ダンカン	〜昭和 12 年

①　アルハード・バナード・ハインド

1914（大正 3）年〜1918（大正 7）年まで第二横浜中に勤務した記録があるが，詳細は不明（『翠嵐百年史』，p. 735）。『翠嵐百年史』には，「ハイント」とあるが，同窓会名簿（昭和 39 年〜平成 19 年）には，「ハインド」とある。一般的な名前としてはハインドが妥当であろう。

②　F. L. Smelser

Smelser に関しては保坂（2021）や四中の項を最初のこと。第二横浜中には大正 7 年までの勤務である。

③　エー・アール・パゼット

英語嘱託として神奈川県第三中学校（厚木中学校）に大正元年 8 月〜大正 3 年 3 月まで勤務（『戸陵百年の歩み（歴史編）』，p. 560）。大正元年〜3 年まで小田原中学校にも勤務（『小田原高校百年の歩み　資料編』，p. 108）。

横浜二中には大正 8 年まで勤務した記録あり。このパジェットと同一人物と思われるが，詳細は不明（『翠嵐百年史』，p. 735）。

④　H. S. グローリー

1921（大正 10）年まで横浜二中に勤務した記録があるが，詳細は不明（『翠嵐百年史』，p. 735）。ヘルバート・エス・クローリー，京都市立第二商業学校に大正 10 年 12 月～大正 11 年 8 月，勤務，京城基督教青年会所属，米国人（『京二商史』，p. 125）。月給 220 円（『京都府学事関係職員録』（大正十一年五月十五日現在），p. 16）。同一人物と考えられる。

⑤　エラスタス・ドレーパー[(6)]

エラスタス・ドレーパー，大正 11 年まで横浜二中に勤務した記録があるが，詳細は不明（『翠嵐百年史』，p. 735）。その他，横浜商業専門学校にも勤務，詳細は保坂（2021）を参照のこと。

⑥　ウオーター・シー・ヤング

大正 11 年 7 月ごろ一中に勤務した記録がある（『神中・神高・希望ケ丘高校百年史資料編』，p. 918）。大正 12 年まで横浜二中に勤務した記録（『翠嵐百年史』，p. 735）がある。その他詳細は不明。

⑦　ローラー・トネー

1924（大正 13）年まで横浜二中に勤務した記録があるが，詳細は不明。

⑧　タッピング

Henry Topping は，花巻，遠野，八戸等で伝道活動をし，盛岡中学で宮沢賢治を教えた可能性が考えられる（小林，p. 237）。妻，Genevieve は日本のキリスト教指導者として盛岡幼稚園を設立するなどした（『日本キリスト教歴史大事典』，p. 842）。両者の活動の性格から，夫 Henry であると考えられるが，確証は得られていない。

⑨　ジョン Christopher Ross

昭和 2 年まで横浜二中に勤務した記録もあるが，詳細は不明（『翠嵐百年史』，p. 735），その他は，四中の項を参照のこと。

⑩　メルカン・ダンカン

横浜二中には，昭和 12 年まで勤務。他にも横須賀中学，小田原中学，厚木中学，湘南中学にも勤務，詳細は保坂（2021）を参照のこと。

その他，「三ツ沢貝塚は市内有数の大規模な貝塚で，考古学的価値が高い，明治 38 年に英人 N・G・マンローが発掘を始めた。三ツ沢貝塚では，横浜二中の谷川（大場）磐雄教諭が多くの生徒とともに発掘を続けた」（『翠嵐百年史』，p. 544）とあるが，マンローに関しては『同窓会名簿』（昭和 33 年，39 年，46 年，56 年，62 年，平成 4 年，平成 9 年，平成 14 年，平成 19 年）では確認できなかった。Neil Gordon Munro（1863 年～1942 年）は，医師として来日，横浜や軽井沢で医師をしながら考古学者やアイヌ民族研究者として活躍した。

4.3　特筆すべき日本人英語教師

教え子の回想には英語の教員が時々出てくる。後に学者としても活躍した平等通昭を初め個性豊かな英語教員が多かった。代表として 2 人を紹介したい。また，戦時中も東京大学出の先生を中心に英語教育が熱心に行われていた事実を付記しておきたい。

⑴　山口清（昭和 15 年 5 月退職）

受験英語ではなく Speaking を重視した山口の英語に後の前田潤（中 22 回）は以下のように回想している（『翠嵐百年史』，p. 401）。

> 中学校の英語は高校受験のための書く英語の方の授業が主であったが山口先生のそれは話す方が主であった。例えば書取の試験は口授者，先生の口授が非常に速いためテキストの全文を暗記せざるを得なかった。（略）小生はこういう経験を得たため，1966 年世界老人病学会デンマークコペンハーゲンを利用して世界を周遊したのであるが，会話はあらゆる面で不自由しなかった。

⑵　平等通昭（1903–1993）

平等通昭も個性的な教員として回想が残されている（『翠嵐百年史』，p. 595）。

> 平等通昭先生は英語の担当だがご専門はサンスクリット語。お釈迦様の前世の物語『ジアタカ』の研究家でしたので，生徒から誘われるとサンスクリット語やインド哲学ウパニシャッドとかパーリー語などの話をしてくれましたね。（略）ラフカディオ・ハーンの英語版をテキストにしていたんです。それで，平等先生は 80 数

歳で東大の学位を取られた

梵文学者，仏教学者，本名は都築昭雄で大正 15 年東京帝国大学文学部梵語學梵文学科卒。昭和 8 年インド等に留学，15 年外務省大東亜省嘱託となり，在タイ日泰文化研究所所長，盤谷日本語学校校長歴任。戦後は日本大学教授，本派本願寺東京仏教学院教授，37 年新羽幼稚園園長など（「近代文献人名事典（β）」（https://lit.kosho.or.jp/%E5%B9%B3%E7%AD%89%E9%80%9A%E6%98%AD）。

⑶ 戦時中の英語教育

昭和 16 年 12 月，太平洋戦争が始まると，英語は敵国語となった。昭和 18 年の中学校令では，英語の学習時間は 4 時間と減らされたり選択になったりと冷遇されていたが，多くの中学校では良識的な英語教員を中心に濃淡はありながらも英語教育は続けられた[7]。横浜二中の場合，以下の回想が残されている。昭和 17 年 4 月に入学した八木功（中 30 回）の回想である（『翠嵐百年史』，p. 411）。

> 英語は特に初めて接する授業でしたので熱心に聞いた記憶があります。英語はリーダー，英文法，英作文と授業は独立して行われました。（略）リーダーは横田國男先生，英作文は中曽根良一先生，英文法は宗・盛治先生（略）英語の教師は他に石野伊三郎先生，田村六郎先生がおられました。英語は戦時中でありながら東大卒の先生が多かったように思います。田村先生は（略）早稲田の英文科出身で生徒には人気がありました。中曽根先生は昭和 19 年に NHK の海外向けアナウンサーとして英語力を生かす仕事に就かれたそうです。

5. 湘南中学校

大正 9 年 8 月 9 日，神奈川県立湘南中学校の設置が認可され，大正 10 年 4 月より開校となった。公立としては 6 番目であり，現在の湘南高等学校である。

大正 10 年本校の開校に先だって，当時新潟県長岡女子師範学校の校長であった赤木愛太郎（1873–1956）が選ばれて，本校初代校長になった。赤木は岡山県出身，岡山県尋常師範学校を卒業，その他詳細は『神奈川県史』（別編　人物）（p. 7）を参照のこと。

まずはよい教師を集めること，第二はすぐれた施設・設備を早く整えることであった。有能な講師招聘に校長自ら奔走した。各界屈指の人物が，東京・横浜から迎えられた。『わしは適材と思ったら，うちの家内でも採用する』当時公立中学として，あれだけの教授陣容を整えたのは，正に天下の偉観だったろう（『湘南五十年史』，p. 18）。

湘南中学の沿革は表の通りである。

表 5　湘南中の沿革（HP 等より筆者が作成）

大正 9（1920）年 8 月 9 日	湘南中学校設立許可
大正 10 年 3 月 5 日	新潟県長岡女子師範学校長赤木愛太郎，初代校長に
昭和 14（1939）年 5 月 28 日	英語教育の優秀校として表彰
昭和 23 年 1 月 22 日	赤木愛太郎校長依願退職
昭和 23 年 4 月 1 日	学制改革により神奈川県立湘南高等学校と改称
平成 23（2011）年 11 月 1 日	創立 90 周年記念式典

5.1　外国人講師

赤木校長は徳育が専門であったが，英語教育にもひと方ならぬ力を注いだ（『日本英学史叙説』，p. 326）。外国人講師を雇用したのも赤木である。

表 6　湘南中学に勤務した外国人教師（『湘南　五十周年史』pp. 335–338）

P. B. Shoemaker	大正 10 年 4 月～大正 11 年 8 月
H. ピーク	大正 11 年 8 月～大正 12 年 3 月
S. バビヤ	大正 13 年 3 月～昭和 11 年 8 月
M. ダンカン	昭和 11 年 11 月～昭和 12 年 10 月

①　Paul B. Shoemaker（1898–?）

「英語の外人教師はシュウメイカ訳すると靴屋といふ米国人（或は加奈陀人であつたかも知れぬ）で，まだ極めて年の若い先生であつた」（『創立十周年』，p. 57）という回想から判断して，息子の Paul B. Shoemaker であると考えられる。Paul や彼の父，James に関しては保坂（2021）を参照のこと。

②　キラス・H・ピーク

大正 11 年に雇用される。帰国後はコロンビア大学で東アジア史を専門とする教授になっており，GHQ の一員として戦後再び来日している。

湘南高校をはじめとして，藤沢近辺が戦時中の空襲を免れたのは，ピークのおかげだと言われている（『日本英学史叙説』，p. 326）。

> 一回生の伊原隆君が，戦後間もない頃大蔵省の役人として GHQ に出入りしていて，奇しくも在京のピークさんと出会い，藤沢が米軍の爆撃を免れたのは戦略爆撃

隊本部にピークさんがおられたおかげである由を聞き，同君の斡旋で赤木校長が江の島にピークさんを招いて一夕の宴を設けたことがあった（『湘南　70 周年記念』p. 146）。

彼は，後に帰国し国務省に勤務した（『湘南　三十周年記念』，p. 73）。

③　Charles Souza Bavier

月 191 円で大正 13 年 3 月～昭和 11 年 8 月，湘南中学に勤務した（『神奈川県教育関係職員録』大正 14 年，p. 16）。さらに，大倉商業学校に勤務（『大倉高等商業学校三十年史』附録，p. 3）。スイス人。

明治 39 年，支那に渡り，北京に赴き，順天時報，満州日々，ニューヨーク・ヘラルド等の通信員たり。（略）中国革命の動きに協力を決意したが，先生を裏切る数々の複雑な中国人の後背に絶望してオーストラリアに移り，大正 3 年英国籍を得，志願して第一次世界大戦に従軍（略）第一次世界大戦後は，大正大学，拓殖大学（昭和 2 年 4 月～昭和 12 年 3 月），早稲田大学，大倉高商，神奈川の県立中学，女学校などで英語を教え，日本語文化学院において，外国人宣教師，外交官等に日本史，説文を講じていた（『湘南　80 周年記念誌』，p. 64）。

Bavier の経歴は『日本の将来』の著者略歴（pp. 3–4）に詳しい。それには日本在住 40 年以上，京都在住とある。「湘南メソッド」として湘南の英語教育が全国から注目が浴びた時期に湘南中学勤務していた。

卒業生の一人が以下のように回想している（『湘南　80 周年記念誌』，p. 62）。

湘南中学では週一回「外英」という授業があり，楽しみであった。異人が教壇に立っていた。初めて見る外国人である。出席簿を開いて英語で点呼する。「レッド・ツリー」（赤木）の次は「ブルー・ツリー」（青木）と続き，私は「アンド・フィールド」（添田）その次は「アウト・ヒル」（外岡）という具合である。漢字の姓を意訳して読み上げるのは驚きだった。一切日本語は使わないが，漢文も読めるし，古事記などを読んでいるという噂もあった。

日本語はできたが全く使わなかった。いわゆるダイレクトメソッドであった。Bavier は日本人と結婚した。彼の妻，大坪スガは，横須賀高等女学校の生物の教員であった。

④　メルカン・ダンカン

昭和 11 年 11 月～昭和 12 年 10 月，勤務した。他にも小田原中，厚木中，横須賀中，横浜二中にも勤務，詳細は保坂（2021）を参照のこと。

5.2　特筆すべき英語教育

湘南中学の先進的な英語教育に関しては庭野（2008）が詳しい。

まず赤木校長自ら動いて，松川昇太郎をはじめ，蟹江忠彦，加藤寿雄など東京高師卒の教員を集めた。「レベルの高い東京高師において共通した学習経験を経た教員による，発音の統一した教育を目指す」（庭野，2008, p. 326）目的が背景にあった。

5.2.1　分割授業

庭野（2008）によると，岡倉由三郎が湘南中学を視察した際に，赤木校長に「外国語の指導は少くとも初年級においては，class の人数を少人数にして一人一人に当たる回数を多くし，いわゆる repetition を徹底させることが最適である」（p. 327）と言った。

この赤木への提言を受けて，昭和 3 年 4 月から松川昇太郎他英語の教員が一致団結してこの「分割授業」賛同し，実践化していった（同上）。

クラス 50 人を半分にしたこと，初歩英語教授に必要な発音・発声の反復練習および個人指導の徹底化が行われたが，その詳細は庭野（2008）を参照のこと。この分割授業は，英語だけでなく数学・作業・図画の各教科でも行われていた（『湘南五十年史』，p. 48）。

5.2.2　湘南メソッド

分割授業の中でパーマーのオーラル・メソッドを利用する条件が整った。「純然たるオーラル・メッソドではなかったようで」（庭野，2008, p. 328）あり，「旧来の和訳授業も利用しながら，部分的にオーラル・メッソドを導入し，なるべく英語を使って指導し，生徒のヒアリング力も養った」（同上）。その詳細は庭野（2008）を参照のこと。

5.2.3　火曜考査

隔週で火曜日の第一限を復習用の時間として取っておいて，実際には英国数漢の試験を順番に行うというものであった。この学習効果に関して庭野（2008, p. 331）は以下の様に述べている。

> 既習個所の考査であり，生徒にとってもかなりの重荷であったらしいが，これによって学習知識の定着化が促進され，平常の授業の能率はかなり増進したようであ

る。

英語に関して言えば，教師全員が考査日の放課後は居残り，共同で採点作業に従事し，お互いに授業その他について批評し合った。

「火曜考査」は授業への影響，正に波及効果は絶大であった。学生の勉強に対する姿勢だけでなく，英語教員の授業に対する姿勢を反省する良い機会となった。

こうした実践は全国に知られることとなり，第十二回英語教授研究所大会（昭和10年11月2日）で全国から参加した英語教員の前でデモンストレーションを行い非常に高い評価を受けた。それ以降，全国から授業参観者が相次いだ。「この中学を日本一にするのだ」と言って意気込んでいた赤木校長が大のご満悦であった（同上，p. 334)。

さらに庭野（庭野，1986, p. 11）は，「優秀な教授陣，地道な努力と情熱，理解ある学校長，そして勉学意欲に満ちた生徒たち―こういった恵まれた要因が，「湘南プラン」という英語教育史に残るすばらしい教授実践を生んだのであった」と分析している。

5.3　主任教員松川昇太郎（1904–1976）の回想

当時の主任教員で後に校長（第四代），さらに神奈川大学教授となった松川はそのころのことを以下のように回想している（『湘南五十年史』，p 56)。

「この時期湘南では非常に多くの参観者を迎えて，英語科職員はその応待に多忙であったし，緊張の連続でもあった。そして参観のかたがたから福島中学（編者注・福島プランといって，当時英語教育では特に有名な学校）との比較を卒直に伺えることもあった。私も同僚と共に福島中学に行って磯尾さんの授業を見せていただき，帰校して同僚と討議を重ねた。そこで湘南ではどうするかの論議が起こったが，『誰にでもやる気があればやれる息の長い方法で行こう。言語―特にParoleとしての―教授の原則を守りながら，地味なeclecticな道を進もう』ということになった。指向するところは一つで，チーム・ワークは十分にとりながらも，各自の特異性は十分に発揮するということを申し合わせた。同志には蟹江忠彦，加藤寿雄，篠崎光太郎，桐村克己，林正二，渡辺謙氏など錚々たるメンバーがあった。毎週一回は全員夜まで居残りでテストの合同採点をしたり， 教えるばかりでは進歩がないというので，English Critical Essay（Twentieth Century）の輪読を一年余りも続けたりしたが，下調べには相当骨を折った記憶もある。何しろアクセント一つ間

違えても注意し合うということなので，なかなかうるさかった。その後日華事変の進展につれて渡辺謙・矢田伸男両氏が応召になり，英語というものに対する社会の風当りもだんだん強くなって，全国的に英語科の苦難試練の時代に入って行った。」（語研ニュースレター・No. 20）

さて，昭和十三年になると，英語教育界の大御所であった岡倉由三郎氏の記念事業のーとして「岡倉英語教育賞」の設立が報ぜられたが，翌十四年，その第一回の受賞校として本校が選ばれたのである。受賞校の決定には，市河三喜・石川林四郎・福原麟太郎氏ら十名の選考委員によるもので，栄誉この上もない事であった。授賞式は五月二十八日東京駅鉄道ホテルで行なわれ，学校長はじめ英語の全職員が招待されて，賞状並びに賞金を受けた。

松川は，さらに，明治 14 年 10 月，「本邦国民教育の見地より見たる中学校における英語教授の意義と方法を論ず」により神田賞を受賞した。昭和 22 年，1947 年藤沢市立第一中学校初代校長，さらに神奈川大学教授になり『実力完成受験英作文法』（1949 年）などを出版した。

おわりに

今回は神奈川県で戦前に設置された公立中学校のうち，4 番目から 6 番目の中学校について述べてきた。その中で明らかになったことは以下の 4 点であった。

① 四中，第二横浜中，湘南中とも初代の校長の強いリーダシップのもと，充実した英語教育が行われていた。特に湘南中学の「湘南メソッド」は赤木校長の優秀な人材集めの結果である。
② 多くの外国人講師が一見ではなかった。例えば，横須賀中学の戦前最後の外国人講師，M・ダンカンは，厚木中学（昭和 7 年〜），川崎中（昭和 10 年），横須賀中（昭和 11 年 5 月〜9 月），湘南中（昭和 11 年 10 月〜12 年 9 月），小田原中（昭和 12 年のみ），横浜二中（昭和 12 年まで）に勤務した。
③ 草の根の国際交流がその後の日本の国益につながった例がみられた。湘南中に勤務し後に GHQ の一員として来日したキラス・H・ピークである。
④ 今回の調査で今まで明らかになっていなかった外国人講師のキャリアの一部が明らかになった。Smelser やデーセントである。

2 回にわたって神川県の英語教育の歴史を外国人講師に焦点を当てて述べてきた。他

府県の例と異なるのは，宣教師のアルバイト感覚というよりも生徒との交流が盛んで教育者としての意識が高い外国人講師が多かったように思われる。②でも述べたが多くの講師が一見ではなく他校での教育経験が豊かな講師が多かったのが一因として考えられる。また，多くの外国人講師が教会の都合で全国を転々とする必要がなく横浜市を中心とした近辺に居住していたことも大きな要因であると考えられる。

当初は，横浜商業学校の外国人講師も調査して本稿で述べる予定であったが，思った以上に内容が濃すぎて今回はまとめることができなかった。Ross やベルの所で若干紹介したように，多くの外国人講師は旧制中学の勤務だけでなく横浜商業学校でも勤務していた。その詳細は次回の課題としたい。

《注》

（1） 戦前の旧制中学の呼称は複雑である。現在の横浜翠嵐高等学校が創立当時は第二横浜中学校であったが，大正 12 年には横浜第二中学校と改称している。特に時期を限定しない場合は，第二横浜中学校と呼ぶことにする。

（2） 四中（横須賀中）の百年史『創立百周年記念誌「百年の風」』は，以降は『百年の風』とする。

（3） 四中の年史，『百年の風』では，最初の外国人講師は F. L. Smelser となっているが，本研究によると後述するように，A. M. デーセントが最初である可能性が高いことが判明した。

（4）『美なりや翠嵐　神奈川県立第二横浜中学校横浜第二中学校横浜第二高等学校横浜翠嵐高等学校創立 100 周年記念誌』は，以降は『翠嵐百年史』とする。

（5） Ross に関しては，ジョン（『函商八十年史』，p. 156）とジャン（『Y 校百年史』そのⅡ，p. 321）の表記がある。「のち横浜商業学校にも勤務」（『函商八十年史』, p. 156）とあるので同一人物のようである。

（6） Draper に関しては，保坂（2021）では一人の人物として扱った。彼に関して『光を求めて九十年：横浜訓盲学院横浜訓盲院のあゆみ』の著者の一人である今村鎮夫氏より情報を頂いた。ギデオンとエラスタスは親子である。父は Gideon Frank Draper（1858–1951）で，息子が Erastus Otis Draper（1901–?）である（同書，p. 229）。父 Gideon は，メソジスト派のアメリカ人宣教師で横浜訓盲院の前身，盲人福音会を発足させた。

（7） 埼玉県の川越中学校では，「従来からの英語に対する誹謗は井の中の蛙で，戦争地域が，すべて英語ならば通用するということを考えると（略）今後英語はますます必要となる，と説いた」（『百周年記念誌　くすの木』，p. 137）。リベラルで良心的な英語教師がいた中学校では英語教育が依然として熱心に行われていたようである。

日比谷中学に戦争中に勤務していた小泉龍雄は，「その頃，英語は，敵国語として無視されそうになりかけた時であったが，先生は，英語は絶対に 必要な語学であるからその様な事に惑わず，一生懸命勉強する様に指導して頂いたと記憶している」（『日比谷高校百年史』, pp. 795–796）という生徒の回想も残されている。

参考文献

上本木朝次郎（編）（1932）.『創立十周年』湘南中学校雑誌部発行.

江利川春雄（2006）.『近代日本の英語科教育史 ── 職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』,

有信堂.
加賀谷平三郎（編）（1951).『湘南　三十周年記念』非売品.
神奈川県教育会（編）（1925).『神奈川県教育関係職員録』（大正一四年），非売品.
神奈川県立小田原高等学校創立百周年記念事業実行委員会百年史編集委員会（編）（2004).『小田原高校百年の歩み』神奈川県立小田原高等学校創立百周年記念事業実行委員会.
神奈川県立希望ケ丘高等学校百周年実行委員会編纂局（編).（1998)『神中・神高・希望ケ丘高校百年史　資料編』神奈川県立希望ヶ丘高等学校創立百周年記念事業合同実行委員会.
神奈川県立湘南高等学校ホームページ（https://www.pen-kanagawa.ed.jp/shonan-h/）
神奈川県立教育センター（編）（1978).『神奈川県教育史』通史編上巻, 神奈川県教育委員会.
神奈川県立教育センター（編）（1978).『神奈川県教育史』別編 1 人物, 神奈川県教育委員会.
神奈川県立横須賀高等学校創立百周年記念誌編集委員会（編).（2008)『創立百周年記念誌「百年の風」』神奈川県立横須賀高等学校.
神奈川県立横須賀高等学校ホームページ（https://www.pen-kanagawa.ed.jp/yokosuka-h/zennichi/）
神奈川県立横浜翠嵐高等学校創立 100 周年記念事業実行委員会記念誌発行小委員会（編）（2014).『美なりや翠嵐　神奈川県立第二横浜中学校横浜第二中学校横浜第二高等学校横浜翠嵐高等学校創立 100 周年記念誌』神奈川県立横浜翠嵐高等学校.
神奈川県立横浜翠嵐高等学校ホームページ（https://www.pen-kanagawa.ed.jp/yokohama suiran-h/zennichi/）
記念誌編集委員会（編）（1970).『神奈川県立商工高等学校創立五十周年記念誌』神奈川県立商工高等学校.
葵友会（編）（1930).『大倉高等商業学校三十年史』葵友会.
京都府教育会（編）（1922).『京都府学事関係職員録』京都府教育会.
京二商史編集委員会（編）（2003).『京二商史』社団法人　大来会.
校史編集委員会（編）（1985).『成城学校百年』学校法人政成城学校.
五十年誌委員会（編）（1972).『湘南五十年史』神奈川県立湘南高等学校.
小林功芳（200).『英学と宣教の諸相』有隣堂.
『戸陵百年の歩み』編纂委員会（編）（2003).『戸陵百年の歩み（歴史編）』神奈川県立厚木高等学校創立百周年記念事業実行委員会.
C. S. バビア（1952).『日本の将来』日本甲子會.
滋賀県立八幡商業高等学校創立 80 周年記念誌編集委員会（編）（1966).『八商　創立 80 周年記念』滋賀県立八幡商業高等学校創立 80 周年記念誌編集委員会.
下関商業高等学校百年史編集委員会（編）（1987).『下商百年史』（資料年表編）下関商業高等学校.
70 周年記念誌編集委員会（編）（1991).『湘南　70 周年記念』非売品.
下関商業高等学校百年史編集委員会（編）（1987).『下商百年史』（資料年表編）下関商業高等学校.
進交会（編）（1942).『進交会会員名簿』進交会.
成城中学校学友会（編）（1941).『成城』（革新倍大号）成城中学校学友会.
日本キリスト教歴史大事典編集委員会（編）（1988).『日本キリスト教歴史大事典』教文館.
80 周年記念実行委員会（編）（2001).『湘南　80 周年記念誌』非売品.
80 周年記念誌編集委員会（編）（1994).『創立 80 周年記念　翠嵐』神奈川県立横浜翠嵐高等学校.
庭野吉弘（1986).「「湘南プラン」について ── その教授法と英語教育史における位置づけ ──」『日本英語教育史研究』第 1 巻，pp. 1–15.
庭野吉弘（2008).『日本英学史叙説』研究社.

日比谷高校百年史編集委員会（編）(1979).『日比谷高校百年史』中巻，日比谷高校百年史刊行委員会.
百年周年記念誌編集委員会（編）(1999).『百周年記念誌　くすの木』埼玉県立川越高等学校創立百周年記念事業実行委員会.
保坂芳男（2021).「神奈川県の旧制中学校における英語教育史(１) ── 外国人講師を中心に ──」『人文・自然・人間科学研究』第 46 号，pp. 75–90.
北海道函館商業高等学校創立八十周年記念事業協賛会（編）(1969).『函商八十年史』北海道函館商業高等学校創立八十周年記念事業協賛会.
毎日新聞横浜支局（編）(1976).『わが母校　わが友』(１)，丸井図書.
山口県教育会（編）(1910).『山口県教育関係職員録』山口県教育会.
横浜市立横浜商業専門学校・横浜市立横浜商業学校（共編）(1932)『横濱市立横濱操業専門学校横濱市立横濱商業学校一覧』(昭和 7 年 10 月)，横濱市立横濱商業専門學校.
Y 校八十周年記念誌編集委員会（編）(1962).『Y 校八十周年記念誌』横浜市立横浜商業高等学校.
Y 校百年史編集委員会（編）(1982).『Y 校百年史』そのⅡ，Y 校百年史編集委員会.
和中・桐蔭同窓会（編）(2018).『和中桐蔭』同窓会名簿』(平成 30 年度）和中・桐蔭同窓会.

（原稿受付　2021 年 10 月 26 日）

人文・自然・人間科学研究　No. 47, pp. 177–214　　March 2022

明治初頭，日本人米国渡航者リスト解題・史料の補足

── 横浜発サンフランシスコ行き日本人船客リストと関連史料紹介及び考察（1）：横浜出航 1870 年 1 月から 6 月まで

塩　崎　　智

List and Commentary of Japanese who traveled to the U.S. at the beginning of the Meiji era, in the year of 1870, Part1:

Leaving Yokohama from January to June

Satoshi SHIOZAKI

要　旨

幕末維新期に渡米した日本人の渡航記録と関連情報をまとめている。今回は 1870 年 1 月―6 月に横浜を出航し，約 3 週間後，サンフランシスコに上陸した日本人に関する一次情報を採り上げ若干の考察を加えた。

主な渡航者は，岩倉具視の子息，具定と具経，とその随行者 3 人の計 5 人の一行と，米国人ユージン・ヴァン・リードが渡米を斡旋したと思われる，旧幕臣 3 人と旧桑名藩士 2 人，その他 3 人の計 8 人の一行である。

岩倉子息一行は，長崎で英語ネイティブ話者に英語の指導を受けていたため，3 人は渡米後 1 年，或いは 2 年で米国の大学に入学し，うち 2 人は大学を卒業し帰国した。また 1 人は米国から渡英し，英国の大学に入学した。

ヴァン・リードが斡旋した 8 人は，戊辰戦争絡みで日本にいられなくなり，僅かな手持ちの金で日本を脱出した。サンフランシスコなど西海岸で，学費と生活費を稼ぎながら勉強した。背水の陣が奏功したのか，旧幕臣の 3 人は渡米後 2 年目に大学に入学し，4 年で卒業した。桑名藩出身者の 2 人も，渡米後 2 年目に，大学，ビジネス専門学校に入学した。

幕末維新期の日本人米国留学生は，全般的に，渡米後はグラマー・スクールや私立アカデミーで英語のイロハを学び，大学入学に至らずに帰国するケースが多いが，この 2 グループの日本人は，大学入学率が高い。

どちらのグループも，まだ不明な点が多く，キリスト教との関わり等，興味深い点も多い。今後も調査・研究を続け，次稿では 7 月以降の船便を扱いたい。

キーワード：米国留学生，幕末維新，太平洋郵船，1870（明治 3）年

はじめに

1867年に横浜・サンフランシスコ（以後SFと表記）間に直行の船便が就航した。便数は年毎に増え，1870年には，ほぼ毎月1本，横浜とSFから船が出るようになった。この船便の日本人乗客リストを作成している。史料は主に，横浜とSFで発行されていた英字新聞の乗船客リストを使用している。日本人名がリストに明記されていない場合は，日米両国の一次史料を中心に情報を収集し名前の確定に努めた。本稿は1870年前半（1月〜6月）の船便を採り上げた(1)。

今回の調査報告は，1年半ぶりに再開したニューヨーク公共図書館（New York Public Library）で2021年8月に行なったデータベース新聞記事検索の結果が基となっている。データベース名は*America's Historical Newspaper*で，キーワードに「Japanese student」「Japanese」，さらに1870年に出国渡米した日本人名等をローマ字入力（ヘボン式以外も試行）し，1870年の1月〜12月の時間枠で，広告等を除いたニュース記事のみで検索をかけた。

使用史料は日米の一次史料が最優先で，補完的に二次史料を使用した。インターネットを駆使して日米の最新の研究成果を導入，紹介することも本稿の目的の一つである。また，今後の研究課題についても必要に応じて触れていきたい。

本稿の構成は次の通りである。

Ⅰ．日本人及び，日米交流に関係の深い米国人等の船便別リスト

Ⅱ．主な日本人渡航グループとそのメンバーに関する情報の紹介，及び今後の研究の課題

1. 岩倉兄弟（具定，具経）とその一行（アメリカ号，1870年3月23日横浜発——4月13日SF着）

⑴ フルベッキの期待

⑵ 現地新聞に見る一行の渡米後の様子

⑶ 岩倉兄弟（具定，具経）

⑷ 折田彦市

⑸ 服部一三

- 米国留学前，長崎時代
- 米国留学中，ラトガーズ大学入学前
- ラトガーズ大学在学中
- 憲法への関心

・キリスト教との関わり
⑹ 山本重輔
・レンセラー工科大学での留学生活
・1872 年英国留学の真偽
⑺ 岩倉兄弟一行まとめ
2. 旧幕臣カリフォルニア留学生一行（チャイナ号，1870 年 6 月 22 日横浜発 ── 7 月 13 日 SF 着）
⑴ 田村初太郎
・留学までの経緯
・SF での生活
・オレゴン州での留学生活
・パシフィック大学卒業後
⑵ 能勢栄
⑶ 斎藤金平
3. 桑名藩脱走，カルフォルニア留学生一行（同上）
⑴ 脱走の経緯
⑵ 多藝誠輔
・SF での生活
・ミシガン州立大学
⑶ 栗原貞作
4. その他の 3 人（同上）
⑴ タム（吉，横浜の吉蔵）
⑵ 塚越酸素彦
⑶ 大路元雄
5. 1870 年 6 月 22 日出航チャイナ号乗船日本人渡航者のまとめ
Ⅲ. おわりに

当初は，日本人の米国渡航を日米交流史に位置付けるために，時代的背景の理解を深めるべく，当該期間の米国新聞に掲載された日本，日本人関連記事の分析も行う予定だったが，紙幅の都合上割愛した。日本では入手困難と思われ，今後の研究に資すると判断した史料は，巻末に全文を掲載し抄訳を付した。

日付，年号は原則として西暦を使用し，和暦の場合は漢字表記とした。米国の頻出する州，都市名であるサンフランシスコは SF, ニューヨークは NY, ニュージャージー州ニューブランズウィックは，それぞれ NJ 州，NB と表記した。また頻出するラトガー

ズ大学附属グラマースクール（Rutgers College Grammar School）は初出を除いては，RGS と表記した。日本語一次史料は一部，表記を読み易くした箇所がある。

Ⅰ．日本人及び，日米交流に関係の深い米国人等の船便別リスト

乗船リストは，横浜で編集，発行されていた *Japan Weekly Mail*（以後 *JWM* と表記）に掲載された乗船客リストを主に使用した。SF での下船リストは，データベース *America's Historical Newspaper* で入手した SF の地元紙 *Daily Alta*，*Weekly Alta* を主に使用した。船便毎に，その船あるいは船客に関する背景知識的情報も必要最小限に掲載した。

1．アメリカ号　1870 年 1 月 2 日頃横浜発― 1 月 23 日 SF 着[2]

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：SF 行き W. M. Robinet and servant

William. M. Robinet（ロビネット）は，長崎在住の米国人で，Robinet & Co. という会社を経営し，グラバー商会や China & Japan Trading Co. という NY 市に本社がある会社に関わっていた[3]。ロビネットは薩摩藩米国留学生が，1866 年長崎を出航した際に同行している。その後，日本に戻り，このアメリカ号で再び従者を連れて帰国する。従者は日本人の可能性があるが名前は不明[4]。

なお，*Cincinnati Daily Enquirer*（オハイオ州）1870 年 1 月 27 日の A troupe of sixteen Japanese acrobats has arrived at San Francisco. という見出しの記事によれば，日本人の軽業師一行 16 人がこのアメリカ号に乗って SF に上陸した可能性が高い。しかし，steerage（船底の下級船室）の乗船客は，新聞に氏名が乗ることはほとんどないので名前は不明である。

2．ジャパン号　1870 年 1 月 23 日横浜発― 2 月 16 日 SF 着

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：日本人名無し

Hartford Daily Courant（コネチカット州都）1870 年 2 月 19 日によると，下級船室には 261 人の中国人と 17 人のヨーロッパ人が乗っていた。同船は 1 万ドル以上分の日本の金貨，銀貨を運んできた。米国で新硬貨に鋳造されるという。このような日米両国相互の「実益」を扱った記事は，両国の関係が徐々に深まり，米国にとってもプラスであるという印象を読者に与えただろう。

3. チャイナ号　1870 年 2 月 22 日横浜発― 3 月 19 日 SF 着

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：日本人名無し

日本人船客とは無関係かもしれないが，船が入港した時の雰囲気を伝える記事を紹介する。*Alta*（SF）1870 年 3 月 20 日によると，中国人船客 870 人（10 人の女性を含む）が下級船室に乗船し，60 ポンド分（約 30 キロ）のアヘンが SF 当局により発見，押収された。前便と比べると 3 倍以上に人数が増えている。船が到着するとしばらくは，乗船してくる米国当局関係者，下船しようとする多くの中国人乗船客で，船の出入り口周辺はごった返していた。初めて渡米する日本人留学生の心情が察せられる。

4. アメリカ号　1870 年 3 月 23 日横浜発― 4 月 13 日 SF 着

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：NY 行き Yamamoto, Tatu, Osaki, J Hattori

下船リストの 4 人の日本人は，長州藩山本重輔（毛利，1848–1901），岩倉具経（変名，龍小次郎，1853–1890），岩倉具定（変名，旭小太郎，1852–1910），長州藩服部一三（1851–1929）であり，実際には薩摩藩折田彦市（1849–1920）も加わり一行は 5 人だった。岩倉具視子息留学一行である。*Evening Post*（NY 市）4 月 13 日によると，このアメリカ号の乗船客は約 1,200 人で，そのうち 1,104 人が中国人だった。前便よりもさらに増えている。神奈川県沖で沈没した米国海軍オネイダ（Oneida）号の生存者も乗っていた。積み荷も船客も満載で，日・中・米間の人と物の活発な移動が読み取れる。

5. ジャパン号　1870 年 4 月 22 日横浜発― 5 月 13 日 SF 着

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：日本人名無し

中国人船客が 1,276 人とかなり多い。

6. グレート・リパブリック号　1870 年 5 月 22 日横浜発―6 月 14 日 SF 着

●乗船リスト：Dr. Vedder

●下船リスト：新聞記事の当該頁，印刷不良につき判読不明

中国人船客は約 1,300 人（女性 29 人を含む）と相変わらず多い。

乗船リストの Dr. Vedder は，Alexander Madison Vedder である。日本側の研究によると，幕末に米海軍医師として来日し，その後，長州藩主のお抱え医師，神戸病院

初代院長等を務めた。卒中を起こし，1870 年春にカリフォルニアに帰国した[5]。

この船のリストには日本人渡航者の名前は無いが，日本人渡航者がいた可能性を示唆する記事がある。*Boston Daily Journal* 7 月 6 日と *Boston Daily Advertiser* 7 月 7 日の記事である。ボストンのセントジェイムズホテルに，日本人の official 一行が滞在中で，このうちの 2，3 人はボストン周辺で英語を学ぶ予定だと書かれているので，4 人以上の集団である。一行が日本から来たとすれば，タイミング的には，6 月 14 日に SF に着き，現地を 1, 2 週間見学して大陸横断鉄道で，東部に移動したという計算になる。

渡航者は，下級船室に乗ると名前も人数も新聞には記されない。日本側の史料で 1870 年に米国に向けて出国した日本人のリストと照合して候補を探しているが，現状では不明である。

7. チャイナ号　1870 年 6 月 22 日横浜発― 7 月 13 日 SF 着

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：For SF　E. M. Van Reed, 7 Japanese

女性 12 人を含む中国人 568 人が乗船。地元 SF 警察の取り締まりが厳しくなったせいかアヘンはほとんど発見されなかった。主に東部に鉄道で送られる 775 packages の茶葉が積み込まれていた。日本産か中国産かは不明である。

下船客の 7 人の日本人とヴァン・リード（Eugene Miller Van Reed, 1835 年–1873）が同じ船で渡米しているのは偶然ではない[6]。この 7 人の日本人の名前は，次の 2 本の米国新聞記事から明らかになった。

San Francisco Bulletin 1870 年 7 月 14 日の JAPANESE STUDENTS という見出しの記事では，7 人の日本人留学生が SF かオークランドで留学するために渡米，全員 Japanese princes の家柄の出身と書かれている。名前は，Tska Koshi, Nose, Ohgi, Kuribara, Tame, Sharibiki（印字不明), and Tamura と書かれている。*Weekly Alta California* 1870 年 7 月 23 日でも，Iska koshi, Nose, Ohgi, Kuribara, Jame, Shaishiki, Tamura が，カリフォルニアでの就学を希望，と書かれている。

田村で日本側史料を調査すると，静岡藩出身の田村初太郎（1852–1915），同三条付属の能勢栄二郎（1852–1895），同斎藤金平（1849–不明），桑名藩出身の多藝誠輔（山脇正勝，1849–1905），栗原貞作（高木貞作，1848–1933），小浜藩出身塚越酸素彦（生没年不明），彦根藩出身大路元雄（生没年不明），横浜の小使，吉，俗名タム（生没年不明）の計 8 人が判明した[7]。Sharibiki あるいは Shaishiki は「せいすけ」で多藝ではないだろうか。斎藤金平の名前が両方のリストに欠けている。

Ⅱ．主な渡航グループとそのメンバーに関する情報の紹介，及び今後の研究の課題

1．岩倉兄弟（具定，具経）とその一行（アメリカ号：横浜発 1870 年 3 月 23 日―SF 着同年 4 月 13 日）

⑴　フルベッキの期待

岩倉兄弟の留学に関しては先行研究が無い。まずフルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830–1898）がフェリス（John Mason Ferris, 1825–1911）に宛てた紹介状 2 通の内容を紹介する[8]。

1870 年 3 月 19 日筆の書簡によると，5 人は有望な青年で，岩倉兄弟はフルベッキの，服部，山本，折田はヘンリー・スタウト（Henry Stout–1912）の弟子である[9]。行き先は NB。岩倉兄弟と服部は立派な青年で，それまで派遣された留学生の中では最も有望と期待されている。5 人のうち 2，3 人は英語がかなりよく話せる。*New Republic*（NJ 州都キャムデン）1870 年 7 月 2 日の記事では一行の 1 人が英語を流暢に話すと書かれている。米国生活 1 年で大学に入学することができた服部か山本だろう[10]。

1870 年 4 月 21 日筆のフルベッキ書簡には，5 人はいずれも従順で社交的で，立ち居振る舞いも端正なので，現地の米国人に好意的に受け入れられることは間違いなく，米国で良い教育を受けて帰国すれば，日本に役立つ人材となるだろう，彼らがキリスト教の信仰に導かれることを祈っている，と書かれている。帰国後，一行が社会のみならず宗教面でも活躍することにフルベッキは大きな期待を抱いている。

⑵　現地新聞に見る一行の渡米後の様子

SF 上陸後の一行 5 人の足跡と NB 着後の様子は，米国各地の新聞に短い記事で掲載されている。「　」は拙訳による記事の概要である。

1．*Idaho Statesman*（アイダホ州ボイジー）1870 年 4 月 26 日

「4 月 18 日に一行 5 人が鉄道でネバダ州 Elko を通った。English officers が同行し，行先は英国。」

2．*NY Herald*（NY 市）1870 年 4 月 26 日　JAPANESE STUDENTS

「一行 5 人は大陸横断鉄道に乗り 4 月 24 日に NY に到着。市内セントジェイムズホテルに宿泊し，セントラルパークなどを訪問して楽しんだ。Vernon 元領事（ex Consul Vernon）が一行の面倒を見ている。留学先はプリンストン大学。」このヴァーノン元領事に関しては未調査である。

3. *Trenton State Gazette*（NJ 州都）1870 年 5 月 9 日

「*The Princetonian* という新聞が 5 人の日本人はプリンストン大学に入学していない，と主張。」

4. *Sentinel of Freedom*（NJ 州ニューアーク）1870 年 6 月 28 日

COMMENCEMENT PROPER

1869 年度ラトガーズ大学卒業式の様子を報道。当時同大学と RGS には 13 人ほどの日本人が学んでいた。They are acquiring our language very rapidly, one who has been in this country only two months conversing with entire accuracy. 日本人学生の英語学習の速さと，2 か月前に来た 1 人の学生の英語の正確さが記されている。米国に来て 2 か月あまりという表現が正確であれば，岩倉兄弟一行のうちの山本か服部である。長崎で英語ネイティブに学んだ成果だろうか。

⑶　岩倉兄弟（具定＝三男，旭小太郎，具経＝四男，龍小次郎）

2 人の留学前の英語学習歴は以下の通りである。父岩倉具視は，佐賀藩の教育を高く評価し，兄弟を佐賀に国内留学させた。この時，具視の指示で兄弟に同行したのが薩摩藩士折田彦市である。3 人は，長崎にある佐賀藩の致遠館でフルベッキに指導を受けることになった。これが 1868 年 12 月頃のことである。折田と岩倉兄弟は，この頃から共に英語を学んでいた。フルベッキはその後上京するので，長崎での指導期間は約半年程だった。

具視は，勝海舟の長男小鹿が 1867 年から NB に留学していたので，勝の意見を聞き，最後は大久保利通の後押しがあって岩倉兄弟の米国留学を決定したとも言われる(11)。

長崎で学んでいた長州藩の服部と山本がどのような経緯で一緒に留学することになったのかは不明である。折田は留学前から継続して，米国滞在中も岩倉兄弟の付添人的意識を継続して持っていたようだ(12)。

岩倉兄弟は他の 3 人と共に，ＮＢ到着後 RGS に入学する。具定は，山本，折田とともに，Lucy Thomson 家で下宿生活を送っていた(13)。学校生活 2 年目の後半の 1872 年 3 月頃健康状態が悪化し，帰国を希望して 4 月には NB を出て SF に向かった。父具視が使節団を率いて渡米し，首都ワシントンに到着したのが 2 月 29 日である。父と入れ替わりで帰国するようなタイミングになった。

1870 年 5 月 3 日，具定が，NB で多くの日本人の面倒を見ていたヴァン・アーズデール夫人（Van Arsdale）に書いた手紙がある(14)。それによると，NY でひどい風邪をひき，NY 市出発が予定より遅れた。大陸横断鉄道でネブラスカ州オマハまで来た頃，さらにひどい風邪を引き，相当苦しんだようだ。SF に 4 月 28 日に着いたが，5 月 1 日の横浜便はキャンセルし 16 日の便に乗る旨を伝えている。

その後，SF を出航する 3 日前の 5 月 13 日に，ラトガーズ大学のジョージ・アサートン教授（George Washington Atherton, 1837–1906，フィリップス・アカデミー，イェール大学卒，政治学）に手紙を書いている(15)。具定は，留学期間の後半，政治学者アサートン教授の家に下宿していたことが文面から分かる。父具視の法律制度を学ぶようにという指示に応えたのだろうか。具定は手紙の中で NB を懐かしがっている。

ラトガーズ大学の学生新聞 *Targum* 1872 年 10 月号には，具定は 1872 年 4 月に，健康上の理由で RGS を退学し帰国したが，本人は 1873 年春の復学を希望している旨が書かれている(16)。その後もラトガーズ大学関係者との連絡は取っていたようで，*Targum* 1874 年 2 月号には，健康も回復し，総理大臣の父を手伝っているという記事が出ている。

弟の具経は *Targum* 1872 年 10 月号によると，勉強は順調だったようで，1872 年 6 月に RGS を卒業し，渡米後 2 年でラトガーズ大学入学試験に合格した。目下ヨーロッパ訪問中で 11 月 1 日に NB に戻ってくる予定と書かれている。具経の留学先は元来イギリスだったようで，結局ラトガーズ大学には戻らず，英国で修学を続け，1873 年に日本人学生として初めてオックスフォード大学に入学し，1878 年に帰国した。具経に関しては，イギリスも含めて留学中の情報がほぼ皆無である。

⑷　折田彦市（薩摩藩，権蔵）

折田に関しては，留学中の日記（1872 年 1 月以降）と書簡を中心にまとめた詳細な研究が複数あるので，詳細は譲り概要をまとめておく(17)。

折田は留学当初は，日本人留学生コミュニティから敢えてやや距離を置いていたようだ。1870 年 9 月から RGS で学んだと思われるが，11 月には近郊のミルストーン（Millstone）に転居し，家主の牧師，オランダ改革派教会の牧師エドワード・コーウイン（Edward Corwin, 1834–1914）の個人指導を受けた(18)。1872 年 6 月には，その個人指導の成果で，College of New Jersey（現在のプリンストン大学）に合格する。現在，NY から鉄道で NB に向かうと，NB から 2 駅目がプリンストン・ジャンクション駅で，ここから 1 両編成のシャトル線に乗り換えて次の駅がプリンストンである。

試験科目は英語と数学のみで，ラテン語，ギリシャ語の古典語は省かれ「選科生」のような扱いで入学したが，3 年生からはラテン語，ギリシャ語も履修し，4 年生の 10 月には Chapel Stage という大学伝統の演説大会で，Japan, Past and Present（「日本 ── その過去と現在」）と題した英文スピーチ（内容不明）を披露した。1876 年 6 月には Bachelor of Arts を取得して正規に大学を卒業した。

NB が近く，薩摩藩出身ということで（留学生には薩摩藩出身者が多かった），日本人留学生との交流は手紙のやり取りを含めて活発だったが，学年が上がるにつれて，米

国人との交流の比率が増え，現地の大学生活に順応していたことが分かる。フルベッキが期待していたキリスト教は，折田の大学生生活で精神上大きな問題となったが，後で述べる。

1876 年 10 月に帰国した後は，文部省に出仕し，ラトガーズ大学から学監として日本に招聘されたデビッド・マレー教授（David Murray, 1830–1905）の通訳として，日本全国を回り，日本の教育の現状をつぶさに見る機会を得た。その後は，大阪専門学校，第三高等学校の校長として教育界で活躍することになる。

⑸　服部一三（長州藩）

服部に関しては，一次史料も含めた伝記があるので，それに在米史料の内容を追加する形で，以下に留学前後の情報をまとめる[19]。服部の留学に関しては先行研究が無いので，ここで詳細に扱いたい。

・米国留学前，長崎時代

服部は 16 歳で四境戦争に参加し，英国留学経験のある河瀬真孝と知り合ったことがきっかけで洋行熱が高まり，薩摩藩の五代友厚の助けを借りて長崎留学が実現した。これが 1867 年春のことである。長崎では，後の英国領事ロバートソン（Russell B. Robertson），後の同領事アストン（William George Aston）に師事して英語を学んだ。フルベッキと大隈重信が指導する致遠館にも数回顔を出したようだ。フルベッキが東京に去った後の後継者ヘンリー・スタウトに英語を学んだ日本人として，服部の名前も挙がっている（本稿注（９）参照）。

英語のスピーキングは上達したが，リーディングが覚束ないということで，当時長崎で医師をしていた芳川顕正に頼み，その生徒に指導してもらった。そうこうするうちに，ニューヨーク号という船が米国行きだと思い，ボーイとして乗り込む機会を得て乗ったところ，行先は米国ではなく上海だったので，失望して長崎に戻ってきたという。服部と山本重輔とは，この長崎時代に知り合い，共に苦労して貧しい書生生活を乗り切った。

その後，養父の長州藩士名和道一（緩，1838–1873）が岩倉具視と親しかったこともあり，名和の周旋で岩倉兄弟の米国留学に同行がかなった。名和は，1871 年に森有礼とともに，米国にやってくる。

このように，留学前に英語ネイティブ・スピーカーとの接触機会が多かったことから，服部の英語力はスピーキングとリスニングがかなり上達していたことが分かる。また，上海渡航の件等から，フットワークの軽い，行動的な人物であることも分かる。

・米国留学中，ラトガーズ大学入学前

伝記の記述は，留学前に比べると，米国留学中に関する記述が大変淡泊で，NB での学びついては，「米国に在りては専ら法律を学ばれると共に，兼ねて学制をも調査された」としか書かれていない。服部が渡米後約 1 年で入学したのはラトガーズ大学科学学部である。

興味深いのは，伝記に収録された『外遊日記』と題がついた日記と，服部宛ての名和，イェール大学で学んでいた会津藩出身の山川健次郎からの留学中の書簡である。

『外遊日記』は，服部が 1 年目のグラマースクール生活を終了し，2 年目のラトガーズ大学科学学部入学が決まった後の，夏の間の旅行の様子が書かれている。同行者は養父の名和で，1871 年 7 月 17 日に NB から NY 州トロイへ向かい，当地の大垣藩留学生戸田氏共と松本壮一郎に会う。その後ナイアガラに足を延ばし滝の絶景を鑑賞し，カナダのモントリオールへ向かう。当地では，どういう経緯で知り合ったのか不明だが，ホルト兄弟とスティーブンソンという現地人を訪問している。

そこからロードアイランド州の有名な避暑地ニューポートに行き，8 月 1 日にボストンに着く。当地では，岩倉使節団が滞在中で，伊藤博文，木戸孝允などと旧交を温めて，晩餐会にも参列し，8 月 4 日に渡英する使節団一行を見送った。NB への帰途，マサチューセッツ州アマーストに寄り，マサチューセッツ農科大学（Massachusetts Agriculture College）で学んでいた長州藩出身内藤誠太郎と原保太郎を訪ね，8 月 7 日に帰宅，1 か月弱の旅が終わった[20]。

服部は，この旅行について，「今度の旅行利を得る事少なからず。まことに愉快の夏なり。地理を知り，国情を知る。また善友を作り，その他益多し。」と感慨深げである。また，山本重輔が岩倉使節団に同行し渡欧，長州藩留学生国司健之助が米国を去ったと記している。山本の留学に関しては，史料情報の混乱があり，後述する。

・ラトガーズ大学在学中の様子

服部は，1871 年 9 月にラトガーズ大学科学学部に入学する。3 年で卒業できるプログラムだが，4 年かけて 1875 年 6 月に卒業した。科学学部の学生数は，服部入学時は 22 で卒業時には 14 に減っている。

学生時代の様子はよく分からないが，学生新聞 *Targum* 1875 年 1 月号を見ると，同紙の 5 人の associated editors の 1 人に名前を連ねている。現地の大学生活に馴染んでいる様子だ。Marilyn Bandera が 1970 年にハワイ大学に提出した修士論文には，服部の欄に，Phi Beta Kappa, Alpha Epsilon Chi Fraternity, Beta Theta Bi Fraternity と書かれている[21]。

フラタナティには Phi Beta Kappa のように，成績優秀な学生のみが加盟を許される

ものもあれば，寮のような建物で生活を共にする学生の社交団体もある。服部がこれらのメンバーだったのであれば，彼の成績の優秀さと豊かな社交性を示していることになる。

日本の朝野新聞 1875 年 8 月 2 日には，「少年ながら銅鉄銀製造法を英語で説明」という見出しで，服部がラトガーズ大学で卒業試験に際し，6 月 21 日に行った説明について書かれている。ニュースソースは *NY Tribune*（日付無し）である。記事によると，服部は「日本産の銅鉄銀を以って物を製造する法を説き日本刀及びこれ等の金属にて製したる小（1 字不明）その外の物を示してこれを証したり」という。金属を溶かしたりする実験をしたのではなく，口頭で日本の冶金について説明したようだ。

Trenton State Gazette（ニュージャージー州都）1875 年 6 月 11 日の，ラトガーズ大学卒業式に関する記事では，服部が日本語で演説することになっており，その日の「目玉」となるだろう，と書かれている。この件はウエスト・バージニア州のホイーリングという地方都市の地元紙（*Wheeling Register* 1875 年 6 月 12 日）の記事でも触れられている。服部が NB で学び始めた頃，1870 年 6 月に新島襄がアマースト大学の卒業式で，日本語で演説したことも多くの米国新聞で採り上げられた。その影響だろうか。学生新聞 *Targum* 1875 年 10 月号によると，演題は「進歩の順序」（The Order of Progress）だった。新島も服部も日本語で演説という点がメディアの興味を引いたのかもしれないが，それゆえに，その演説の内容が残されていない。

服部が晴れの卒業式を前に招待の手紙を出した相手は，首都ワシントン駐在全権日本公使の吉田清成である[(22)]。米国人留学生なら家族を呼ぶところだろう。

・ラトガーズ大学在学中，憲法への関心

服部の伝記では，「米国に在りては専ら法律を学ばれると共に，兼ねて学制をも調査された」と書かれている。

法律云々に関しては，本書に収録されている服部宛の留学中（1870–1875 年）の書簡内容が根拠となっていると思われる。この服部宛書簡は，日付は書いてあるが，年が不明のものが多い。いくつかの書簡の内容から，服部が，日本の Constitutions（憲法）について詳しく論じていることが分かる。

イェール大学留学生，会津藩出身の山川健次郎（1854–1931）が服部に 1874 年 2 月 8 日に書いた手紙には，「貴下が憲法に付き縷々とご意見を述べられているが憲法と我等は如何なる関係があるか，又，我らが憲法を如何しようと言うのであるか？ 我々と憲法は直接関係がないではないか？ 我々の論じ得られるのは憲法ではなく法令である。」と書かれている。かつてイェール大学で学びロンドンに移った鳥取藩留学生原六郎（1842–1933）も 1874 年 11 月 15 日の書簡で，「貴下は『いよいよ時が来た。即ち不合理

な政治を行われない様に，憲法の制定を必要とする時が来た』との御説であるが，（後略）」と書いている。

ラトガーズ大学の学生新聞 *Targum* 1873 年 3 月号に掲載されていた匿名の英文で，Constitutions Are Not Made, But Grow という題の英文がある。日本の憲法について述べていて，著者は明らかに日本人である。匿名で，新聞編集部に特別なつながりのある学生が書いた可能性がある。地元 NB の新聞にも転載されている。興味深い内容で【英文史料 2】（拙訳も掲載）として掲載した。山川と原が手紙で触れている服部の憲法への深い関心を考慮すると，これは服部が書いた英文である可能性が高い。服部の関心は大学での専攻の科学ではなく，社会科学にあったとすれば，科学学部は 3 年コースで卒業のところを 4 年かけて卒業したことも理解できる。この匿名記事を服部が書いたとすると，服部は，大学 2 年目の時点ですでに憲法にかなり興味を持っていたことになる。

・キリスト教との関わり

フルベッキはフェリスへの推薦状で，一行の信仰上の成長について記していた。服部宛の書簡で最も多いのは養父の名和からの書簡で，6 通，伝記に掲載されている。養父だけあって，服部が自分の精神面での状況を素直に伝えていることが間接的に分かる。名和は服部の質問に 12 箇條を立てて答えている（pp. 192–195）。その中で，キリスト教の信仰，「新生社」とトーマス・レーク・ハリス（Thomas Lake Harris, 1823–1906）の教え，スエーデンボルグの思想等について書かれたものが 6 箇条を占めている。ラトガーズ大学に在籍していた畠山義成やワシントン駐在公使の森有礼（1871 年赴任）は，かつてハリスのコミュニティで生活した経験がありハリスから精神的に大きな影響を受けていた。森が渡米時に連れて来た，服部の養父の名和もハリスのコミュニティを訪れている。服部も影響無しという訳には行かなかっただろう。ラトガーズ大学というコミュニティ自体がキリスト教色濃厚だったこともあり，服部はキリスト教，ハリスの思想への態度を決めかね，名和に書簡で相談を持ち掛けたのではないか。

前出の山川発の書簡でも，山川は「若し貴下がキリスト教信者になつたれば，以上の法律の外にまだ神の掟があって，信仰と貴下の肉体は二つと成る。」と書いているので，服部はこの時点でクリスチャンではないが，相当な関心をキリスト教に対して持っていたことをうかがわせる。

山川は服部に対して，「貴下は何時も貴下の進歩した説を主張しているが貴下は学問の為に貴下の意見を変更された方が良いと思う。そうしてこれ以上若い学生の頭を刺激しないでほしい。」と書いている。服部が専攻の科学以外にも，大学生活中，学生や教授，日本人留学生と，分野を問わぬ知的交流を活発に展開していたことが想像される。

⑹　山本重輔（毛利，長州藩）

・レンセラー工科大学での留学生活

山本もまた，留学中に関しては先行研究が無い。山本は当初，岩倉具定，折田とともに下宿し，RGS で 1 年間学んだ後，ニューヨーク州トロイにあるレンセラー工科大学（Rensselaer Polytechnic Institute）に 1871 年 9 月に入学した。前出の服部の伝記にも書かれているように，岩倉使節団が 1872 年夏，渡英した際に，山本は同行して英国で鉄道について学んだとされている[23]。

しかし，ウィリアム・エリオット・グリフィス（William Elliot Griffis）が 1916 年に発表した *The RUTGERS GRADUATES IN JAPAN*（*Revised and Enlarged*）には，Juisuke Yamamoto, of Yamaguchi, Cho-shiu, was prepared in the Grammar School at New Brunswick for the Scientific course, but entered the Rensselaer Polytechnic Institute at Troy, N. Y. graduating in full course.（p. 25）つまり，レンセラー工科大学を卒業した，と書かれている。

E. J. M. Roads が同大学の *Annual Register* を基に作成したリストによると，山本は 1871 年から 1875 年まで在学していたが，graduated と書かれていない[24]。日本への帰国は 1875 年 4 月となっているので，1875 年 6 月の卒業を待たずに帰国したことになる。

20 年以上前に，レンセラー工科大学を，日本人留学生の取材で訪問した際，同大学広報課から受け取った資料がある。*JAPANESE STUDENTS WHO ATTENDED RPI* に次のように書かれている。山本は，1 年目の Class of 1875（1871 年入学）は，6 コースを落としたので，入学試験を受け直し Class of 1876 に再入学（1872 年再入学）し，Division D を 1872 年度，同 C を 1873 年度に，5.0 中平均約 3.8 の成績で合格した。1874–1875 年は Division B の学生リストに入っていたが，そこには進まず，理由不明で退学した。日本への帰国は 1875 年 4 月となっている。

まとめると，山本はまず RGS で 1 年間学び，1871 年 9 月からレンセラー工科大学に入学したが，授業についていけず落第した。翌 1872 年 9 月に再挑戦で再入学し 1873 年 6 月には 2 年進級が決定，1873 年 9 月に始まる 2 年生も合格進級できた。1874 年 9 月に始まる 3 年目は，登録したが授業には出なかった。この 1875 年 4 月までの 1 年間の足跡は不明だが，帰国後の日本での就職を考え，米国の鉄道関連企業で実習に参加していた可能性はある。折田の 1875 年の交際相手として，山本は在米国の 1 人として挙げられているので米国にはいたのだろう[25]。

・1872 年英国留学説の真偽

1872 年夏の山本の動向に関しては，レンセラー工科大学があるトロイで留学中の松本壮一郎が，フェリス宛の 7 月 24 日筆の手紙で，次のように報告している[26]。

「山本は 7 月初旬，ニューヨーク州北部のバッファロー近くの Gowanda（NY 州）へ，鉄道の実地研修に出掛けた。それから 1 週間経つか経たないかの頃，英国から友人が山本を訪問してきたので NY で会い，今は，山本はその友人達とともに，首都ワシントンにいる。」

岩倉使節団副使の木戸孝允の日記の記述によると，山本は 1872 年 7 月 20 日に首都ワシントンに木戸を訪問しているので，松本の記述は正しい[27]。

使節団本隊は，7 月 27 日に首都ワシントンを出発，8 月 6 日にボストンを出航し英国に向かった。服部がこの時ボストンにいて木戸と会っていることは先述した。この時，山本と英国の友人一行が，使節団に同行し渡英したかどうかに言及した史料は未見である。ちなみに山本の友人候補である河北と戸田は，寺島宗則とともに，使節団より一便早い船で渡英している。

英国渡航以降の木戸の日記を見ると，1872 年 11 月 28 日に，山本が木戸を訪ねていたことが分かる[28]。そこには，山本がプロシア，ベルギー，フランスを回り，米国に帰国する旨が書かれている。山本は 1872 年の夏から数か月に渡り，ヨーロッパを訪問して回っていたことが明らかになった。

結論としては，山本は 1872 年夏に渡欧したが，イギリス長期留学はしていなかったことになる。1874 年 9 月以降に関しては，イギリスでの鉄道実地研修の可能性は残されている。

山本の学生時代に関しては史料が発見されていない。文系大学と異なり，教室での講義以外にも，実験，現場工事実習などに参加していたことが想像される。学校と異なり，実習の場合は記録に残りにくい。帰国後は工部省鉱山寮に出仕し，1882 年から鉄道関連部署で働き始めた。1901 年に，碓氷峠列車逆走事故で，悲劇的な最期を遂げた。

⑺　岩倉兄弟一行まとめ

フルベッキは，一行 5 人を今までの中で最も有望な留学生とフェリスへの手紙に記していた。彼らはその期待に応えただろうか。1870 年の夏休みと 9 月から始まる年度を終えて，1871 年度 9 月に大学入学を果たしたのは，服部と山本の 2 人である。岩倉具経と折田はその 1 年後の 1872 年 9 月に大学に入学あるいは入学する資格を得た。岩倉具定のみが，健康を害し帰国を余儀なくされたが，大学教授の家に住み込んでいたところを見ると，彼も順調に学んでいれば 1872 年 9 月には大学入学を果たしていた可能性はある。こうしてみると，ほぼ全員が，在米 1 年，2 年で大学入学を果たしたということになる。しかも，4 人のうち服部と折田は大学を正規に卒業している。2 人は米国人学生にも受け入れられ，彼等とともに充実した学生生活を送っていたようだ。この点に

ついては，フルベッキの期待に応えたと言って良い。

更なる分析が必要だが，留学前の長崎での英語学習歴が奏功したと考える。服部と山本は長州藩出身ということで苦労しながらも長崎で，長期間英語ネイティブについて学ぶ環境があった。

一行 5 人が渡米するにあたり，フルベッキはフェリスに宛てた手紙で「願わくは神が彼等を祝福し，より聖い信仰とより高い愛に導かれんことを」と期待を込めて祈りの言葉を書いた。キリスト教の信仰についてはどうだっただろうか。

1870 年の米国新聞で Japanese をキーワード検索すると，日本のカトリック信者弾圧の記事やそれに対する批判的コメントが出てくる。例えば，一行が NB に到着して 2 か月弱の *Daily Critic*（首都ワシントン）6 月 16 日に，日本でのキリスト教徒の迫害に対して，在日の外交団＝アメリカ，イギリス，フランス，プロシアが連名で抗議，日本政府はクリスチャンの日本政府への不服従を懸念しているようだ，といった内容の記事が掲載された。当時の米国では，電信のおかげで，1 紙の記事が全米各地の新聞に転載されたので，その影響は 1 都市に留まらない。岩倉兄弟一行を始めとした NB 在住の日本人留学生も，この話題には無関係，無関心ではいられなかっただろう。

ラトガーズ大学も RGS もキリスト教の雰囲気が濃厚な環境だった。牧師コーウィンのもとで 2 年間に渡り直接個人指導を受けた折田は，プリンストン大学でも日々，キリスト教に触れ真剣に悩み続け，ついに卒業直前に洗礼を受けた。他の 4 人の信仰を明確に証明する史料は無い。少なくとも，岩倉兄弟に関しては，在米時はまだ明治政府がキリスト教徒を迫害していた状況なので，父具視の立場上，信仰を受け入れたとしても，それを公表するわけにはいかなかっただろう。服部は，養父名和の書簡から察するに，キリスト教の信仰に関しては精神的葛藤があったようだ。ハリスが主催した「新生社」との関わりも調査する必要がある。

New Republic（NJ 州都キャムデン）1870 年 7 月 2 日の紙面に掲載された，RGS とラトガーズ大学で学んでいた日本人留学生のインタビュー記事がある。見出しは THE JAPANESE IN COLLEGE となっている。記者に単独で対応しているのは，薩摩藩留学生の畠山義成（変名，杉浦弘蔵，1842–1876）である。

NB で学んでいる日本人留学生に関しては，地の利を活かした，地元 NJ の新聞記事の内容が詳細である。かなりくだけた内容の記事であるが，畠山は，キリスト教への改宗について苦しそうに次のように答えている。

> Two have been converted to Christianity, one to Methodism, and the other Dutch Reform belief. The reporter asked Mr. Soogiwoora, what the Imperial Government say to this. Soogiwoora hesitated, and finally replied that it said

nothing.

“Does your Government know of it?” asked the reporter.

“Well,” said Soogiwoora at last, “not a quite, not a quite.”

この洗礼を受けた二人は，メソジストの吉田清成とオランダ改革派の畠山自身である。畠山としては，自らの信仰について日本政府が知っているかどうかは，お茶を濁した感じで答えている。

ちなみに，他の RGS の日本人学生 12 人のキリスト教に対する姿勢は次のように書かれている。

As for the twelve other Japanese youths they neither approve nor disapprove of the conversion. They are reading and meditating themselves, and have not yet made up their minds whether they shall remain firm to their old faith or not.

日本人留学生達は，明治政府の指示通りにキリスト教を明確に拒否したのではなく，各自葛藤していたことが分かる。

米国で洗礼を受けた日本人は帰国すると，それがキリスト教解禁後でも，自らの信仰を明らかにしなかった場合が多い。フルベッキの期待は，この意味では，裏切られたことになるかもしれない。しかし 5 人が少なくとも 1 年間は生活した NB は，学校も下宿もキリスト教の信仰が深いコミュニティで，reading and meditating と書かれているように精神的，思想的に，どの留学生も大なり小なりキリスト教の影響を受けたはずだ。彼等の帰国後の日本での活動において，この米国生活が精神的，知的に与えた影響がどのように反映されたかを知ることは，自分の幕末維新日本人米国留学生研究の最終ゴールの一つである。

2. 旧幕臣カリフォルニア留学生一行（チャイナ号：1870 年 6 月 22 日横浜発 —7 月 13 日 SF 着）

この船に乗っていた 8 人の日本人は，敢えて命名するならばヴァン・リード率いるカリフォルニア留学生ということになる。ヴァン・リードは日本の新聞等で米国渡航の斡旋の宣伝をしていた。それに応募したのが，この 8 人という可能性が高い。一行をグループ分けすると，田村，能勢，斎藤の旧幕臣組，栗原と多藝の桑名藩士組，そしてその他 3 人ということになる。ここでは，まず旧幕臣組について情報をまとめておく。

⑴　田村初太郎

・留学までの経緯

一行 8 人の中で，最も情報が豊富である[29]。その内容に依拠して以下情報をまとめておく。

田村は旧幕臣で，1864 年に開成所で英語を学び，翌年 2 月には助手，その 2 年後には英学教授手伝となる。明治に入り，父が浜松添奉行となり一家で転居。翌年静岡の名村五八郎私塾に入り，静岡英語学問所英学四等教授，その後，三等教授となった。1867 年春，東京に出て大学南校に入学したが，満足せず海外留学の道を模索していた。留学前から，相当な英語学習歴がある。江戸時代は読み書き中心，維新後の大学南校ではネイティブの指導を受けていた可能性が高い。

1870 年 6 月 22 日，横浜港から米国へ渡り，7 月 13 日 SF に到着した。田村の留学は完全な私費で，渡航・留学費用の捻出は以下の記述が詳しい。

> 「旅費として浜松の父に三百両の用立てを頼んだが，急のこととて間に合わぬとの返事があり，やむを得ず持物を売って百両作り，洋銀メキシコドル九十三ドルに換え，五十ドルを船賃に払った。」[30]

つまり，SF に到着した時には手元に 43 ドルしかない。幕末維新期の留学生は，ほぼ全員が国費，公費，私費で年間 600 から 1,000 ドルの予算で渡米している。田村の場合は現地で働かないことには米国の学校にも通えない。岩倉兄弟一行とは違った，捨て身の留学だった。

・SF での生活

SF の発展ぶりに田村は驚くが，日曜の閑散とした街中で響き渡る鐘の音に惹かれたのか，教会に足を踏み入れ，日曜学校にも顔を出し，そこでパーマーという米国人と知り合い，聖書の内容を教えてもらう。毎週のように教会に通って牧師の説教を聞いたが，疑念があり，信仰心を持つには至らなかった。牧師の説教の内容はある程度は理解できたようだ。

ホームステイ先は，パーマーの母親の家で，8 月 6 日から 3 週間ほど下男奉公をして暮らす。「衣服泥土に浴し鼻より出血し先苦万苦紙上に尽し難し」だった。3 年前，同じ SF で，高橋是清が，ヴァン・リードの父親の家で下男奉公し，学校にも行かせてもらえず，食事も粗末で，家事労働をさせられた例が想起される[31]。この 3 週間のホームステイ労働の賃金は，寝床・賄い付きで合計 5 ドルだった。

・オレゴン州での留学生活

2 か月程経った 9 月 2 日に SF を出てオレゴン州ポートランドに向かい，9 月 6 日に到着，8 日にパシフィック大学（Pacific University）の中学校（grammar school）に入学した。

同大学は，1849 年に設立された，現地の孤児を教育するための学校が前身で，組合教会の牧師等が中心となって作ったキリスト教の雰囲気が濃厚の大学である。1854 年に大学教育を始め，1863 年に最初の学士学位取得者を出した。田村は日曜学校関係者に紹介されたのだろう。

田村は学費，生活費を稼ぐために，ここでも下男生活を強いられる。今度は S. H. マーシュというグラマースクールの校長の家に住み込む。「割烹，鋸挽き，薪割り，牛乳絞り」で心身の疲労も激しかったが，朝から晩まで週末も夏休みも雑用と読書の毎日だった。2 か月前に渡米し NB で学んだ岩倉兄弟一行の留学生活とは雲泥の差である。

英語に関しては，言葉がうまく通じず子供達から揶揄われることもあったようで，教会の説教は理解できても，日常生活会話レベルの英語には苦労したようだ。途中から，同船，旧幕臣出身仲間の能勢栄と斎藤金平も下男仲間に加わった。

グラマースクールでは，「第四読本」と「法書」の研究を始めたという。「第四読本」はグラマースクールでよく使われた Reader と呼ばれる教科書で，First から始まり Fifth まである。Fourth から始まったということは，英語を読む力はかなりあったということになる。

グラマースクールに入学した年の冬，1871 年 12 月に岩倉使節団が SF に到着した。一行を田村等は訪問し，「大使付きの栗原安次郎から二百両を頂き，また勝安房の周旋で脱走罪を許され官費生として扱われることになった」という[32]。この「脱走」については後述する。

グラマースクールは 2 年間で卒業し，1872 年 6 月にパシフィック大学に入学した。岩倉一行の服部，山本からは 1 年遅れで折田と同じペースで大学入学ということになる。グラマースクールか大学 1 年の時に，努力の甲斐あってか，ポートランドの「ハルグレン」という米国人が田村と斎藤に年額 30 ドルを 2 年間援助してくれることになった。

田村は，官費生となっても，将来のために下男奉公を続けた。この蓄えのおかげで，1873 年に日本政府の留学生一斉帰国命令が出た時も自費で修学を続けることができた。

他の日本人留学生は大学に進学しても，学ぶ側のままだったが，田村は大学で 2 年間，学生に化学を講義することになった。できたばかりの小規模な大学だから可能だったのだろうが，田村の日本での教員歴も奏功したと考えられる。今でいう Teaching Assistant だった可能性もある。

田村は，大学時代，演説に力を入れ，2 年生で全校の演説会に参加し，3 年目には選

ばれて演説者となり，4年目には「上等一級生徒として毎期の終わりに演説をした」。大学在学中，課外も含めると，写真，花火，音楽等を研究し，記帳法，フランス語，分析化学等を学んだ。リベラルアーツの大学で特に専攻は無かったようだ。夏休み中は，森林で材木のアルバイトをして体力と財力を養った。

1876年6月7日の卒業式では，選ばれて演説をしたが，演題は不明である。その後，7月28日に大陸横断鉄道で初めて東部に向かい，8月5日にフィラデルフィアに到着し，当時開催中だった建国百年記念万国博覧会を見学した。日本も参加し，日本から関係者が来ていたいので，彼等と会っていただろう。

・パシフィック大学卒業後

卒業後，メリーランド州のバルチモア郊外の町エリカット（Ellicott）にある，「セント・クレメンツ・ホール」という学校の教授として雇用された。これは1866年に設立されたSt. Mary's Collegeではないだろうか。この学校は1882年以前，つまり田村が教壇に立った1876年頃は，Mount Saint Clemensと呼ばれていた，カトリックのレデンプトール会が設立した神学校だった(33)。

1877年3月には同校を去ったので，教歴は1年弱ということになる。その2日後にオハイオ州オバリンのオバリン神学校（The Oberlin Theological Seminary）に入学し，5月に第二組合教会で洗礼を受けた。同校を選んだのは，1876年12月に首都ワシントンを訪問した際，懇意になったE. W. メトローフの妻の薦めだった。折田がプリンストン大学で卒業直前に洗礼を受けてから，ほぼ1年後ということになる。キリスト教と早くから接しながら，ここまで洗礼に時間がかかった理由は何だったのか。ちなみに，田村と折田はフィラデルフィア万国博覧会で出会っている可能性がある。

1877年の夏は，オハイオ州内の町から遠く離れたニューヨーク州ロチェスターまで，教会を訪問し演説して回った。大学時代に鍛えた演説術の賜物だったかもしれない。

1878年2月末，田村は父病死という知らせを日本から受け，苦渋の末決断し，神学校卒業を前に，4月1日SFを出航して帰国した。

帰国後は，官立大阪英語学校の教員となったのを振り出しに，大阪梅花女学校校長，第三高等中学校，京都私立平安女学院等で教壇に立った。ちなみに田村が就職した大阪英語学校の当時の校長，高良二は徳島藩留学生で，田村の後の便で渡米した1870年渡米留学組の1人であり，その後任は折田である。1870年留学組3人が関わっていたことになる。

大阪英語学校では英語，物理，ラテン語を講義している。その後，第三高等学校，京都帝国大学の教員となり，1913年には，京都帝国大学文科大学でラテン語を講義した。田村の蔵書には，ラテン語，古代ギリシャ語，ヘブライ語があり，日本における西洋古

典語学の草分けとも言える存在だったようだ[34]。

(2) 能勢　栄

旧幕臣の家の出身で，江戸で生まれた。留学までの経緯は不明。田村関連史料には，「三条付属」と書いてある[35]。三条の留学に随行という意味に取れるが，三条という渡航者は同船していない。SF 上陸後の経緯は不明だが，田村とは別行動を取り，その後，パシフィック大学附属グラマースクールの校長宅の下男に，斎藤金平とともに加わった。能勢もまた私費留学生で十分な学資もなく渡米したのだろう。

1870 年度にグラマースクールに入学後，田村と同じ 1872 年にパシフィック大学入学，1876 年に同大学を卒業して 9 月に帰国した。

在学中の詳しい情報は無いが，『幕末維新海外渡航者人物情報事典』では，専攻分野「理学」と記されている。帰国後は，岡山県，長野県，福島県の師範学校教員，中学校長等を歴任した。1877 年に『動物生理学』を翻訳出版している。1886 年には森有礼文部大臣の要請で，文部省書記官を務め，中学校と師範学校の教科書『倫理書』の編纂に関わった。森暗殺後は，文筆業，翻訳に専念し，教育学者として指導的役割を果たしたとされている[36]。

(3) 斎藤金平

静岡出身ということで旧幕臣の家出身。能勢とともに，パシフィック大学グラマースクールの校長宅の下男となり，田村とともに，ポートランドの「ハルグレン」という米国人から年額 30 ドルを 2 年間出してもらった。1876 年同大学卒業後，1877 年にミシガン大学に入学し，法学部で学び 1878 年に学位を得て卒業後，帰国した[37]。帰国後は，広島中学校教員となり，後に函館始審裁判所長，大審院判事を務めた。

1876 年 6 月 13 日筆 SF 領事高木三郎から駐米公使吉田清成への書簡で，斎藤，能勢，田村の 3 人がパシフィック大学を 6 月に卒業したが，さらに 3 年間米国東部へ留学したいと高木のところにやってきた旨を伝えている。3 人とも勤労学生で相当苦労し感心なので，話を聞いてやってほしい，と高木は吉田に伝えた[38]。吉田の彼等への対応は定かではないが，田村と斎藤は東部と中西部で留学を続けることができた。

3. 桑名藩脱走，カリフォルニア留学生一行

(1) 脱走の経緯

桑名藩出身の多藝と栗原の二人は諸史料によると，戊辰戦争で新選組の一員として幕府側で戦い，今回ヴァン・リードの小使いとして渡米したことが分かった。二人とも帰国後の日本での動向の詳細が分かっている[39]。

まず，多藝，栗原とヴァン・リードとの関係については，ワカマツ・コロニー研究者が，「於開港場免状相渡候航海人銘鑑」で次の史料を発見している[40]。

・貞作　出身地：横浜太田町三丁目平松ヤ / 身分・職業：寅吉寄子 / 渡航理由：米商ウェンリート小使ニ被雇 / 発行日一八七〇年五月二十二日 / 返納年月：一八七三年二月十日帰朝 / 年齢：22 / 免状渡航名：神奈川
・誠助　出身地：横浜太田町三丁目平松ヤ / 身分・職業：貞作弟 / 渡航理由：米商ウェンリート小使ニ被雇 / 発行日一八七〇年五月二十二日 / 返納年月：一八七四年十一月二十四日帰朝 / 年齢：24 / 免状渡航名：神奈川

貞作は，栗原貞作＝高木貞作で，誠輔は，多藝誠輔＝山脇正勝である。2 人は出身地や身分（苗字無しの町民）をほぼ完全に偽り，ヴァン・リードの小使いの兄弟として出国したことが分かる。明治も 3 年になるというのに，密かに渡米するには理由がある。少し長いが，桑名市 HP の栗原＝高木に関する記述を以下に引用する[41]。

「慶応 4 年に 21 歳（数え年）でした。この年の閏 4 月 3 日に，桑名藩家老吉村権左衛門宣範を越後柏崎の路上で暗殺したといわれています。 もう一人の暗殺者であった山脇隼太郎とともに暗殺後に姿を隠しました。高木は神戸四郎，山脇は大河内太郎と変名し，旧幕府軍の衝鉾（しょうほう）隊に潜り込み，会津若松で桑名藩軍に合流しましたが，その後，桑名藩軍が庄内で降伏したので，彼らも降伏しました。 そして桑名藩軍が桑名へ護送されることになったのですが，彼ら二人が桑名へ戻れば吉村家から仇討ちにあうかもしれないと考えられました。そのため二人は僧侶の姿をして，名前も高木が成徳，山脇が成光とまた変名し，箱館（現在の函館）にいる旧桑名藩主松平定敬を訪ねていきました。庄内を出るときに高木は手紙と刀，髪の毛を服部半蔵に預けました。

ところが彼らが箱館に着いたときには，すでに松平定敬は箱館を出た後でした。その後二人は新選組に属して，最後の五稜郭の戦いに参戦し，敗北したのです。明治 2 年 11 月に東京へ船で護送されて，身柄は桑名藩に引き渡されました。その後のことは明確ではありませんが，二人とも桑名には戻らず，明治 3 年にアメリカへ行きました。高木はいったん帰国して，明治 5 年に大蔵省派遣留学生として，再びアメリカへ行きました。」

これだけの「前科」があれば，明治政府からも桑名藩からも目を付けられ八方ふさがりの状況となり，出国するしか途は無かったということになる。

明治 3 年になっても日本で隠れ回って暮らさなければならなかった旧佐幕藩士に「米国」という活路を開いたヴァン・リードの貢献も見えてくる(42)。ヴァン・リードは，一八六七年七月，十月，十一月，一八六八年二月，十二月，一八六九年十二月に，『萬國新聞』に日本語で，「米国へ学問修業交易又ハ見物遊歴」希望の者を世話するという広告を出していた。

多藝，栗原の SF 到着直後の足跡は不明である。反政府という同じ立場だった田村，能勢，斎藤の旧幕臣 3 人とは別行動を取ったようだ。

⑵ 多藝誠輔

・SF での生活

多藝の名前が最初に史料に登場するのは，名古屋藩留学生の永井久一郎の日記，1871 年 9 月 12 日の記述である。SF 上陸後 1 年 2 か月が経過している。この日，永井一行が宿泊した SF のグランドホテルに，多くの在留日本人が訪ねて来た。「彦根藩二名，東京府商社三名，多芸誠輔等」がその顔ぶれである(43)。翌 13 日の夜，「多芸誠輔・武藤某・安藤・山内・佐藤等」と中国料理店に行き，麺を食べた。多藝の一行訪問の目的は書かれていない。

その 4 か月後，1872 年 1 月 15 日に岩倉使節団が SF に到着し長期滞在していた時，使節団に同行した元福岡藩主黒田長知のところに，多藝と会津藩出身西川友喜が訪ねて来たことが，黒田随行の団琢磨の伝記に書かれている(44)。西川と多藝は，黒田一行を SF で案内したようで，西川は黒田の通訳として雇われ，ボストンに一緒に滞在することになる。多藝は SF に残ったようだ。

更にその 3 か月後，1872 年 4 月 18 日 SF に入港したアメリカ号（横浜発 3 月 26 日）には，大蔵省派遣吉田清成一行 5 人が乗り込んでいた(45)。吉田の米国出張の目的の一つに外債募集があり，吉田は SF で早速交渉を開始した。この時，吉田を訪ねてきた 2 人の日本人について，大隈重信と井上馨宛ての文書で SF に関する諸情報を伝える中で，次のように吉田は記している(46)。

> 「多藝誠輔元桑名藩士，石澤源四郎元斗南藩士，両人は二年前より当地へ罷り越し候而，實学修行之望も有之人物に有之候。且此程同行の内には通辯十分に出来候者無之，彼是差支候旁，右両人至極適當之者と見込候間「ニウヨルク」迄召連，猶經驗之上に而愈宜敷候はば，金銀溶解術實地研究為致奉存候。」

桑名藩出身の多藝と会津藩出身の石澤という 2 人の日本人が 2 年前から SF で修学していて，吉田一行には十分な通訳がいないので，2 人を NY まで連れて行き，そこで，

おそらく貨幣鋳造のための実地研修させたい旨伝えている。吉田はSFから首都ワシントンに移動し，1872年6月には渡英する。多藝と石澤が，この後，吉田一行に同行したかどうか，どこまで同行したかは未調査である。通訳として雇われたとしても，吉田一行の渡英までの2か月間ほどのことだっただろう(47)。

多藝や西川，石澤が，このように，日本人一行がSFに着くと訪問していたのは，生活費稼ぎと自分の売り込みが目的だったのだろう。SFを案内し通訳を担当することにより，某かの御礼をもらい，西川のように長期間に渡る仕事も貰える可能性もある(48)。案内してもらった方も，ただでお世話になる訳にはいかない。SFで自活していく必死さがうかがえる。

・ミシガン州立大学

1872年9月，多藝は，SAISKE TAGAIという名前でミシガン州アナーバーにある州立ミシガン大学に入学し，1874年まで在籍してたことが分かっている(49)。卒業はしていない。学費が安かった同大学では，日本人留学生がこの後，外山正一，同船していた斎藤金平など続々と入学してくる。多藝は日本人学生第1号で渡米2年後の大学入学である。

Salem Register（マサチューセッツ州）1872年10月14日の記事に，在ミシガン州アナーバー特派員が，市内のUnion High Schoolで，bright looking Japanese youths（聡明そうな日本人の若者達）が学んでいると書いている。多藝がミシガン大学に入学した時に，同じ町の高校で学んでいた日本人留学生が複数いたことが分かる。同大学で学んだ日本人で最も有名な人物は外山正一（1848–1900）である。彼は1873年に同大学に入学し，入学前に市内の高校で学んでいたので，外山はこの1人だったのだろう。

多藝の帰国は1874年11月となっているので，ミシガン大学を卒業せずに帰国したことになる。帰国後は，山脇と名乗り，1875年に三菱に翻訳係として入社したのを皮切りに，三菱所有の海外航路，高島炭鉱，長崎造船所など，三菱内部で出世を遂げていく。

⑶　栗原貞作

栗原については，拙稿で既に採り上げている(50)。1872年4月に多藝が吉田清成を訪問した時，この吉田一行に参加していたのが栗原である。栗原は単独で帰国し，吉田一行の一員として再渡米した。この帰国の目的は多藝と自分の学費の工面ということも考えられる。

4. その他の 3 人

⑴ 横浜の小使，吉，俗名タム

1870 年 11 月 17 日に SF に着いたチャイナ号には，大垣藩出身松本壮一郎等が乗船していた。松本の手記によると，SF では，佐倉藩出身佐藤百太郎，徳島藩出身森源蔵，横浜の吉蔵が会いに来ている[51]。この吉蔵が，吉＝タムという可能性はある。江戸の儒者，佐藤一斎の孫の河田栄之助も当時 SF にいたようで，松本に会いに来ている。松本の手記によると，SF には 7 人の日本人がいた。当時の SF 在住日本人に関しては，関連史料を収集中であり，別稿で扱いたい。小浜藩出身塚越と彦根藩出身大路も，この 7 人に入っていたかもしれない。

⑵ 塚越酸素彦（生没年不明）

小浜藩出身。唯一の情報は，彦根藩主井伊直憲一行が 1872 年 12 月に渡米した際の『井伊直憲洋行日誌』の記述である[52]。1873 年 3 月 19 日，井伊一行がボストンからニューヨークに戻ってきた時，一行はセントニコラスホテルで「塚越幷由良」ともう 1 人の日本人宿泊客を訪ねている。塚越に関する記述はこれ以外にない。由良は紀州藩出身の由良守応で，当時，勧農寮から派遣され米国の牧畜の実態を見学して回っていた。この塚越が小浜藩出身の塚越と同一人物であれば，英語が不自由な由良の通訳として一緒に行動していた可能性がある。

⑶ 大路元雄（生没年不明）

彦根藩出身。史料未発見。永井久一郎等名古屋藩留学生が，1871 年 9 月 12 日に SF に上陸しグランドホテルに宿泊していたところ，多くの日本人が訪問してきた。そのうちの 2 人は，名前は記されていないが，「彦根藩二名」と書かれている[53]。この 1 人が大路ではないだろうか。

彦根藩が米国に送り出した留学生については，鈴木栄樹は，鈴木貫一と武藤精一を挙げている[54]。鈴木貫一は，明治元年（1868 年）出国後 SF で英語を学び，明治二年に帰国した。武藤は実業留学で，やはり明治元年に渡米し，ニューヨーク州中部のユティカ（Utica）で「羅紗製造機械場」で技術伝習を受けていた。大路には触れていない。

5. 1870 年 6 月 22 日出航チャイナ号乗船日本人渡航者のまとめ

これまで，幕末維新の米国日本人留学生研究は，NB やボストン，ブルックリン，ニューヘイブン等，米国北東部で学んだ日本人留学生にほぼ限られていた。その理由は，フルベッキ－フェリスのオランダ改革派教会関係者経由の留学が多く，史料も豊富で研究対

象としてアクセスしやすかったことが挙げられる。しかし，今回の調査で，SF，オレゴン州やミシガン州など，米国西部，中西部で学んでいた日本人留学生に関する情報が増えてきていることが分かる。

この 8 人については，田村と多藝以外は，留学に関しては，ほとんど先行研究が無い。ワカマツ・コロニーの研究者達からの更なるアプローチを含めて，関連分野研究者の協力により，史実を明らかにしていく必要がある。実際，幕末維新期に SF で学んでいた日本人留学生はかなりいたようで，まずはこの点から調査を開始したい(55)。

田村初太郎関連史料によると，岩倉使節団が SF に到着して一行に会った時に「勝安房の周旋で脱走罪を許され」たという。また，松本壮一郎の留学中の手記によれば，「脱走の姿にてミチガン当等にも留学せる本邦人あり」と恐らく多藝のことが書かれている。桑名藩の多藝，栗原の脱走は明らかだが，旧幕臣の田村，能勢，斎藤も「脱走歴」があったとすると，何のことだったのか。彼らも何らかの幕府側の隊に属し，新政府の目から逃れ続けなければならない存在だったのだろうか。小浜藩は鳥羽伏見の戦いでは幕府側で戦った。彦根藩は，薩長側で戦ったが，譜代藩であり，暗殺された大老井伊直弼の出身の藩であったことから，心情的には佐幕の藩士も少なくなかった。

彼らに米国という究極の脱出先を提供したのがヴァン・リードだった。一行 8 人は藁にもすがる思いで，ヴァン・リードになけなしの金を払ってとにかく SF に渡ったのではないか。僅かな資金の私費留学なので，物価が高く，大陸横断鉄道の費用もかかる東部に行かず，SF に留まり，住み込み労働などをしながら勉学を続けた。

一行 8 人のうち，田村，能勢，斎藤は大学卒業，多藝も大学で学び，栗原は専門学校で実業を身に着ける等，立派な教育成果を挙げている。日本に戻るに戻れないという状況，生活費，授業料を自費で捻出しなければならないという厳しい環境が，彼らのディシプリンを刺激し続け，学業成績にもそれが反映されていたのではないだろうか。パシフィック大学もラトガーズ大学と同じように，キリスト教の雰囲気が濃厚な小規模な大学だった。SF の教会の世話にもなったことだろう。田村以外のカリフォルニア留学生とキリスト教との関わりは，今後の研究課題の一つである。

また，折田と田村の例に見るように，全く異なる留学生活を送っていた，1870 年留学組の東（ニュージャージー州）西（カリフォルニア州，オレゴン州）の交流（帰国後も含めて）も興味深い研究テーマである。

おわりに

1870 年には，1868, 1869 年と比べると，日本人留学生も含めて，米国新聞における日本・日本人に関する記事の掲載がかなり増えてきた印象を受ける。日本から来た軽業

師の一行は複数のグループが全米を巡業し，彼等の紹介や実際に行われたパフォーマンスに関する記事が，年間を通して全米各地の新聞に載っている。

1月24日には，米国海軍船オネイダ（Oneida）号が，現在の神奈川県観音崎沖で，英国船と衝突し沈没。この事件や生存者の体験談の影響のせいか，米国の新聞では1870年前半は日本がよく取り上げられた。日本に旅行，任務で長期滞在した西洋人の体験談や在日本特派員発の記事も，読者の興味を引くのか，掲載されることが少なくなかった。

日本と米国とのビジネスに関する記事も多い。日本から欧米に輸出された，茶葉や繭，蚕紙はよく新聞で採り上げられた。*San Francisco Bulletin* 1870年4月6日の紙面には，American Enterprise in Japanという見出しの記事が，日本における鉄道や電信の敷設といった米国のビジネスチャンスについて報じている。明治も3年になると日本の国情も落ち着きを見せ始め，特に太平洋岸のサンフランシスコ等は，ビジネス絡みで日本に熱い視線を送り始めていた。

このような日本への関心の高まりを背景に，全米各地の日本人留学生の情報も増えてきている印象を受ける。記事の転載も多い。日本と中国の混同，日本でのキリスト教徒に対する迫害や，幕末，維新初期の攘夷的雰囲気の余韻がまだ濃厚に残されていたこの時期，次々に船でやって来る礼儀正しく，princeと呼ばれた日本人の渡航者達は，日本に対するイメージの改善を促進していたように感じられる。

これまでの調査の結果から，1869年末から日本人の出国ラッシュを予想していた。1870年の1月から6月までの前半は，今回姓名が判明した日本人の出国は，岩倉兄弟一行（3月23日出航）と旧幕臣・桑名藩出身者とその他（6月22日出航）のみである。様相が一変するのは7月出航以降であるが，これは次稿に譲りたい。

意外だったのは，1870年渡航集団は，1873年の文部省による留学生一斉帰国召喚を乗り越えて，多くの大学卒業生を輩出していることである。従来，維新初頭の日本人米国留学生は，グラマースクールや私立アカデミーで英語を学習する段階で帰国し，大学入学まで到達したケース，さらに大学卒業まで至ったケースは稀というイメージがあった。服部，折田，田村，斎藤，能勢は大学を卒業し，山本，多藝も大学に進学し複数年学んでいる。

この成功要因の一つとして，日本での長期間に渡る英語学習が挙げられるだろう。服部，山本は，米国到着後1年で大学に入学し，岩倉具経，折田は2年で大学入学資格を得ている。彼らは長崎で，フルベッキ等から英語を1年かそれ以上学んでいた。田村も早くから英語を読み・書き中心で学び，留学前から長期間に渡る英語指導歴もあった。

幕末維新期の日本人留学生は，米国で初めて英語に触れアルファベットから学んだという印象があるが，田村は5段階のリーダーの上から2番目を読むぐらいの英語力を既

に身に着けていた。

今後は，長崎，横浜，慶應義塾等，日本で英語教育を受けて留学した日本人の，日本での英語学習の内容と，留学先での英語力，一般学力の伸びとその速度等の関係も調査する必要がある。

カリフォルニア留学組は，田村以外は日本での英語学習歴は無さそうだが，米国で生きていくしかない，という必死の覚悟が成功要因だったかもしれない。能勢，斎藤，多藝も渡米後2年で大学に入学している。

キリスト教との関係については，彼等の内面に関することで，時代的制約もあり，情報は限られているが，ラトガーズ大学，プリンストン大学，パシフィック大学のいずれもキリスト教的雰囲気が濃厚な環境だったので，洗礼は受けなかったとしても，価値観，人生観，社会観等で，相当な影響を受けていたと思われる。名和・服部書簡や，畠山のインタビューは，彼等の内面を伝える重要な史料である。今後も，米国人宛ての個人書簡等の内容を精査していきたい。

この米国渡航者リスト作成は，当初の単純な「リスト作成」の域を超えて，調査内容が拡大する一方で，焦点がぼやけているのでは，との指摘も受けている。確かにその通りであるが，次から次へと枝葉のように分かれて現れる更なる研究テーマの出現を無視できない，というのが本音である。しかし，自分個人の非力では到底対処できるものではない。拙論を読まれた方に関心を持っていただき，共に研究を進めていただければ，という思いもあり，執筆を進めている。

次稿では，1870年代後半（7月以降の出発）を扱うが，さらに日本人渡航者が増え，発表もさらに2回に渡る予定である。また，1870年の渡航者の研究で，1867–1869年の渡航者に関する新たな情報も入手できたので，こちらに関してもいずれ修正した結果をまとめて発表したい。

《注》

（1） これまでの調査結果は，以下の拙稿参照。なお，1870年分の調査報告は，本稿も含めて3回に分けて発表する予定である。

- 塩崎智（2020）「1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き，アメリカ号日本渡航者の調査 ── 先行研究発表後四半世紀の関連研究成果のまとめ ──」
- 同（2021）「横浜発サンフランシスコ行直行便の日本人船客リスト（1868年と1869年）── 日米両史料を活用した試み」

Japan Weekly Mail（以後*JWM*と表記）の船舶情報欄と太平洋郵船の就航に関しては，伊藤久子「解説」が基本的情報を提供している。本研究のきっかけとなった西岡淑雄の以下2本の研究も重要である。

- 西岡淑雄（1992）「太平洋郵船と英学史」
- 同（1993）「明治五年二月十八日横浜発のアメリカ号で渡航した留学生たち」

（2） この船便のみ横浜出航日が不明。SF 着の 3 週間前の日付を出航日とした。1869 年 12 月末出航の可能性が高いが，前稿，塩崎（2021）で扱わなかったので，本稿で採り上げた。

（3） 吉原重和「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」pp. 5–6。

（4） 例えば，ヘボンが 1868 年に米国に一時帰国した際，長吉と三吉という横浜在住の日本人が「小使」として免状を発行されている。免状発行者リストは，海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遥かなる「ワカマツ・コロニー ── トランスパシフィックな移動と記憶の形成』の巻末（資料 12–16, pp. 69–117）に掲載されている。

（5） 寺島俊雄「神戸病院初代病院頭アレキサンダー・ベッダーに関する新事実」。

（6） *Cincinnati Daily Gazette*（オハイオ州）1870 年 8 月 20 日に，神奈川在住のヴァン・リードが東部に向かっていると書かれている。SF にしばらく滞在した後，東部に向かったようだ。日本人が同行しているという記述は無い。ヴァン・リードに関しては，後出の注(42)参照。

（7） 加納重朗「田村初太郎について ── 未発表「履歴」より ──」，pp. 66–67。インターネット上，国会図書館等では入手できない貴重な史料である。平安女学院の校史編纂のためのメモ等の『田村初太郎略歴』が，ほぼそのまま紹介されている。内容は一次史料的価値がある。

（8） 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』pp. 172–173。

（9） ヘンリー・スタウト（1838–1912）は，妻のエリザベスとともに，オランダ改革派教会の宣教師として派遣され，1869 年 3 月に長崎に来た。フルベッキはその直後，東京に招聘され，スタウトはフルベッキの後継者として長崎の広運館で英語を教えた。折田，服部，山本も，スタウト訪日以前は，フルベッキに学んだことがあった。

森川潤「青木周蔵の渡独前の修学歴（4）── 長崎遊学時代　その二　修学 ──」によると，山本等長州藩士は，1867 年 5 月頃から長崎での自費留学が許されたが，公の場で教育を受けることができず，薩摩藩邸にかくまわれて，フルベッキや阿波藩士芳川顕正から英語を学んだ。

小川亜弥子「幕末期長州藩の洋学と海外留学生」（pp. 192–193）によると，慶應三年に長州藩では海外留学の希望者が急増した。長崎で海外留学の機会をうかがっていた長州藩士として，山本の名前が挙がっているが，服部の名前は見当たらない。

服部，山本に関しては，長州藩士の当時の長崎での立場を意識して，フルベッキは自分の弟子として書かなかったのかもしれないが，薩摩藩出身の折田に関しては説明が付かない。フルベッキは，多くの日本人生徒を教えていたので，個人情報が混乱していたこともありうる。二次史料ではあるが，スタウトから英語を学んだ日本人として，黒木五郎編『梅光女学院史』は，大隈重信と服部を挙げている（p. 62）。スタウトに関しては，G・D・レーマン著峠口新訳『ヘンリー・スタウトの生涯』を参照した。

米国留学生の留学前の英語力を知るために，幕末・明治初年，長崎で英語を「誰が」「誰に（フルベッキ，スタウト，何礼之等）」「どこで」「どれくらいの期間」「何を」学んだかという情報が必要である。

(10) 巌平『三高の見果てぬ夢』では，5 人の中では，山本と服部が英語力で秀でていたと推測している（p. 23）。

(11) 高橋秀悦『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学―日銀総裁富田鐵之助のアメリカ体験』p. 204 参照。巌は，折田の海外留学願望に岩倉具視が共鳴し，具定と具経 2 人を折田に託して長崎に送ったという説を紹介している（巌，p19）。西村文則『岩倉具定公伝』（p. 106）によると，父具視は，具定には法律制度，具経は海軍について学ぶよう指示していた。

岩倉兄弟の帰国後に関しては，以下の通り。

- 具定：1874 年帰国後内務省地理局出仕。1882 年伊藤博文の憲法調査に随行して欧州に渡る。1884 年家督を継ぎ公爵。帝室制度取調委員，貴族院議員，学習院長を

歴任。1900 年枢密顧問官，1909 年宮内大臣となる。（https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/22.html?cat=30　2021 年 10 月 24 日最終閲覧）

・具経：1878 年太政官権少書記官・法制局専務となる。以後，兼大蔵権少書記官，大蔵権少書記官兼太政官権少書記官などを歴任。1884 年男爵を叙爵。同年 9 月，外務書記官に転じロシア公使館で勤務した。帰国して 1890 年 3 月宮中顧問官に就任したが，同年 10 月に病のため死去。具経のイギリス留学に関する詳細な情報は未見である。（https://www. weblio.jp/wkpja/content/%e5%b2%a9%e5% 80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c_%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c%e3%81%ae%e6%a6%82%e8%a6%81　2021 年 10 月 24 日最終閲覧）

（12） 前出，厳，p. 33。

（13） 塩崎智（2019）「1870 年に実施された米国国勢調査（Census）── 日本人留学生情報の分析 ──」（p. 67）。具経は国勢調査結果に名前が出ていない。兄弟は常に行動を共にしていたわけではないようだ。

（14） ラトガーズ大学アレグザンダー図書館所蔵のグリフィス・コレクションに納められている。

（15） 留学 2 年目の日本人留学生の英語力を現した例として【英文資料 1】に掲載した。プライベートな手紙で，末尾に書いてあるように，米国人の英文チェックは入っていない。ラトガーズ大学の University Archives, George Washington Atherton Papers に納められている。アサートン教授の 1870 年前後の日記や書簡が，ペンシルヴェニア州立大学の図書館に所蔵されている。岩倉具定を始め日本人留学生からの書簡，日本人留学生の情報などが発見できるかもしれない。

（16） ラトガーズ大学アレグザンダー図書館がマイクロフィルムで所蔵している。

（17） 厳『三校の見果てぬ夢』と，板倉創造『一枚の肖像画 ── 折田彦市先生の研究 ──』。後者は，特に日本人留学生との交流に関する記述が詳細である。高橋秀悦『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学』の第 3 章「ニュージャージー州ミルストーン」（pp. 155–184）も参照。

（18） コーウィンに関しては，前出，高橋の第 3 章 3 節コーウィン牧師（pp. 164–169）に詳しい。前出，厳，p. 76 の注(21)も参照。

（19） 服部翁顕彰会編『服部一三翁景傳』（服部翁顕彰会，1943 年）。服部の留学を扱った論文，著作は見当たらない。

服部の帰国後の経歴は以下を参照。 https://kotobank.jp/word/%E6%9C%8D%E9%83%A8%20%E4%B8%80%E4%B8%89-1652624（2121 年 10 月 26 日最終閲覧）

服部の経歴からは理系学部卒業生らしさが感じられないが，地震に興味を持ち，1880 年日本地震学会の初代会長を務めた。

伏谷聡「知事服部一三とその史料」によると，2007 年 1 月に服部の子孫から兵庫県公館県政資料館へ史料を寄付する申し出があった。この中に書簡が 336 点含まれている。服部の米国留学中の書簡は 13 点で養父の名和緩関連の書簡が 11 点を占めるという。前出の『服部一三翁景傳』には，名和発の書簡が 6 点掲載されている。両者が重なっているか否かを明らかにする必要がある。

（20） 原保太郎は，ラトガーズ大学科学学部に 1873 年入学しているが，それまでどこで学んでいたかは不明。

（21） 以前，ラトガーズ大学アレグザンダー大学の司書の方からコピーを頂いた。Marilyn Bandera, *Case Study in Educational Motivation: Ryugakusei and Rutgers College 1866–1895,* 1970 April。

1870 年代の米国大学におけるフラタナティ活動については調査が必要である。ラトガーズ大学科学学部の最終学年で病死した，越前藩出身の日下部太郎（1845–1870）は成績優秀

で，病死後，日本人学生としては初めて Phi Beta Kappa に推薦され，黄金の鍵を授けられた。

(22) 吉田清成関係文書研究会編・解説『吉田清成関係文書四』p. 442。田中智子のまとめ（「幕末維新期のアメリカ留学 ── 吉田清成を中心に ──」）によると吉田の米国留学生活は以下の通りである。吉田は 1868 年 9 月ラトガーズ大学科学学部に入学し，1869 年 7 月にマサチューセッツ州のウィルブラハム・アカデミー（Wilbraham Academy）に移った。大学から私立アカデミーに移る例は稀有である。1870 年 2 月にはコネチカット州ミドルタウン（Middletown）に引っ越しウエズレイヤン大学（Wesleyan University）に入学した。服部が NB に来た時には，吉田もまだ大学生だった。1870 年 6 月には，外務省から手当をもらい，在米官費留学生の学資配達を命じられるなど，米国東部で学んでいた日本人留学生のまとめ役といった存在だった。

1870 年秋には，上野景範にその能力を買われてイギリスへの出張に同行し，吉田の米国留学生活が終わった。1874 年には米国駐在日本全権公使として首都ワシントンで公務に就くことになる。

(23) 山本の米国から英国留学への変更を示唆する情報としては，『幕末明治期海外渡航者人物情報事典』があり，山本の留学先は米国と英国となっている。前出，厳，p. 34 で，岩倉使節団に随従して英国で鉄道について研究することになった，と書かれている。これらの根拠は服部の伝記に収録されている「外遊日記」の日付のない「後期」と記された「此の頃，河本氏欧州より来り，山本十助氏，大使と共に渡欧，又国司氏米州を去る」という 1 文（p. 295）だと思われる。

(24) Edward J. M. Rhoads, *Stepping Forth into the World. The Chinese Educational Mission to the United States, 1872-81*（Hong Kong University Press, 2011）

(25) 前出，板倉，p. 120。

(26) ラトガーズ大学アレグザンダー図書館所蔵。タイプ打ちの書簡が保存されている。

(27) 日本史籍協会編『木戸孝允日記　二』p. 201。明治五年五月十五日に「山本重助尋来る」とある。英国から来た友人とは，4 日前にイギリスから到着した，長州藩出身の河北俊弼（義次郎，1844–1891）と尾崎三良（戸田三郎，1842–1918）の可能性が高い。

(28) 同上，p. 266。明治五年十月二十八日に記載。

(29) 加納重朗「田村初太郎について ── 未発表「略歴」より ──」の内容は，沼津市明治史料館編『神に仕えたサムライたち 静岡移住旧幕臣とキリスト教』pp. 35–38 に掲載された，菊池三男氏所蔵の『田村初太郎履歴』とほぼ同じであるが，異なる箇所もある。これらの史料の内容は，いずれ精査する必要がある。

(30) 前出，加納，p. 66。

(31) 高橋是清，上塚司編『高橋是清自伝（上）』pp. 46–47。

(32) 前出，加納，p. 68。栗原安次郎という使節団員の確認ができていない。

(33) Michael Duck , *The Story Beneath The Ruins A History of St. Mary's College in Ilchester Part I: From Tavern to Seminary,* 2000　http://ann.stubbornlights.org/stmarys/story1.html（2021 年 10 月 20 日閲覧）

まだ洗礼を受けていないが，プロテスタントの環境で育った田村が，カトリックの神学校で教壇に立つことになった経緯は興味深い。

(34) 堀井令以知「ラテン語教育の先駆者 ── 田村初太郎のこと」。

(35) 前出，加納，p. 67。留学生では，イギリスに 1868 年に留学した三条公恭しか，三条という名前は見当たらない。

(36) 齋藤知明「明治二〇年代の教育言説と「宗教的情操」：能勢栄を中心に」，pp. 408–409。

(37) 秋山ひさ「外山正一とミシガン大学」p. 17，注 26。ミシガン大学の明治期日本人留学生

に関しては，田中康子「ミシガン大学幕末・明治の留学生 72 人」も参照した。

(38)　吉田清成関係文書研究会編『吉田清成関係文書二　書翰篇 2』p. 191。

(39)　栗原＝高木に関しては，一時帰国後の再渡米の件を，拙稿で採り上げた。塩崎智（2020）pp. 94–95。

(40)　海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遥かなる「ワカマツ・コロニー」』史・資料，pp. 110。

(41)　桑名史上の人たち（８）── 高木貞作（たかぎ　ていさく）── http://www.city.kuwana.lg.jp/index.cfm/24,11184,234,407,html（最終閲覧 2021 年 10 月 20 日）。

(42)　前出，海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遥かなる「ワカマツ・コロニー』pp. 27–41。ヴァン・リードに関しては，様々な論考が発表されてきたが，菅美弥がこれまでの経緯を整理してまとめ，客観的，公平な評価が述べられている。ハインリッヒ・シュネルとヴァン・リードの「避難民送り出し」プロジェクトの発想は興味深く，歴史的にもより詳細に検証されるべきである。ヴァン・リードは幕府海軍を率いて北海道に向かった榎本武揚にもハワイへの「亡命」を勧めていた。『萬國新聞』の公告の件は，同書所収の小澤智子「第二章新聞報道にみる初期の移動―横浜からハワイ・サンフランシスコへ」pp. 76–77 を参照。

(43)　瀬戸口龍一「永井久一郎と専修大学創立者たち：「禾原先生遊学日誌」からみるアメリカ留学生の実態について」p. 71。

(44)　多藝と西川と黒田の関係については，海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遥かなる「ワカマツ・コロニー』pp. 140–143 参照。故團男爵傳記編纂委員会編『男爵団琢磨傳　上』p. 66 で，団は「多藝と云う人は実に立派な人で御一新の前に人を斬って大に乱暴して逃げ出して来た人だ」と記している。団は帰国後，しばらく経ってから多藝と知らず山脇に再会した。

(45)　塩崎（2020）参照。

(46)　大内兵衛・土屋喬雄編『明治期財政経済史料集成』10 巻，pp. 268–269。

(47)　会津藩士石澤源四郎に関しては，史料が集まり次第，SF 在住留学生に関する論考で採り上げる予定である。

(48)　彦根藩井伊直憲一行は，1872 年末，SF 到着時，案内してくれた高木源次（出身不明）に「挨拶」として 50 円を与えた。鈴木栄樹氏からの個人的史料提供「井伊直憲洋行日誌」による。

(49)　前出，秋山ひさ，参照。例えば，小野寺香月, 神戸大学博士論文，2018 年「近代日本重工業における経営問題の相克と克服 ── 組織内部の意思決定分析から ──」に次のように書かれている。

> 「敗戦後，山脇は高木と共に岩倉使節団随行の留学生となり，1870 年からアメリカに留学した。彼らが留学した理由は，家老を暗殺した者を国内に置くことが憚られたためといわれている。山脇が留学で何を学んだのかは不明であるが，高木がのちに商法講習所（現一橋大学）に勤め会計の教科書を著していることから，商業に関係するものと推察される。」（下線筆者）

論文の大筋には影響が無いと思われるが，下線部分は，修正が必要であろう。

(50)　注(45)参照。

(51)　瀬戸口龍一翻刻・解説「松本壮一郎「亜行日記」」p. 103。

(52)　鈴木栄樹「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学 ── 大名華族の西洋体験 ──」p. 232。

(53)　瀬戸口龍一「永井久一郎と専修大学の創立者たち」p. 71。

(54)　前出，鈴木，pp. 213–214。

(55)　諸史料によると，SF 市内のシティカレッジ（City College）という大学に通っていた日本人留学生が多かったようだ。高橋是清，上塚司編『高橋是清自伝（上）』p. 43 にシティカレッジで学んでいる金子という日本人が登場している。この彦根藩 2 名のもう 1 人は，武藤精一で，当初は SF で牧畜を学んでいた。後にニューヨーク州のユティカで工場実地研修を受けた。渡英する予定だったが，結局米国に留まり，1873 年に米国で亡くなった。彦根市編集員会編『新修彦根市史　第 8 巻　史料編近代 1』pp. 723–724 参照。

参考文献

●「基調論文」

伊藤久子「解説」（『復刻版ジャパン・ウィークリー・メール　第 1 期　第 3 回配本：1880–1884 別冊付録』，エディション・シナプス，2007 年）pp. 5–14。

塩崎智「1872 年 3 月 26 日横浜発サンフランシスコ行き，アメリカ号日本人渡航者の調査 ── 先行研究発表後四半世紀の関連研究成果のまとめ ──」（『拓殖大学論集　人文・自然・科学研究』44 号，2020 年 10 月）pp. 75–107。

同「横浜発サンフランシスコ行直行便の日本人船客リスト（1868 年と 1869 年）── 日米両史料を活用した試み ──」（『拓殖大学論集　人文・自然・科学研究』45 号，2021 年 3 月）pp. 97–122。

西岡淑雄「太平洋郵船と英学史」（『英学史研究』25 号，1992 年）pp. 87–101。

同「明治五年二月十八日横浜発のアメリカ号で渡航した留学生たち」（『英学史研究』26 号，1993 年）pp. 159–172。

●「資料集」

大内兵衛・土屋喬雄編『明治期財政経済史料集成』10 巻（改造社，1935 年）。

海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遥かなる「ワカマツ・コロニー ── トランスパシフィックな移動と記憶の形成』（彩流社，2019 年）。

高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』（新教出版社，1978 年）。

手塚晃，石島利男共編『幕末明治期海外渡航者人物情報事典』（雄松堂書店，2003 年）

日本史籍協会編『木戸孝允日記　二』（東京大学出版会，1967 年）。

彦根市編集委員会編『新修彦根市史　第 8 巻　史料編近代 1』（滋賀県彦根市，2003 年）。

吉田清成関係文書研究会編『吉田清成関係文書二　書翰篇 2』（思文閣出版，1997 年）。

●その他の日本語文献，資料

秋山ひさ「外山正一のミシガン大学」（『神戸女学院大学論集』29 巻 1 号，1982 年 7 月）pp. 1–18。

小川亜弥子「幕末長州藩の洋学と海外留学生」（『洋学』27 号，2020 年）pp. 177–213。

大久保利謙「幕末の長崎と上野景範 ── 長崎とサツマの英学文化交渉史断片 ──」『大久保利謙歴史著作集 5　幕末維新の洋学』（吉川弘文館，オンデマンド版，2007 年，pp. 317–343）。

加納重朗「田村初太郎について ── 未発表「略歴」より ──」（『平安女学院短期大学　のぞみ』19 号，1977 年 2 月）pp. 65–73。

黒木五郎（編）『梅光女学院史』（下関梅光女学院，1934 年）。

齋藤 知明「明治二〇年代の教育言説と「宗教的情操」：能勢栄を中心に」（『宗教研究』89 巻別冊，第十三部会，研究報告，〈特集〉第 74 回学術大会紀要，2016 年）pp. 408–409。

塩崎智「1870 年に実施された米国国勢調査（Census）── 日本人留学生情報の分析 ──」（『拓殖大学論集　人文・自然・科学研究』41 号，2019 年 3 月）pp. 60–93。

鈴木栄樹「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学 ── 一大名華族の西洋体験 ──」（佐々木克編

『幕末維新の彦根藩』彦根市教育委員会，2001 年）pp. 209–240。
瀬戸口龍一翻刻・解説「松本壮一郎「亜行日記」」（『専修大学史紀要』2 号，2010 年 3 月）pp. 90–110。
瀬戸口龍一「永井久一郎と専修大学創立者たち：「禾原先生遊学日誌」からみるアメリカ留学生の実態について」（『専修大学史紀要』3 号，2011 年 3 月）pp. 55–79。
高橋是清，上塚司編『高橋是清自伝（上）』（中公文庫，1976 年）。
田中智子「幕末維新期のアメリカ留学 ── 吉田清成を中心に ──」（山本四郎編『日本近代国家の形成と展開』吉川弘文館，1996 年）pp. 2–36。
田中康子「ミシガン大学幕末・明治の留学生 72 人」（『知識』2 号，1990 年）pp. 162–169。
故團男爵傳記編纂委員会『男爵団琢磨傳　上』（故團男爵傳記編纂委員会，1938 年）。
妻木忠太『史実参照木戸松菊公逸話』（有朋堂書店，1935 年）。
寺島俊雄「神戸病院初代病院頭アレキサンダー・ベッダーに関する新事実」（『神緑会ニュースレター』7 巻 4 号，2016 年 3 月）pp. 17–24。
西村文則『岩倉具定公伝』（北海出版社，1943 年）。
沼津市明治史料館編『神に仕えたサムライたち 静岡移住旧幕臣とキリスト教』（沼津市明治史料館，1997 年）。
伏谷聡「知事服部一三とその史料 ── 兵庫県公館県政資料館所蔵の服部一三知事関係資料について ──」（『新兵庫県の歴史』1 号，2009 年 3 月）pp. 55–67。
堀井令以知「ラテン語教育の先駆者 ── 田村初太郎のこと」（大修館書店『言語』1 号，1983 年 7 月）pp. 30–33。
森川潤「青木周蔵の渡独前の修学歴（４）── 長崎遊学時代　その二　修学 ──」（『広島修大論集』57 巻 1 号，2016 年）pp. 1–28。
厳平（Yan Ping）『三高の見果てぬ夢―中等・高等教育成立過程と折田彦市』（思文閣出版，2008 年）。
吉原重和「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」（『新島研究』104 号，2013 年 2 月）pp. 3–31。
吉元正幸「上野景範渡米日記」（『研究年報』14 号，1985 年）pp. 37–47。
G・D・レーマン著，峠口新訳『ヘンリー・スタウトの生涯』（新教出版社，1991 年）。

●英語文献・資料

Marilyn Bandera, *Case Study in Educational Motivation: Ryugakusei and Rutgers College 1866–1895.*（In Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree Master of Arts, presented to the Faculty of the Department of History University of Hawaii, 1970 April 24）
Edward J. M. Rhoads, *Stepping Forth into the World. The Chinese Educational Mission to the United States, 1872–81.*（Hong Kong University Press, 2011）

●インターネット上で入手した情報

岩倉具定
https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/22.html?cat=30　2021 年 10 月 24 日最終閲覧
岩倉具経
https://www.weblio.jp/wkpja/content/%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c_%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c%e3%81%ae%e6%a6%82%e8%a6%81　2021 年 10 月 24 日最終閲覧
歴史街道編集部『「致遠館と弘道館～岩倉具視が息子を託した佐賀の藩校」『WEB 歴史街道』

（2018 年 7 月 11 日公開， https://shuchi.php.co.jp/rekishikaido/detail/5230， 2021 年 9 月 19 日最終参照）
栗原貞作　桑名史上の人たち（８）── 高木貞作（たかぎ　ていさく）──
http://www.city.kuwana.lg.jp/index.cfm/24,11184,234,407,html（2021 年 10 月 20 日最終閲覧）。
Michael Duck, *The Story Beneath The Ruins A History of St. Mary's College in Ilchester Part I: From Tavern to Seminary,* 2000
http://ann.stubbornlights.org/stmarys/story1.html（2021 年 10 月 20 日最終閲覧）

《英文史料》

【英文史料 1】（抄訳は著者による。明らかなスペルミスも修正せずに掲載した。）
岩倉具定からラトガーズ大学 Prof. Atherton への手紙。具定は首都ワシントンで 1 通（4 月 3 日），SF で 1 通（5 月 3 日），アサートン教授に手紙を書いている。これは帰国前の 3 通目である。

San Francisco Cal.
May 13th 1872
Dear Sir
I have written a letter to you about a week ago, I expect you have received it by this time. I wrote in a letter that I was very sick for sometime; but now I am quite recovered and am all ready to go to Japan. The steamer sails from here on the 16th of May, so that, I have only a few days to stay here. Although I am very glad to leave here, I like to stay in the eastern states very much; but not here, the climate is very good and my health is getting better. But I do not wish to stay here very long. I suppose, my father will be in New York by this time, I hope then you will see him and hope to tell what I was doing in your house. I want to get back to N.Brunswick very much. I am very homesick, to see N.B. I suppose this letter will be last to you in this country for w better while. Please give my best regards to Mrs. Atherton and give my love to Mr. Frankee.
I am your friend K. Aashi

I hope you will excuse my writing, I suppose all not correct writing.

一週間ほど前に手紙をあなた様に書いて御送りしました。もうお手元に届いていることと存じます。その手紙では，自分の具合が大変悪かったと伝えしましたが，今はもうすっかり良くなり日本に出航できる状況です。船の出航は 5 月 16 日ですので，ここで過ごせる日は，もう数日しかありません。ここを離れるのは嬉しいのですが，東部の州で生活したい思いが強いです。ここは，気候もよく健康もよくなりましたが，ここに長く住みたいとは思いません。もうそろそろ父は NY に着いているでしょう。どうか父に会い，私があなた様の家でどのように過ごしていたかお伝えください。NB に戻りたいという想いで一杯です。NB を一目見たくてホームシックになっています。この手紙が米国であなた様に出す最後の手紙となるでしょう。どうぞ奥様とフランキーによろしくお伝え下さい。

英語での乱筆お許しください。間違いが散見されると思いますが。

【英文史料 2】（抄訳は著者による）

木戸孝允が岩倉使節団の副使として渡米した際（1872 年），長州藩留学生の服部や山本は木戸を度々訪問している。妻木忠太『史実参照木戸松菊公逸話 』（pp. 435–435）によると，木戸は服部等に，漸進主義の重要性を語ったという。日本の進歩は急激であってはならず，確実に一歩一歩進んでいくことが大事だと語り，当時の森有礼や伊藤博文の急進的考えを批判した。この英文には，木戸が主張する漸進主義と共通点が感じられる。木戸の影響を受けて服部が法制度の自然な発生という考え方に発展させたとも考えられる。木戸が 1873 年 7 月に率先して憲法の制定を建議した（p. 439）ということも覚えておいてよい。服部を始めとする長州藩留学生と木戸との関係は，今後の研究課題の一つである。

Constitutions are not made, but grow
Targum, March, 1873

It is often said in this country, that the present progress of Japan is entirely unnatural, and that the maxim “Constitutions are not made, but grow,” is utterly ignored by that nation.

米国で，よく次のように言われる。日本の発展は西洋の基準から外れている。一国の法制度というものは，その場その場で作られるものではなく，それまでの伝統が法制度へと自然にまとめられるという原理が日本では全く無視されている。

For Japan had preserved an entire seclusion from the other world for so long time that we Japanese seemed, as the critics say, to utterly ignore the golden maxim of Sir James Mackintosh; but fortunately, as early as 283 A. D., we had diligently studied the book of the great philosopher, Moshi, who told us, that to improve a national affair too fast is as foolish as to pull out the stem of a plant to make it grow faster; and we admire his saying as much as you do Mackintosh’s. Although the great changes going on at present in Japan are made by order of the government, and seem to the critics artificial, yet if they are made peacefully and permanently, I think that they are not artificial, but a natural growth, for “the true sources of such changes lie deeper than the acts of legislators.” What are the true sources of these changes, if not the acts of the legislators?

日本は長い間鎖国していたので，ジェームズ・マッキントッシュの有名なこの格言は当てはまらないと思われるのかもしれないが，実は日本は西暦 283 年という早い時期に，中国の偉大な思想家孟子の本を熱心に研究し，急激な変化は，成長を促すために植物の茎を引っこ抜くようなもので，成長を阻害するということを承知している。日本人にとっては，孟子は欧米でのマッキントッシュに引けを取らないくらい賞賛されている。確かに，今，日本では次々に大変化が政府の命令により起こっていて，それは人為的なものだと批判する人もいる。それが問題を引き起こさずにそして永続的に起こるのであれば，それは人為的なものではなく自然発生的と言えるのではないか。日本の劇的な変化は単に議会で決められているのでなく，もっと深いものに根ざしているのではないか。では，これらの変化を起こしているものは何だろうか。

There are two sources, namely: the “Yamato-Damashi,” (Japanese spirit), and our first attention to material progress above all others. I think nothing can characterize the Japanese more distinctly than the Yamato-Damashi, which is nothing but their patriotic spirit. Those, and only those, who are familiar with Japanese literature, especially that of the

modern time, can realize how much this feeling has influenced the national progress. It was this spirit that brought the first Japanese students to Europe, which was in their imagination at that time situated almost beyond this world. They undertook this expedition, not by the order of the government or their parents, not for the ambition of wealth or fame, but under the guidance of patriotic spirit, to search something which could be brought back to promote their national affairs. It was also with this spirit that we accomplished the sudden but peaceful destruction of our feudal system. As soon as the Taicoon was overthrown in the year of 1868, by the combined powers of the Daimios, four of them agreed among one another that to strengthen Japan the feudal system must be destroyed, and the powers, military and civil, must be concentrated into the central government; and in the year 1869, they addressed to the Mikado a letter, offering to resign their extensive territories, and enormous wealth, (their revenues varied from £769,728 to £6,400) and before the end of the year all Daimios, without a single exception, followed the noble example of their colleagues.

それは二つ考えられる。一つは「大和魂」と呼ばれる日本人独特の気魄であり，もう一つは他の何にも勝る物質面での進歩への関心である。「大和魂」以上に，日本人の愛国的心情を明確に表している言葉はない。「大和魂」の日本の進歩に対する影響力については，日本の近年の著述を読まないことには理解できないだろう。この「大和魂」に突き動かされて，最初の日本人留学生たちは，想像を超えた遥か遠い世界であるヨーロッパへ向かったのだ。彼らは誰の命令に従った訳でもないし，どんな物欲，名誉欲に背中を押された訳でもない。ただ，日本の進歩を後押しするものを持ち帰らんがために，「大和魂」が命じるままに留学したのだ。封建制度の廃止は突然だったが，それも混乱なく達成されたのは「大和魂」の成せる技である。諸大名の協力により，1868 年に将軍政権が打ち倒されると，4 人の大名が封建制度を廃止し，政府，軍隊，市民がまとまって中央政権を設立することに同意した。そして 1869 年には天皇にその広大な保有地と莫大な富を手放すよう書簡で求めた。その結果，その年のうちに全ての大名が，天皇が示した例に従ったのである。

There are a great many examples like these, but while I am boasting of this faithful national spirit, I am sorry to say that the ghost of liberty or freedom of the western nations has already scattered many germs of faithlessness upon our loving country.

この誇るべき「大和魂」の影響は，他にも数えきれないほどの例があるが，残念なことに，西洋の自由という「幽霊」が，この愛すべき国，日本に広がりつつあり悪影響を及ぼしつつある。

The second source is our first attention to the material progress above all others. Before the year 1854, when the American fleet under the command of Commodore Perry forced into the bay of Yedo, the western civilization was unknown to us, and our attention was then first attracted by the strong steam-vessels, and the good discipline of their marines and sailors; and the result was the introduction of steam-power and the military and naval science of the west. These, of course, soon brought us into contact with other new facts, and these again excited our further curiosity, and each step demanding its next step we have arrived at the present state; and as when we first started there were only a few narrow passages, now these being branched again and again we are going in almost every direction. A reverend gentleman said in the pulpit lately, that by this way Japan is

actually becoming a nation of materialists or sophists. But I do deny this, because we are actually tracing down from the fruits to the branches to the trunk, thence to the root. By this method we can reach, sooner or later, at the true root of human civilization, whatever it may be, without any great mistake. In conclusion, I say that, although Japan commits many petty mistakes, the main road she takes is the safest and shortest, and her constitution has been growing peacefully and will continue so forever.

日本の変化を引き起こしているもう一つの内的要因は物質面での進歩を最優先するという姿勢である。ペリー提督に率いられた米国艦隊が 1854 年に江戸湾に侵入する前，西洋文明は，日本人にはほとんど知られておらず，日本人の関心は，強大な蒸気船やよく訓練された水兵の規律に向けられていた。その流れで，蒸気船と西洋流の海軍，陸軍制度が導入された。しかし，西洋への関心はここに留まらず，日本人の好奇心を更に刺激し，その連続と発展が，現在の日本を生み出したのである。最初は限られていた変化がどんどん枝分かれしてあらゆる分野に広がっていった。最近，ある牧師が教会で，こうして日本は実利主義者か，さもなければ好ましからぬ理屈家になりつつあると語った。しかし，自分は大いにこの説に異を唱えたい。我々は果実から枝，そして幹，そして最終的には根へと辿りつつある。この方法により，我々は，どんな文明であれ，その蘊奥を間違いなく究めることができる。結論として言うと，些細な間違いは多々あるものの，日本が進んでいる道は，最も安全な近道なのだ。そして日本の法制度はここまで順調に成長してきており，さらに同じように永遠に成長し続けるだろう。

（原稿受付　2021 年 10 月 27 日）

令和２年３月１日

拓殖大学研究所紀要投稿規則

（目的）

第１条　拓殖大学（以下，「本学」という。）に附置する，経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所，理工学総合研究所，人文科学研究所，国際開発研究所，日本語教育研究所および地方政治行政研究所（以下，「研究所」という。）が刊行する紀要には，多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し，研究活動の促進に供することを目的とする。

（紀要他）

第２条　研究所の紀要は，次の各号のとおりとする。

⑴　経営経理研究所紀要『拓殖大学　経営経理研究』

⑵　政治経済研究所紀要『拓殖大学論集　政治・経済・法律研究』

⑶　言語文化研究所紀要『拓殖大学　語学研究』

⑷　理工学総合研究所紀要『拓殖大学　理工学研究報告』

⑸　人文科学研究所紀要『拓殖大学論集　人文・自然・人間科学研究』

⑹　国際開発研究所紀要『国際開発学研究』

⑺　日本語教育研究所紀要『拓殖大学　日本語教育研究』

⑻　地方政治行政研究所紀要『拓殖大学　政治行政研究』

２　研究所長は，次の事項について毎年度決定する。

⑴　紀要の『執筆予定表』の提出日

⑵　投稿する原稿（以下，「投稿原稿」という。）及び紀要の『投稿原稿表紙』の提出日

⑶　投稿原稿の査読等の日程

（投稿資格）

第３条　紀要の投稿者（共著の場合，投稿者のうち少なくとも１名）は，原則として研究所の専任教員，兼担研究員および兼任研究員（以下「研究所員」という。）とする。

２　研究所の編集委員会が認める場合には，研究所員以外も投稿することができる。

３　研究所の編集委員会は，前項に規定する研究所員以外のうち，講師（非常勤）の投稿について，年度１回を限度に認めることができる。

（著作権）

第４条　投稿者は，紀要に掲載された著作物が，本学機関リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。

２　共同執筆として紀要に掲載する場合には，共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し，投稿代表者に承諾書を提出しなければならない。投稿代表者は，共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

（執筆要領および投稿原稿）

第 5 条　投稿原稿は，研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。

2　投稿原稿は，図・表を含め，原則として返却しない。

3　学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は，紀要に投稿することはできない（二重投稿の禁止）。

（原稿区分他）

第 6 条　投稿原稿区分は，次の表 1，2 のとおり定める。

表 1　投稿原稿区分：第 2 条に規定する理工学総合研究所を除く研究所

⑴論文	研究の課題，方法，結果，含意（考察），技術，表現について明確であり，独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
⑵研究ノート	研究の中間報告で，将来，論文になりうるもの（論文の形式に準じる）。新しい方法の提示，新しい知見の速報などを含む。
⑶抄録	本条第 5 項に該当するもの。
⑷その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿（公開講座記録等）については，編集委員会において取り扱いを判断する。また，編集委員会が必要と認めた場合には，新たな種類の原稿を掲載することができる。

表 2　投稿原稿区別：理工学総合研究所

⑴論文，⑵研究速報，⑶展望・解説，⑷設計・製図，⑸抄録（発表作品の概要を含む），⑹その他（公開講座記録等）

2　投稿原稿区分は，投稿者が選定する。ただし，紀要への掲載にあたっては，査読結果に基づいて，編集委員会の議を以て，投稿者に掲載の可否等を通知する。

3　紀要への投稿が決定した場合には，投稿者は 600 字以内で要旨を作成し，投稿した原稿のキーワードを 3〜5 個選定する。ただし，要旨には，図・表や文献の使用あるいは引用は，認めない。

4　研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表（原稿）の投稿原稿区分は，原則として論文とする。

5　研究所研究助成を受けた研究所員が，既に学会等で発表した研究成果（原稿）は，抄録として掲載することができる。

（投稿料他）

第 7 条　投稿者には，一切の原稿料を支払わない。

2　投稿者には，抜き刷りを 30 部まで無料で贈呈する。但し，査読を受けた論文等に限る。

（リポジトリへの公開の停止及び削除）

第 8 条　投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合または編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には，リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

（その他）

第 9 条　本投稿規則に規定されていない事柄については，編集委員会の議を以て決定する。

（改廃）

第10条　この規則の改廃は，研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附　則

この規則は，令和２年３月１日から施行する。

平成 29 年 4 月 1 日

拓殖大学人文科学研究所紀要
『拓殖大学論集　人文・自然・人間科学研究』執筆要領

1. 発行回数

紀要『拓殖大学論集　人文・自然・人間科学研究』（以下，「紀要」という）は，原則として年 2 回発行する。原稿提出期日および発行は，次のとおりとする（厳守）。

⑴	原稿は，　6 月末日締切　－　10 月発行
⑵	原稿は，　10 月末日締切　－　3 月発行

2. 執筆予定表

投稿希望者は，研究所が定めた日までに，紀要の執筆予定表に必要事項を記入・捺印し，学務部研究支援課（以下，「研究支援課」という。）に提出する。

3. 使用言語

使用言語は，日本語又は英語とする。ただし，これら以外の言語での執筆を希望する場合は，事前に人文科学研究所編集委員会（以下，「編集委員会」という）に書面にて申し出て，許可を受ける。

許可を受けた原稿は，必ず外国語に通じた人の入念な校閲を受けたものに限る。

4. 様式

投稿する原稿は，完成原稿とし，原則としてワープロ原稿 2 部を，編集委員会に提出する。

⑴　ワープロを使用する際は，A4 判の白紙片面を縦長に用い，横書きで，1 行 39 文字，1 ページ 34 行で印字する。その際，天地，左右各 30 mm 程度の余白をとっておく。縦書きの場合もこれに準ずる。

⑵　欧文による原稿の場合は，A4 判の白紙片面を縦長に用い，天地左右の余白を 30 mm 程度とり，1 行 78 文字，1 ページ 34 行で印字する。外国語の要約の原稿もこれに倣う。

⑶　原稿の分量は，本文と注及び図・表を含め，原則として，A4 縦版・横書で次のとおりとする。なお，日本語以外の言語による原稿の場合もこれに準ずる。

①　日本語および全角文字で記す場合，原則として 24,000 字以内。

②　欧文の場合，原則として 48,000 字以内

⑷　投稿者は，紀要の複数の号にわたり，同一タイトルで投稿を希望することはできない。ただし，「資料」の場合は，同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は，最初の稿で，記載原稿の全体像と回数を明示しなければならない。

5. 原稿

⑴　原稿区分は，「拓殖大学研究所紀要投稿規則」に記載されているとおりするが，「その他」の区分，定義については付記のとおりとする。

⑵　原稿の受理日は，研究支援課に到着した日とする。

⑶　投稿は，完成原稿の写しを投稿者が保有し，原本を編集委員会宛とする。

⑷　投稿する原稿とあわせて，「拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究」投稿原稿表紙に必要事項を記入，「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し，原稿提出期日までに添付する。

6. 本文表記

⑴ 本文の構成を章・節・項のように分ける場合，それぞれの表記の仕方は，例えば，章はⅠ・Ⅱ……，節は 1.・2.……，項は 1)・2)……などの表記方法があるが，本紀要の場合，執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し，とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの表記方法に準ずること。

⑵ 数字は算用数字を用いる。数字や欧字は，1 字のみの場合を除き，半角とする。

ただし，縦書きの場合に限り，数字は原則として漢数字を用いる。

⑶ 特殊な字体（イタリック・ボールド・ギリシャ文字など）・紛らわしい文字（l〈エル〉・1〈イチ〉・i〈アイ〉・0〈ゼロ〉・O〈オウ〉など）や大文字・小文字（W と w など）は，明瞭に区別できるよう指定する。また，添え字も，上付き・下付きを明瞭に指定する。

⑷ 本文中に文献・資料を引用・参照する場合は，下記の例のように，文献・資料の著者名（姓のみ）と発表年を示し，必要に応じて関連ページも示す。

青木（2001）は……，上村（2002：50-61）は……，青木・上村（2003）によれば……，…という説がある（大山 1998：43-52）。……という見解もある（飯田 2003；太田 1999）。青木ほか（2004）は……，など。

⑸ 本文中に文献・資料の一部を引用する場合は，引用部分を，「 」でくくる，字下げする，活字ポイントを小さくする，などの方法で表す。

7. 図・表・数式の表記および作成

⑴ 図（図には写真も含む）および表は必要最小限にとどめる。とくに，同じデータに関する図と表の重複は避ける。

⑵ 図および表は，各図・各表ごとに別紙とし，それぞれ，図 1・図 2…　表 1・表 2…のように通し番号を明示し，執筆者名を記入する。

⑶ 図および表のタイトル・説明文・出典などの原稿は，別紙にまとめる。外国語の要約をつけた場合は，図・表のタイトルと説明文は，外国語を併記することができる。

⑷ 本文中の図および表の挿入希望位置は，本文原稿の右側余白に記入する。また，図・表の大きさや体裁について希望がある場合は，本文原稿上に枠で指定するか，おおよその大きさなどを右側余白に記入しておく。なお，図・表の大きさや体裁は，編集委員会で決める。したがって執筆者の希望に添えない場合もある。

⑸ 図および表を本文中に引用する際は，「図 1 によれば……」「……は表 3 に示される」などのように示す。

⑹ 図は，黒インクで明瞭に描いたものか，ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して描いたもので，そのまま写真製版が可能なもの（版下原稿）に限る。

⑺ 表は，ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して作成する。

⑻ 図中や表中の文字や数字の大きさ，図の表現の細かさについては，刷り上がりの大きさで明瞭に読みとれるよう，縮小率を十分考慮して決める。

⑼ 数式は専用ソフトなどを使用して正確に表現する。数式の上下は 1 行ずつあける。

8. 注とその記載方法

⑴ 注は，本文内容の補足説明を行う場合と，引用・参照した文献・資料の出所を明示する場合に用いる。

⑵ 本文中の当該箇所の右肩に（ ）でくくった通し番号をつけ，注の内容は，本文のあとに，通し番号順にまとめて記す。

9. 文献・資料の表示方法

本文で引用・参照した文献・資料を表示する方法としては，本文中には著者の姓と発表年のみを記し〈これについては，前ページの本文表記 4 を参照のこと〉，原稿末尾の文献・資料表に詳しく表示する方法と，本文中には記さず，本文のあとの注に詳しく表示する方法の二つが一般的である。

⑴ 文献・資料表に表示する場合

① 文献・資料表に，下記の要領で記載する。なお，文献・資料表は，原稿の末尾（注の後ろ）に掲載する。

a. 学術雑誌など定期刊行物の場合は，著者名・発表年・文献名・定期刊行物名・巻または号番号・文献の最初と最後のページを明記する。単行本の場合は，著者名・発表年・書名・出版社（出版所）名を明記する。

b. 著者が複数の場合も，全著者名（姓名）を列記する。

c. 定期刊行物の巻・号番号およびページについては，巻ごとの通しページがある場合は，巻番号（ゴシック）と通しページを記す。巻ごとに通しページがない場合は，巻番号（ゴシック）のあとに号番号を（ ）でくくって示し，号ごとのページを記す。号番号のみの場合は，（ ）でくくった号番号とページを記す。

② その他の書式（記載順序や方法）については，本紀要の場合，執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し，とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの要領に則って，統一した形式で記すこと。

③ 文献・資料の並べ方は，下記の要領による。

a. 日本語文献・資料，アジア地域言語文献・資料，欧語文献・資料の順に並べる。

b. 日本語文献・資料は，著者名の五十音順に並べる。アジア地域言語文献・資料はそれぞれの著者名の当該言語の固有の配列順（あるいはカタカナ表記の五十音順）に並べる。欧語文献・資料は著者名（姓が先）のアルファベット順に並べる。

c. 同じ著者の文献・資料は発表年の順に並べる。同じ発表年のものが複数ある場合は，本文の引用順に，a・b……を発表年のあとにつけて並べる。

⑵ 注に表示する場合

① 注の該当箇所に著者名・文献・資料名などを詳しく表示する方式で，この場合は，文献・資料表を省くことができる。

② 表示例は，以下の通り。

【日本語文献・資料】

小林政吉『宗教改革の教育史的意義』（創文社　1960）p. 12.　《単行本の場合》

林　泰成「ピーターズのコールバーグ批判」（佐野安仁，吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』世界思想社　1993）p. 34.　《単行本所収の論文の場合》

石井雅史「コミュニケーションと規則」（日本哲学会編『哲学』第 51 号　2000）pp. 270–272.　《学術雑誌等の掲載論文の場合》

G. ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳（法政大学出版局 1974）p. 25.　《和訳書の場合》

【英文文献・資料】

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145.　《単行本の場合》

A. H. Bullen (ed.), *The Works of Francis Beaumont and John Fletcher* (Variorum ed.;

London London: George Bell and Sons, 1908), pp. 49–53.《論文集の編者表記の場合》

G. M. Dutcher et al., *Guide to Historical Literature* (New York: The Macmillan Co., 1931), p. 50.《著者が 3 名以上の場合》

F. A. Moe, "School Retrenchment," *School Review*, XLII (May 1934), p. 40.《学術雑誌等の掲載論文の場合》

John Calvin, *The Institutes of the Christian Religion*, trans. Henry Beverridge (2nd ed.; Edinburgh: T. & T. Clark, 1895), Ⅰ, pp. 40–45.《英訳書の場合》

【欧文文献・資料の略語の用法】

欧文文献・資料の引用・参照の際によく使われる略語（ loc. cit., ibid., op. cit ）の用法を，以下に記す。

loc.cit.　同じ文献・資料の同じ箇所を連続して引用する場合に用いる。

ibid.　同じ文献・資料から連続して引用する場合に用いる。その際，前と引用ページが異なる場合には，当該ページを表示する。

op.cit.　前に挙げた文献・資料に，いくつかの注を隔てた後に，再び言及する場合に用いる。したがって，この場合は，著者名（姓のみ）とページ数とを必ず表示する。

上記の略語は，単行本と学術雑誌の場合はイタリック体で，論文の場合はローマン体で表記する。

［ 使用例 ］

⑴　T. M. Parrot and R. H. Ball, *A Short View of Elizabethan Drama* (New York: Charles Scribner's Sons, 1943), p. 190.

⑵　*loc. cit.*

⑶　*ibid.*, p. 325.

⑷　E. H. C. Oliphant, *The Plays of Beaumont and Fletcher* (New Haven: Yale University Press, 1927), p. 67.

⑸　Parrot and Ball, *op. cit.*, p. 198.

⑹　Oliphant, *op. cit.,* pp. 89–91.

⋮

その他のよく用いられるページ表記略号（ただし，英文文献・資料の場合）

p. 5. ＝ page 5 の意味

pp. 17 f. ＝ pp. 17 *et seq.* とも表す。これは page 17 and the following page の意味

pp. 20 ff ＝ pp. 20 *et seq.* とも表す。これは page 20 and the following pages の意味

＊欧文文献・資料では，注に示す場合と，文献・資料表に示す場合とでは，著者名などの表記の仕方が異なる。これについては，以下の例を参照のこと。

〈 注に示す場合 〉

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145.

〈 文献・資料表に示す場合 〉

Judson, Alexander C., *The Life of Edmund Spencer.* Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945.

＊なお，インターネット上の文献・資料を引用・参照する場合は，文献・資料表あるいは注に，原則として下記の事項を記載する。

執筆者・タイトル・年月日（掲載年月日あるいは更新年月日あるいは取得年月日）・URL

10. 原稿の審査

編集委員会が審査し決定する。その手続きは次の通り。

⑴ 原稿の内容に応じて編集委員以外の査読者を選び，査読を依頼する。それとともに編集委員の中から担当委員を選ぶ。査読者および担当委員は，原則として各 1 名とするが，場合により複数名とすることもある。

⑵ 査読者および担当委員は，論文・研究ノート・抄録・その他については，以下の 11 項目について原稿を検討し，査読結果（掲載の可否・原稿種類の妥当性についての意見や原稿に対するコメントなど）をまとめ，それを編集委員会に報告する。

① タイトルは内容を的確に示しているか
② 目的・主題は明確か
③ 方法・手法は適切か
④ データは十分か
⑤ 考察は正確かつ十分か
⑥ 先行研究を踏まえているか
⑦ 独創性あるいは学術的価値（資料的価値）が認められるか
⑧ 構成は適切か
⑨ 文章・語句の表現は適切か
⑩ 注や参考文献の表記は，執筆要領に添ったものになっているか
⑪ 図・表の表現は適切か

⑶ 編集委員会は，これらの報告に基づいて，委員の合議により，掲載の可否，原稿種類の妥当性および次項の「審査結果のお知らせ」に添える文書の内容などを決定する。なお，掲載の可否については，①このままで掲載，②多少の修正の上で掲載，③大幅な修正が必要，④掲載見送りの 4 段階で判定する。③については，執筆者の修正原稿を査読者と担当委員が再査読し，その結果に基づいて，編集委員会が掲載の可否等を決定する。

⑷ 研究会記録および公開講座記録の原稿については，原則として掲載する。ただし，この場合も編集委員の中から担当委員を選び，担当委員は上記項目の 9）等を検討する。その結果，執筆者に加筆修正を求めることがある。

11. 原稿の審査結果・変更・再提出

⑴ 投稿の採否は，編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて，編集委員会が紀要への掲載を決定する。その際に編集委員会は，原稿区分の変更を投稿者に求める場合もある。

⑵ 編集委員会は，査読に基づき，若干の訂正，あるいは書き直しを要請することができる。

また，上記判定を受けた投稿者は，その趣旨に基づいて，原稿を速やかに修正し，再度，編集委員会に提出する。ただし，査読結果の内容に疑問・異論等がある投稿者は，編集委員会にその旨を申し出ることができる。

⑶ 投稿者は，投稿を許可された原稿（査読済）を，編集委員会の許可なしに変更してはならない。

⑷ 査読の結果，大幅な修正がある場合には，投稿者の修正原稿を編集委員会が再査読し，その結果に基づいて，編集委員会が紀要への掲載の可否等を決定する。

⑸ 編集委員会が，紀要に掲載しない事を決定した場合は，人文科学研究所長（以下「所長」という）より，その旨を投稿者に通達する。

12. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は，編集委員会の査読を経て，修正・加筆などが済み次第，A4 版用紙（縦版，横書き）

にプリントした完成原稿 1 部と電子媒体を提出する。電子媒体の提出時には，使用 OS とソフトウェア名を明記する。

なお，手元には，必ずオリジナルの投稿原稿（データ）を保管しておく。

13. 校正

投稿した原稿の校正については，投稿者が初校および再校を行い，所長，編集委員長が三校を行う。

この際，投稿者がおこなう校正は，最小限の字句に限り，版組後の書き換え，追補は認めない。

また，投稿者は，編集委員会の指示に従い，迅速に校正を行う。

投稿者が，期日までに校正が行われない場合には，紀要への掲載はできない。

14. その他

本執領に定められていない事項については，投稿者（執筆者）と協議の上，編集委員会が判断する。

15. 改廃

本執筆要領の改正は，編集委員会が原案を作成し，本研究所会議の議を経て，所長が決定する。

附則

この要領は，平成 18 年 4 月以降に投稿される原稿から適用する。

附則

この要領は，平成 26 年 4 月以降に投稿される原稿から適用する。

附則

この要領は，平成 29 年 4 月以降に投稿される原稿から適用する。

付記：「その他」の区分・定義について

①	研究動向：	ある分野の研究成果を総覧・整理しまとめたもので，研究史・研究の現状・将来への展望などを論じたもの。
②	調査報告：	ある課題についての文献・アンケート・聞き取り調査などの報告で，調査の意義が明確なもの。
③	資　　料：	文献・統計・写真など，研究にとっての資料的価値があると思われる情報を吟味し，それに解説をつけたもの。
④	討　　論：	本紀要に掲載された論文等に対する批判・質問および執筆者からの反論・回答。
⑤	研究会記録：	本研究所主催の研究会の講演内容および質疑の概要。
⑥	公開講座記録：	本研究所主催の公開講座の講演内容の詳細な記録あるいは概要。

以　上

月、教育出版センター）

（28）大塚美保「『金毘羅』の方法とドイツ・ロマン主義、新ロマン主義」（『鷗外を読み拓く』平成一四年八月、朝文社）

（29）前掲、新井正人「Seele をめぐる論理 ── 心身問題と鷗外 ──」

（30）須田喜代次「解題」（『鷗外歴史文学集 第三巻』平成一一年一一月、岩波書店）

（31）稲垣達郎「安井夫人」（『森鷗外の歴史小説』平成元年四月、岩波書店）

（32）分銅惇作「安井夫人（近代小説鑑賞・三）」（『国文学 言語と文芸』一三、昭和三七年七月）

（33）須田喜代次「「繭を破つて出た蛾」としての「お佐代さん」──「安井夫人」を書く鷗外 ──」（『大妻国文』四二、平成二三年三月）、王晨野「森鷗外「安井夫人」論 ── 佐代を中心に ──」（『日本文芸学』五六、令和二年三月）など参照。

（34）小林幸夫「〈お佐代さん〉の正体 ──『安井夫人』論 ──」（『日本近代文学』三七、昭和六二年一〇月）

（35）栗坪良樹「安井夫人 ── 主観的な意見二、三 ──」『森鷗外の断層撮影像 国文学解釈と鑑賞』（昭和五九年一月臨時増刊号）

（36）平岡敏夫「遠い遠いところ ── 鷗外の女性像と芥川の女性像」（『森鷗外研究』二、昭和六三年五月）は、「広く言えば、現姓を超えるまなざしであり、宗教的なニュアンスさえくみとることも不可能ではない」と指摘している。

（37）日塔美代子「森鷗外『安井夫人』小考 ── 佐代のイメージ ──」（『立命館文学』五九二、平成一八年二月）

（38）前掲、清田文武「鷗外の文芸観と「霊」Seele への関心」

（39）金子幸代「歴史小説のヒロイン・『安井夫人』」（『鷗外と〈女性〉── 森鷗外論究 ──』平成四年一一月、大東出版社）

（40）前掲、日塔美代子「森鷗外『安井夫人』小考 ── 佐代のイメージ ──」は、メーテルリンク『智恵と運命』『モンナ・ワンナ』との関わりの他に、『蜜蜂の生活』からの影響関係に着目し、佐代像について「「悪かれた魂」を持つ「本能的人物」として、メーテルリンクの「蜜蜂」のイメージを重ねた存在として描かれているといえよう」と指摘している。

（41）以下の引用は、M・メーテルリンク、山崎剛訳『限りなき幸福へ』（平成一三年三月、平河出版社）による。

（42）ここに佐代の造型が重ねられることは、前掲金子幸代「歴史小説のヒロイン・『安井夫人』」、前掲須田喜代次「「繭を破つて出た蛾」としての「お佐代さん」──「安井夫人」を書く鷗外 ──」、大石直記「〈解放思想〉の枠組を脱して ── モダニティをめぐる鷗外・らいてうの思想的接面」（『鷗外・漱石 ── ラディカリズムの起源』平成二一年三月、春風社）などに詳細な指摘がある。

（43）山本定祐、薗田宗人、平野嘉彦、松田隆一訳『ドイツ・ロマン派全集 第一二巻 シュレーゲル兄弟』（平成二年二月、国書刊行会）

（44）前掲、稲垣達郎「安井夫人」

（45）今泉文子「近代開始期の「新生」への夢」（香田芳樹編著『〈新しい人間〉の設計図 ── ドイツ文学・哲学から読む』平成二七年五月、青灯社）

（46）藤代素人「ロマンテイツクの詩人ノワリス」（『草露集』明治三九年九月、大倉書店）

（47）今泉文子『鏡の中のロマン主義』（平成元年五月、勁草書房）

（48）前掲、F・シュレーゲル「神話についての議論」

【附記】 鷗外の著作の引用に関しては、特に断りのない限り『鷗外全集 二五巻』（昭和四八年一一月、岩波書店）『鷗外全集 二六巻』（昭和四八年一二月、岩波書店）、『鷗外近代小説集 第四巻』（平成二四年一一月、岩波書店）、『鷗外近代小説集 第六巻』（平成二四年一〇月、岩波書店）、『鷗外歴史文学集 第三巻』（平成一一年一一月、岩波書店）に拠った。

本稿は文部科学省科学研究費基金・若手研究(B)「19世紀末ドイツにおける人文主義と森鷗外の歴史叙述」（17K13396）の助成に基づく成果の一部である。

（原稿受付 二〇二一年一〇月二七日）

の一人として積極的に関わっていたことを巡って、既に論じたことがある（拙稿「接続する「神話」――『天皇皇族実録』『日本神話』『北条霞亭』」『森鷗外の歴史地図』平成三〇年二月、翰林書房）。

（8）濱田真「神話論からみた啓蒙主義とロマン主義の関係について――ヘルダーにおける啓蒙主義神話論の受容形態を中心に――」（伊坂青司・原田哲史編『ドイツ・ロマン主義研究』平成一九年一月、御茶の水書房）

（9）前掲、「神話論からみた啓蒙主義とロマン主義の関係について」

（10）前掲、「神話論からみた啓蒙主義とロマン主義の関係について」

（11）グリム兄弟の民話蒐集については、ジャック・ザイプス著、鈴木晶訳『グリム兄弟 魔法の森から現代の世界へ』（平成三年一〇月、筑摩書房）、森涼子『グリム童話と森』（平成二八年一二月、築地書館）など参照。

（12）須藤秀平『視る民、読む民、裁く民――ロマン主義時代におけるもうひとつのフォルク』（平成三一年三月、松籟社）は、ゲレス『ドイツ民衆本』出版について民衆文学の保存という側面があったとしつつ「ゲレスに特有のフォルク観を見出すことができる」とした上で、ロマン主義的な「「民族的神話的」なフォルク像の構築にとどまらない」ことを指摘している。

（13）明治三十四年一月二十八日「鷗外日記」に「赤司書を寄せてエロス（Eros）の神を把る所の弓箭は何の材もて作れるものぞと問ふ。」と問い合わせの内容が書かれている。

（14）前掲、赤司繁雄『自由基督教の運動――赤司繁太郎の生涯とその周辺』

（15）原題は『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』。第一部は一八〇〇年に書かれ、第二部は作者の死により中断。薗田宗人・今泉文子訳『ドイツ・ロマン派全集 第二巻 ノヴァーリス』（昭和五八年一〇月、国書刊行会）参照。

（16）ハインリヒ・ハイネ、山崎章甫訳『ドイツ・ロマン派』（平成六年五月、未来社）

（17）ドイツ・ロマン派の一人とされるハイネがフランス移住後に書いた、前掲『ドイツ・ロマン派』では、ドイツ・ロマン主義について「われわれはその流派をロマン派と呼んでいる。この流派の支配人としてわれわれの前に名のり出たのは、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル氏とフリードリヒ・シュレーゲル氏であった。その兄弟が考えを同じくする多くのひとびとと共に時々住んでいたイェーナが、新しい美学上の教義が広まっていった中心地であった。「教義」と私はいう。というのは、この流派は、過去の芸術作品を批判し、未来の芸術作品のための処方箋を書くことで始まったからである」と述べられている。

（18）神林恒道「ドイツ観念論最古の体系計画　訳者注」（『ドイツ・ロマン派全集 第九巻 無限への憧憬――ドイツ・ロマン派の思想と芸術』平成九年二月、国書刊行会）

（19）佐藤朋之「「新しい神話」と「来るべき自然学」」（小泉進、小倉博孝編『神話的世界と文学』平成一八年一二月、上智大学出版）。佐藤は、「ドイツ観念論最古の体系計画」「神話についての講話」について、「興味深いことにそのどちらにおいても、「新しい神話」の構想には自然学 Physik が関与し、一定の寄与を果たすべきことが言及されている」と指摘している。

（20）シェリング、神林恒道訳「ドイツ観念論最古の体系計画」（前掲、『ドイツ・ロマン派全集 第九巻 無限への憧憬――ドイツ・ロマン派の思想と芸術』）

（21）伊坂青司「ドイツ・ロマン主義の精神とモチーフ」（前掲、伊坂青司・原田哲史編『ドイツ・ロマン主義研究』）

（22）前掲、伊坂青司「ドイツ・ロマン主義の精神とモチーフ」

（23）R・ザフランフキー、津山拓也訳『ロマン主義 あるドイツ的な事件』（平成二二年一二月、法政大学出版局）

（24）F・シュレーゲル「神話についての議論」（山本定祐訳『ロマン派文学論』平成一一年七月、冨山房百科文庫）

（25）フレデリック・C・バイザー、杉田孝夫訳『啓蒙・革命・ロマン主義』（平成二二年三月、法政大学出版局）

（26）前掲、R・ザフランフキー『ロマン主義 あるドイツ的な事件』

（27）鈴木重貞『ドイツ語の伝来――日本独逸学史研究――』（昭和五〇年七

おわりに

鷗外のドイツ・ロマン主義理解を踏まえると、「かのやうに」の五條秀麿の一時的な突破口となったのが、ドイツ観念論の流れにある新カント派のハンス・ファイヒンガー『かのやうにの哲学』（一九一一年）だったことは非常に示唆的であると考えられる。シュレーゲルもまた「新しい神話というものが、精神の最も奥深い深みからのみ、あたかも自分自身のなかからのごとくに作り出されるのであるならば、われわれが求めているものにとってきわめて重要な示唆と注目すべき確証が、この世紀の偉大な現象のなかに見出される。すなわち観念論である」[48]と、「新しい神話」の根拠をドイツ観念論に見出そうとしていたからである。シュレーゲルは「スピノザと、現在の物理学が、あらゆる思索人のうちに呼び起さずにはおかないあのさまざまな見解を豊かにふくんだ古き神話を、一度だけでも考察しようとしてみたまえ。すべては、新しい輝きと生命にみちてあらわれるであろう」とも述べており、神話へのまなざしは近代の再構成であると同時に、過去を蘇らせる行為でもあった。晩年の鷗外の歴史小説・史伝をここに重ね合わせるならば、鷗外にとっての「歴史」は、過去の歴史を新たな「神話」として描き直すための作業だったと考えることが可能である。一方で、赤司は道徳が宗教の発展に重要であるとする普及福音教会の信仰によって、過去の神話に今につながる「神秘」を見ていた。この「神秘」の中に、「新しい共同体創出の可能性」をロマン主義作家たちが見ていたことは、既にみてきた通りである。

鷗外にとって「安井夫人」に描いた理想的な「愛」は、必ずしも近代の人間に実現可能なものとして提出されたわけではなかっただろう。それは、あくまでも理想としての「愛」にすぎないともいえる。しかし、近代日本において失われた「中心点」を取り戻すという使命のもと、「芸術」に精神の内奥にある「愛」という概念を提示することそのこと自体が重要だった、と考えることができるのではないだろうか。その意味において、鷗外における「神話」は、単なる歴史の対立項としての意味以上に重要な概念であるといえるだろう。

《注》

（1）拙稿「普及福音教会と森鷗外「鎚一下」」（『人文・社会・人間科学研究』四三、令和元年三月）、「森鷗外「レッシングが事を記す」――普及福音教会と『賢者ナータン』」（『鷗外』一〇七、令和二年七月）参照。

（2）赤司繁雄『自由基督教の運動――赤司繁太郎の生涯とその周辺』（平成七年八月、朝日書林）

（3）前掲、赤司繁雄『自由基督教の運動――赤司繁太郎の生涯とその周辺』

（4）清田文武「鷗外の文芸観と「霊」Seele への関心」（『鷗外文芸の研究 中年期篇』平成三年一月、有精堂）

（5）松村友視「鷗外文学における Seele のゆくえ」（『近代文学の認識風景』平成二九年一月、インスクリプト）

（6）新井正人「Seele をめぐる論理――心身問題と鷗外――」（『鷗外文学の生成と変容――心理学的近代の脱構築』令和二年六月、七月社）

（7）鷗外と「神話」の問題に関しては、宮内省図書頭時代、『標準お伽文庫 日本神話』（上巻大正一〇年四月、下巻大正一〇年八月、培風館）の撰者

正四年一月）に基づき、「歴史離れがしたさに」書いたとされる「山椒大夫」（『中央公論』三〇―一、大正四年一月）の前に書かれた作品であることから、「歴史離れの過程」を表す作品として扱われてきた。「安井夫人」の史実と虚構部分の混在には、「「歴史離れ」へのはなはだしい動揺」[44]が見られるがゆえに、重要な作品として位置付けられてきたのである。しかし、「安井夫人」の「歴史離れ」の側面は、佐代の造型に偏っていることを考え合わせるならば、「歴史離れ」を脱出しきれずにいるというよりはむしろ、「わたくし」の佐代の造型に対する強い意志を見ることができるだろう。ここに、「中心点」を失った近代における「新しい人間」を描くための「「新たな命」、「新たな生」への希求」[45]を見ることができないだろうか。その意味において、「安井夫人」によって鷗外が書こうとしたのは「歴史」ではなく、「新しい神話」だった。

　このような鷗外のロマン主義受容は独自のものではなく、同時代的な関心と重ね合わせることができる。藤代禎輔は、最初のドイツ文学研究者としてドイツに留学し、帰国後明治三十六年より東京帝国大学独文科に着任したゲルマニストである。明治三十七年、槮牛会における講演で、藤代はノヴァーリス『青い花』について、次のように述べている。

> 此「青き花」とは何であるか、ロマンテイツクの象徴である、其理想の景慕の表徴である、ロマンテイツクが理想としたのは何であるかと云ふに、芸術である。芸術は彼等の人生観である。人間生存の目的である。處世の原理である。宗教も、哲学も、倫理も、政治も皆芸術から打算し、此世に芸術の国を打ち立てんとするのである。彼等の目から見れば宇宙も亦此芸術に外ならぬのである。此理想がノワリスに於て如何なる形を以て現れて居るかと云ふと、ノワリスは詩を以て愛の黄金世界を建てんとするのである。愛は霊妙不思議なる魔力で、詩の根底であるとは、ノワリスが詩に対する主張であるが、此愛を根底とした詩を以て世界を改造し、永久不変の愛の世界を造り上げんとするのが彼の理想である。[46]

　ここで藤代が『青い花』を「ロマンテイツクの象徴」であり、詩という芸術によって「愛の黄金世界」を描こうとしたこと、「愛を根底とした詩を以て世界を改造」しようとしたことを捉えている点、鷗外と同様のまなさしを見ることができる。しかし一方で、藤代の理解は「彼が目にしえたものはおそらくまだ限定的なノヴァーリス文献であったろう」と今泉文子が述べるように、「我が国で現在もなお横行している通俗的なノヴァーリス像、いわゆるロマンチックな感情詩人としてのノヴァーリス像」[47]にすぎないともいえる。しかし、鷗外には「ロマンテイツク」の「芸術」が目指す先、すなわち「新しい神話」が見えていたのだと考えられる。それは文学的な関心にとどまらない、鷗外のドイツ・ロマン主義への関心からもたらされたものである。

も鷗外が「智慧」の力で「運命を明視し得る人」としての女主人公ワンナを高く評価していることは明らかである。金子幸代[39]は、メーテルリンクとの関連を詳細に分析した上で、『安井夫人』の佐代に「日本のモンナ・ワンナ」たる意志の強い女性像の投影を見ている[40]。

メーテルリンクは、エッセイ集『智慧と運命』（一八九八年[41]）において、「叡智」を語る上で「愛」を重要視している。例えば「叡知は愛の光であり、光の源は愛だ。愛が強ければ、それだけ叡知は輝く。叡知が輝けば、それだけ愛に近づく。だから愛さなければならない。愛するなら、限りなく叡知の光は高まるだろう。（中略）そして常に愛する者は、愛によって今より常に善良になる。だから愛は絶えることがない。愛は叡知を育て、叡知は愛を育てる」と「叡知と愛は一体」として捉えられている。鷗外はこの点も捉えていたと思われ、「モンナ、ワンナの芝居」の見どころとして、「序幕では、唯ぽおつとした女の様」だったワンナが、二幕目には「凝り固まつてゐる心」が解け、三幕目では「本当の恋を知つてゐる一人前の女となつて出て来て、殊に今迄のは譫であつたと云」う内面の変化の有り様を挙げている[42]。

新ロマン主義の影響が見られる一方、既に触れたように、鷗外は「妄人妄語」において、「愛」の概念をシュレーゲルに基づいて考察していた。「ロマン主義は発展的普遍的文学である」と述べたシュレーゲルにおいても、また初期ドイツ・ロマン主義においても「愛」は「精神」の内奥を体現するための重要な概念であった。佐代の仲平への献身的な「愛」は、「教育の基礎」になり得る可能性を持ったものであり、佐代が見ていたのは「係恋」の対象としての「青い花」であったのだとも考えることができるだろう。

こうした献身的な「愛」が佐代の投影されたことの意味は、この後に続く「Geistreich」の説明において「Schlegel が女子の特有として説明して居る Geist として視ると甚だ明画な印象を與へる」と捉えていることと重ね合わせることができる。ここでいう「Geist」すなわち「精神」は、「女子の特有」として見られる「冷かに商量するので無く、いき〳〵と人生の中に立ち入る悟性」だと述べられている。シュレーゲルは『アテネーウム断章』においても、「愛」について度々触れており、例えば「真の愛は、その由来に従えばまったく恣意的で同時にまったく偶然的であるべきであり、必然的であると同時に自由であるようにみえなければならないだろう。だがその性格に従うならば天命であると同時に徳であるべきであり、ひとつの秘事であると同時にひとつの奇蹟であるようにみえなければならないだろう[43]」と、愛の見え方を論じている。また別の箇所では、次のように述べている。

> 愛における第一の要素は、たがいを感じとる感覚であり、最高の要素はたがいを信じあうということである。献身は信頼の表現である。

ここで述べられる「たがいを信じあう」「献身」からもたらされる「愛」は、まさに「安井夫人」に描かれる夫婦の「愛」である。

「安井夫人」は従来、「歴史其儘と歴史離れ」（『心の花』一九―一、大

こうした夫婦像を客観的に分析する存在として、作中には黒木孫右衛門という男が登場する。この黒木という男も「素と飫肥外浦の漁師であつたが、物産学に精しいため、わざわざ召し出されて徒士になつた」とされる、特異な経歴を持つ人物である。自らの学問、知識によって召し出されたという点では、黒木もまた「智慧」のある人物であると考えることもできるだろう。黒木は仲平を訪ねた際、佐代を見て次のように述べる。

「はあ。御新造様は学問をなさりましたか。」
「いゝや。学問と云ふ程の事はしてをしませぬ。」
「して見ますと、御新造様の方が先生の学問以上の御見識でござりますな。」
「なぜ。」
「でもあれ程の美人でお出になつて、先生の夫人におなりなされた所を見ますと。」

仲平は「あれ程の美人でお出になつて、先生の夫人におなりなされた所を見ますと」という言葉に「失笑」し、「無遠慮のやうな世辞」と受け取るのであるが、ここで佐代が仲平の妻となることを選んだ行為が「見識」と重ねられている点に着目すべきだろう。佐代は「必ずや未来に何物をか望んで」仲平との結婚を選んだ。そしてその「美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれてゐて」、言葉では表現できない「何物」かを常に見ていたと「わたくし」は述べる。佐代の見ていた、この言葉にできない「何物」は、どのように捉えたらよいのだろうか。

四、「新しい神話」としての「安井夫人」

以上のように作品を見てきた場合、「安井夫人」は、安井夫婦の生涯を詳細に描く物語ではないことがわかる。歴史上、仲平こと安井息軒は幕末期の高名な儒学者であり、作中にも幕末維新の動乱の時代を生きていることは示されてはいる。しかし、そのような時代の中で、仲平が儒学者としてどのように生きたかということには、焦点が当てられていないのである。描かれるのは、自らの意思によって「智慧」のある仲平を選ぶ、佐代の献身的な「愛」である。「安井夫人」には、質素倹約な理想的な夫婦の「愛」が描かれているのである。

こうした佐代の造型については、既に触れたように、メーテルリンクやライナー・マリア・リルケからの影響が指摘されてきた[38]。鷗外が一貫してメーテルリンクに強い関心を寄せていたことはよく知られている。講演「マアテルリンクの脚本」（『心の花』明治三六年六月）には、その言及の一端を見ることができる。ここで鷗外は、メーテルリンクの論を「一種の運命論」と紹介し、「運命といふものは、一応避くべからざる秘密なものゝやうに見えるけれども、明智の人は其運命を自分で左右して、さうして幸福に達すると云ふのが、マアテルリンクの議論」と説明している。その上で、脚本「モンナ、ワンナ」の筋書きを紹介するが、中で

平さんは不男だ」と云ふ蔭言が、清武一郷に伝へられてゐる。

「江戸がへり、昌平黌じこみ」の息軒は、非常に優秀なことで知られていたが、一方で「痘痕があつて、片目で、背の低い」容姿から、優秀な評判には常に見た目の「蔭言」がつきまとう。冒頭で示される仲平を巡る評判は、仲平の内面・外面いずれを見るかによって評価が著しく異なってくることを表している。そのため、息子の結婚に困難をきたすであろうと予測した父親は、「智慧」のある人物を嫁にしたいと思うようになる。ここでの「智慧」とは「若くて美しいと思はれた人も、暫く交際してゐて、智慧の足らぬのが暴露して見ると、其美貌はいつか忘れられてしまふ」とあるように、内面の美しさを表している。さらに「又三十になり、四十になると、智慧の不足が顔にあらはれ、昔美しかつた人とは思はれぬやうになる」と、「智慧」は次第に外見にも影響を与え、外見の美貌は「智慧」の不足によって忘れられてしまうという。それとは反対に、「智慧」のある「才人」である仲平は「只一つの黒い瞳をきらつかせて物を言ふ顔を見れば、立派な男に見える」。仲平の存在は、内面と外面の美しさを巡る価値評価の揺れを体現しているのだと言える。

一方、同じく「智慧」のある佐代は、仲平のそのような一面を見抜き、仲平との結婚を選ぶ。結婚した佐代は、物語では突然、次のように「繭を破つて出た蛾のやうに」「天晴地歩を占めた夫人」へと変化する。

これまで只美しいとばかり云はれて、人形同様に思はれてゐたお佐代さんは、繭を破つて出た蛾のやうに、その控目な、内気な態度を脱却して、多勢の若い書生達の出入する家で、天晴地歩を占めた夫人になりおほせた。

容姿の悪い仲平は「智慧」を持つがゆえに、内面がにじみ出た際には「立派な男に見える」。「あれが人物を識つた女」と結婚させたいという父親の望み通り、佐代は仲平の内面を見抜き、自ら結婚を申し出た。この仲平を選んだという行動自体が、佐代を「天晴地歩を占めた夫人」に変化させたのだといえる。その後、物語では仲平の「智慧」を証明するかのように、その質素倹約な生活ぶりが描かれていく。例えば、大阪の篠崎小竹の所で修業をしていた際には、「倹約のために大豆を塩と醤油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、蔵屋敷では「仲平豆」と名づけた」エピソードや、夜に本を読んでいる間に灯火であぶられた酒を毎夜一合「旨そうに飲んで寝る」というエピソードが示される。また、蔵書に関するエピソードを語る際には、「質素で濫費をせぬから、生計に困るやうな事はないが、十分に書物を買ふだけの金はない」と生活の質素ぶりが明かされている。そのような生活の中で、佐代は仲平の妻として「形振に構はず働いてゐる」が、「「岡の小町」と云はれた昔の俤はどこやらにある」という。「智慧」を持つ佐代は、たとえ貧しくても、たとえ老いたとしても美しさはなお保たれている。このように、作中に描かれる安井息軒夫婦は、「智慧」を持つ理想的な夫婦として描かれていく。

し」は、佐代が「五十一になつた年の正月四日に亡くなつた」とその死を語った後に、突如「お佐代さんはどう云ふ女であつたか」と次のように佐代の人物像を想像し始める。

お佐代さんが奢侈を解せぬ程おろかであつたとは、誰も信ずることが出来ない。又物質的にも、精神的にも、何物をも希求せぬ程恬澹であつたとは、誰も信ずることが出来ない。お佐代さんには慥かに尋常でない望があつて、其前には一切の物が塵芥の如く卑しくなつてゐたのであらう。

お佐代さんは何を望んだか。世間の賢い人は夫の栄達を望んだのだと云つてしまふだらう。これを書くわたくしもそれを否定することは出来ない。併し若し商人が資本を卸し財利を謀るやうに、お佐代さんが老苦と忍耐とを夫に提供して、まだ報酬を得ぬうちに亡くなつたのだと云ふなら、わたくしは不敏にしてそれに同意することが出来ない。

ここで「わたくし」によって総括される「慥かに尋常でない望」をもつ佐代像は、「自己滅却の無償の道」[31]や「鷗外独自の〈献身〉の概念の投影」[32]などの評価をはじめ、「わたくし」の理想の反映として研究が積み重ねられてきた[33]。小林幸夫[34]はこの部分が「わたくし」の「疑問」「推定」によって進められる点に着目し、語り手の「心の騒立ち」が佐代の「幻像」を作り出したと述べた。一方で「わたくし」の理想像に対し、栗坪良樹[35]は「〈わたくし〉固有のロマンチックかつセンチメンタルな邪推」と批判した。いずれの場合も、この小説の結末部を「わたくし」の「幻像」として捉える点では共通しているといえるが、とりわけ本論で着目したいのはここに続く以下の引用である。

お佐代さんは必ずや未来に何物をか望んでゐたゞらう。そして瞑目するまで、美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれてゐて、或は自分の死を不幸だと感ずる余裕をも有せなかつたのではあるまいか。其望の対象をば、或は何物ともしかと弁識してゐなかつたのではあるまいか。

このように語り手は献身的な佐代像を作り上げる一方で、その理由や「何を望んだか」については全く語らない。引用部のように、「未来に何物をか望んでゐた」や「視線は遠い、遠い所に注がれて」と表現するのみである。ここには理想的すぎる、ある意味神々しい人物が描かれていると言えないだろうか[36]。こうした佐代像には、ベルギーの新ロマン主義作家モーリス・メーテルリンクからの影響が検討されてきた[37]が、佐代像の意味をもう少し広い視野で考えてみたい。

「安井夫人」の物語世界を規定しているのは、作品冒頭に示される息軒を巡る次のような評価基準である。

「仲平さんはえらくなりなさるだらう」と云ふ評判と同時に、「仲

られる。ここで述べられるシュレーゲル理解に対し、新井正人は、鷗外が「「Leib」「に即いた」「Seele」の「方面」を重視するシュレーゲルの心身観を引き受けている」と述べ、「個々の人間存在において相互に不可分な「魂と肉体」として捉える志向、生命原理としての「魂」を重視する志向を鷗外は強めたことであろう」と指摘している[29]。

続けて鷗外は、「理性と空想との下に各二少枝が分れる」とし、「理性」の下に「記憶」「良心」、「空想」の下に「官能」「策励」を見、「策励に善悪両面がある」とする。「此中の愛といふものが人生の大事」と述べられる「愛」は「策励」の「善」の面に属している。この「人生の大事」とされる「愛」は、次のように説明されている。

> 此中の愛といふものが人生の大事で、これに特別な説明が下してある。（略）夫婦の愛から母子の愛が出る。兄弟姉妹諸眷属の愛が出る。こゝに家族合同 Familienverein が成り立つて、教育の基礎が据わる。此愛に伴つて来るものが、感奮 Begeisterung と係恋 Sehnsucht との二つだ。感奮は彼の敵愾心などのやうに、或る思想を把捉して兼て其実行を期するので、（Erfassen eines Gedanken zugleich auf Verwirklichung gerichtet）係恋は只管向上の道を踐むのだ、理想の影を追ふのだ。そして此係恋の対象が即ち青い花だ、不可思議の碧華だ。

ここでは、「愛」によって導かれる「係恋」が「理想の影を追ふ」ものであり、ノヴァーリスの『青い花』はそうした「係恋」を追い求めたものとして捉えられている。こうした「愛」の捉え方は、先にふれた『青年』の主人公小泉純一の造型にも見ることができる。純一は作品を書けないまま、坂井夫人と肉体だけの関係を持ち、そうした「恋愛もなければ、係恋もない」生活に「真の充実した生活」とは異なるものを感じている。こうした純一の発想には、ドイツ・ロマン主義のもたらした芸術観が投影されている。一方で、「係恋は只管向上の道を踏み」、「理想の影を追ふ」「係恋」のあり方は、「未来の何物をか望んでゐた」「安井夫人」の佐代の造型にも当てはめることができるように思われる。以下、「安井夫人」の描写に沿って考えていきたい。

三、「安井夫人」の「愛」

「安井夫人」は、儒学者安井息軒とその妻・佐代を描いた歴史小説である。鷗外は本作品を執筆するにあたり、若山甲蔵『安井息軒先生』（大正二年十二月、蔵六書房）を用いたとされるが、既に指摘されているように、本資料には妻である佐代の記述はほとんどない。そのため「そこに展開されるほんのいくつかのエピソードから鷗外は、一個の佐代像を紡ぎ上げ[30]」たとされる。こうした成立事情、あるいは物語内容そのものから、「安井夫人」は佐代の造型を中心に論じられてきた。なぜなら、次のような語り手「わたくし」の語りは、読者に佐代に対する強い印象をもたらすからである。物語末尾、「安井夫人」を語る「わたく

術」によって「精神の最も奥深い深み」から導かれる時期が来たことをはっきりと宣言している。

わたしが主張したいのは、われわれの文学には、中心点が欠けている、ということだ。つまり古代人の文学にとって神話がそうであったようなものが欠けているのだ、現代文学をして古代文学の下風に立たしめている本質的な要素はすべて、次の言葉に要約される。われわれは神話を所有していない、と。だがわたしはこうつけ加えたい。われわれは今まさにそのような神話を手に入れようとしている、あるいはむしろ神話を生み出すべく真剣に協同すべき時期が到来している、と。[24]

初期ロマン主義は「何よりもまず美的運動」であり、「その中心目的は、芸術の持つ神秘的かつ奇跡的な力を通じて、ドイツ文化と公共生活の再生を図ろうとするものであった」[25]。そのため、芸術を通して、理性によって失われた美や神秘を回復し、個人が再び自然と自己との一体感を取り戻すことができると考えられていた。その後、「ロマン主義という偉大な時代は一八二〇年代頃に終わった」[26]と一般的に言われるように、一八〇〇年代に入ると、神話論を始めとした初期ロマン主義の観念は自然主義を経て形を変え、ミュンヘンやウィーンを中心としたネオ・ロマン主義へと継承されていった。

日本では『文学界』の作家らを中心に浪漫主義運動がもたらされたが、「我国文壇の自然主義が頂点を過ぎた明治四十年代に入ると、自然主義に対する批判が現れ」、「新浪漫派の紹介に移って行った」[27]。そうした中、新ロマン主義のもたらした「〈霊の覚醒〉の潮流」、さらには「科学」と「神秘」を接続するための「リアリズムの中に神秘性を象徴的に表現するという、新ロマン主義の方法」を鷗外は的確に捉えていたと大塚美保は指摘する[28]。

自然主義に対抗するものとして、日本の文壇に「新浪漫派」が紹介され始める少し前、鷗外は「妄人妄語」(『萬年艸』一一、明治三七年二月)において「Romantik 派」について次のように触れている。

Romantik 派の所謂青い花は、Novalis の小説を読んで見れば、情の上から其の匂を知ることは出来るが、彼派が智の上からそれをどう説いて居たかといふことは、一寸文学史などを覗いて見ても分からない。此頃 Friedrich Schlegel の人生哲学を読んで、始てはつきりした印象を得た。

引用箇所は、鷗外のロマン主義に対する理解を表すものとして、しばしば参照される文章である。ここで鷗外はシュレーゲルに基づき、「人間意識の四大枝」を紹介する。それは「悟性」「意志」「理性」「空想」とされ、「此中で悟性と意志とは精神 Geist に属して居て、これが身体 Leib を離れた方面で、神 Gott に通じて居る、理性と空想とは霊魂 Seele に属して居て、身体に即いた方面で、感情を伴つて居る」と述べ

のうちに現れていた中世の詩の復活にほかならなかった[16]」と述べているように、ドイツ・ロマン主義運動は、ドイツの国家観に関わる固有の概念として捉えるべきであろう。そうした「芸術」の中心とされたのが、「共同体の神話」とされるところの「新しい神話」であった。

ドイツ・ロマン主義[17]の初期形成期とされる一七九六年、ロマン主義の「新しい神話」の理念の先駆けとして、『ドイツ観念論最古の体系計画』の草稿が書かれた。ヘーゲルの手稿として一九一三年発見されたこの文章は、一九一七年に公刊されている。「オリジナルな思想を誰に帰すかについて、シェリング、ヘルダーリン、ヘーゲル説、折衷説とさまざまであるが、シェリング説が最も有力である[18]」と述べられるように、本稿は後にロマン派の精神に大きな影響を与えた人物たちによって書かれた、「個々人の精神の絶対的自由と平等を実現する「美的」な社会変革を要請[19]」する、革命的なプログラムであった。

まずわたしは、ここでひとつの理念について語ろう。それはわたしの知るかぎりでは、いかなる人も思いつかなかったものである。――すなわちわれわれは、新しい神話を持たなければならない。しかしこの神話は理念に仕えるものでなければならず、またそれは理性の神話とならなければならない[20]。

ここで述べられる「新しい神話」とは、「理性が神話という形態を取って民衆を強化し、神話によって「民衆が理性的になる」ことを企図したもの[21]」とされる。その背景には「古い共同体の喪失とともに近代的な自我原理の限界をも自覚しつつあった若い知識人たち」による「新たな共同性創出の可能性[22]」の模索があった。「国家はすべて、自由な人間を機械的な歯車装置として取り扱わざるをえないからである。国家はそうすべきではないし、ゆえにそのような国家は廃されるべきである」とあるように、現在の国家は機械的なものであり、人間はその一部として歯車のように扱われていると捉えられる。そうした現状に批判を投げかけ、新たな社会を作りだすために民衆に投げかけるのが「新しい神話」であり、そこでの神話はさらに次のように述べられている。

われわれが理念を美的な、すなわち神話的なものにしないかぎりは、それは民衆にとって何の関心もなく、また逆に神話が理性的なものでないかぎりは、哲学者はその神話を恥じるにちがいない。こうして最後に啓蒙された者と啓蒙されない者とが互いに手を差しのべることが必要なのである。

「神話」とは民衆に公開されたものであり、そのことによって「社会を一体化する力[23]」となるという。『ドイツ観念論最古の体系計画』で宣言された「新しい神話」の理念は、初期ロマン主義のフリードリヒ・シュレーゲル「神話についての議論」（「文学についての会話」『アテネーウム』第三巻、一八〇〇年）に受け継がれていく。ここでシュレーゲルは次のように、現代には「中心点」としての「神話」が欠けており、「芸

を刊行する。「緒言」には、赤司がギリシャ・ローマ神話だけでなく、スカンジナビア、エジプト、アッシリア、印度、アメリカ、メキシコなどの古伝説についても精力的に継続して蒐集していることが分かる。例えば、『北欧神話 霹靂』の「緒言」には次のようにある。

> 編者等は諸国の神話、古伝説を、世に紹介せむと欲するものなり、故に、曩に希臘、羅馬の神話梗概をものし、「天馬」「胡蝶のをとめ」と名けて、すでに岡崎屋書店より出版しぬ、希臘、羅馬の神話も、なほ、これに悉きず、追うて世に出ださむ日、近きにあり、埃及、墨西哥、その他、東洋諸国の古伝説の如き、また、遠からずして、諸君の一瞥を請はんとす。

ここに続編への意思が書かれているように、その後も赤司噲花・石田春風共編『オヂッセ梗概 さすらい』（明治三七年一月、金港堂）、『イリアッド梗概 楯の響』（明治三七年一月、金港堂）が刊行され、神話の梗概書は赤司によって合計五冊出された。中でも注目すべきは、日本で初めてのギリシャ・ローマ神話の書『神話梗概 天馬』である。「緒言」には、校閲者として鷗外の名が挙げられている。実際、この稿を成すにあたって、赤司は鷗外に「クピド」の弓矢について問い合わせをしている[13]。赤司繁雄によると「比較的漢語の多い繁太郎の表現が、鷗外の手によって流麗典雅な文[14]」に変わったといい、明らかに鷗外が手を加えた痕跡が見られるという。

鷗外の校閲は、単に赤司の問い合わせに答えたというだけではないだろう。ギリシャ・ローマ神話を日本に初めてまとまった形で紹介するという、本書における意図そのものに賛同してなされたものに違いない。近代日本に「神話」が公開されることの意味を、赤司と同様に鷗外も共有していたはずだからである。赤司と鷗外の間には、レッシングを巡る、あるいはドイツ・ロマン主義の「神話」を巡る共通する関心があったといえよう。

赤司は、ハイネに拠りつつも正確に、ドイツ・ロマン主義を捉えていたといえる。それでは、鷗外が見ていた「神話」とはいかなるものであったのか。以下、「神話」を巡るドイツ・ロマン主義の議論を見ていきたい。

二、ドイツ・ロマン主義者たちの「神話」

啓蒙主義、産業革命、フランス革命を経験した十九世紀ドイツでは、理性によって失われたものを取り戻す「芸術」の創出を目指す形で、ドイツ・ロマン主義の運動が起こった。とりわけ初期のロマン主義運動は、イェーナ大学に集ったシュレーゲル兄弟や「青い花[15]」で知られるノヴァーリスらによって、機関誌「アテニウム」を中心に展開された。ハイネが「フランスでこの名称でいい現されているものとはまったく別のものであるということ、その傾向はフランスのロマン主義のそれとはまったく異なったもの」、「中世の詩歌、絵画、建築のうちに、つまり芸術と生活

る」存在として評価している。

具体的なヘルダーの生涯は、連載の続きである「ヘルデルが事を記す」に示される。「ヘルデルが事を記す」には、ヘルダーの人生における重要な転換点である、リガからナントへの航海、ワイマールでのゲーテとの交流、ゲーテとの共同でのスピノザ研究など詳細に描かれている。その中でも、赤司がヘルダーの依拠した「人間性」の概念を考察した「人類歴史哲学の観念」について触れ、次のように述べていることは注目に値する。

> 其書中論ずる所、人は其天文学的、地学的、理学的、歴史的位置の産出なることを顕はさんとして人類の歴史の変遷を叙述し、種々なる種族に関してそを証説するにあり（傍線引用者、以下同じ）

ヘルダーは歴史を考察するにあたり、歴史上の各時代を人間の成長段階にたとえ、「各時代の固有性と同時にその間の連続性[8]」を重視した。「其天文学的、地学的、理学的、歴史的位置の産出なることを顕はさんとして人類の歴史の変遷を叙述」という表現からは、赤司がそのことを正確に捉えていることが窺える。ヘルダーはこの書によってカント派からの攻撃を受け、ゲーテやシラーからも批判を受けることになるが、ここで展開される人間性の概念はヘルダーの神話論の基礎になったものである。各時代、各民族の個別性を重視する一方で、そこには近代に認められる連続性も見られるという視点は、「神話の創造的模倣の重要性[9]」という考えにつながる。ヘルダーの唱える「全く新しい神話」とは、「近代という時代にかなったやり方で創造的・建設的に模倣されなければならない[10]」ものだった。

そのような「創造的模倣」の対象として、ヘルダーが着目したのが異文化としての東洋の神話である。ヘルダーは近代を相対化するものとしての神話学を発展させ、古代ギリシャ神話にとどまらず、東方オリエントからインドに至るまでの世界の神話を調査した。一方で、民衆の間に伝わってきた文学としての「民謡」の蒐集にも取り組んだ。ヘルダーは、それらに「神話」の起源を見たのである。こうしたヘルダーの関心は、グリム兄弟の民話蒐集[11]や、ヨーゼフ・ゲレス『ドイツ民衆本』（一八〇七年）の刊行につながっていく[12]。ヘルダーの神話論は、初期ドイツ・ロマン主義から、シェリングらを通して後期ドイツ・ロマン主義に受け継がれていったとされる。やがて民族の歴史への復古的傾向を強め、国家主義的イデオロギーを補強する一端ともなった。

このようなヘルダー像を正確に描き出した赤司は、自身もその後、神話や古伝説の研究にのめりこんでいく。トマス・ブルフィンチ『The Age of Fable』からの翻訳として、赤司は継続的に『四の緒』に多くの神話を紹介するようになる。中でも、赤司が強い関心を寄せたのは、ギリシャ・ローマ神話であった。明治三十五年、ギリシャ・ローマの神話をまとめた赤司繁太郎・石田元季共編『神話梗概　天馬』（明治三五年四月、岡崎屋書店）を出版、続けて『神話梗概　胡蝶之乙女』（明治三五年六月、岡崎屋書店）、『北欧神話　霹靂』（明治三五年八月、金港堂）

月）では、物書きになるため上京した純一が「書かうと思ってゐる物」として「その sujet は国の亡くなつたお祖母さんが話して聞せた伝説」が挙げられる。純一は「伝説を書かうと云ふことは、これまでにも度々企てた」が、未だ書くことはできず、「こん度は現代語で、現代人の微細な観察を書いて、そして古い伝説の味を傷つけないやうにして見せよう」と「工夫」している。「かのやうに」（『中央公論』二七―一、明治四五年一月）の五條秀麿は、「まさかお父う様だつて、草昧の世に一国民の造つた神話を、その儘歴史だと信じてはゐられまい」と神話が事実ではないことを認識した上で、「神話と歴史の限界」に悩み、著述に手が著けられないでいた。ここで述べられる「神話」を、「歴史」の対立項としてのみとらえるだけでは、不十分に思われる。鷗外が「神話」と述べる際、それはどのようなものとして想定されていたのだろうか。

以下、本稿では、赤司のドイツ・ロマン主義論を手がかりに、赤司と鷗外が見ていた「神話」の概念を正確に捉え、その上で歴史小説「安井夫人」（『太陽』二〇―四、大正三年四月）について考えていきたい。「安井夫人」には、献身的に息軒に仕える妻佐代の姿が描かれるが、そうした姿に語り手は合理的な理由説明は加えず、「美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれてゐて」と表現する。ここにドイツ・ロマン主義が描こうとした人間の精神としての「geistreich」を見ることが可能なのではないだろうか。まずは、赤司の「神話」への取り組みを追っていきたい。

一、赤司繁太郎と「神話」

明治二十七年、新教神学校を卒業した赤司は、最初の伝道地名古屋へと向かった。名古屋での伝道は、約十一年半にわたった。その間、赤司は『中京文学』や『四の緒』などの地方文芸誌に、外国文学を紹介する原稿を寄せている。ドイツ・ロマン主義に関するものとしては、『中京文学』に「ヘルデルが事を記す」（二一、二三、二四、二五、二八号、明治二六年六月～明治二八年六月）、「ローマン詩派」（二六～三二号、明治二六年四月～一〇）が載せられている。うち「ローマン詩派」は、ヘルマン・ヘッセ『ドイツ・ロマン派』（一八三三年）の抄訳である。まずは、赤司の関心を探る手がかりとして、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーを論じた「ヘルデルが事を記す」を見ていきたい。

「ヘルデルが事を記す」に先んじて発表された「文豪ヘルデル」（『中京文学』一九、明治二五年八月）には、ヘルダーを論じるにあたり、文豪としての全体像が描かれている。「宗教改革」「三十年の役」を経たドイツでは「艶麗優美の仏文学勃如として独人の思想を乱し」、「仏国心酔の極」に達していた。そこで「仏心酔者の睡眠を醒し」たのが、レッシングであり、ヘルダーであったとされる。ある文学者の言として引かれる「彼は之を補助し、之を奨励し、之を醒覚し、之を照明し、以て独逸国を新精神的存在に導ひきし起死回生の霊気なり」という賞賛も決して過大なものではないとし、ヘルダーを「未来に向つて大なる恩恵を与ふ

赤司と鷗外の接点について、簡単に確認しておきたい。赤司は、日本における自由派キリスト教三派の一つ、普及福音教会を日本にもたらした「普及福音新教伝道会」のシュピンナーが作った「新教神学校」の最初の卒業生の一人である。シュピンナーは伝道活動の他に、「東京在住の専門の知識をもっているドイツ人やドイツ留学からの帰朝者たちに、宗教・文学・学術等、ドイツ文化の紹介を依頼し、その講演によって見聞をひろめ、修養に資すること」[2]を目的とするゾール・オリエンス会を開催していた。参加者の多くは、東京帝国大学や予備門の学生たちであったとされる。この会でシュピンナーは、レッシング『賢者ナータン』（一七七九年）の連続講義を行ない、講義に参加した赤司は、レッシングの思想に大変な感銘を受ける。その後、最初の単行本として『烈真具』（明治二五年三月、東京一二三館）を刊行する。この書に「題言」を寄せたのが、鷗外である。「題言」を書くに至った経緯は、「東京帝大医科大学長で、ゾール・オリエンス会の発起人の一人であった大沢謙二や、鷗外を崇敬していた藤浪鑑らの働きかけにより、その知遇をえて、序文を寄せてもらったものと思われる」[3]とされている。しかし、二人の接点はこの時だけの一時的なものではなく、その後も書簡のやり取りを通して続いていく。ドイツ帰国後、『しがらみ草紙』においてレッシング「エミーリア・ガロッティ」（一七七二年）の翻訳『戯曲折薔薇』（『しがらみ草紙』明治二二年一〇月～明治二五年六月、全八回、三木竹二と共訳）を連載し、レッシングの略歴「レツシングが事を記す」（『しがらみ草紙』二一～二四、明治二四年六月～九月）を書くなど、鷗外のレッシングに対する関心は、赤司と同様並々ならぬものがあった。

森鷗外は、ドイツ・ロマン主義をいち早く受容、日本に紹介した一人である。鷗外がドイツ留学中より、西洋の文芸や思想動向に関心を寄せ、その関心に「人間精神における「霊」あるいは精神の内奥の動きといったものに興味を抱いていた事実」があったこと、かつ「「霊」をドイツ語の〈Seele〉という概念から考えていた」こと、さらにそうした関心の延長にドイツ・ロマン派があったことは、清田文武[4]をはじめとした先行研究によって指摘されている。松村友視[5]は、〈Seele〉への思索をベルリン留学時代から晩年に至るまで継続的に捉え、「文壇復帰後の旺盛な文学活動を通じて、鷗外は、自然科学や個人主義に代表される認識体系と、利他という倫理につながるSeeleの領分との綜合をさまざまなレベルで模索しつづけた」と述べる。こうした「魂と肉体」を問い続ける営為を、新井正人[6]は「人間存在のそうした二面性を理解しようと苦闘した一九世紀末学知の課題を引き受け、それを行為遂行的に表象しようとする試みだったと言える」と位置付けた。このように、鷗外のロマン主義受容は、「魂と肉体」「科学と神秘」などの二面性を問い続ける過程として理解されてきたといえる。

一方で、本論で見ていくドイツ・ロマン主義作家たちの「新しい神話」という概念に着目するならば、鷗外が「歴史」と「神話」の問題に拘っていたことには別の意味が見えてくる。というのも、明治末期の鷗外にとって、「神話」は繰り返し検討される重要な概念の一つだったからである。[7]「青年」（『スバル』二―三～三―八、明治四三年三月～四四年八

人文・自然・人間科学研究　第四七号　一―一六頁　二〇二二・三

「美しい目の視線は遠い、遠い所に」――森鷗外「安井夫人」とドイツ・ロマン主義

村上祐紀

要旨

本稿は、森鷗外の歴史小説「安井夫人」を、鷗外のドイツ・ロマン主義への取り組みとその影響という観点から分析するものである。「安井夫人」には、江戸の儒学者安井息軒とその妻佐代の歴史が描かれるが、そこには夫婦の歩んだ生涯の詳細な説明はなされない。むしろ佐代の死後、語り手が唐突に佐代への見解を読者に投げかけることから、本作には自らの意思によって結婚相手を選ぶ佐代の献身的な「愛」が描かれていると捉えることができる。本稿では、「安井夫人」は質素倹約である理想的な夫婦の「愛」が描かれた物語であるとした。そのうえで、「安井夫人」に描かれる「愛」には、鷗外が早くに受容していたドイツ・ロマン主義の影響が見られることを指摘した。とりわけ「愛」の概念を巡って参照したのは、F・シュレーゲルの「神話」を巡る議論である。「理性」によって失われた「芸術」を取り戻す運動として起こったドイツ・ロマン主義にとって、「新しい神話」の創出は重要な使命であった。そのことを踏まえ、ドイツ・ロマン主義者たちが抱えていた使命を、自由主義神学普及福音教会牧師であった赤司繁太郎が正確に押さえていた事実を確認し、鷗外との関心の共有を指摘した。以上の分析より、理想的な「愛」を描く「安井夫人」は、過去の歴史を新たな「神話」として描き出した作品であると結論づけた。

キーワード：森鷗外、ドイツ・ロマン主義、赤司繁太郎、神話、歴史小説

はじめに

論者はこれまで、ドイツからもたらされた自由主義神学普及福音教会とその牧師赤司繁太郎について、レッシングに対する関心を手がかりに、鷗外との接点を論じてきた。その上で、鷗外と赤司が共に、「唯一の神との聯結は次第に弛んで行くばかり」（「吃逆」『中央公論』二七―五、明治四五年五月）である信仰なき理性の時代における、新たな「連帯」の可能性を、ドイツ・プロテスタンティズムの文脈に見出していたことを明らかにした[1]。本論では、その関心の延長として、ドイツ・ロマン主義に対する赤司の関心を参照してみたい。このように考えるのは、日本におけるドイツ・ロマン主義受容の比較的早い時期に赤司がこれらを紹介しているということに加え、その後、赤司が神話・古伝説の翻訳に継続的に取り組んでいくことになるためである。こうした動きに、鷗外が論じていた「神話」の問題を考える契機があるのではないかと考える。

執筆者および専門分野の紹介（目次掲載順）

犬竹　正幸（いぬたけ・まさゆき）	政経学部	教授	哲学，論理学
三井　美穂（みついみほ）	商学部	准教授	アメリカ文学，現代小説
小林　敏宏（こばやし・としひろ）	政経学部	准教授	言語社会学，英語社会論
長尾　素子（ながおもとこ）	商学部	教授	コミュニケーション論，英語教育
渡辺　勉（わたなべ・つとむ）	外国語学部	教授	英語音声学，言語学
井内　千紗（いのうち・ちさ）	商学部	助教	地域研究，文学
山田　克已（やまだ・かつみ）	拓殖大学北海道短期大学	教授	幼児教育
萬　司（よろず・つかさ）	拓殖大学北海道短期大学	教授	幼児教育，障害児教育
保坂　芳男（ほさか・よしお）	外国語学部	教授	英語教育史，英語教育学
塩崎　智（しおざき・さとし）	外国語学部	教授	日米交流史，比較文化
村上　祐紀（むらかみ・ゆき）	政経学部	准教授	日本近代文学，日本史学史

表紙ロゴ『拓殖大学論集』は，西東書房，二玄社のご協力をいただきました。
2社に感謝申し上げます。
⑴「拓」　次の2項目を合成
　手偏　西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.12の「持」より）
　石　西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.15）
⑵「殖」　西嶽華山廟碑（二玄社刊，p.90）
⑶「大」　西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.9）
⑷「學」　史晨後碑（二玄社刊，p.52）
⑸「論」　尹宙碑（西東書房刊，p.36）
⑹「集」　西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.11）

人文・自然・人間科学研究　第47号　ISSN　1344-6622（拓殖大学論集326）　ISSN　0288-6650
2022年（令和4年）3月18日　印　刷
2022年（令和4年）3月25日　発　行

編　集　拓殖大学人文科学研究所編集委員会
編集委員　田野　武夫　海口　浩芳　長尾　素子　末延　俊生　関　良基
　小林　敏宏　村上　祐紀　永江　貴子　廣澤　明彦　大森　裕二
発行者　拓殖大学人文科学研究所長　田野　武夫
発行所　拓殖大学人文科学研究所
　〒112-8585　東京都文京区小日向3丁目4番14号
　Tel. 03-3947-7595
印刷所　㈱ 外為印刷

THE JOURNAL OF HUMANITIES AND SCIENCES

Number 47 March 2022

CONTENTS

Articles:

Masayuki INUTAKE — A Road to Kant's Critical Philosophy from the Viewpoint of his Theory of Space (1)

Miho MITSUI — Ghost Narratives — Echoing the Victims of the Middle Passage (29)

Toshihiro KOBAYASHI — EIGO Culture and Popular Geopolitics in Japan: Negotiating Cultural Identities Through a Contingent and Ironic Language in a Liquid Modern World (50)

Motoko NAGAO — The Influence of English Experiential Learning on Communication Apprehension: A Comparative Study of TGG's Programs (80)

Tsutomu WATANABE — On the Transitive and the Intransitive Verbs in English: "to screen" as an Example (95)

Study Notes:

Chisa INOUCHI — Influence of Linguistic Situations on a Bilingual Writer Jean Ray / John Flanders in the 20th Century Belgium (126)

Katsumi YAMADA, Tsukasa YOROZU — Development and Improvement of "Musicals for Children" that Encourage Voluntary Activities (142)

Reports:

Yoshio HOSAKA — English Education at Middle Schools in Kanagawa Prefecture before WWII (2): With a Focus on Native English Teachers at Middle Schools (No. 4–No. 6) (157)

Satoshi SHIOZAKI — List and Commentary of Japanese who Traveled to the U.S. at the Beginning of the Meiji Era, in the Year of 1870, Part1: Leaving Yokohama from January to June (177)

Article:

Yuki MURAKAMI — Ogai Mori "Yasui Fujin" and Romanticism (*1*)

Instructions to Authors (215)

Edited and Published by

INSTITUTE FOR RESEARCH IN THE HUMANITIES

TAKUSHOKU UNIVERSITY

Kohinata, Bunkyo-ku, Tokyo 112–8585, JAPAN